Nanden Daizōkyō

(南傳大藏經)
VIII

Edited by Takakusu Junjirō
(高楠順次郎; 1866–1945)

and various translators

1936

高楠博士功績記念會纂譯

(Scan 2020)

経蔵 (Sutta Pitaka)
長部 (Dīgha Nikāya)
波梨篇 (Pāṭika Vagga)

南傳大藏經

"The Dīgha Nikāya is a Buddhist scripture, the first of the five nikāyas (collections) in the Sutta Piṭaka, which is one of the "three baskets" that constitute the Pāli Tipiṭaka of Theravāda Buddhism. In English it is known as the "Collection of Long Discourses." A complete version of the Dīrgha Āgama of the Dharmaguptaka School survives in Chinese translation under the title of *Cháng Ahánjīng.*[1] There are 30 *sūtras* (discourses) in it as compared to 34 *suttantas* (discourses) of the Theravādin Dīgha Nikāya. Fragments of the Sarvāstivādin School's Dīrgha Āgama are also extant in their Sanskrit as well as Tibetan translations. During the fifth century, a commentary on the Dīgha Nikāya, known as the *Sumaṅgalavilāsinī,* was written by Buddhaghosa." [2]

Pāṭika Vagga

24. Pāṭika Sutta: Story of the disciple who follows other teachers because the Buddha does not work miracles or teach the origin of things.
25. Udumbarikasīhanāda Sutta: The Buddha discusses asceticism with the ascetic Nigrodha.
26. Cakkavattisīhanāda Sutta: Story of the universal king, the corruption of morals and their restoration, and the coming of the future Buddha Metteyya.
27. Aggañña Sutta: A discussion on caste, and an exposition on the origin of things (as in No. 24) down to the origin of the four castes.
28. Sampasādanīya Sutta: A dialogue between the Buddha and Sāriputta, who describes the teaching of the Buddha and asserts his faith in him.
29. Pāsādika Sutta: The Delectable Discourse. Discourse of the Buddha on the perfect and the imperfect teacher.
30. Lakkhaṇa Sutta: The 32 marks of a Great Man.[3]
31. Sigālovāda Sutta: The Sigāla homily on the duties of the householder to the six classes of persons.
32. Āṭānāṭiya Sutta: On the Four Great Kings and their spell for protection against evil.
33. Saṅgīti Sutta: Sāriputta outlines the principles of the teaching in ten numerical groups.
34. Dasuttara Sutta: Sāriputta outlines the doctrine in tenfold series.[4]

---

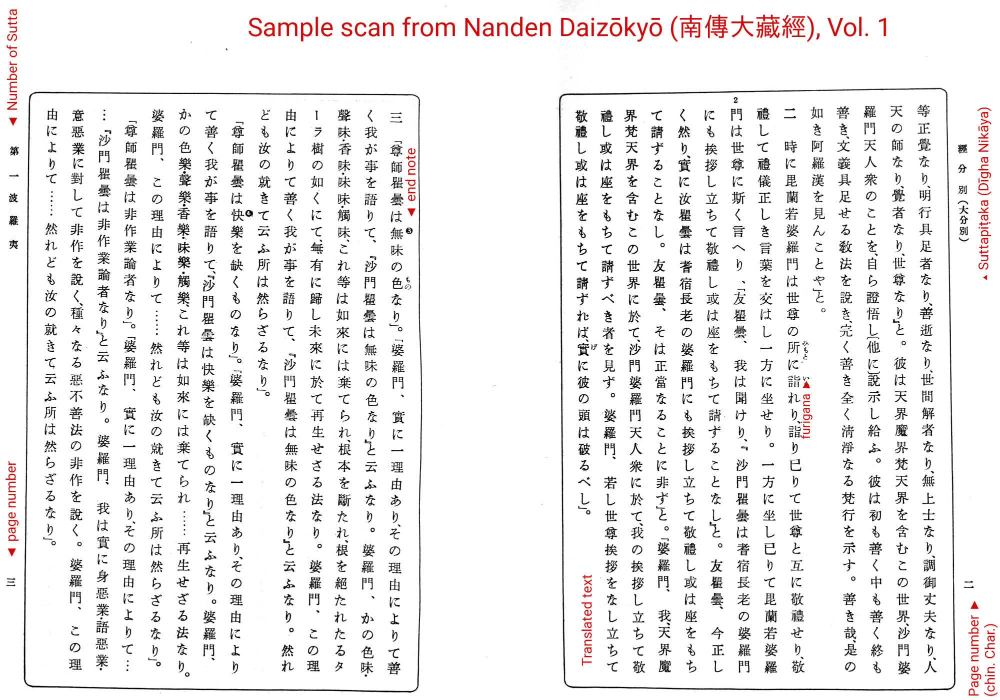
[1] Taishō 1, separate sutras also in T. 2–25.

[2] Sarao K. T. S.; "Dīgha Nikāya;" in: Sarao K. T. S., Long J. D. (eds.); *Buddhism and Jainism. Encyclopedia of Indian Religions;* Dordrecht 2017 (Springer)

[3] Cf. "Basic Meaning: thirty-two marks:" `http://www.buddhism-dict.net/cgi-bin/xpr-ddb.pl?q=`三十二相

[4] Webb, Russell; *An Analysis of the Pāli Canon;* Kandy 1975, [2]1991, [3]2008 (Buddhist Pub. Soc.); ISBN 978-955-24-0048-1. "For free distribution. This work may be republished, reformatted, reprinted and redistributed in any medium. However, any such republication and redistribution is to be made available to the public on a free and unrestricted basis, and translations and other derivative works are to be clearly marked as such."

Contents



經分別（大分別）

等正覺なり、明行具足者なり、善逝なり、世間解者なり、無上士なり、調御丈夫なり、人天の師なり、覺者なり、世尊なり』と。彼は天界魔界梵天界を含むこの世界、沙門婆羅門天人衆のことを、自ら證悟し〔他に〕説示し給ふ。彼は初も善く中も善く終も善き、文義具足せる教法を説き、完く善き全く清淨なる梵行を示す。善き哉、是の如き阿羅漢を見んことや」と。

二　時に毘蘭若婆羅門は世尊の所に詣れり、詣り已りて世尊と互に敬禮せり、敬禮して禮儀正しき言葉を交はし一方に坐せり。一方に坐し已りて毘蘭若婆羅門は世尊に斯く言へり、「友瞿曇、我は聞けり、『沙門瞿曇は耆宿長老の婆羅門にも挨拶し立ちて敬禮し或は座をもちて請ずることなし』と。友瞿曇、今正しく然り、實に汝瞿曇は耆宿長老の婆羅門にも挨拶し立ちて敬禮し或は座をもちて請ずることなし。友瞿曇、そは正當なることに非ず」と。「婆羅門、我、天界魔界梵天界を含むこの世界に於て、沙門婆羅門天人衆に於て、我の挨拶し立ちて敬禮し或は座をもちて請ずべき者を見ず。婆羅門、若し世尊挨拶をなし立ちて敬禮し或は座をもちて請ずれば、實に彼の頭は破るべし」。

二

第一　波羅夷

三　「尊師瞿曇は[3]無味の色なり」。「婆羅門、實に一理由あり、その理由によりて善く我が事を語りて、『沙門瞿曇は無味の色なり』と云ふなり。婆羅門、かの色味・聲味・香味・味味・觸味、これ等は如來には棄てられ、根本を斷たれ、根を絶たれたるターラ樹の如くにて、無有に歸し未來に於て再生せざる法なり。婆羅門、この理由によりて善く我が事を語りて、『沙門瞿曇は無味の色なり』と云ふなり。然れども汝の就きて云ふ所は然らざるなり」。

「尊師瞿曇は[4]快樂を缺くものなり」。「婆羅門、實に一理由あり、その理由によりて善く我が事を語りて、『沙門瞿曇は快樂を缺くものなり』と云ふなり。婆羅門、かの色樂・聲樂・香樂・味樂・觸樂、これ等は如來には棄てられ……再生せざる法なり。婆羅門、この理由によりて……然れども汝の就きて云ふ所は然らざるなり」。

「尊師瞿曇は非作業論者なり」。「婆羅門、實に一理由あり、その理由によりて……『沙門瞿曇は非作業論者なり』と云ふなり。婆羅門、我は實に身惡業・語惡業・意惡業に對して非作を説く、種々なる惡不善法の非作を説く。婆羅門、この理由によりて……然れども汝の就きて云ふ所は然らざるなり」。

三

Figure 1: The original Japanese text is written vertically, right to left.

Technical notes: Due to limitations in the specs of the *pdf* and *djvu* file formats direct links from the Concordance (☞ S. III) and romanized Table of Contents only work in the “full” pdf, not the derivates automatically created at archive.org. In the *djvu* file only links to external targets work (by opening a new tab in your standard browser). If in doubt – choose the larger file.

The hardlinks to `suttacentral.net`, given in captions at the beginning of each section were tested 13 June 2020.

☸ ☸ ☸

凡例

一、今巻依用の底本は巴梨聖典出版協會(Pali Text Society)本にして、兼て錫蘭版、暹羅版を參照せり。

一、本文行頭に羅馬數字を以て底本の頁數を附し、彼此參看に便じたり。

一、文中（ ）印を以て括せる語又は句は、譯者の挿入に係る。

一、文中「……」或は「…乃至…」とあるは、底本に然く省略せるものなり。

一、文中「…（乃至）…」とあるは、譯者が便宜上省略せるものなり。

一、文字の右肩に附せる白抜羅馬數字は註の對照番號にして、註の文は各經の最後に之を出したり。

一、固有名詞の中、その音譯の經典に見在するものは可及的に之を採り、義譯は（ ）印に括して添加せり。 但し漢譯經典は主としてサンスクリットよりの翻譯なるを以て、その音譯は必ずしも巴梨語のそれに對應すとは言ふべ

からず。

一、假名字を以て表せる發音も亦巴梨語の正確なる音を寫せるものとは言ひ難し。從つて漢字、假名兩者いづれの表音も、その正しきを知る爲には、卷末索隱中の原語に依るを要す。

一、索隱は發音索隱と漢字索隱との二種とし、前者は假名字、原語羅馬字、漢字の順に、後者は漢字、原語羅馬字の順に配し、總て五十音順に列位す。而して漢字索隱には固有名詞の他に術語をも合入したり。

Table of Contents 目次

目次　長部經典三

本經は漢譯長阿含卷第一一の阿㝹夷經(大正藏一)に當る。佛が末羅國の阿㝹夷(アヌピヤ)土に留錫中、バッガヴ・ゴッタ梵志を訪問して談話をせられたのが本經であつて、その時話題に上つたのは離車族出身の比丘善宿の退敎事件であつた。佛に日夜親炙しながらも、佛敎に留ることとの出來なかつた愚な善宿が、佛の法と律とを去るに至つた根本の原因は、佛が神通を示現せられないことゝ、世界人世の起源に就いて説明を與へられなかつたことに對する不滿に歸する。從つて本經の內容は大別して二部となり、一は神通説、二は起源論である。

佛は神通の現不現に佛道修行の目的があるのではないこと、佛敎の根本精神は人を完全なる苦滅に導くに在ることを説示せられ、また完全なる苦滅に到るのが目的であるから、世界起源論の如きは必要缺くべからざるものではないことを説かれたのである。親しく佛の敎を信受したものは、何の疑もなく、完全なる苦滅の法を戴いて、神通説や起源論を問題にするものはなかつた。然し當時一般の求道者達は苦行主

義・主定主義などゝ共に斯かる問題に沒頭して居たのであるから、善宿もその傾向に從つてこの問題に執著したのであらう。佛は善宿に對して、上述の如く佛道修行の目的並に佛教の根本精神を說き(一・三―一・六)更に上人の法による神通を示現したことが三度に及んだことを告げられた。第一は裸形道士コーラカッティヤに關するもの(一・七―一・一〇)、第二は七戒行者カンダラマスカに關するもの(一・一一―一・一四)、第三は裸形道士波梨子(パーティカプッタ)に關するもの(一・一五―二・一三)である。本經は波梨經と言はれるだけあつて、特に第三の波梨に關する部分が最も長い。恐らく本經の中心部は玆にあつて、前後のものはその莊嚴となつたのであらう。

神通說は凡て善宿に就いて說かれたのであるが、起源論はたゞバッガヴ・ゴッタ梵志に對して佛が往時の出來事として物語られたものである。第一は自在天・梵天創造說(二・一四―二・一七)、第二は戲耽說(二・一八)、第三は意亂說(二・一九)、第四は無因生說(二・二〇)である。而して一類の沙門婆羅門は斯かる說を唱道するのみで、それを論據づけることを知らぬのに對して佛は之を轉生的に寧ろ心理的に根據づけて彼等を滿足せしめたと說かれてある。最後に(二・二一)佛は淨解脫の現相を說き、三寶に歸せずして、つまり異見異行等を以て、淨解脫に入るの難きを示して、バッガヴ道士よ、卿の如きはせめて佛に對する信奉を堅く獲られよと言つて、經は結ばれてゐる。

本經は漢譯長阿含卷第八の散陀那經(大正藏一)、中阿含卷第二六の優曇婆邏經(大正藏二六)、並に尼拘陀梵志經(大正藏一一)に當る。佛弟子散陀那居士が優曇婆邏梵志女林に住める尼俱陀梵志を訪れた時、諸種の苦行を最上の法と信ぜる尼俱陀梵志は獨處靜觀を好んで空處邊地に住する佛を以て偏見を抱くものであると誹謗した。その時、佛は優曇婆邏梵志女林に來り給ひ、尼俱陀梵志に對して、諸の苦行の穢垢を說き示し、更に四戒を守り、五蓋を斷じ、四禪に住し、四神足を獲るを以て最上の行であることを明して、外道の迷妄を打破し、彼等をして先の誹謗を慚愧せしめ、無上梵行を修すべきことを勸められたのが本經の梗概である。漢譯の散陀那經は居士の名により、優曇婆邏經は林の名に從ひ尼拘陀經は梵志の名をとつて、各その經題としたものであり、從つてその內容は大概一致してゐるが、個々の點に於ては四經相合しない所も多々ある。例へば外道苦行の諸相に就いても、或は合致し、或は異なり、或は一方に存して他に無いものもある。又四戒に就いても、漢譯の三經は何れも殺生、偸盜、邪淫、妄語となつてゐるに反して、本經には殺生、偸盜、邪淫、修習(bhāvitam)となつてゐるが如き、その一例である。從つて漢譯の三經と本經とを比較對照すれば得る所が多いと思ふ。

本經は漢譯長阿含卷第六の轉輪聖王修行經(大正藏一)、中阿含卷第一五の轉輪聖王

經(大正藏二六)に相當し、その內容は殆んど一致してゐる。卽ち先づ身・受・心・法の四念處を說き、次に轉輪聖王の威力を詳說し、七寶を說き、寶輪の功德を說き、轉輪聖王の理想を說いてある。又偸盜・殺生・妄語等の諸惡を以て世界墮落の根源となし、殊に貧困による生活苦より偸盜を生ずと明し、また殺生・妄語・邪淫等あらゆる罪惡生起の過程を說き、人壽八萬歲より漸次降下して人壽十歲に至るまで、各その罪の據る處を說いて人壽退下の因緣を示してある。それと同時に人々はその罪惡の慘害を痛感して善法修行の念を生じ先づ不殺生等の五戒を守り、漸次に諸惡を征服して人壽十歲より八萬歲の世まで向上し、再び轉輪聖王の理想國が實現する。その時彌勒佛が出現して大覺を證し、無上淸淨の梵行を說き給ふ。こゝに於て一面には理想の國土が出現すると共に、一面には理想の佛土が應現し、かくして比丘は四神足を證し、四禪定を修し、無漏の心解脫・慧解脫を獲るに至ることを述べてある。

二七　起世因本經……久野芳隆譯……九七

本經は漢譯長阿含卷第六の小緣經(大正藏一)、中阿含卷第三九の婆羅婆堂經(大正藏二六)、並に白衣金幢二婆羅門緣起經(大正藏一〇)に當る。佛が黃昏時、鹿母講堂外を逍遙せられた折、その後に隨ひ來れる婆羅門族出身の婆悉吒と婆羅墮とに對して說かれたのが本經であつて、その內容を大別して二部とすることが出來る。卽ち前半は人間の貴賤は四姓の如き階級の高下に由るのではなく、その人格價値の有無によ

ることを說いて、四姓の平等なることを力說し、後半に於ては、この世の初開展より說き起して四姓の起源に及び、最後に此等四姓の何人と雖も、法を體得せんとする者こそ人類の最上者であると結ばれてゐる。

本經は漢譯長阿含卷第一二の自歡喜經(大正藏一八)に相當する。本經は佛直說の形式を採る經ではなくして、長老舍利弗が之を說き、佛はこれを認可し給ふ形式の經である。佛が那爛陀の波波利菴婆林に在した時、長老舍利弗は世尊の前に於て、餘の沙門婆羅門の遠く及ばざる世尊の等正覺に於ける勝智に絕大の信念を披瀝し、世尊の教示により幸に勝智を獲て法に安住することを得たる自己を喜びつゝ、嘗て世尊の說き給へる諸の善法、十二處法、四種の入胎、四種の記心、四種の見定、七種の人施設、諸の精勤、四種の通行、言正行、士夫戒正行、四教誡法、他人解脫智、三常住論、宿住隨念智、有情生死智、二種の神通等の法の說示を讚嘆して自己の了解を述べ、世尊は之を認可して、舍利弗に之を宣說せよと付囑し給うたものである。

本經は漢譯長阿含卷第一二の清淨經(大正藏一)に當る。佛が緬祇の菴羅林に在した時、新來の比丘周陀が波婆城より阿難の所に來て、尼乾子の死後その學徒の間に分裂、

鬪爭、排他の主張を固執してゐる狀態を告げた。阿難は周陀を伴ひて佛の所に詣り、事の由を告げると、佛は弟子達の將來の誡にもとて、說かれたのが本經である。先づ師と法と弟子とに關して、師の死が弟子達にとりて憂となる場合と、然らざる場合とに就いて語り、次に淸淨梵行の成就を說き、四種の安樂行とその果報とを述べ、最後に諸種の謬見を遠離する爲に身・受・心・法の四念處を敎へられたのである。

三〇　三十二相經……………逸見梅榮譯…………一八三

本經は漢譯中阿含卷第一一の三十二相經(大正藏二六)に相當し、佛の身相としての三十二相を說いたものである。然し漢譯と一致するところは極めて小部分に限られ、僅に第一誦品の最初の三節に過ぎずして、他の大部分は註釋的敍述である。從って本經は三十二相に關する一種の註釋經と看做し得るであらう。而してその三十二相を說くに當つては、各相とこれを獲るに到れる過去世の善業との關係を述ぶることに重點を置き、この相は斯々の宿因の然らしむる所であつて、これを獲たる大人（マハープリサ）は轉輪聖王か或は佛かの何れかになり得べきことを示し、次に斯かる相を獲たる轉輪聖王若しくは佛が、この世に於て獲べき特權を敍し最後に偈を以て大約を攝してある。而して或時は一の宿因によつて一相を獲たりとなし、或時は二相乃至三相を獲たりと說き、必ずしも最初に揭ぐる三十二相の順に從つて明してはないけれども、斯く三十二相とその宿因との因果關係を詳しく說く所に本經の特色があると謂ふべ

きであらう。

三一　教授尸迦羅越經……………………神林隆淨譯……………………二三七

本經は漢譯長阿含卷第一一の善生經(大正藏一)、中阿含卷第三三の善生經(大正藏二六)、尸迦羅越六方禮經(大正藏一六)、並に善生子經(大正藏一七)に當る。佛が王舍城外の栗鼠養餌處竹林に在した時、家主子(長者子)尸迦羅越の六方禮を機緣として說かれたのが本經である。旣に在家の家主子に對する說法であるから、その內容も極めて世間的な處世訓であつて、凡そ二部に別れてゐる。卽ち前半に於ては、先づ四つの業垢と惡業の四因を擧げ、次に財產を失ふ六種の原因を詳しく說き、就中惡友に交ることの危險なるを誨へて、如何なるを惡友とし、如何なるを善友とするかを明し、更に、全財產の四分の一は自己の生活費に當て、四分の一は窮困の備として貯蓄し、二分の一を事業の經營に用ふべき等、財產の使用法までも說き示してある。後半に於ては、現實の人間生活を度外視して徒らに天地四方を禮拜するの無意義なるを指摘して、六方禮に倫理的根據を與へられたのであつて、卽ち東南西北下上の六方は之を父母・師匠・妻女・朋友・奴婢・沙門婆羅門に配すべく、從つて例へば東方を禮拜するに當りては、父母は子に對する道を思ひ、子は父母に仕ふる道を省みるべき等、すべて六方禮には深き道德的意義の存する所を說き明されたものである。

三二　阿吒曩胝經……………………………立花俊道譯……………………………二五九

本經に相當する漢譯經は之を缺く、(但し毘沙門天王經(大正藏一二四五)參照) Hoernle: Manuscript Remains found in Eastern Turkestan vol. I に本經に相當する梵文 Āṭānāṭiya Sūtra の斷片が存する。佛が靈鷲山に在した時、毘沙門天王が諸夜叉を隨へ來り、阿吒曩胝の護經を唱へて佛に左の如く告げた。諸夜叉の中には佛語に信順せずして、佛弟子の修行を妨げんとするものもあれば、佛弟子守護の爲にこの阿吒曩胝の護經を納受し給へと。佛は之を納受して、翌日比丘等にその旨を示して、阿吒曩胝の護經を保持せよと勸められたのが本經の所述である。

三三　等誦經……………………………渡邊楳雄譯……………………………二八五

本經は漢譯長阿含卷第八の衆集經(大正藏一)並に大集法門經(大正藏一二)に相當し、Hoernle: Manuscript Remains found in Eastern Turkestan vol. I に本經に相當の梵文 Saṅgīti Sūtra の斷簡が存する。波婆城の末羅族が建立した新公會堂に於て、佛が舍利弗に代説せしめられたのが本經であつて、その全般に亘つて阿毘達磨的色彩が頗る濃厚である。卽ち一法二、二法三十三、三法六十、四法五十、五法二十五、六法二十二、七法十四、八法十一、九法六、十法六の、法數を標準とせる十段二百二十九法を列記してあり、有部六足論の隨一たる集異門足論(大正藏一五三六)は、有部の立場よりして本經を註釋した

ものに外ならないのである。

本經は漢譯長含卷第九の十上經(大正藏一)並に長阿含十報法經(大正藏一三)に相當し、本經も等誦經と同樣に舍利弗が說いたものであつて、その內容は一法乃至十法の十段より成り、各段に一法十、二法十といふ風にして合計五百五十法を列記した、いはゞ佛敎々理の綱要書である。從つて阿毘達磨的色彩が最も强く、之を阿毘達磨文學と關聯して考へる時、極めて興味の深い經である。

波梨篇(はりへん) (Pāṭika Vagga)

波梨経(はりきょう) (Pāthika-sutta)

1

二四　波梨經（パーティカ・スッタンタ）

是の如く我聞く。

第一誦品

一　一時、佛は末羅(マッラ)[國]に住したまへり。阿㝹夷(アヌピヤ)土と名づくる末羅國の都ありき。その時、佛は早朝下衣を著し上衣と鉢とを取りて、乞食の爲に阿㝹夷土に入りたまへり。その時、佛は念ひたまふらく、「阿㝹夷土に乞食をなすには時餘りに早し、いざ梵志バッガヴ・ゴッタの僧園なる、バッガヴ・ゴッタ梵志を訪はん」と。その時、佛はバッガヴ・ゴッタ梵志の僧園に至り、バッガヴ・ゴッタ梵志を訪ひたまへり。

2

二　その時、梵志バッガヴ・ゴッタは、佛に斯く云へり。「來れ、佛世尊、善來、佛世尊、實に[相見ざること]久しかりき。佛世尊、今❶何の緣を以て玆に來りたまふや。佛世尊、坐したまへ、この用意せる座に」と。

佛は用意せられたる座に就きたまへり。バッガヴ・ゴッタ梵志も亦他の低き

座をとりて一方に坐せり。一方に坐してバッガヴ・ゴッタ梵志は佛に斯く云へり。

「世尊、先日〔否〕先々日のこと、離車子善宿は我を訪ひ、我を訪ひて斯く云へり。『バッガヴよ、今や我、佛を見捨て去れり、バッガヴよ、今や我、佛の許に住せざるなり』と。世尊、離車子善宿の言へる如くなるや」。

「バッガヴよ、正に離車子善宿の言へるが如し」。

三 「バッガヴよ、先日〔否〕先々日、離車子善宿は我を訪へり。訪ひて會釋し一方に坐せり。一方に坐して、バッガヴよ、實に離車子善宿は我に斯く言へり。『世尊、今や我佛を捨てんとす。世尊、今やわれ佛の許に住せざるべし』と。かく言はれたる時、バッガヴよ、我は離車子善宿に斯く言へり。『されど善宿よ、我、嘗て――善宿よ、來れ。汝わが許に住せよ――と言ひたることありや』と。

『否、そのことなし、世尊』。

3 『然らば汝は我に――世尊、われ佛の許に住せん――と言ひたることありや』。

『否、そのことなし、世尊』。

『斯く、善宿よ、我は――來れ、善宿よ、わが許に住せよ――と言はず、汝また我に――世尊、われ佛の許に住せん――とも言はず。もし是の如くんば、愚人よ、何人にして、何人を汝は捨てんとするや。見よ、愚人よ、この事に關しては罪汝にあるを』。

四 『されど、世尊、佛はわが爲に上人❷の法による神通變化を爲したまはず』と。

『さらば、何とよ、善宿よ、われ汝に――善宿よ、來れ、わが許に住せよ。われ汝に上人の法による神通變化を爲さん――と斯く言ひしや』。

『否、そのことなし、世尊』。

『或は汝、我に――世尊、われ佛の許に住せんとす。佛はわが爲に上人の法による神通變化を爲さんことを――と斯く言ひしや』。

『否そのことなし、世尊』。

『かく、善宿よ、われ實に汝に――善宿よ、來れ、汝わが許に住せよ。われ汝に上人の法による神通變化を爲さん――と言はず。汝また我に――世尊、われ佛の

許に任せん。佛はわが爲に上人の法による神通變化を爲さんことを——とも言はず。もし是の如くんば、愚人よ、何人にして汝は何人をか捨てんとするや。善宿よ、そを如何に思ふや。或は上人の法による神通變化が爲さるゝも、或は上よる神通人の法に變化が爲されざるも、わが說ける法は、そを修する行者をば、完滅の目的全なる苦に導くことを得るや』。

『世尊、　或は上人の法による神通變化が爲さるゝとも、或は上人の法による神通變化が爲されざるとも、佛所說の法は、そを修する行者をば、完全なる苦滅の目的に導くを得るなり』。

『かく、善宿よ、或は上人の法による神通變化が爲さるゝとも、或は上人の法による神通變化が爲されざるとも、わが說ける法は、そを修する行者をば、完全なる苦滅の目的に導くを得るなり。ここに、善宿よ、上人の法による神通變化は何なるや。〔以て〕何をか爲さんとするや。見よ、愚人よ、この事に關しては罪汝にあるを』。

五　『されど世尊、　佛はわが爲に[3]世界の起原を宣示したまはず』

『さらば、何とよ、善宿よ、我は——善宿よ、來れ、汝わが許に住すべし。われ汝に世

界の起原を宣示せんとす――と、斯く言ひしや』。
『否、その事なし、世尊』。
『或は汝、我に――世尊、われ佛の許に住せんとす。佛はわが爲に世界の起原を宣示せんことを――と、斯く言ひしや』。
『否、その事なし、世尊』
『さらば、かく、善宿よ、我は――善宿よ、來れ、汝わが許に住すべし。われ汝の爲に世界の起原を宣示せん――と言はず。汝また我に――世尊、われ佛の許に住せんとす。佛はわが爲に世界の起原を宣示したまはんことを――とも言はざりき。是の如くあらんには、愚人よ、そも何人にして汝は何人を捨てんとするや。善宿よ、汝はそを如何に思ふや。その起原の宣説せらるゝ時と、その起原の宣説せられざる時とを問はず、わが所説の法は、そを修する行者をば、完全なる苦滅の目的に導くを得るや』。
『或は起原の宣示せらるゝと、或は起原の宣示せられざるとを問はず、佛所説の法は、そを修する行者をば、完全なる苦滅の目的に導くを得るなり』。

5

「斯く、善宿よ、或は起原の宣示せらるゝと、或は起原の宣示せられざるとを問はず、わが說ける法は、そを修する行者をば、完全なる苦滅の目的に導くにありとせよ。こゝに善宿よ、起原の宣說は何の用かある。見よ、愚人よ、この事に關しては罪汝にあるを』。

六　善宿よ、實に汝は跋耆（ヷッヂ）の邑に於て、諸種の方便を以て我を稱讚せり――かく、かの世尊は阿羅漢なり、正等覺者なり、明行足なり、善逝なり、世間解なり、無上士なり、調御丈夫なり、天人師なり、佛陀なり、世尊なり――と。かく、善宿よ、汝によりて、種々の方便を以て、我は跋耆の邑に於て稱嘆せられたり。

善宿よ、實に汝は跋耆の邑に於て、種々の方便を以て、法を稱讚せり――世尊の法は善く說かれたり、現世に於て報を受けしむるものなり、直接的なり、來れ見よと言ひて人を招くものたり、解脫に近づかしむるものたり、諸の知者によりて各自に解得（げとく）せらるべきものなり――と。かく善宿よ、汝によりて跋耆の邑に於て、法は諸種の方便を以て稱讚せられたり。

善宿よ、實に汝は跋耆の邑に於て、諸種の方便を以て、僧伽を稱讚せり――佛の

弟子僧伽はよく悟入せり、佛の弟子僧伽は端正に悟入せり、佛の弟子僧伽は正理に悟入せり、佛の弟子僧伽は正行に悟入せり、卽ち四雙八輩〔皆然り〕。この佛の弟子僧伽は、供養せらるべく恭敬せらるべく布施を受くべく合掌せらるべく、世に無上の福田なり――と。かく、善宿よ、實に汝によりて種々の方便を以て、僧伽は跋耆の邑に於て稱讃せられたり。

善宿よ、實にわれ汝に告ぐ。善宿よ、實にわれ汝に知らしむ。實に善宿よ、汝に就てかく云ふものあらん――離車子善宿は沙門瞿曇(ゴータマ)の許に梵行を修すること能はず。かく能はずして修行を捨てゝ卑俗に就く――と。實に善宿よ、汝に就てかく語る者あるに至らん』。

6 バッガヴよ、離車子善宿は我にかく言はれたるも、尚ほ恰も惡趣地獄に定まれるものゝ如く、この法と律とより離れ行けり。

七 バッガヴよ、我、一時ブム〔國〕に在りき。ウッタラカーと名づくるがブム國の都なり。その時、バッガヴよ、實にわれ早朝下衣を著し上衣と鉢とを取り、離車子

善宿沙門を從へてウッタラカーに乞食の爲に入りたり。實にその時、裸形道士コーラカッティヤあり、犬の如く生活し、[4]四足にて行き、地に散ぜられたる食物を口のみにて噉み、口のみにて食ひたり。

實にバッガヴよ、離車子善宿は、裸形道士コーラカッティヤの、犬の所作をなし、四足にて行き、地に散ぜられたる食物を口のみにて噉み、口のみにて食ひたるを見たり。見て彼惟へらく『おゝ善美なり、あゝ實に阿羅漢なり、沙門なり。四足にて行き、地に散ぜられたる食物を口のみにて噉み、口のみにて食ひたまふ』と。

その時バッガヴよ、われ心に依りて離車子善宿の心中を知り、離車子善宿にかく云へり。

『愚人よ、汝は實に釋子の徒なりと自稱するや』と。

『世尊、佛は何故に――愚人よ、汝は實に釋子の徒なりと自稱するや――と、我[7]に告げたまふや』。

『さらば、善宿よ、汝は裸形道士コーラカッティヤが犬の所作をなし、四足にて行き、地に散ぜられたる食物を、口のみにて噉み、口のみにて食ふを見て――おゝ善

美なり、あゝ實に阿羅漢なり、沙門なり。四足にて行き、地に散ぜられたる食物を、口のみにて噉み、口のみにて食ふ――と、かく思はざりしや』。

『世尊、その如し。されど世尊、佛は何故に、他が阿羅漢性を得ることに嫉妬を起したまふや』。

『愚人よ、我は他が阿羅漢性を得ることに嫉妬を起すことなし。この惡しき見を起したるは汝なるのみ。そを捨てよ、汝に長夜の不利と災禍とあること勿れ。善宿よ、汝は實に裸形道士コーラカッティヤを――善美なり、阿羅漢なり、沙門なり――と思ふも、彼は七日の後に❺腹脹にて死すべし、死してカーラカンヂャと名づくる、阿修羅（アスラ）中の最も下賤なる阿修羅身を得べし。而して彼死したる時は、墓所のビーラナ叢中に捨てられん。善宿よ、汝もし希望あらば、裸形道士コーラカッティヤを訪ひて――友、コーラカッティヤよ、汝は自らの趣を知るや――と問ふべし。善宿よ、かの裸形道士コーラカッティヤの、汝にかく答へ得べき理由あり――友、善宿よ、我はわが趣を知る。カーラカンヂャと名づくる阿修羅中の、最も下賤なるものあり、我、そこにその阿修羅身を得べし――と』。

八　その時、バッガヴよ、離車子善宿は、裸形道士コーラカッティヤを訪ひ、訪ひて裸形道士コーラカッティヤにかく言へり。『實に友コーラカッティヤよ、沙門瞿曇は汝のことを豫言して言へり――裸形道士コーラカッティヤは、七日の後、腹
8 脹にて死すべし、死してカーラカンヂャと名づくる阿修羅中の最も下賤なるものありて、そこにその阿修羅身を得ん。而して死したる時、彼は墓所のビーラナ叢中に捨てられん――と。茲を以て、友コーラカッティヤよ、汝は出來得る限り、適量の食物を食はんことを。また出來得る限り、適量の飲料を飲まんことを。以て沙門瞿曇の語を邪(よこしま)ならしむべし』と。

　その時、バッガヴよ、善宿は如來を信ぜざるが故に、一〔日〕二〔日〕と數へて七日に至れり。その時、バッガヴよ、裸形道士コーラカッティヤは七日を經たる時、腹脹にて死したり。死してカーラカンヂャと名づくる阿修羅中の最も下賤なる阿修羅身を得たり。而して死したる時、墓所のビーラナ叢中に捨てられたり。

九　バッガヴよ、善宿は『裸形道士コーラカッティヤは、腹脹にて死し、死して墓所のビーラナ叢中に捨てられたり』と聞きたり。その時、バッガヴよ、離車子善宿は、

墓所のビーラナ叢中に、裸形道士コーラカッティヤを訪ひ、訪ひて三度び手を以て打ちつゝ言へり。『友、コーラカッティヤよ、汝の趣を知るや』と。

その時バッガヴよ、裸形道士コーラカッティヤは、手にて背を拂ひつゝ、立ちて云へり。『友善宿よ、我はわが趣を知る。カーラカンヂャと名づくる最下賤の阿修羅あり、そこにかの阿修羅身をわれ得たり』と、かく言ひ終りて、實に彼は❻迎向に臥仆れたり。

一〇 その時バッガヴよ、離車子善宿は我を訪ひ、訪ひて我に會釋し一方に坐せり。一方に坐したる離車子善宿に、バッガヴよ、我はかく言へり。

『善宿よ、汝はそを如何に思ふや。われ汝に裸形道士コーラカッティヤに就て豫言したるが如き結果なりしや、或はそれと異りしや』と。

『世尊、佛のわが爲に、裸形道士コーラカッティヤに就て豫言したまひし如き結果にして、それと異らざりき』と。

9 『善宿よ、そを汝は如何に思ふや。もし是の如くならんには、上人の法による神通變化は爲されたるや、將た爲されざりしや』。

『實に世尊、是の如くにして眞に、上人の法による[7]神通變化は爲されたるなり、爲されざるに非ざるなり』。
『愚人よ、是の如く、上人の法による神通變化を爲したる我を、尙ほ實に——げに世尊、佛はわが爲に、上人の法による神通變化を爲したまはず——と言はんとするや。見よ、愚人よ、この事に關してはその罪汝にあるを』。
是の如く、また實にバッガヴよ、離車子善宿は我に言はれたるも、尙ほ恰も惡趣地獄に定まれる人の如く、この法と律とより離れ行けり。

一一　バッガヴよ、我、一時、吠舍離(ヹーサーリー)〔國〕大林の重閣講堂に住したり。さてその時、裸形道士カンダラマスカなるものありて、吠舍離に住し、跋耆の邑に於て所得大に名聲大に揚れり。彼は七種の誓戒を企て、これらを實行したり——生涯裸形たらん、如何なる衣裳をも纏はざらん。生涯梵行者たらん、不淨法を行はざらん。生涯スラー酒と肉とに依りて生活し、飯と粥とを食はざらん。吠舍離の東は憂(ウ)園(デーナ)廟を過ぎて往かざるべし。吠舍離の南は瞿曇(ゴータマカ)廟を過ぎて往かざらん。吠舍

離の西は七聚廟を過ぎて往かざらん。吠舍離の北は多子廟を過ぎて往かざらん――と。彼はこれらの七種の誓戒を實行したるが故に、跛者のその邑に於て、その所得大に、その名聲大に揚れり。

一二　その時、實にバッガヴよ、離車子善宿は、裸形道士カンダラマスカを訪ひ、訪ひて裸形道士カンダラマスカに質問を發したり。かの裸形道士カンダラマスカは、この發問に答を爲すこと能はず、答ふること能はずして、瞋恚と嫌忌と不滿とを表はしたり。その時、實にバッガヴよ、離車子善宿は斯く思へり。『げに善美なる、あゝ阿羅漢たる、この沙門と隙（げき）あるに至れり。あゝ我等に、長夜の不利と災禍あることとなからんことを』と。

一三　その時、實にバッガヴよ、離車子善宿は我を訪ひ、訪ひて我に會釋し、一方に坐せり。バッガヴよ、我、實に一方に坐せる離車子善宿に斯く云へり。

『愚人よ、汝と雖も釋子の徒なりと自稱し居るや』と。

『世尊、何の故にか、佛は――愚人よ、汝と雖も釋子の徒なりと自稱し居るや――と我にかく仰せたまふや』と。

『善宿よ、汝は裸形道士カンダラマスカに質問を發したるや。かれ裸形道士カンダラマスカは汝に對して發問に答ふること能はず、答ふる能はずして瞋恚と嫌忌と不滿とを表はしたりしや。その時、汝かく思ひしや――げに善美なる、あゝ阿羅漢たるこの沙門と、我等は隙あるに至れり。あゝ我等に、長夜の不利と災禍あることなからんことを――と』。

『世尊、是の如し。世尊、佛は何の故に、他が阿羅漢性を得ることに嫉妬を起したまふや』と。

11

『愚人よ、我は他が阿羅漢性を得ることに嫉妬を起すことなし。この惡しき見を起したるは汝なるのみ。そを捨てよ、汝に長夜の不利と災禍とあること勿れ。また善宿よ、汝は裸形道士カンダラマスカを――善美なり、阿羅漢なり、沙門なり――と思ひ居るも、彼は久しからずして衣を著し、梵行を離れ、飯と粥とを食ひ、吠舍離の一切の廟を過ぎて行くに至り、名聲地に墜ちて死すべし』と。

その時、實にバッガヴよ、裸形道士カンダラマスカは、久しからずして衣を著し、梵行を離れ、飯と粥とを食ふに至り、また吠舍離の一切の廟を過ぎて行き、名聲地

に墜ちて死したり。

一四　實に離車子善宿は――裸形道士カンダラマスカが、衣を著し梵行を離れ…〔乃至〕…名聲地に墜ちて死したる――を聞きたり。その時、バッガヴよ、善宿は我を訪ひ、訪ひて我に會釋し一方に坐せり。實にバッガヴよ、我は一方に坐せる離車子善宿に斯く云へり。

『善宿よ、そを如何に思ふや。われ汝の爲に、裸形道士カンダラマスカに就て、豫言したるが如き結果なりしや、將たそれと異りしや』と。

『世尊、佛のわが爲にカンダラマスカに就て、豫言したまひし如き結果にして、それと異らざりき』と。

『善宿よ、そを如何に思ふや。若し是の如くならんには、上人の法による神通變
12 化は爲されたるや、將た爲されざりしや』と。

『世尊、實に是の如くならんには、上人の法による神通變化は、眞に爲されたるなり、爲されざるには非ざるなり』と。

『實に、愚人よ、汝は是の如く、上人の法による神通變化を爲したる我を尚ほ――

世尊、佛は實にわが爲に、上人の法による神通變化を爲したまはず――と云ふ。見よ、愚人よ、この事に關しては、その罪汝にあるを』と。

是の如く、實にバッガヴよ、離車子善宿は我にかく言はれたるも、尚ほ惡趣地獄に定まれる人の如く、この法と律とより離れ行きたり。

一五　バッガヴよ、我、一時吠舍離〔國〕大林の重閣講堂に在留したり。その時、裸形道士波梨子（パーティカ）は吠舍離に住し、跋者の邑に於て、所得大に名聲大に揚れり。彼は吠舍離の大衆中に於て、是の如き語を説きたり。

『沙門瞿曇も智者なり、我も亦智者なり。智者は智慧によりて、上人の法による神通變化を示現することを得。沙門瞿曇にして若し半路を來らんには、我も亦半路を往かん。そこに於て我等兩者は、上人の法による神通變化を爲さんと欲す。若し沙門瞿曇にして、上人の法による神通變化一を爲さんに、我はよく二を爲さん。若し沙門瞿曇にして、上人の法による神通變化二を爲さんに、我はよく
13 四を爲さん。若し沙門瞿曇にして、上人の法による神通變化四を爲さんに、我は

よく八を爲さん。かく沙門瞿曇が、上人の法による神通變化を爲すに隨ひて、我よくその倍を爲さん』と。

一六　その時、實にバッガヴよ、離車子善宿は我を訪ひ、訪ひて我に會釋し、一方に坐せり。一方に坐して、實にバッガヴよ、離車子善宿は我に斯く言へり。

『世尊、裸形道士波梨子は吠舍離に住し、跋耆の邑に於て、所得大に名聲大に揚れり。彼は吠舍離の大衆の中に於て、是の如き語を說く――沙門瞿曇も智者なり、我も亦智者なり。智者は智慧によりて、上人の法による神通變化を示現することを得。沙門瞿曇にして、若し半路を來らんには、我も亦半路を往かん。そこに於て、我等兩者は、上人の法による神通變化を爲さんと欲す。若し沙門瞿曇にして、上人の法による神通變化一を爲さんに……乃至……我よくその倍を爲さん』と。斯く言はれたる時、バッガヴよ、我は離車子善宿に斯く言へり。

『實に善宿よ、若し裸形道士波梨子にして、その語を捨てず、その心を捨てず、その見[8]を捨てずして、我に面接し來らんことは不可能なり。若し彼にして――我はこの語を捨てず、この心を捨てず、この見を捨てずして、沙門瞿曇の面前に行かん。

——と思はゞ、彼の頭は裂かれん』と。

一七　『世尊、佛はこの語を守れ、善逝はこの語を守れ』と。

14 『善宿よ、汝は何の故にか我に——世尊、佛はこの語を守れ、善逝はこの語を守れ——と言ふや』。

『世尊、佛の此等の語は、絶對的教誡ならん——裸形道士波梨子にして、その語を捨てず、その心を捨てず、その見を捨てずして、吾が面前に來らんことは不可能なり。若し彼にして——我はこの語を捨てず、この心を捨てず、この見を捨てずして、沙門瞿曇の面前に至らん——と思はゞ彼の頭は裂かれんと（の言の如きは）。されど、世尊、裸形道士波梨子が變形によりて佛の面前に來ることあらんには、その虚僞は佛にあるに至らん』と。

一八　『さらば、善宿よ、如來はその語が、二樣に意味あるが如き語を語ることありや』。

『さらば言はん、世尊、裸形道士波梨子にして、その語を捨てず…（乃至）…その頭は裂かれん——との裸形道士波梨子に關することは、佛の心が心に依りて了知

したまふ所なりや。はた――裸形道士波梨子にしてその語を捨てず…乃至…その頭は裂かれん――とこの事を一天神ありて、如來に告ぐる所なりや』。

『――裸形道士波梨子にして、その語を捨てず…乃至…彼の頭は裂かれん――との裸形道士波梨子に關することは、善宿よ、わが心が心によりて了知したる所なり。また――裸形道士波梨子にして、その語を捨てず…〔乃至〕…その頭は裂かれん――とのこの事は、天神も亦我に告ぐる所なり。何となればアヂタと名づくる離車族の軍師は、先日死して三十三天に身を得たり。彼は我を訪ひてかく云へり。「世尊、裸形道士波梨子は無恥漢なり。世尊、裸形道士波梨子は妄語者なり。何となれば、世尊、裸形道士波梨子は跋者の邑に於て我を――離車族の軍師アヂタは大地獄に生を得たり――と言ひたればなり。實に然るに世尊、我は大地獄に生を得ず、三十三天に身を得たり。世尊、裸形道士波梨子は無恥漢なり。世尊、裸形道士波梨子は妄語者なり。世尊、裸形道士波梨子にして、その語を捨てず…〔乃至〕…その頭は裂かれん」と。

善宿よ、實に斯くわが心は心によりて了知したるなり――裸形道士波梨子に

してその語を捨てず……〔乃至〕……その頭は裂かれん――といふことを。天神も亦、我にこの事を告げ知らせたるなり――裸形道士波梨子にして、その語を捨てず……〔乃至〕……その頭は裂かれん――といふことを。

善宿よ、我、吠舍離に乞食を爲し、食後、乞食よりの歸途、午後の休息の爲にかの裸形道士波梨子の園林を訪はん。善宿よ、その時、もし汝欲するならば、それを彼に告ぐべし』と。

16
一九　バッガヴよ、その時、我早朝下衣を著し上衣と鉢とを取りて、乞食の爲に吠舍離に入れり。吠舍離に乞食を爲し、食後、乞食よりの歸途、かの裸形道士波梨子の園林を、午後の休息の爲に訪ひたり。その時、バッガヴよ、離車子善宿は、急ぎて吠舍離に入れり、而して數多の知名の離車族を訪ひ、數多の知名の離車族を訪ひて斯く云へり。

『諸君よ、佛は吠舍離に乞食を爲し、食後、乞食よりの歸途、午後の休息の爲に、裸形道士波梨子の園林に入れり。諸子よ、來れ、諸子よ來れ。善美なる沙門の、上人の法による神通變化は行はれんとす』と。

その時、實にバッガヴよ、數多の知名の離車族は斯く思へり。『おゝ善美なる沙門の、上人の法による神通變化は行はれんとす、いざいざ我等行かん』と。
また數多知名の高位の婆羅門、富有なる家主者、諸外道の沙門婆羅門を訪ひ、訪ひて數多の知名なる諸外道の沙門婆羅門に斯く言へり。
『諸君よ、佛は吠舍離に乞食を爲し、食後、乞食よりの歸途、午後の休息の爲に、裸形道士波梨子の園林に入れり。諸子よ來れ、諸子よ來れ。善美なる沙門の、上人の法による神通變化は行はれん』と。
その時、實にバッガヴよ、數多知名の諸外道の沙門婆羅門は斯く思へり。『おゝ善美なる沙門の、上人の法による神通變化は行はれんとす、いざいざ我等行かん』と。

17 その時、實にバッガヴよ、數多知名の離車族、數多知名の高位の婆羅門、富有の家主者、諸外道の沙門婆羅門は、かの裸形道士波梨子の園林に集まり來れり。バッガヴよ、彼等の大衆は幾百、幾千といふ數を知らざりき。

二〇　實に、バッガヴよ、裸形道士波梨子は『數多知名の離車族は來り、數多知名の

高位の婆羅門、富有なる家主者、諸外道の沙門婆羅門は來り、沙門瞿曇も亦わが園林に於て、午後の休息の爲に坐せる』を聞きたり。聞きて畏れ震ひ身毛竪立す。その時、實にバッガヴよ、裸形道士波梨子は、恐れ戰き身毛竪立して、かのティンドゥッカーヌ出家園に往けり。

バッガヴよ、實にかの大衆は『裸形道士波梨子は、恐れ戰き身毛竪立して、かのティンドゥッカーヌ出家園に行きたる』を聞きたり。その時、バッガヴよ、かの大衆は一人の男子に云へり。

『來れ、おゝ丈夫よ、汝かのティンドゥッカーヌ出家園に、裸形道士波梨子を訪へ。訪ひて裸形道士波梨子に斯く云へ――來れ、友波梨子よ、數多の知名の離車族は來れり、數多の知名の高位なる婆羅門、富有なる家主者、諸外道の沙門婆羅門も來れり、沙門瞿曇も亦午後の休息の爲に、尊者の園林に坐し居れり。友波梨子よ、汝によりて吠舍離の大衆中に、次の語は說かれたり――沙門瞿曇も智者なり、我も亦智者なり。智者は智慧によりて、上人の法による神通變化を示現することを
18 得。沙門瞿曇にして若し半路を來らんには、我も亦半路を往かん。そこに於て

18 我等兩者は上人の法による神通變化を爲さんと欲す。沙門瞿曇にして、若し上人の法による神通變化一を爲さば、我は二を爲さん。若し沙門瞿曇にして、上人の法による神通變化二をなさば、我は四を爲さん。若し沙門瞿曇にして、上人の法による神通變化四を爲さば、我は八を爲さん。かく沙門瞿曇の、上人の法による神通變化を爲すに隨ひて、我よくその倍を爲さん——と。故に友波梨子よ、實に半路を來れ。沙門瞿曇は最初に來りて、午後の休息の爲に、尊者の園林に坐せり』と。

二一 『是の如くすべし、諸子よ』とかの男子は大衆に答へて、ティンドゥッカーヌ出家園に、裸形道士波梨子を訪ひたり。訪ひて裸形道士波梨子に斯く云へり。『友波梨子よ、來れ、數多知名の離車族は來れり：乃至：沙門瞿曇も亦、午後の休息の爲に、尊者の園林に坐せり。友波梨子よ、汝によりて實に吠舍離の大衆中に次の語は說かれたり——沙門瞿曇も智者なり、我も亦智者なり：乃至：その倍を爲さん——と。故に實に友波梨子よ、半路を來れ。沙門瞿曇は最初に來りて、午後の休息の爲に、尊者の園林に坐す』と。

かく言はれたる時、バッガヴよ、裸形道士波梨子は『友よ、我還らんとす』と云ひて
19 匍匐し而も座より起つこと能はず。その時實に、バッガヴよ、かの男子は裸形道
士波梨子に斯く云へり。

『實に友波梨子よ、そは何れなりや、卽ち腿が繩床に膠著したるにや、はた實に繩床が汝の腿に膠著したるにや。「友よ、我還らん、友よ、我還らん」と言ひて匍匐し、而も座より起つこと能はず』と。

實にバッガヴよ、是の如く言はれたるも、尙ほ裸形道士波梨子は『友よ、我還らん、友よ、我還らん』と言ひて匍匐し、而も座より起つこと能はざりき。

二二　今や實にバッガヴよ、かの男子は認知したり――かの裸形道士波梨子は敗北せるを。『友よ、我還らん、友よ、我還らん』と言ひて匍匐し、而も座より起つこと能はざるを――茲に於てかの男子は大衆に還りて次の如く言へり。

『裸形道士梨波子は敗北せり、彼は『友よ、我還らん、友よ、我還らん』と言ひて匍匐し、而も座より起つこと能はず』と。

是の如く言はれたる時、バッガヴよ、我はかの大衆に斯く言へり。

『實に諸子よ、裸形道士波梨子にして、その語を捨てず、その心を捨てず、その見を捨てずして、我が面前に來らんことは不可能なり。若し彼にして——我はこの語を捨てず、この心を捨てず、この見を捨てずして、沙門瞿曇の面前に往かん——と思はゞ、彼の頭は裂かれん』と。

第二誦品

一　その時、實にバッガヴよ、一人の離車族の大官ありて、座より立ち、大衆に次の如く言へり。

『さらば諸子よ、待て暫し。その間に我行きて、我にても裸形道士波梨子を、この
20 大衆の處に伴ひ來ることを得るや否やを見んとす』と。

その時、實にバッガヴよ、離車族の大官はティンドゥッカーヌ出家園に、裸形道士波梨子を訪ひ、訪ひて裸形道士波梨子に次の如く言へり。

『波梨子よ、來れ、汝は出で來るが良し。多數知名の離車族、多數知名の高位の婆羅門、富有なる家主者、諸外道の沙門婆羅門も來れり。沙門瞿曇も亦、午後の休息

の爲に、尊者の園林に坐せり。實に波梨子よ、汝によりて吠舍離の大衆中に於て、次の語は說かれたり――沙門瞿曇も智者なり、我も亦智者なり…乃至…我よくその倍を爲さん――と。故に實に友波梨子よ、半路を來れ、沙門瞿曇は最初に來りて、午後の休息の爲に、尊者の園林に坐せり。友波梨子よ、沙門瞿曇によりて、大衆の中に於て、次の語は說かれたり――裸形道士波梨子にして、その語を捨てず…乃至…彼の頭は裂かれん――と。友、波梨子よ來れ、來らば汝に勝利を得せしめ、沙門瞿曇に敗北を爲さしめん』と。

二　かく言はれたる時、バッガヴよ、裸形道士波梨子は『友よ、我還らん、友よ、我還らん』と言ひて、匍匐しその座より起つこと能はざりき。その時に實にバッガヴよ、離車族の大官は、裸形道士波梨子に斯く言へり。

『友、波梨子よ、そは實に何れなりや、腿が汝の繩床に膠著したるにや、將た繩床が汝の腿に膠著したるにや。――友よ、我還らん、友よ、我還らん――と云ひて匍匐し、而もその座より起つこと能はず』と。

是の如く言はれたるも、實にバッガヴよ、裸形道士波梨子は、『友よ、我還らん、友よ、

我還らん』と言ひて匍匐し、而もその座より起つこと能はざりき。

三　實にバッガヴよ、離車族の大官は、――『友よ、我還らん、友よ、我還らん』と言ひて匍匐し、而もその座より起つこと能はず。この裸形道士波梨子は敗北せり――と認知したる時、かの大衆に到りて斯く言へり。

『かれ裸形道士波梨子は敗北せり――友よ、我還らん、友よ、我還らん――と言ひて匍匐し、而もその座より起つこと能はず』と。

是の如く言はれたる時、バッガヴよ、我はかの大衆に斯く言へり。

『實に諸子よ、裸形道士波梨子にして、その語を捨てず…乃至…その頭は裂かれん。若し離車族の諸子中に――裸形道士波梨子を、革紐にて結び、牛軛にて牽き來らん――と思ふものあらば、かの革紐は斷たれん、波梨子も亦その身破れん』。

22 再び言ふ、裸形道士波梨子にして、その語を捨てず…乃至…その頭は裂かれん』と。

四　その時、實にバッガヴよ、ダールパッティカの門弟闍利（ジャーリヤ）[9]は、座より起ちて大衆に斯く云へり。

『さらば諸子よ、待て暫し。其間に我行きて、我にても裸形道士波梨子を、この大

衆の處に伴ひ來ることを得るや否やを見んとす』と。

その時、實にバッガヴよ、ダールパッティカの門弟闍利はかのティンドゥッカーヌ出家園に裸形道士波梨子を訪ひ、訪ひて裸形道士波梨子に斯く言へり。『友波梨子よ、來れ、汝は來るが良し。多數知名の離車族は來れり…乃至…沙門瞿曇も亦、午後の休息の爲に、尊者の園林に坐せり。友波梨子よ、汝は嘗て吠舍離の大衆中に於て、說を爲せり――沙門瞿曇も智者なり…乃至…我よくその倍を爲さんと。故に友波梨子よ、半路を來れ。沙門瞿曇は最初に來りて、午後の休息の爲に、汝の園林に坐せり。また實に友波梨子よ、沙門瞿曇は、大衆の中に於て說を爲せり。裸形道士波梨子にして、その語を捨てず…〔乃至〕…その頭は裂かれんと。若しまた離車族の諸子にして――裸形道士波梨子を、革紐にて結び、牛軛にて牽き來らん――と思ふものあらば、その革紐は斷たれん。波梨子〔も亦その身破れん〕。重ねて云ふ、裸形道士波梨子にして、その語を捨てず…〔乃至〕…その頭は裂かれんと。友波梨子よ、來れ、來らば實に汝に勝利を得せしめ沙門瞿曇に敗北を爲さしめん』と。

五　かく言はれたる時、裸形道士波梨子は、『友よ、我還らん、友よ、我還らん』と言ひて俯匐し、而もその座より起つこと能はざりき。その時、實にバッガヴよ、ダールパッティカの門弟闍利は裸形道士波梨子に斯く言へり。

『友波梨子よ、そは實に何れなるや。卽ち腿が汝の繩床に膠著したるにや、將た繩床が汝の腿に膠著したるにや。「友よ、我還らん、友よ、我還らん」と言ひて俯匐し、而もその座より起つこと能はざるに非ずや』と。

かく言はれたるも、裸形道士波梨子は尙ほ『友よ、我還らん、友よ、我還らん』と言ひて俯匐し、而もその座より起つこと能はざりき。

六　斯くして實に、バッガヴよ、ダールパッティカの門弟闍利は――『友よ、我、還らん、友よ、我還らん』と言ひて俯匐し、而もその座より起つこと能はず、以てかの裸形道士波梨子は敗北せり――と認知したり。その時に斯く言へり。

『友波梨子よ、往古に獅子獸王ありて、斯く思へり。「いでや、我、一深林の側に住窟を構へん、そこに住窟を構へて昏時住窟より出でん、住窟より出でゝ奮ひ立たん、奮ひ立ちて普く四方を顧望せん、普く四方を顧望して三度び獅子吼を爲さん、三

度び獅子吼を爲して牧場に到らん、かくて群獸中の最上のものを屠り、最軟の肉を食ひて住窟に歸り來らん」と。

その時、友よ、獅子獸王は一深林の側に住窟を構へたり、そこに住窟を構へて、昏時住窟を出でたり、住窟より出でゝ奮ひ立ちたり、奮ひ立ちて普く四方を顧望せり、普く四方を顧望して、三度び獅子吼を爲せり、三度び獅子吼して牧場に到れり、かくて群獸中の最上のものを屠り、最軟の肉を食ひて住窟に歸り行けり。

24 **七** 實に、友波梨子よ、獅子獸王の殘食に依りて生活せし老豺あり、傲慢にして強力なりき。その時、實に友よ、かの老豺は斯く思へり。「我は何ぞや、獅子獸王は何ぞや。いざ我も亦、一深林の側に住窟を構へん、そこに住窟を構へて昏時住窟より出でん、住窟より出でゝ奮ひ立たん、奮ひ立ちて普く四方を顧望せん、普く四方を顧望して三度び獅子吼を爲さん、三度び獅子吼を爲して牧場に到らん、かくて群獸中の最上のものを屠り、最軟の肉を食ひて住窟に歸り來らん」と。

その時、實に友よ、老豺は一深林の側に住窟を作り、そこに住窟を作りて昏時住窟より出でたり、住窟より出でゝ奮ひ立てり、奮ひ立ちて普く四方を眺めたり、普

く四方を眺めて「三度び獅子吼を爲さん」として、却つて豺の鳴を爲せり、實に豺の鳴を爲したり、『豺の如何にも卑しきことよ、その獅子吼とは何事ぞ』。

是の如く、實に波梨子よ、汝は善逝の修道法に生活し、善逝の殘食を食ひつゝ、而も如來・阿羅漢・正等覺者に近似するを得と思ふや。――波梨子の憫然たるは如何に、何ぞ如來・阿羅漢・正等覺者に近似するとは何事ぞ――と』。

八　それより、實にバッガヴよ、ダールパッティカの門弟闍利は、この譬喩を以てしても、尙ほ裸形道士波梨子をば、その座より離すこと能はざるを以て、その時に斯く言へり。

25

　豺は自らを獅子なりと思ひ爲して
「我は獸王なり」と思へり、
　而も彼は豺鳴を爲せり。
豺の卑しきよ、獅子吼とは何事ぞ、と。

『是の如く、波梨子よ、汝は實に善逝の修道法に生活し、善逝の殘食を食ひつゝ、如來・阿羅漢・正等覺者に近侍し得と思へり。「波梨子の憫然たるは如何に、何ぞ如來・

阿羅漢・正等覺者に近侍し得べき」と』。

九　さて、バッガヴよ、ダールパッティカの門弟闍利は、この譬喩を以てしても、尚ほ裸形道士波梨子を、その座より離すこと能はざりき。その時、彼に言へるやう、

他に隨ひて遊行し
その殘食を食ふ自らを思ひやり、
眞の自らを見ざる間は
「我は虎なり」と豺は思へり、
而も彼は豺鳴を爲せり。
豺の卑しきよ、獅子吼とは何事ぞ。

『是の如く、實に波梨子よ、汝は善逝の修道法に生活し、善逝の殘食を食ひつゝ、如來・阿羅漢・正等覺者に近似し得と思へり――されど波梨子の憫然たるは如何に、何ぞ如來・阿羅漢・正等覺者に近似し得べき――と』。

一〇　それより、實にバッガヴよ、ダールパッティカの門弟闍利は、この譬喩を以
26てしても、尚ほ裸形道士波梨子を、その座より離すこと能はざりき。その時に彼

に云へり。

蛙・床蝨・墓所に捨てられたる
屍體を食ひつゝ
大林に空林に育ちたる豺は
「我は獸王なり」と思へり、
されど彼、豺鳴を爲せり。

豺の卑しきよ、獅子吼とは何事ぞと。

「是の如く、波梨子よ、汝は善逝の修道法に生活し、善逝の殘食を食ひつゝ、如來・阿羅漢・正等覺者に近似し得と思へり——されど波梨子の憫然たるは如何に、何ぞ如來・阿羅漢・正等覺者に近似し得べき——と』。

一一　それより、實にバッガヴよ、ダールパッティカの門弟闍利は、この譬喩を以てしても、遂に裸形道士波梨子を、その座より離すこと能はざりき。その時、かの大衆に到りて斯く言へり。

「諸君よ、裸形道士波梨子は敗北せり、彼は「友よ、我還らん、友よ、我還らん」と言ひて

匍匐し、而もその座より起つこと能はず』と。

一二　かく言はれたる時、バッガヴよ、我、かの大衆に斯く言へり。『諸君よ、裸形道士波梨子にして、その語を捨てず、その心を捨てず、その見を捨てずして、わが面前に來らんは不可能なり…〔乃至〕…その頭は裂かれん。若しまた離車族の諸子にして――　裸形道士波梨子を革紐にて結び、牛軛にて牽き來らん[27]――と思ふものあらば、革紐は斷たれん、パーティカ子〔も亦その身破れん〕。重ねて云ふ、裸形道士波梨子にして、その語を捨てず…〔乃至〕…彼の頭は裂かれん』と。

一三　その時、實にバッガヴよ、我はかの大衆を、説法によりて、教誡し刺激し感奮せしめ歡喜せしめたり。　かの大衆を説法によりて、教誡し刺激し感奮せしめ歡喜せしめて、大縛より解脱せしめ、更に四萬八千〔の有情〕を大獄より救ひ上げ、光界三昧に入りて、七多羅樹の高さに空中に昇り、更に七多羅樹の高さに光を放ち、輝かしめ炎々たらしめたる後、大林の重閣講堂に再現したり。　その時、バッガヴよ、離車子善宿は我を訪ひ、訪ひて會釋し、一方に坐せり。　一方に坐せる善宿に、バッガヴよ、われ次の如く云へり。

『善宿よ、汝はそを如何に思ふや。汝の爲に裸形道士波梨子に就て、わが豫言したるが如き結果なりしや、將たそれと異りしや』と。

『世尊、佛の我が爲に、裸形道士波梨子に就て豫言したまひし如き結果にして、それと異らざりき』と。

『善宿よ、汝はそを如何に思ふや。若し是の如くんば、上人の法による神通變化は爲されたるにや、將た爲されざりしにや』と。

『世尊、實に是の如くんば、上人の法による神通變化は爲されたるなり爲されざるに非ざるなり』。

『是の如く、愚人よ、上人の法による神通變化を爲したる我を、汝は――されど世尊、佛はわが爲に、上人の法による神通變化を爲したまはず――と曰ふ。見よ、愚人よ、この事に關しては罪汝にあるを』。

是の如く、實にバッガヴよ、離車子善宿は、我にかく言はれたるも、尚ほ惡趣地獄に定まれる人の如く、此の法と律とより離れ行きたり。

一四 バッガヴよ、我は〔世界の〕起原を知る。そを知り、更にそれ以上を知る。そ

を知りて[10]墮著せず、墮著せざるより、我自ら[11]涅槃を了知せり。それを證知して如來は過誤に陷らざるなり。バッガヴよ、一類の沙門婆羅門あり、彼等は自在天所造、梵天所造なりとの古傳の起原說を宣說す。我、彼等を問ひて云へり。『汝等諸子は自在天所造、梵天所造なりとの古傳の起原說を宣說するは眞なりや』と。我に斯く問はれて『然り』と彼等は答ふ。彼等に我斯く云へり。『如何にして汝等諸子は自在天所造、梵天所造とする古傳の起原說を宣說することを認定したるや』と。彼等は我に問はれて答へず。答ふること能はずして、却つて我にそを反問せり。彼等に問はれて、我說示したり。

一五　『諸子よ、實に遲かれ早かれ、長さ期間の後、この世界の滅する時來るべし。世界の滅する時、有情多くは光音天に轉生すべし。そこに於ては、彼等は意より成り、喜を食物とし、自ら光を發ち、空中を行き、美を保ち、長期の間留まらん。實に諸子よ、長期を經過したる後、遲かれ早かれ、この世界の生ずる時あるべし。世界の生ずる時、[12]空虛なる梵天宮現はるべし。その時、或る有情は壽命の盡きたる爲か、或は功德の盡きたるかによりて、光音天身より沒して、空虛なる梵天宮に生る

べし。かくしてそこに、意より成り、喜を食とし、自ら光を放ち、空中を行き、美を保ちて長期の間留まらん。そこに獨にて長夜〔任せるより〕不安と不滿と焦慮とを生ず。〔謂く〕「あゝ茲に他の有情も亦來らんことを」と。その時、また他の有情ありて、壽命の盡きたる爲か、或は功德の盡きたる爲かにより、光音天身より沒して、空虚なる梵天宮に生れ來り、彼の伴侶となるべし。彼等も亦そこに、意より成り、喜を食とし、自ら光を放ち、空中を行き、美を保ちて長期の間留まらん。

一六　茲に於て、諸子よ、最初に生を受けたる有情の惟へらく「我は梵天なり、大梵天なり、征服者なり、不可征者なり、透見者なり、指令者なり、自在者なり、造者なり、化者なり、最上者なり、指定者なり、自主者なり、既有未有の父なり。此等の有情は我によりて造られたり。そは如何なる故ぞ。われ先に惟へらく――あゝ他の有情も亦茲に來らんことを――と。是の如きは、わが意願なりき。而して茲に此等の有情は來れり」と。

後に生を得たる有情等も亦惟へらく――實にこの尊は梵天なり、大梵天なり、征服者なり、不可征者なり、透見者なり、指令者なり、自在者なり、造者なり、化者なり、

最上者なり、指定者なり、自主者なり、既有未有の父なり。諸君よ、我等はこの梵天によりて作られたるなり。そは如何なる故ぞ。何となれば我等の見る如く、彼は最初に茲に生じたり、而して我等は後に生じたればなり――と。

30 一七　茲に於て、諸子よ、最初に生じたるかの有情は、その壽命一層長く、その美麗一層輝き、その勢力一層偉大なり。然るに後に生じたる有情等は、一層その壽命短かく、その美少く、その勢少し。諸子よ、また他の有情ありて、その身を沒して茲(地上)に生ずることありき。茲に來りて彼は在家より無家に出家せん。在家より無家に出家して、熱心により、努力により、專念により、精勵により、完全なる心集中によりて、是の如き心三昧に達す。その三昧に於ては、その前住所を憶念す、されどそれより以前を憶念せざるなり。彼惟へらく、「かの尊は梵天なり、大梵天なり…(乃至)…既有未有の父なり、彼の梵天によりて我等は作られたり、彼は常住・堅固・永遠・不壞滅のものにして、永久同に住するならん。然るにかの梵天に依りて作られたる我等は、無常、不堅固、少壽、壞滅のものにして茲に來れり」と。是の如くにして、諸子よ、諸子は自在天所造、梵天所造なりとの古傳の起原説を宣說すべし』

と。
彼等は云へり。『友瞿曇よ、實に我等の聽けるが如し、尊者瞿曇の宣べたるが如し』と。バッガヴよ、我は世界の起原を知る：乃至：〔涅槃を了知せり〕それを證知して如來は過誤に陷らざるなり。

一八 バッガヴよ、一類の沙門婆羅門あり、彼等は戲耽を古傳の起原說なりと宣說す。彼等を訪ひて我かく云へり。『汝等諸子は戲笑に耽ることを、古傳の起原說なりと宣說すといふは眞なるや』と。彼等は我に斯く問はれて『然り』と答ふ。
31 彼等に我は斯く云へり。『如何にして汝等諸子は、戲耽を古傳の起原說なりと認定するや』と。我に問はれて彼等は答ふる所を知らず。答ふこと能はずして、却つて我に反問したり。彼等に問はれて我說示したり。

『諸子よ、戲耽と名づくる天ありき。彼等は多年、笑戲樂法に入りて住したり。永く笑戲樂法に入りて住したるが故に、專心は亂れたり。專心混亂して、彼等諸天はその身より沒せり。諸子よ、他の有情ありて、彼等の身より沒して茲に來れることあり。茲に來りて在家より無家に出家せん。在家より無家に出家して

熱心により…乃至…恰も是の如き心三昧生ず。その心三昧に於て、かの前住所を憶念するもそれ以前を憶念せず。彼惟へらく「彼等諸天は戲に耽らず、彼等は永く笑戲樂法に入りて住せざるが故に、その專心は混亂せず、その專心混亂せざるが故に彼等諸天はその身を捨せず、常住にして堅固、永遠にして不壞滅の法にして、永久同に住す。然るに我等は戲に耽りたり、永く笑戲樂法に入りて住したり。我等は永く笑戲樂法に入りて生活したるが故に、專心は混亂したり、專心混亂したるによりて、我等の身は死すべく、無常にして不堅固、永遠に非ずして少壽、壞滅の法によりて玆に來れり」と。是の如くにして諸子よ、諸子は戲耽を古傳の起原説なりと宣説すべし」と。

32 彼等は云へり。「實に瞿曇よ、是の如く我等は聽けり、正しく瞿曇の云へるが如し」と。バッガヴよ、我は世界の起原を知る…乃至…〔涅槃を了知せり〕それを證知して如來は過誤に陷らざるなり。

一九　バッガヴよ、一類の沙門婆羅門あり、意亂を古傳の起原説なりと宣説す。彼等を訪ひて我云へり。「汝等諸子は、意亂を古傳の起原説なりと宣説すといふ

は眞なるや』と。彼等は我に問はれて『然り』と答へたり。我、彼等に云へり。『汝等諸子よ、如何にして意亂を以て古傳の起原説なりと宣説するや』と。彼等は我に問はれて答ふることを得ず。答ふること能はずして、却つて我に反問したり。彼等に問はれて我説きて云へり。

『諸子よ、意亂と名づくる天ありき。彼等は永く互に嫉妬に燃えたり。彼等は永く互に嫉妬に燃えたるが故に、その心亂れたり。彼等は互に心亂れたるが故に、その身衰耗し、その心困乏せり。〔かくして〕彼等諸天は、その身より沒せり。さて諸子よ、また次の如き事態を知るべし、他の有情あり、その身より沒して玆に生れ來らん。玆に來りて在家より無家に出家すべし。在家より無家に出家して熱心により……乃至……かゝる心三昧生ず。その心三昧に於ては、かの前住所を憶念するも、それ以前を憶念せず。彼等惟へらく「實に彼等諸天は意亂れず、彼等は永く互に嫉妬に燃えず。彼等は永く互に嫉妬に燃えざるが故に、互にその心亂れず。彼等はその心互に亂れざるが故に、その身體は衰耗せず、その心は困乏せ
33 ず。彼等諸天はその身體より沒せず、常住にして堅固、永遠にして不壞滅の法に

よりて、永久同に住す。然るに我等は意亂れたり。我等は永く互に嫉妬に燃えたり。我等は永く互に嫉妬に燃えたるが故に、互に心穢されたり。互に心穢されたるが故に身體は衰耗し、心は困乏す。我等の身體は滅び、無常にして不堅固、少壽にして壞滅の法によつて茲に來る」と。是の如くにして、諸子は意亂を以て古傳の起原說を宣說すべし』と。

彼等は云へり。『實に友瞿曇よ、是の如く我等は聞けり、正しく瞿曇の云へるが如し』と。バッガヴよ、我は世界の起原を知る……乃至……〔涅槃を了知せり〕それを證知して如來は過誤に陷らざるなり。

二〇　バッガヴよ、一類の沙門婆羅門あり、無因生を以て古傳の起原說なりと宣說す。彼等を訪ひて我云へり。『汝等諸子は無因生を以て古傳の起原說なりと宣說すとは眞なるや』と。我にかく問はれて、彼等は『然り』と答へたり。我、彼等に云へり。『如何にして汝等諸子は、無因生の敎說を以て、古傳の起原說なりと宣說するや』と。我に問はれて、彼等は答ふることを得ず。答ふること能はずして却つて我に反問したり。彼等に問はれて我は說示したり。

『諸子よ、無想有情と名づくる天ありて、一想起るや否や、彼等諸天はその身より沒したり。諸子よ、かゝる事態を知るべし、他の有情ありて、その身より沒して茲に來ることあるべし。茲に來りて在家より無家に出家せん。在家より無家に出家して熱心により…乃至…恰も次の如き心三昧生ず。その心三昧に於ては、かの想生を憶念するも、それ以前を憶念せず。彼惟へらく「我も世界も無因生なり。そは如何なる故ぞ。實に我始め有らざりき。斯く我は有らずして、有性に展變せり」と。是の如くにして汝等諸子は、無因生を以て古傳の起原說なりと宣說すべし』と。

34

彼等は云へり、『實に友瞿曇よ、是の如く我等は聽けり、正しく瞿曇の云へるが如し』と。バッガヷよ、我は起原を知る、そを我は知るのみならず、更にそれ以上を知る、而してそを知りて、それに墮著せず、而して墮著せざるが故に、我自らかの涅槃を了知せり、それを證知して如來は過誤に陷らざるなり。

二一 實にバッガヷよ、實に一類の沙門婆羅門は、是の如き言、是の如き說を爲す。我を、不眞・空虛・虛僞・虛誕を以て批議すらく、『沙門瞿曇は顚倒せり、諸比丘も亦然り。

何となれば、沙門瞿曇は云ふ「淨解脱を逮得して住せる時に於て、その時に於て一切を不淨と知る」と』。されどバッガヴよ、我は『淨解脱を逮得して住せる時に於て、その時に於て一切を不淨と知る』と言はず。實にバッガヴよ、我は斯く云ふ『淨解脱を逮得して住せる時に於て、その時に於て淨とこそ知る』と。

『世尊、佛は顚倒せり、比丘等は一層顚倒せりと思ふは彼等なり。「佛は我が爲
35 に、淨解脱を逮得して住し得るやう、如法に教示したまふことを得と、是の如く我
は佛を信受し奉る」と』。

『實にバッガヴよ、是の如く、異なれる見解、異なれる信忍、異れる目的、異なれる研究、異なれる行持によりて、淨解脱を逮得してこれに住するは、汝にとりて難きことなり。來れ、汝バッガヴよ、我に對する汝の信奉、そを實に汝はよく護守すべきなり』。

『世尊、もし異見・異忍・異趣・異行・異教によつて淨解脱を逮得し、これに住すること、我に難きことならんには、佛に對する我が信奉、そを實に我はよく護守せんと

す』と。

斯く佛は宣へり。バッガヴ・ゴッタ梵志は佛の所説を歡喜滿悦したり。

註 ❶何の緣を以て云ゝ 「この緣を爲せりや、卽ち玆に來れる」を原意とす。

❷上人の法 uttari-manussa-dhamm をかく譯せり。

❸世界の起原 (aggañña) 註に lokupatticariyavamsa とある故にかく譯せり。下の第二七經 Aggañña-suttanta には lokuppatti (世起因)とあり。

❹四足にて行き(catukuṇḍiko)四瓶、つまり兩臂兩膝にて歩む所恰も四足の瓶に似たるよりかく云ふか。M. I. 79に catukuṇṭiko とあり。(南傳藏、中部經典、一・一三〇參照)。

❺腹脹(alasakena)英譯者によれば lasikā (關節滑液)をかくもの、顚癇ならんかといふ。漢に腹脹と譯す、次節には食物を節すべきことを說くが故に、この譯方れるが如し。暫くこれに從ふ。

❻註者によれば死屍は起つことと語ることを得ず、この事あるは佛の威力によるといふと。漢にはこの事實を名前化して、kālakañja を起屍餓鬼と譯す。

❼註釋によれば一、死時、二、病氣、三、再生、四、死法、五、死鬼語の五神通が爲されたるなりと。

❽見(diṭṭhi)かゝる際に見とは邪見を指す。

❾闍利(Jāliya)南傳藏、長部經典、一・二二九頁參照。

❿ 墮著せず (na parāmasāmi) 他の意見や欺瞞に陷らぬこと。
⓫ 涅槃 (nibbuti) 佛音は煩惱滅 (kilesa-nibbāna) と解す。
⓬ 空虛なる (suññaṁ) 空虛とは人の居ないこと。

優曇婆邏(うどんばら)経(きょう) (Udumbarika-sutta)

syn.: 優曇婆邏(うどんばら)師子吼(ししく)経(きょう) Udumbarika-sīhanāda-sutta. SC: Lion's Roar at Udumbarikā's Monastery

36

二五　優曇婆邏師子吼經（ウドゥンバリカ・シーハナーダ・スッタンタ）

是の如く我聞く。

一　一時、佛は王舍城耆闍崛山中に在しき。その時、一梵志有りて、尼倶陀(ニグローダ)と名づけ、常に三千の梵志大衆と倶に優曇婆邏(ウドゥンバリカー)梵志女林に住しぬ。時にまた散陀那(サンダーナ)と名づくる居士ありて、日々王舍城に往觀し、佛所を訪ひ（佛を供養し敬禮しぬ）。或時、散陀那居士謂へらく「今は佛所を訪ふ時にあらず、世尊は靜室に在して三昧思惟に住し給はん。諸比丘衆を訪ふ時にあらず、諸比丘衆も靜室に在りて三昧思惟に住し給へり。我今、寧ろ優曇婆邏梵志女林に到りて尼倶陀梵志を訪ねん」と。かくて散陀那居士は優曇婆邏梵志女林に到りて尼倶陀梵志を訪ねたり。

二　その時、尼倶陀梵志は、他の多くの梵志衆と倶に、大聲疾呼して諸種の遮道濁亂の論説を爲せり。——即ち或は王論を爲し、賊論を爲し、大臣論を爲し、軍隊論

37 を爲せり。或は怖畏を論じ、戰鬪を論ぜり。或は飲食を論じ、衣服を論じ、几床を

論じ、花鬘を論ぜり。或は近親を論じ、車馬を論じ、聚落を論じ、町村を論じ、都市を論じ、國土を論ぜり。或は男女を論じ、英傑を論じ、道路を論じ、渠溝を論ぜり。或は靈魂を論じ、異相を論じ、途說を論じ、海洋を論じ、是の如き有非有の所說を爲せり。

三　尼倶陀梵志は、遙かに散陀那居士の來れるを見て、彼の諸弟子を誡めて言く、「汝等靜肅にせよ。隻語をも發する勿れ。彼處に沙門瞿曇の弟子散陀那居士來れり。沙門瞿曇の諸弟子の中、白衣居士として、王舍城に住するもの丶中に於て、この散陀那居士はその隨一なるものなり。此等の尊者は靜寂を欲し、沈默を格守し、靜肅を讚美せり。彼また靜肅の人あるを知らば、必ずや訪ね來るべし」と。かく告げ終るに、彼等梵志は各々沈默を守りぬ。

四　その時、散陀那居士は、尼倶陀梵志の所に到りて、尼倶陀梵志に問訊會釋して一方に坐せり。著座し終りて、散陀那居士は尼倶陀梵志に告げて言く、

「賢者よ、此等の異學外道の梵志等、一所に參集し、互に大聲疾呼して、諸種の遮道

濁亂の言說を爲せり——卽ち或は王論を爲し……乃至……是の如き有非有の所論

を爲せり。然るにこれに反して、かの佛は林間樹林、孤獨遠離の所住を好み、靜謐にして寂莫の地、有閑にして清風の如く處を選びて住し給へり」と。

五　是の如く告げ終るに、尼倶陀梵志は散陀那居士に答へて言く、

「居士よ、然らば沙門瞿曇は誰人と倶に語り、誰人と對論し、誰人に明智理解を得しむるや。沙門瞿曇の智は空處に偏せり。沙門瞿曇は獨處を好みて倶に語るを得ず、彼は常に偏見を抱けり。譬へば瞎牛の偏歩して常に邊處に在るが如く、沙門瞿曇の智は空處に偏せり。獨處を好みて倶に語るを得ず、彼は常に偏見を抱けり。居士よ、若し沙門瞿曇にして、この集會處に來らば、一問に依りて彼を窮追し、恐らく空瓶の如く、遂に彼を默せしむべし」と。

六　世尊は超人清淨天耳通を以て、散陀那居士と尼倶陀梵志との、是の如き應對を聞き給ひて、直ちに耆闍崛山を降り、スマーガダー河畔、養孔雀園に到りて、その
39 空處に於て經行し給ひき。尼倶陀梵志は世尊がスマーガダー河畔、養孔雀園の空處に於て經行し給へるを見て、彼の諸弟子を誡めて言く、

「汝等靜粛にせよ。隻語をも發する勿れ。かの沙門瞿曇はスマーガダー河畔、

養孔雀園の空處に經行せり。かの師も亦、實に靜寂を欲し、沈默を格守し、靜肅を讚美せり。彼また靜肅の人あるを知らば、必ずや訪ね來るべし。若し沙門瞿曇にして、この集會處に訪ね來らば、我等は彼に此の問を爲さん――世尊、かの世尊は如何なる法によりて、その弟子を敎訓し、また如何なる敎法によりて、その弟子は止息安穩を得、樂はしき根本梵行を知るを得るや――と」。

かく告げ終るに、彼等諸梵志は各々沈默を守れり。

七 その時、世尊は尼倶陀梵志の所に到り給へり。時に尼倶陀梵志は世尊に告げて言く、

「佛世尊、よくぞ來ましぬ。佛の來り給ふこと何ぞ久濶なる、いざこの所設の座に著き給ふべし」と。

世尊は所設の座に著き給ひぬ。尼倶陀梵志は自ら他の卑座に著きて一方に坐しぬ。一方に坐せし尼倶陀梵志に世尊はかく曰ひぬ。

「尼倶陀よ、如何なる談話の爲に、今汝等はこゝに坐せるや。また遮られたる汝等の閑談は何なりしや」と。

斯く曰へるに尼倶陀梵志は世尊に應へて言く、

「世尊、我等はこゝに世尊のスマーガダー河畔、養孔雀園の空處に經行し給へ
40 るを遙に見て、かく語り合へり。『若し沙門瞿曇にして、この集會處に來り給はゞ、彼に此の所問を爲さん――世尊、かの世尊は如何なる法によりてその弟子を敎訓し、また如何なる敎法に由りて、その弟子は止息安穩を得、樂(ねが)はしき根本梵行を知ることを得るや――と』。我等の此等の閑話が遮られ、その時世尊は來り給ひしなり」。

「尼倶陀よ、如何なる敎法によりて、われ諸弟子を敎へ、また如何なる敎法によりて、我が指導せる諸弟子は止息安穩を得、樂はしき根本梵行を知ることを得るかは、かの異なれる見解、異なれる信忍、異なれる目的、異なれる研究、異なれる行持の者には不可知なり。いざ、尼倶陀よ、汝自ら所修の苦行に關して、我に――世尊、實に如何なる淸苦行修行は成滿し、如何なる苦行修行は不成滿なるや――と問へ」と。

かく曰へるに、彼等諸梵志は、各自大聲を發し、讚美して言く「偉なる哉、奇なる哉、

沙門瞿曇は大威力大神力を有せり。實に自說を立て、他說によりて〔自說を〕充實せしむ」と。

八　その時、尼倶陀梵志は彼等梵志を靜止せしめて、世尊にかく告げて言く、「世尊、我等は實に苦行修行說を爲し、苦行修行義を持し、苦行修行執に住せり。世尊、如何なる清苦行修行は成滿し、如何なる苦行修行は不成滿なるや」と。

「尼倶陀よ、今こゝに苦行者あり、無衣にして、不作法、〔食後〕手を舐め、『來れ』との請を受けず、『住まれ』との請を受けず、持來らされたるを受けず、特に用意せられたるを受けず、招待を受けず、或は瓶の口より食を取らず、皿の緣より取らず、閾の間に置かれしを取らず、臼間にあるを取らず、杖間にあるを取らず、杵の間にあるを取らず、二人共に食する時〔その一人のみより與へらるゝを〕受けず、懷姙せる女より受けず、授乳中の女より受けず、男と交會中の女より受けず、❶畜狗家の食を取らず、狗近くにあれば受けず、蠅群れば受けず、魚肉を食はず、清酒を飲まず、濁酒を飲まず、粥汁を飲まず。或は一家受食者にして一口〔の食を以て足れりと〕爲し、或は二家受食者にして二口〔の食を以て足れりと〕爲し、或は七家受食者にして、七口〔の食

を以て足れりと爲す。或は一施によりて身を持し、二施によりて身を持し、七施によりて身を持す。或は一日に一食を爲し、二日に一食を爲し、七日に一食を爲す。かくして半月に一食に至るまで、定期に食する修行に從事す。或は又、菜茹を食し、稗子を食し、硬米を食し、頭々羅（ダッドゥラ）米を食し、ハタ草を食す。或は雜麨を食し、或は飯汁を食し、糜米を食し、穅稻を食し、牛糞を食し、樹・根・果を食し、自落果を食す。或は麻衣を著し、麻莎衣を著し、塚間衣を著し、糞掃衣を著し、ティリタ樹皮を著し、或は黑羚羊皮を著し、黑羚羊の皮の細條を編めるを著し、或は草皮を著し、樹皮衣を著し、木片の衣を著し、或は髮毛の布を著し、或は馬毛の布を著し、或は梟羽の衣を著す。或は拔鬚髮行者にして常に鬚髮拔除を行じ、或は住立行者にして座を斷じ、或は蹲踞行者にして蹲踞を修し、或は臥刺行者にして刺を以て床と爲し、或は果蓏上に臥し、或は露地に臥し、或は一側にのみ臥し、塵埃に浴し、或は空地に住し、到る處常に停立す。或は異食を爲し、常に奇異の食を取ることを行じ、或は不飲水行者にして、常に冷水を飲まざるを行じ或は一日三浴を行ぜん。尼俱陀よ、そを如何に思ふや。是の如き淸苦行修行は成滿となすや、不成滿と爲すや」と。

「世尊、實に是の如き苦行修行は成滿にして、不成滿にあらず」と。

「尼倶陀よ、我はかゝる苦行修行に對して、諸種の垢穢あることを説く」と。

九　「世尊、然らば如何にして、世尊はかゝる苦行修行の成滿に對して、諸種の垢穢ありと説き給ふや」と。

「尼倶陀よ、茲に苦行者ありて苦行を勤修す。彼その苦行によりて自足悦滿す。尼倶陀よ、若しかの苦行者にして、苦行を勤修し、彼その苦行によりて、自足悦滿せば、これ苦行者の垢穢なり。

次に復、尼倶陀よ、茲に苦行者ありて苦行を勤修す。彼その苦行によりて、自己を讚美し他を誹謗す。尼倶陀よ、若しかの苦行者にして、苦行を修して自己を讚美し、他を誹謗せば、是また實に苦行者の垢穢なり。

次に復、尼倶陀よ、茲に苦行者ありて、苦行を勤修す。彼その苦行によりて、惑溺し染著し沈醉す。尼倶陀よ、若しかの苦行者にして、苦行を修し、その苦行により
43 て惑溺し染著し沈醉せば、是また實に苦行者の垢穢なり。

一〇　次に復、尼倶陀よ、茲に苦行者ありて苦行を勤修す。彼はその苦行により

て供養敬禮を受く。彼はその供養敬禮によりて、自足悦滿す。尼倶陀よ、若しかの苦行者にして、苦行を修して供養敬禮を受け、彼その供養敬禮によりて自足悦滿す。是また實に苦行者の垢穢なり。

次に復、尼倶陀よ、茲に…〔乃至〕…彼その苦行によりて供養敬禮を受く。彼その供養敬禮によりて、自己を讃美し他を誹謗す…〔乃至〕…是また實に苦行者の垢穢なり。

次に復、尼倶陀よ、茲に…〔乃至〕…彼その苦行によりて供養敬禮を受く、彼その供養敬禮によりて、惑溺し染著し沈醉す…〔乃至〕…是また實に苦行者の垢穢なり。

次に復、尼倶陀よ、茲に苦行者ありて苦行を勤修し、諸食に於て分別を爲して言く、『我これを好み、これを好まず』と。彼はその好まざるものをば得んことを避け、その好めるものに愛著し、之に惑はされ囚はれて、その諸患を見ず、出要を知るを得ず…乃至…是また實に苦行者の垢穢なり。

44 次に復、尼倶陀よ、茲に苦行者ありて苦行を勤修するに、供養敬禮事の故を以てす。彼謂へらく、『國王、大臣、刹帝利、婆羅門、居士、異學等、我を尊敬せん』と。是また

實に苦行者の垢穢なり。

一一　次に復、尼倶陀よ、苦行者ありて他の沙門・婆羅門を非難して言く、『かの沙門・婆羅門は豐かに生活しつゝ、而も何故に尙ほ根種子、樹種子、節種子、枝種子、第五に種種子の如き一切のものを享受せんと欲するや。恰も雷鳴〔風雨〕の發芽を害するが如くに』と沙門を呵責す…乃至…是また實に苦行者の垢穢なり。

次に復、尼倶陀よ、苦行者ありて、他の沙門・婆羅門の有族中に於て恭敬尊重せらるゝを見、かゝる念を生ず、『かの沙門は豐かに生活しつゝ、有族者に恭敬尊重せらる。然るに苦行者たる我は、難苦の生活を爲しつゝ、有族者に恭敬尊重せられず』と。是の如く彼は有族中に於て怨恨慳貪の念を生ず…乃至…是また實に苦行者の垢穢なり。

次に復、尼倶陀よ、苦行者ありて、常に四衢街頭に坐して諸種の苦行を行ず…乃至…是また實に苦行者の垢穢なり。

次に復、尼倶陀よ、苦行者ありて、己〔の姿〕を隱して有族中を行乞し、自ら謂へらく、『これ亦我が苦行中のものなり、これ亦我が苦行中のものなり』と…乃至…是また

45

實に苦行者の垢穢なり。

次に苦行者ありて、何物か常に覆ふところあり。彼は『汝、こを是と爲すや』と問はれたる時、非是に於て是と答へ、是に於て非是と答ふ。是の如く、彼は自覺して妄語を爲す……乃至……是また實に苦行者の垢穢なり。

一二　次に復、尼倶陀よ、苦行者ありて、如來及び如來聖弟子の教法所說の善訓教訶を認知せず、是また實に苦行者の垢穢なり。

次に復、尼倶陀よ、苦行者ありて瞋恨を有す。若し苦行者にして瞋恨を有せば、是また實に苦行者の垢穢なり。

次に復、尼倶陀よ、苦行者あり、虛僞欺瞞にして嫉妬貪欲なり。狡猾にして僞詐なり、傲慢にして高慢なり、邪婬にして惡望を抱けり、邪見にして邊取見を抱き、所見に染著し、兩手に堅く執持して出要を得ず。若し苦行者にして所見に染著し、兩手に堅く執持して出要を得ざれば、是また實に苦行者の垢穢なり。

尼倶陀よ、そを如何に思ふや、此の苦行勤修は穢なるや、無穢なるや」と。

「世尊、今實に此等の苦行勤修は、穢にして無穢にあらず。世尊、今こゝに一

苦行者ありて、此等一切の垢穢を成ぜることを知り給はゝ、更に進みて如何なる所說をか說き給ふや」。

一三　「尼俱陀よ、こゝに苦行者ありて苦行を勤修す。彼はその苦行によりて自足悅滿せず。尼俱陀よ、若し苦行者にして苦行を勤修し、彼はその苦行によりて
46 自足悅滿してあらざれば、彼はその事に於て淸淨なり。

次に復、尼俱陀よ、苦行者ありて、苦行を勤修し、彼はその苦行によりて自己を讚美せず、他を誹謗せざれば…乃至…彼はその事に於て淸淨なり。

次に復、尼俱陀よ…〔乃至〕…彼はその苦行によりて惑溺せず、染著せず、沈醉せず…乃至…彼はその事に於て淸淨なり。

次に復、尼俱陀よ…〔乃至〕…彼はその供養敬禮によりて自足悅滿せず…〔乃至〕…彼はその事に於て淸淨なり。

次に復…〔乃至〕…彼はその供養敬禮によりて自己を讚美せず、他を誹謗せず…〔乃至〕…彼はその事に於て淸淨なり。

次に復…〔乃至〕…彼はその供養敬禮事によりて惑溺せず、染著せず、沈醉せず…

〔乃至〕…彼はその事に於て清淨なり。

次に復…〔乃至〕…彼はその好まざるものを得んことを避けず、その好めるものに愛著せず、それに惑はされず、囚はれず、その諸患を見て、出要を知ることを得…〔乃至〕…彼はその事に於て清淨なり。

次に復…〔乃至〕…彼は供養敬禮事の故を以て『國王、大臣、刹帝利、婆羅門、居士、異學等は我を尊敬すべし』と思惟せず…〔乃至〕…彼はその事に於て清淨なり。

一四 次に復、尼倶陀よ、苦行者ありて、他の沙門・婆羅門を非難することなし。卽
47 ち『かの沙門婆羅門は豐かに生活しつゝ、而も何故に尙ほ根種子、樹種子、節種子、枝種子、第五に種種子の如き一切のものを享受せんと欲するや。恰も雷鳴〔風雨〕の發芽〔を害するが如くに〕』と沙門を呵責することなし。彼はその事に於て清淨なり。

次に復、尼倶陀よ、苦行者ありて他の沙門・婆羅門の、有族中に於て恭敬尊重せらるゝを見て、かゝる念を生ぜず…〔乃至〕…是の如く、彼は有族中に於て怨恨慳貪の念を生ぜず。彼はその事に於て清淨なり。

次に復、尼倶陀よ、苦行者ありて、常に四衢街頭に坐し、諸種の苦行を行〔ぜ〕ず、かく彼はその事に於て清淨なり。

次に復、尼倶陀よ、苦行者あり、己の姿を隱して有族中に行乞せず…〔乃至〕…『これ亦、我が苦行中のものなり』と思惟せず。彼はその事に於て清淨なり。

次に復、尼倶陀よ、苦行者ありて、何物にも常に覆はるゝところなく…〔乃至〕…彼は自覺して妄語せず。彼はその事に於て清淨なり。

一五　次に復、尼倶陀よ、苦行者ありて如來及び如來聖弟子の敎法所説の善訓敎訶を認知す。彼はその事に於て清淨なり。

次に復、尼倶陀よ、苦行者ありて無瞋無恨なり…〔乃至〕…彼はその事に於て清淨なり。

次に復、尼倶陀よ、苦行者あり、不虛僞不欺瞞にして嫉妬せず…〔乃至〕…兩手に堅[48]く執持することなく、よく出要を得たり…〔乃至〕…彼はその事に於て清淨なり。

尼倶陀よ、それを如何に思ふや。是の如き清苦行勤修は眞に清淨なるや、不清淨なるや」。

「世尊、今、是の如き清苦行勤修は實に清淨にして不清淨にあらず、是れ最上樹③節の行なり」。

「尼倶陀よ、是の如き苦行勤修は最上樹節の行にあらず。これその外皮に達したるのみなり」。

一六 「世尊、然らば如何なる苦行勤修が最上樹節の行なるや。世尊、願くは佛、苦行勤修によりて最上樹節の行に達せしめ給はんことを」。

「尼倶陀よ、こゝに苦行者の四種禁戒律儀あり。如何が苦行者の四種禁戒律儀なる。尼倶陀よ、こゝに苦行者ありて、自ら殺生を爲さず〔他に〕殺生を爲さしめず、
49 〔人に〕殺生を教へず。〔自ら〕偸盗せず、他に偸盗せしめず、人に偸盗を教へず。〔自ら〕妄語せず〔他に〕妄語せしめず、人に妄語を教へず。〔自ら〕修習を望まず、〔他に〕修習を望ましめず、〔人に〕修習を望むことを教へず。尼倶陀よ、是の如きは、〔これ〕苦行者の四種禁戒律儀とす。尼倶陀よ、若し苦行者にして、是の如き四種禁戒律儀あり、彼の苦行、この中に成じてあらば、彼は増益を得て退轉することなし。彼は遠離獨坐を好み、園林・樹下・山腹・巖窟・洞穴・祠堂・林間・空處・穰積處を樂む。彼は食後、鉢

を持して歸り、結跏趺坐し、正しく身を持して、正念專注に住す。彼は世間に於ける貪欲を斷じて離貪心に住し、貪心を淨化す。瞋恚を斷じて不瞋心に住し、一切の生類有情を利益し哀愍して、瞋恚心を淨化す。睡眠を斷じて離睡眠に住し、明慧の心を自覺して、睡眠の心を淨化す。悼悔を斷じて不悼悔に住し、內心平靜にして悼悔の心を淨化す。疑念を斷じて無疑心に住し、疑念を去り善法に於て、疑念を拂ひて心を淨化す。

一七　彼は此等の五蓋を斷じて、心は明慧によりて諸穢の力を滅除し、慈と倶な
る心を以て一方に遍滿して住す。是の如く二方、三方、四方に〔遍滿す〕是の如く上、
50 下、橫、普く一切處、一切世界に廣大、廣博、無量、無恚、無害なる慈心を以て遍滿して住
す。悲と倶なる心を以て…乃至…喜と倶なる心を以て……捨と倶なる心を以
て…〔乃至〕…遍滿して住す。尼倶陀よ、そを如何に思ふや。實にかゝる清苦行勤
修は清淨なるや、不清淨なるや」。

「世尊、實にかゝる清苦行勤修は清淨にして不清淨にあらず、最上樹節の行なり」。

「尼倶陀よ、是の如き苦行勤修は最上樹節の行にあらず、そは樹皮の行に過ぎず」。

一八　「世尊、然らば如何が苦行勤修の最上樹節の行なる。世尊、願はくは佛、我等をして苦行勤修によりて、最上樹節の行に達せしめ給はんことを」。

「尼倶陀よ、こゝに苦行者の四種禁戒律儀あり。如何が四種禁戒律儀なる…乃至…尼倶陀よ、是の如きが、苦行者の四種禁戒律儀なり。尼倶陀よ、若し苦行者にして四種禁戒律儀あり、彼の苦行、その中成じてあらば、彼は増長して退轉することなし。彼は遠離獨坐を好み…乃至…彼は此等の五蓋を斷じて、心は明慧によりて、諸穢の力を滅除し、慈と倶なる心を以て、一方に遍滿して住す……彼は無量の前生を憶念す。即ち或は一生、二生、三生、四生、五生、十生、二十生、三十生、四十生、五
51 十生、一百生、一千生、百千生、無量の成劫、無量の壞劫、無量の成壞劫に於て『予は、其處に於て是の如き名あり、是の如き族姓、是の如き種族にして、是の如き食あり、是の如き苦樂の受あり、是の如き壽量あり。彼は此處に沒して彼處に生ず。そこに於て、また是の如き名あり、是の如き族姓、是の如き種族にて、是の如き食、是の如き

苦樂の受あり、是の如き壽量ありと憶念す。彼また彼處に沒して此處に生ぜり』と。是の如くかく其の事情と境遇とを併せて、種々なる前生を憶念す。

尼倶陀よ、汝はそを如何に思ふや。是の如き清苦行勤修は、實に清淨なるや不清淨なるや」。

「世尊、實に是の如き苦行勤修は清淨にして不清淨にあらず、また最上樹節の行なり」。

「尼倶陀よ、是の如き苦行勤修は最上樹節の行にあらず、そは纖皮に達せるに過ぎず」。

一九　「世尊、然らば、如何なるが苦行勤修の最上樹節の行なる。世尊、願はくは佛、我等に苦行勤修の樹節の行を得せしめ給はんことを」。

「尼倶陀よ、こゝに苦行者ありて四種禁戒律儀を成ぜり……〔乃至〕……是の如く彼は
52 其の事情と境遇とを併せて種々なる前生を憶念す。彼は超人清淨天眼通によりて、有情の生死を見、貴賤と醜好と、善趣と惡趣とを、その業に隨つて知る。卽ち、『諸賢よ、實に此等の有情は身惡行を成じ、口惡行を成じ、意惡行を成ず。諸師を誹

謗し、邪見を抱きて邪見所生の業果を得たり。彼等は身壞命終の後、惡生、惡趣、險難處、地獄に生ず。次に復、諸賢よ、此等の有情は、身善行を成じ、口善行を成じ、意善行を成ず。諸師を誹謗せず、正見を抱き、正見所生の業果を得たり。彼等は身壞命終の後、善趣、天世に生ず』と。是の如く超人清淨天眼通によりて有情の生死を見、貴賤と醜好と、善趣と惡趣とを、其の業に隨つて知れり。

尼俱陀よ、汝はそを如何に思ふや。かゝる淸苦行勤修は淸淨なるや、不淸淨なるや」。

「世尊、實にかゝる淸苦行勤修は、淸淨にして不淸淨にあらず、最上樹節の行なるべし」。

「尼俱陀よ、是の如き苦行勤修こそ、最上樹節の行なり。是の如く、尼俱陀よ、若し、汝、我に『世尊、世尊の諸弟子を敎ゆる敎法は如何、またその諸弟子を導きて安穩處を得しめ、樂(ねが)はしき根本梵行を知らしむる敎法は如何』と問はゞ、尼俱陀よ、是の如き〔法こそ〕、われ諸弟子を導き、我によりて諸弟子の、安穩處に導かれ、樂はしき根本梵行を知る最勝殊妙の法なり」と。

かく說き終り給ふに、彼等梵志は大聲に讃美して言く、「こゝに我等はかの師を失へり。我等これ以上に勝れたるものを知らず」と。

53 二〇　散陀那(サンダーナ)居士は、眞に今、此等の異見を抱ける梵志等が、佛の所說を聞き、諦聽して知解心を生ぜしことを知り、かの尼倶陀梵志に告げて言く、

「是の如くして、賢者尼倶陀よ、若し汝我に『居士よ、沙門瞿曇は誰人と倶に語り、誰人と對論し、誰人に明智理解を得しむるや。沙門瞿曇の智は空處に偏せり、沙門瞿曇は獨處を好みて倶に語るを得ず、彼は常に偏見を抱けり。譬へば瞎牛の偏歩して常に邊處に在るが如く、沙門瞿曇の智は空處に偏せり。獨處を好みて倶に語るを得ず。彼は常に偏見を抱けり。居士よ、若し沙門瞿曇この集會處に來らば、一問によりて彼を窮追し、恐らく空瓶の如く、遂に彼を閉塞せしむべし』と放言せしにあらずや。諸賢よ、今かの佛・阿羅漢・等正覺はこゝに來給へり。彼をば獨處を好みて倶に語るを得ざるものと爲せ、偏歩して常に邊處に在る瞎牛と爲せ、一問によりて彼を窮追し、恐らく空瓶の如くに彼を閉塞せしめよ」と。

かく言ひ終るに、尼倶陀梵志は默然として慚悔し、悄然として肩を垂れ、眼を伏

して赤面し、啞然として坐せり。

二一　その時、佛は尼倶陀梵志の、默然として懺悔し、悄然として肩を垂れ、眼を伏して赤面し、啞然として坐せるを見給ひ、尼倶陀梵志に告げて曰く、

「尼倶陀よ、汝等かゝる言說を爲せることは、これ眞實なるや」と。

54 「世尊、我等は眞に是の如き愚鈍なる、是の如き不善なる、此等の言說をば爲しぬ」。

「尼倶陀よ、そを如何に思ふや。汝は梵志長老耆宿先師の所說に傾聽して、『彼等は嘗て過去世に於て阿羅漢・等正覺たりし時、曾て此等の諸佛、一所に集會して大聲疾呼し、諸種の遮道濁亂の言に耽りしことありしか。例へば或は王論を爲し……乃至……是の如き有非有の所論を爲せること、今汝及び汝等の師の論諍せるが如くなりしか。或は又、彼等諸佛は林間樹林に在りて、孤獨遠離の所住を好み、靜謐にして寂莫なる處、有閑にして淸風吹く處、人里の潰閙を離れて、禪思三昧に適する處を選びて住したること、我の今爲せるが如くなりしや否や』を聞けることありや」。

「世尊、我、かの梵志長老耆宿先師の所說を聞けり。『彼等は過去世に於て阿羅漢・等正覺なりし時、彼等諸佛は一所に集會して大聲疾呼し、諸種の遮道濁亂の言に耽りしことなし。例へば或は王論を爲し…乃至…有非有の所論を爲せること、今の我及び我等の師の論諍したるが如くなりしことなし。たゞ是の如く聞けるのみ、彼等諸佛は林間樹林に在り…乃至…禪思三昧に適する處を選びて住すること、今佛の爲し給へるが如くなりき』と。

「尼倶陀よ、汝は有慧にして耆宿と爲り、此の事を思はずや。『かの佛は覺者なり、自覺によりて法を說き給ふ。かの佛は自ら能く調伏せり、調伏によりて法を說き給ふ。かの佛は自ら止息せり、止息によりて法を說き給ふ。かの佛は自ら能
55 く度脫せり、度脫によりて法を說き給ふ。かの佛は自ら解脫を得給へり、解脫によりて法を說き給ふ』と。

二二　かく說き給ふに、尼倶陀梵志は佛に告げて言く、

「世尊、我、愚鈍なるまゝに、痴冥なるまゝに、不善なるまゝに、罪過によりて制伏せられて、佛を是の如く誹謗しまつれり。世尊、我、罪過を罪過として確認し、以

て將來必ず自制すべきを、世尊の受納したまはんことを」と。

「尼倶陀よ、愚鈍なるままに、痴冥なるままに、不善なるままに罪過が汝を制伏して我を誹謗せしめたるなり。尼倶陀よ、されど汝は罪過を罪過として認め、如實にそれを懺悔するが故に、我はそれに關する汝の懺悔を受納せん。尼倶陀よ、若し人ありて、罪過を罪過として認め、そを如實に懺悔し、以て將來自制をなさば、これ聖者の律の繁榮する所以なればなり。尼倶陀よ、我またかく說かん。『來れ、有慧にして正直、高潔、正行の人よ、われ當に敎へん、われ當に法を說くべし。所說の如く行じ、そを目的として有族姓子の、在家より出家に入れるが、かの無上梵行を成じて、現世に於て獨自に證悟して止住せんには、七年を要すべし。尼倶陀よ、七年間任持せよ。來れ、有慧にして正直、高潔、正行の人よ、われ當に敎へん、われ當に法を說くべし。所說の如く行じ、そを目的として有族姓子の、眞に在家より出家に入れるが、かの無上梵行を成じて、現世に於て獨自に證悟して止住せんには、六年を要すべし……〔乃至〕……五年、四年、三年、二年、一年を要すべし……乃至……七月を要すべし……乃至……六月、五月、四月、三月、二月、一月、半月を要すべし。尼倶陀よ、唯だ半月を任

持せよ、來れ、有慧にして正直、高潔、正行の人よ、われ當に敎へん…〔乃至〕…現法中に自知作證し、成就して住せんには、僅かに七日を要するに過ぎず』と。

二三　尼倶陀よ、汝またかく思惟するならん、『沙門瞿曇は、その弟子を奪はんが爲に我等にかく云へり』と。尼倶陀よ、蓋しかゝる所見を抱く勿れ。汝の師をして常に汝の師たらしめよ。尼倶陀よ、汝またかく思惟するならん、『沙門瞿曇は諷誦を止めんが爲に我等にかく言へり』と。尼倶陀よ、かゝる所見を抱く勿れ。諷誦をして常にあらしめよ。尼倶陀よ、汝またかく思惟なるならん、『沙門瞿曇は我等の生活を奪はんが爲にかく言へり』と。尼倶陀よ、汝またたかゝる所見を抱く勿れ。汝の生活をして汝の生活たらしめよ。尼倶陀よ、汝またかく思惟せん、『我等の法は不善なり、諸師またその不善を指摘せば、そを確認せしめんと欲してかく言へり』と。尼倶陀よ、かゝる所見を抱く勿れ。汝の不善法も、諸師に指摘せられたる不善も、そのまゝに存在せしめよ。尼倶陀よ、汝またかく思惟せん、『我等の法は善なり、諸師またその善を指摘せば、そを除かんと欲して、沙門瞿曇はかく言へり』と。尼倶陀よ、汝またかゝる所見を抱く勿れ。汝等の善法も諸師指摘の善法も、その

まゝに存せしめよ。尼倶陀よ、我は是の如く、『諸弟子を奪はんが爲に說くにあらず。また諷誦を止めんが爲にもあらず。生活を奪はんが爲にもあらず。また57汝等に不善法あり、諸師その不善法を指摘するあらば、そを確認せしめんと欲して說くにもあらず。また汝等に善法あり、諸師その善法を指摘するあらば、それを除かんと欲して說くにもあらず。蓋し尼倶陀よ、不善法を斷ぜずは、有穢轉生して苦痛惡報あり。未來に生死〔の苦〕あり。我それ等を斷ぜんが爲に法を說く。汝等如實に行ぜば、穢垢の法を斷盡し、淸白の法は增益せん。智慧成滿して現世に於て、獨自に證悟して住せん』と。

二四　かく說き終り給ふに、彼等諸梵志は默然として悔悟し、悄然として肩を垂れ、眼を伏して赤面し、啞然として坐せり。その時、彼等の心は惡魔によりて全く擾亂せられたり。

その時、佛は思惟し給はく、「此等一切の愚痴人は、惡魔波旬に撓亂せられたり。そこには斯く思惟するもの一人もあらず。卽ち『いざ、我等は沙門瞿曇所示の梵行を行ぜん。如何にせば七日にて成ずるを得るや』と」。

かくて、佛は優曇婆邏梵志女林中に於て、獅子吼を爲し終り、虚空に乘じて耆闍崛山中に還り給へり。散陀那居士も直ちに王舍城に歸りたりと。

註❶畜狗家。底本に samkittisu とあるも、一本には sangitisunā とあり。卽ち畜狗家の意なるべし。

❷雷鳴 (asani-vicakkam) 雷鳴風雨の害の意なるべし。

❸樹節とは眞實と同義なり。

転輪王経(てんりんおうきょう) (Cakkavatti-sutta)

SC: Wheel-Turning Monarch

58

二六　轉輪聖王師子吼經（チャッカヴァッティ・シーハナーダ・スッタンタ）

是の如く我聞く。

一　一時佛は摩揭陀(マガダ)國摩偷羅(マートゥラー)に住し給へり。その時佛は諸比丘に告げて曰(のたま)はく、「諸比丘よ」と。「世尊」と彼等諸比丘は佛に應へき。佛は次の如く說き給へり。

「自らを島とせよ、自らを歸依處とせよ、他を歸依處とする勿れ。法を島とせよ、法を歸依處とせよ、他を歸依處とすること勿れ。

比丘等よ、然らば如何が、比丘は自らを島とし、自らを歸依處とし、他を歸依處とせず、法を島とし、法を歸依處とし、他を歸依處とせずして住するや。

こゝに、比丘等よ、身に於て身觀に住し、精勤し、自覺し、憶念せば、世間に於ける貪欲愚痴を調伏し得べし。受に於て…乃至…心に於て……法に於て…〔乃至〕…是の如く、比丘等よ、比丘は自らを島とし、自らを歸依處とし、他を歸依處とせず、法を島とし、法を歸依處とし、他を歸依處とすることなくして住せり。

Related texts: 輪王七寶經 the original Pāli text is SN 46.42 *Cakka-vattisutta.* Variant translations include the tenth sutra of the Saṃyuktâgama 雜阿含經 T 99(27), the *Qibao jing* of 七寶經 of the Madhyamâgama 中阿含經 T 26(58), and the seventh sutra of the Ekôttarâgama 增一阿含經 T 125(39). In addition, related legends are explained in the variant translations of the Mahā-parinibbāna-suttanta relation such as 般泥洹經 T 6. (http://www.buddhism-dict.net/cgi-bin/xpr-ddb.pl?q=輪王七寶經)

[Page 74 not scanned.]

[Page 75 not scanned.]

よ、彼の刹帝利灌頂王は、天の輪寶の忽焉として消滅せるを見て、心中怏々として喜悅せず、卽ち彼は父王の所に到りて、父王に告げて言く、

『大王よ、天の輪寶は忽焉として消滅せるを知り給はずや』と。

比丘等、かく告げられて、父王は刹帝利灌頂王に告げて言く、

『噫、わが子よ、汝、天の輪寶の忽焉として消滅せしことを悲しむ勿れ。また〔そが爲〕に憂愁の念を抱く勿れ。わが子よ、實にこの天の輪寶は、汝の父祖の遺產に非ず、汝正に聖なる輪寶を轉ずべきのみ。若し汝にして聖なる輪寶を轉ぜば、十五日滿月の時、頭髮を沐浴して齋戒を行ひ、莊麗なる殿堂に昇らん時、天の輪寶は忽焉として出現せん。輪には千輻あり、車轂は一切の工匠を成滿具足したらん』と。

61 **五**　『然らば、大王よ、その聖なる輪寶を轉ずるとは如何に』と。

『わが子よ、汝當に常にかの法に依り、法を恭敬し尊重し、法幢となり、法幟となり、法を以て首となし、よく正法を守護し、又當に庶民、軍隊、刹帝利、群臣、婆羅門、居士、農商、沙門婆羅門等に於て、また禽獸に至るまで護視すべし。而して汝の國土中に、如何なる惡法をも留まらしむる勿れ。若しまた汝の國土に貧者あれば、彼に財

寶を與へよ。若しまた汝の國土に於て沙門婆羅門は、憍慢懈怠を離去し、忍辱仁愛を獨修し、自己を調御し、自己を靜止し、自己を寂滅せしむるを得なば、汝は時に彼處に行きて、かく問ふべし、『賢者よ、如何が善にして如何が不善なる、如何が罪にして如何が無罪なる、如何が可行にして如何が不可行なる。また何法を行ぜば、長夜に不利益と苦とを受くべく、何法を行ぜば長夜に利益と安樂とを受くべきか』と。そを聞きて、不善はこれを去り、善はこれを受持すべし。わが子よ、これ實に聖なる轉輪寶なり』と。

『然るべし、大王よ』と。比丘等よ、刹帝利灌頂王は父王の意を奉じて聖なる輪寶を轉ぜり。彼が聖なる輪寶を轉ぜしに、十五日滿月の時、頭髪を沐浴して齋戒を行ひ、莊麗なる殿堂に昇る時、天の輪寶は忽焉として出現し、輪に千輻ありて、車轂は一切の工匠を成滿具足せり。これを見終りて、刹帝利灌頂王は自ら謂らく、『われ曾て聞くことあり。若し刹帝利灌頂王にして、十五日滿月の日、頭髪を沐浴して齋戒を行ひ、莊麗なる殿堂に昇らん時、天の輪寶、忽焉として出現し、輪に千輻あり、車轂は一切の工匠を成滿具足してあらば、これ卽ち轉輪聖王なりと。われ今

[62]正に轉輪聖王たるべし』と。

六　その時、比丘等よ、かの刹帝利灌頂王は玉座より立ち、一方の肩を露はして、左手に金瓶を持ち、右手に金輪を摩捫して告げて言く、

『汝、輪寶よ、轉ぜよ、〔轉じて一切を〕征服せよ』と。その時、比丘等よ、かの輪寶は東方に向つて轉ぜり。時に轉輪聖王は四兵を具して常に〔その後〕に從へり。また、比丘等よ、その輪寶の停まる處には、如何なる國と雖も、轉輪王は四兵と倶に駕を止めぬ。比丘等よ、東方敵國の諸王は、悉く轉輪王の所に來りて告げて言く、

『大王よ、よくぞ來ませる。一切は悉く、君の所有なり。大王よ、統治し給へ』と。

轉輪王は告げて言はく、『殺生を爲す勿れ、偸盜を爲す勿れ、邪婬を行ふ勿れ、妄語を語る勿れ、飲酒を爲す勿れ、適當の食を爲すべし』と。

かくてまた、比丘等よ、東方敵國の諸王は悉く轉輪王の治下に服しぬ。

七　その時、かの輪寶は東海に沒し、再び身を現じて南方に到りぬ。…〔乃至〕…西[63]方に…〔乃至〕…北方に…〔乃至〕…治下に服しぬ。

その時、比丘等よ、かの輪寶は、海を超へて普く四天下を平定し、彼の國都に還り

て、轉輪王の宮闕樓門の上に懸れるが如く、轉輪王の內宮を照耀せり。

八 比丘等よ、第二……第三……第四……第五……第六……第七の轉輪王も亦、數十百千年の後、他の臣に告げて言く、

『噫、汝、臣よ、若し天の輪寶にして、その本處を離れて去り行くを見なば、その時わが處に來りて告げよ』と。

『大王よ、然るべし』と。比丘等よ、かの臣は轉輪王に答へぬ。

比丘等よ、かの臣は數十百千年の後、天の輪寶の、その本處を離れて忽焉として去り行けるを見たり。かく見終り、轉輪王の所に到りて轉輪王に告げて言く、

64 『大王よ、天の輪寶は、その本處を離れて忽焉として去り行けるを知り給はずや』と。

その時、比丘等よ、轉輪王は太子を招き、これに告げて言く、

『汝太子よ、わが天の輪寶は、その本處を離れて忽焉として去り行けりと云ふ。われ嘗てこのことを聞けり。「若し轉輪王の天の輪寶にして、その本處を離れ、忽焉として去り行かば、かの王の壽命は幾程もなし」と。われ已に人界の欲樂を享

受せり。今ぞ天界の欲樂を求むべき時になむ。來れ、わが太子よ、汝この四天下を統治せよ。われ當に鬚髪を剃除して袈裟衣を服し、在家より出家に入らん』と。
その時、比丘等よ、轉輪王は太子によくその國土を統治せしめ、自らは鬚髪を剃除して袈裟衣を服し、在家より出家に入りぬ。然るに、國王の出家して後七日にして、比丘等よ、天の輪寶は、忽焉として消滅しぬ。

九　その時、比丘等よ、一人の臣は、かの刹帝利灌頂王の所に到りて、かの王に告げて言く、

『大王よ、かの天の輪寶は、忽焉として消滅せるを知り給はずや』と。時に、比丘等よ、かの刹帝利灌頂王は、天の輪寶の忽焉として消滅せるを見て、心中怏々として喜悦せず。然も彼は父王の所に行きて、聖なる轉輪寶に就きて問ふことを爲さず。彼はその國を治むること、昔の諸王の公正にその國を治めしに及ばずまたかの昔の諸王が、聖なる輪寶を轉ぜし如くに、その國を統治せざりき。
その時、比丘等よ、大臣・侍臣・主計・近衞・巫祝官等參集して、刹帝利灌頂王の所に到り、告げて言く、

65 『大王よ、今國土を治すること昔の諸王の公正にその國を治めしに及ばず、またかの昔の諸王が、聖なる輪寶を轉ぜし如くにその國を統治せず。大王よ聰明にして有慧なる大臣侍臣主計近衞巫祝官などあり。我等及びその他の者も、聖なる轉輪を受持せり。大王よ若し我等に聖なる轉輪を問ひ給はゞ、我等謹みて所問の聖なる轉輪を解說すべし』と。

一〇 その時、比丘等よ、かの刹帝利灌頂王は、大臣侍臣主計近衞巫祝官などを招集して、聖なる轉輪を問ひぬ。彼等はその聖なる轉輪の所問に對し、謹みて奉答せり。そを聞きて正法を擁護し守護せしめたり。然も猶ほ貧困者に財寶を與へず、貧困者に財寶を惠まざるによりて、貧困者は益々增長するに至れり。貧困者の增長するに至り、人々相互に他より與へられざるものを、盗心を以て取れり。人々は彼を捉へたり。彼を捉へて、刹帝利灌頂王に見せしめて言く、

『大王よ、この者は他より與へられざるものをば、盗心を以て取れり』と。

比丘等よ、かく告げられて、刹帝利灌頂王はかの男に告げて言く、

『汝は實に他より與へられざるものをば、盗心を以て取れりとは、これ眞實なり

や』と。
『大王よ、眞實なり』。
『何故なるか』。
『大王よ、われ生くるを得ざればなり』と。
66 その時、比丘等よ、刹帝利灌頂王は、かの男に財寶を與へて言く、『汝よ、汝は此等の財寶によりて自ら生活し、父母を養ひ妻子を養へ。仕事を勤めて沙門婆羅門に對して、福利ある供養をなし、以て天上の安樂なる果報を得て、天界に生るべし』と。
『大王よ、唯だ然らん』と。 かの男は刹帝利灌頂王に答へぬ。
一一 比丘等よ、また一人の男ありて、他より與へられざるものを盜心を以て取れり。人々は彼を捉へ、彼を捉へて刹帝利灌頂王に見せしめて言く、
『大王よ、この者は他より與へられざるものを、盜心を以て取れり』と。
比丘等よ、かく告げられて、刹帝利灌頂王はその男に問ひて言く、
『汝よ、汝は他より與へられざるものを、盜心を以て取れりとは、眞實なりや』と。
『大王よ、實に然り』。

『何故なるか』。
『大王よ、われ生くるを得ざればなり』と。
その時、比丘等よ、刹帝利灌頂王は、かの男に財寶を與へて言く、『汝よ、汝は此等の財寶によりて自ら生活し、父母を養ひ、妻子を養へ。仕事を勤めて沙門婆羅門に對し、福利ある供養をなし、以て天上の安樂なる果報を得て天界に生るべし』と。
『大王よ、唯だ然らん』と。かの男は刹帝利灌頂王に答へぬ。

一二　比丘等よ、人々はかく聞けり、『たとひ人々は他より與へられざるものを、盗心を以て取るも、大王は人々に財寶を與ふ』と。そを聞きて彼等は謂へらく、『いでや我等も亦、他より與へられざるものを、盗心を以て取らばや』と。
その時、比丘等よ、一人の男ありて、他より與へられざるものを、盗心を以て取れり。人々は彼を促へぬ。彼を促へて刹帝利灌頂王に見せしめて言く、
『大王よ、この者は他より與へられざるものを盗心を以て取れり』と。
67 比丘等よ、かく告げられて、刹帝利灌頂王は、かの男に問ひて言く、
『汝よ、汝は他より與へられざるものを、盗心を以て取れりとは眞實なりや』と。

『大王よ、實に然り』。

『何故なるか』。

『大王よ、われ生くるを得ざればなり』と。

その時、比丘等よ、刹帝利灌頂王は謂へらく、『若しわれ、他より與へられざるものを、盗心を以て取る者に對し、財寶を與へなば、かくの如く不與取(偸盗)增長せん。いでや、われ、この男を充分に膺懲し、これを根絶し、彼の頭を斷たん』と。

かくて、比丘等よ、刹帝利灌頂王は諸臣に命じて言く、『さらば、諸臣よ、此の男を荒繩を以て後手に堅く縛し頭髮を剃除し、擊鼓唱令して、諸街巷衢を悉く引導し終り、南門より出でゝ、都城の南方に到り彼を充分に膺懲して、これを根絶し、彼の首を截るべし』と。

『大王よ、實に然らん』とて、比丘等よ、彼等諸臣は、刹帝利灌頂王の命を聞きて、かの男を荒繩を以て後手に堅く縛し、彼の頭髮を剃除し、擊鼓唱令して、諸街巷衢を悉く引導し終り、南門を出でゝ、都城の南方に到り、彼を膺懲し、これを根絶し、彼の首を斷てり。

一三　比丘等よ、人々はかく聞けり、『若し他より與へられざるものを、盗心を以て取らんには、大王は膺懲し、根絶し首を刎ねん』と。それを聞きて彼等は謂へらく、『いでや、我等は各自に利刀を作らしめん。利刀を作らしめて、其等の人々の不與物[68]を、盗心を以て取り、その上其等の人々を膺懲し、根絶し、その首を斷つべし』と。

彼等は利刀を作らしめたり。利刀を作らしめて村落の劫掠を、町村の劫掠を、城市の劫掠を、途上の劫掠をなすに至りぬ。

かくて其等の人々の不與物をば、盗心を以て取り、その上にその人々を膺懲し、根絶し、その首を斷つに至れり。

一四　是の如くして、比丘等よ、貧困者に財寶が與へられざるにより、貧困者は益々増長し、貧困者の多くなるに從ひて、偸盗愈々滋くなるに至り、偸盗滋くなるに從ひて、刀杖滋くなり、刀杖滋くなりて殺害頻發するに至り、殺害多くして妄語頻りに行はれ、妄語遍く行はるゝに至りて、彼等衆生の壽命は縮み、顔色は衰へぬ。彼等の壽命縮み顔色衰へて、人壽八萬歳よりその子に至りて四萬歳となりぬ。

比丘等よ、人壽四萬歳の時、人ありて他の不與物を、盗心を以て竊取せり。人々

は彼を捉へて、刹帝利灌頂王に示し、告げて言く、『大王よ、この男は他の不與物を、盜心を以て竊取せり』と。

かく告げられて、比丘等よ、刹帝利灌頂王はかの男に告げて言く、『汝よ、汝は他の不與物を、盜心を以て竊取せるは事實なりや』と。

『大王よ、竊取せず』と云ひて、故意に妄語を爲せり。

一五　是の如くして、比丘等よ、貧困者に財寶を與へざるより、貧困者益々多くな
69 り…〔乃至〕…壽命縮み、顏色衰へて、人壽四萬歲より、その子に至りて二萬歲となれり。

比丘等よ、人壽二萬歲の時、人ありて、他の不與物を盜心を以て竊取せり。他の人、之を刹帝利灌頂王に告げて言く、『大王よ、斯く斯くの人は、他の不與物を、盜心を以て竊取せり』とて惡口を爲せり。

一六　比丘等よ、是の如くして、貧困者に財寶を與へざるによりて貧困者益々多くなり…〔乃至〕…顏色衰へて、人壽二萬歲より、その子に至りて一萬歲となれり。

比丘等よ、人壽一萬歲の時、人の或者は美しく、或者は醜かりき。彼等醜き者は

美しき者に嫉妬を生じ、他の妻女に邪婬を行へり。

一七　比丘等よ、是の如くして、貧困者に財寶を與へざるにより、貧困者は益々多くなり……(乃至)……顏色衰へて人壽一萬歳より、その子に至りて五千歳となれり。

比丘等よ、人壽五千歳の時、二法ありて増長するに至る。卽ち麤語と綺語となり。二法増長せるが故に彼等衆生の壽命は縮み顏色は衰へたり。彼等の壽命
70 は縮み顏色は衰へて、人壽五千歳より、その子は、或は二千五百歳となり、或は二千歳となれり。

比丘等よ、人壽二千五百歳の時、貪恚の念増長す……(乃至)……人壽二千五百歳より、その子は一千歳となれり。

比丘等よ、人壽一千歳の時、邪見増長す……(乃至)……人壽一千歳より、その子五百歳となれり。

比丘等よ、人壽五百歳の時、三法ありて増長したり。卽ち非法欲と非理貪と邪見法となり。三法増長して……(乃至)……人壽五百歳より、その子は或は二百五十歳となり、或は二百歳となれり。

比丘等よ、人壽二百五十歳の時、此等の諸法增長す、卽ち母に孝ならず、父に孝ならず、沙門婆羅門を恭敬せず、有族耆宿を敬禮せず。

一八　比丘等よ、是の如くして、貧困者に財寶を與へざるにより、貧困者益々增長
し…〔乃至〕…偸盗…〔乃至〕…刀杖…〔乃至〕…殺生…〔乃至〕…妄語…〔乃至〕…惡口…〔乃至〕
71 …邪婬…〔乃至〕…麤語…〔乃至〕…綺語…〔乃至〕…貪恚…〔乃至〕…邪見…〔乃至〕…非法欲
…〔乃至〕…非理貪…〔乃至〕…邪見法…〔乃至〕…母に孝ならず、父に孝ならず、沙門婆羅
門を恭敬せず、有族耆宿を敬禮せず。此等の諸法增長して彼等衆生の壽命は縮
み顏色は衰ふ。壽命は縮み顏色は衰へて、人壽二百五十歳より、その子に至りて
百歳となれり。

一九　比丘等、此等の人々の子は、壽命十歳となる時あらん。比丘等よ、人壽十歳の時、童女五歳にして婚嫁するに至らん。比丘等よ、人壽十歳の時、此等の諸味は消失せん。卽ち酥・酪・油・砂糖・鹽これなり。比丘等よ、今日は粳米飯が最上の食糧たるが如くに、比丘等よ、人壽十歳の時、草莠はその最上の食糧とならん。比丘等よ、人壽十歳の時、十善行法は悉く消滅し、十不善行法は明かに出現せん。比丘等

よ、人壽十歲の時、善なるもの全くなからん。況んや善の所行あらんや。比丘等[72]よ、人壽十歲の時、彼等、父母に孝ならず、沙門婆羅門を尊敬せず、有族耆宿を恭敬せざるものの尊敬讃美せられんこと、恰も今日父母に孝に、沙門婆羅門を尊敬し、有族耆宿を恭敬するものの尊敬讃美せらるゝが如く、是の如く比丘等よ、人壽十歲の時、父母に孝ならず、沙門婆羅門を尊敬せず、有族耆宿を恭敬せざるものが、尊敬せられ讃美せらるゝに至るべし。

二〇　比丘等よ、人壽十歲の時は、母・伯母・叔母・師長の妻女の區別なくして、羊・鷄・豕・犬・豺・狼の如く、世は雜然たるに至らん。比丘等よ、人壽十歲の時は、彼等衆生は互に烈しき害心を生ずることゝなり、烈しき瞋恚、烈しき惡意、烈しき殺意を生ぜん。母は子に於て、子は母に於て、父は子に於て、子は父に於て、兄弟は兄弟に於て、兄弟は姉妹に於て、姉妹は兄弟に於て、烈しき害心を生じ、烈しき瞋恚、烈しき惡意、烈しき殺意を生ぜん。比丘等よ、譬へば獵師の群鹿を見て、烈しき害心を生じ、烈しき瞋恚を生じ、烈しき惡意、烈しき殺意を生ずるが如く、是の如く、比丘等よ、人壽十歲[73]の時には、彼等衆生は互に烈しき害心を生じ…〔乃至〕…烈しき殺意を生ぜん。

二一　比丘等よ、人壽十歳の時、七日の間刀杖の劫生ぜん。彼等は互に鹿想を受けん。彼等は各々利刀を手に持ちて現はれ、その利刀によりて、『これ鹿なり、これ鹿なり』と、各々互に生命を相剝奪せん。然るに、比丘等よ、此等の衆生の或者に、次の如き念生ぜん。『我等は誰人をも害するを得ざれ、また誰人も我等を害せざれ。いでや我等は叢林樹木の坑坎に倚り、河洞岩窟に隱れ、樹根果實を食して身を保たばや』と。彼等は叢林樹木の坑坎に倚り、河洞岩窟に隱れ、樹根果實を食してその身を保たん。彼等その七日を經過したる後、叢林樹木の坑坎、河洞岩窟より出で、互に相抱き相集りて慶賀して言はん、『慶ばしき哉、汝も生けるか、汝も生けるか』と。その時、比丘等よ、彼等衆生にかゝる念生ぜん。『我等は不善法を行じたるにより、長き間近親を亡ぼすことを爲せり。いでや我等は善法を行ぜん。如何なる善をか行ずべき。いでや我等殺生を禁ぜん。我等は此の善法を受持することとせん』と。彼等は殺生を禁じて、此の善法を受持せん。彼等は善法を受持
74 せるによりて壽命増長し、顔色美を増さん。彼等の壽命増長し、顔色美を増して、人壽十歳の人、その子の壽命は二十歳とならん。

二二　その時、比丘等よ、彼等衆生に斯かる念生ぜん。『我等は善法を受持せるによりて壽命増長し、顔色美を増せり。いでや我等は益々善事を爲すべし。いでや我等は偷盗を禁じ邪婬を禁じ、妄語を禁じ、悪口を禁じ、麤語を禁じ、綺語を禁じ、貪念を斷じ、瞋恚を斷じ、邪見を斷じ、三法卽ち非法欲、非理貪、邪見法を斷盡せん。いでや我等は父母に孝に、沙門婆羅門を尊敬し、有族者宿を尊敬する等、この善法を受持すべし』と。

〔斯くて〕、比丘等よ、彼等は父母に孝に、沙門婆羅門を尊敬し、有族者宿を尊崇し、此等の善法を受持せん。彼等は善法を受持せるによりて、壽命増長し顔色美を増さん。彼等は壽命増長し、顔色美を増すによりて、人壽二十歳の時、その子の壽命は四十歳とならん。人壽四十歳の時、その子の壽命は八十歳とならん。人壽八十歳の時、その子の壽命は百六十歳とならん。人壽百六十歳の時、その子の壽命は三百二十歳とならん。人壽三百二十歳の時、その子の壽命は六百四十歳とならん。人壽六百四十歳の時、その子の壽命は二千歳とならん。人壽二千歳の時、その子の壽命は四千歳とならん。人壽四千歳の時、その子の壽命は八千歳とな

らん。人壽八千歳の時、その子の壽命は二萬歳とならん。人壽二萬歳の時、その子の壽命は四萬歳とならん。人壽四萬歳の時、その子の壽命は八萬歳とならん。

75

二三　比丘等よ、人壽八萬歳の時に於ては、童女は五百歳にして婚嫁せん。比丘等よ、人壽八萬歳の時に於て三種の病あり。欲と斷食と老とこれなり。比丘等よ、人壽八萬歳の時に於ては、此の閻浮提は熾盛繁榮し、邑都王城に鷄鳴相聞こえん。比丘等よ、人壽八萬歳の時に於ては、かの阿鼻地獄と思惟せられたる閻浮提も、蘆葦の叢林の如くに、人々遍滿すべし。比丘等よ、人壽八萬歳の時に於ては、彼の波羅奈（バーラーナシー）はケートゥマティーと名づくる王都となり、盛大繁華となり、人民熾盛群集し、土地肥沃とならん。比丘等よ、人壽八萬歳の時に於ては、此の閻浮提に於て八萬四千の都城あるもケートゥマティーはその最上の王都となるべし。

二四　比丘等よ、人壽八萬歳の時、ケートゥマティーの王城に儴伽（サンカ）と名づくる王出でて、轉輪法王として、普く四天下を統御し、人民の保護者として七寶を成就してあらん。彼に此等の七寶具足せん。卽ち、金輪寶、白象寶、紺馬寶、神珠寶、玉女寶、居士寶、第七に主兵寶なり。尙ほまたかの王に千子あり、勇猛雄健にして、よく外

敵を却く。彼は此の地を越へて大海の彼岸に及ぶまで、刀杖を用ひず、正法を以て統御して住せん。

76 二五　比丘等よ、人壽八萬歳の時、彌勒と名づくる、應供、等正覺、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊なる如來世に出現せん。恰もわれ今この世界に、應供…〔乃至〕…佛・世尊として現はれたるが如く。彼また此の天界魔界梵天界を含むこの世界、沙門・婆羅門・天・人衆のことを獨自に證悟して、説示せん。恰もわれ此の天界・魔界・梵天界を含むこの世界、沙門・婆羅門・天・人衆のことを、獨自に證悟して説示する如く。彼は初も善く中も善く後も善き法を説き、文義具足せる、一切圓滿にして清淨なる梵行を説くべし。恰もわれ今初も善く中も善く後も善き法を説き、文義具足せる、一切圓滿にして清淨なる梵行を説くが如く。彼また無量數千の比丘僧伽に圍繞せられん。恰もわれ今無量數千の比丘僧伽に圍繞せらるゝが如くに。

二六　その時、比丘等よ、儴伽（サンカ）と名づくる王あり。その王の殿堂は大波那（マハーパナーダ）王によりて作られたるものなり。その殿堂を莊嚴し、而してこれに住し、而してこれを

譲與し終りて、沙門・婆羅門・貧民・流浪者・乞食に布施を行ひ、然る後、彌勒如來應供・等正覺の許に於て、鬚髪を剃除し、袈裟衣を著し、在家より出家に入らん。彼は是の如く出家となりて、獨在遠離し、苦行修道し、專心堅固に住して、久しからずして、か[77]の善男子のそれを目的として、在家より出家に入るが如く無上梵行を成就し、現世に於て獨自に證悟して止住せん。

二七　比丘等よ、自らを島とせよ、自らを歸依處とせよ、他を歸依處とする勿れ。法を島とせよ、法を歸依處とせよ、他を歸依處とすること勿れ。比丘等よ、如何が自らを島とし、自らを歸依處とし、他を歸依處とせず、法を島とし、法を歸依處とし、他を歸依處とせずして住するや。比丘等よ、こゝに比丘あり、身に於て身觀に住し、精勤し、自覺し、憶念せば、世間に於ける貪欲・愚痴を調伏し得べし。受に於て……心に於て……法に於て…〔乃至〕…。是の如く、比丘等よ、比丘は自らを島とし、自らを歸依處とし…〔乃至〕…他に歸依することなくして住せん。

二八　比丘等よ、行乞して汝自らの父祖の地に行け。比丘等よ、行乞して汝自ら

の父祖の地に行かば、壽命延長し、顏色美を增し、安穩快樂にして、財寶豐饒となり、威力具足せん。

比丘等よ、然らば如何が比丘の壽命は延長せん。比丘等よ、こゝに比丘ありて、欲定・精勤・完成を具備する神足を習修し、精進定…乃至…意定、……思惟定・精勤・完成を具備する神足を修習す。彼は此等の四神足を修習し、多修し、所欲に從ひて一劫或は一劫有餘(住)せん。比丘等よ、これを比丘の壽命延長なりと說く。

比丘等よ、如何が比丘の顏色美を增すとなすや。比丘等よ、こゝに比丘、戒德あ
78 りて、波羅提木叉に依りて攝護し、威儀具足して、小罪に於て怖畏を見、諸戒を學修す。比丘等よ、これを比丘の顏色美を增すとなすなり。

比丘等よ、如何が比丘の安穩快樂なるや。比丘等よ、こゝに比丘ありて、諸欲を斷じ、不善法を去り、念あり思ありて遠離の心生じ喜と樂とのある、初禪に達して住す。また念と思とを滅除し、內心靜安し、心專一となり念なく思なく、定より生ずる、喜と樂とのある、第二禪に…乃至…第三禪に…乃至…第四禪に達して住す。比丘等よ、これを比丘の安穩快樂となす。

比丘等よ、如何が比丘の財寶なるや。比丘等よ、こゝに比丘ありて、慈と倶なる心を以て一方に遍滿して住す。是の如く二方、三方、四方に遍滿す。是の如く上、下、横、普く一切處・一切世界に廣大・廣博・無量にして無恚・無害なる慈心を以て遍滿して住す。悲と倶なる心を以て……喜と倶なる心を以て……捨と倶なる心を以て遍滿して住す。比丘等よ、これ比丘の財寶なり。

比丘等よ、如何が比丘の威力なるや。比丘等よ、こゝに比丘あり。有漏を滅盡し、無漏・心解脱・慧解脱を、現世に於て獨自に證悟して止住す。比丘等よ、これ比丘の威力なり。

比丘等よ、われ他の一威力の、魔力に過ぎたるものを見ず。然れども、比丘等よ、
79
善法を持す、ることによりて是の如きの此の福徳の增長を得るなり」と。

佛はかく說き終り給へり。彼等諸比丘は佛の所說を聞きて歡喜信受せり、と。

起世因本経（きせいんほんきょう） (Aggañña-sutta)

SC: Origin of the World

二七 起世因本經[1]（アッガンニャ・スッタンタ）

是の如く我聞く。

一 或る時、世尊は舎衞國淸信園林の鹿母講堂に在しき。時に婆悉吒（ヴァーセッタ）と婆羅墮（バーラードゥヴァージャ）とは、比丘の修行を欲して比丘の群に入れり。時に黃昏、世尊は靜思より立ちて其の堂より出で、堂の蔭に於て戶外を逍遙し給へり。

二 婆悉吒は黃昏、世尊の靜思より立ちて其の堂より出で、堂の蔭に於て戶外を逍遙し給へる有樣を見たり。そを見たる後、彼は婆羅墮に告げて曰く、「友、婆羅墮よ、世尊は、黃昏に、靜思より立ちて其の堂より出で、堂の蔭に於て戶外を逍遙しつつあり、友、婆羅墮よ、かしこなる佛に、行きて近づかん。世尊の許に於て、多少は法話を聞くことを得るやも知れず」と。「然り、友よ」と婆羅墮は婆悉吒に答へたり。

かくて婆悉吒と婆羅墮とは、行きて世尊に近づき、近づきたる後、世尊に挨拶をなし、世尊の逍遙し給ふ儘に、その後に從ひたり。

81

三　その時、世尊は婆悉吒に曰(のたま)へり。

「婆羅門の生れと婆羅門の系統とに於て優れたる汝等は、婆羅門種族の家庭生活より出で丶、家なき生活に入れり。　婆悉吒よ、婆羅門は汝等を非難し罵倒することなきや」。

「唯、實に然り、尊者、　婆羅門は實に婆羅門特有の罵倒を以て、存分に我等を非難し、罵倒して止むことなし」。「然らば婆悉吒よ、如何なる言葉を以て、婆羅門は實に婆羅門特有の罵倒を以て、存分に汝等を非難し罵倒して止むことなきや」。

「尊者、　婆羅門は斯く言ふ、『婆羅門種は最上なる種族なり、其の他は劣等なる種族なり。　婆羅門のみ白き肌なり、他は黑き肌なり。　婆羅門のみ純粹なり、婆羅門ならざる者は然らず。　婆羅門のみ梵天の眞正なる子にして、その口より生れたり。　梵天より生れ、梵天によりて造られ、梵天の相續人なり。　汝等は高貴の階級を捨て、かの賤種の階級に近づくのみならず、かの剃髮せる沙門、賤しき黑人、我等一族の足より生れたる者と親しむ。　斯くの如きは宜しからず斯くの如きは適當ならず。　汝等は高貴の階級を捨て丶、かの賤種の階級に近づくのみならず、か

の剃髪せる沙門、賤しき黑人、我等一族の足より生れたる者と親しまんとは』と。斯くの如き語を以て、尊者、婆羅門は我等を、婆羅門特有の罵倒を以て、存分に非難し罵倒して止むことなし」と。

四 「確かに婆悉吒よ、汝等婆羅門は、全く古の事實を忘れて斯く言ふ、『婆羅門は最上なる種族なり、其の他は劣等なる種族なり。婆羅門のみ白き肌なり、他は黑き肌なり。婆羅門のみ純粋なり、婆羅門ならざる者は然らず。婆羅門のみ梵天の眞正なる子にして、其の口より生れたり。梵天より生れ、梵天によりて造られ、梵天の相續人なり』と。然るに反對に、婆悉吒よ、婆羅門の女は、經水あり、妊娠し、子を孕み、子を産むことを經驗するに非ずや。而も實に彼等婆羅門は胎より生れつゝも斯くぞ言ふ、『婆羅門は最上なる種族なり……乃至……梵天の相續人なり』と。彼等婆羅門は、實に虛言を吐き、甚しく罵倒して不名譽を與ふ。

五 婆悉吒よ、四種の姓あり、卽ち刹帝利種、婆羅門種、吠舍種、首陀羅種なり。さて婆悉吒よ、刹帝利種中にも、或は生命を害する者あり、與へられざるを取る者あり、婬欲の邪行をなす者あり、妄語をなす者あり、兩舌をなす者あり、悪口をなす者あ

り、綺語をなす者あり、慳貪の者あり、害心ある者あり、邪見ある者あり。婆悉吒よ、是の如く、或は不善なる性質の者、或は不善なりと考へらるゝ性質の者、非難すべき、或は非難すべしと考へらるゝ性質の者、摸倣すべからざる、或は摸倣すべからずと考へらるゝ性質の者、貴人に不適當なる、或は貴人に不適當なりと考へらるゝ性質の者、陰險なる行爲と陰險なる行爲の果報、賢人によりて擯斥せらるゝ性質の者、是の如き者は、實に刹帝利種の中にも、往々にして見出し得べし。復、婆悉吒よ、婆羅門種の中にも往々にして……乃至……婆悉吒よ、吠舍種にも……乃至……婆悉吒よ、首陀羅種にも……〔乃至〕……往々にして見出し得べし。

六　婆悉吒よ、復、一面に於て、刹帝利種中にも往々にして、或は生命を害するを禁ずる者あり、與へられざるを取ることを禁ずる者あり、婬欲の邪行をなすを禁ずる者あり、妄語をなすを禁ずる者あり、兩舌をなすを禁ずる者あり、惡口をなすを禁ずる者あり、綺語をなすを禁ずる者あり、慳貪なき者あり、害心なき者あり、正見の者あり。婆悉吒よ、是の如く、或は善なる性質の者、或は善なりと考へらるゝ、性質の者、或は非難すべからざる、或は非難すべからずと考へらるゝ性質の者、摸倣

すべき、或は摸倣すべしと考へらるゝ性質の者、貴人に適當なりと考へらるゝ性質のもの、白淨なる行爲と白淨なる行爲の果報、賢人に適當て賞讃せらるゝ性質の者、是の如き者は、實に刹帝利種の中にも、往々にして見出し得べし。婆悉吒よ、又、婆羅門種の中にも…乃至…又吠舍種の中にも…乃至…
83 又首陀羅種の中にも…〔乃至〕…往々にして見出し得べし。

七 婆悉吒よ、此等四姓の中に於ても黑、惡の性質の者と、白淨の性質の者と、賢人に擯斥せらるべき者と、賢人に賞讃せらるべき者とは、二分することを得るを見なば、彼等婆羅門が斯く『婆羅門種は最上なる種族なり、其の他は劣等なる種族なり…〔乃至〕…梵天の相續人なり』との主張は賢人には許されざるべし。そは何故なるや。蓋し、婆悉吒よ、總て此等四姓の中の何人なりとも、比丘となり、阿羅漢となり、諸漏を滅せる者、梵行已に立せる者、作すべきことを作し終れる者、重擔を捨てたる者、再生なき位を正しく得たる者、有の束縛を滅せる者、完全智を有する者、解脱したる者たらんとする其の人こそ、此等四姓の最上者と稱せらる。法の故を以て、又非法ならざる故を以てなり。何となれば、婆悉吒よ、法は人類に於ける

最上なるものなればなり。此の世に於ても、又他世に於ても。

八　婆悉吒よ、此の世に於ても他世に於ても、法は人類の最上なるものなりとの
理を、次の如き實例によりて了解すべし。婆悉吒よ、拘薩羅の王波斯匿（パセーナディ）は知れり。
『沙門瞿曇は無上なる釋迦族より出家せるものなり』と。而して又婆悉吒よ、釋迦
族は拘薩羅國の波斯匿王に對し、臣下の禮をとれり。婆悉吒よ、釋迦族の者は、拘
薩羅の王波斯匿に從順にし、挨拶をなし、席を立ち、合掌をなし、謙遜なる態度をな
す。是の如く、婆悉吒よ、釋迦族の者が、拘薩羅の王波斯匿に對し、從順にし、挨拶を
なし、席を立ち、合掌をなし、謙遜なる態度をなすが如く、それと同じく拘薩羅の波
84 斯匿王は、如來に對し、從順にし、挨拶をなし、席を立ち、合掌をなし、謙遜なる態度を
なす。『豈に沙門瞿曇は高貴の出ならずや。我は高貴の出に非ず。沙門瞿曇は
力強く、我は力弱し。彼は容貌美しく、我は醜し。沙門瞿曇は大勢力を有し、我は
殆んど勢力なし』と王は言へり。實に拘薩羅の波斯匿王は如來に對し、從順にし、
挨拶をなし、席を立ち、合掌をなし、謙遜なる態度をなすは、かの王が法を尊敬し、法
を崇び、法を重んじ、法を尊び、法を神聖視するが故なり。この實例によりても、婆

悉吒よ、法は人類の最上なるものなり。此の世に於ても、亦他世に於ても〔亦然り〕と知るべし。

九　婆悉吒よ、生れの異れる、名の異れる、姓の異れる、家系の異れる汝等は、家を出で〻家なき生活に入れり。『汝は何者ぞ』と質ねられなば、その時汝は答ふべし、『我等は釋迦族の子孫なる彼に從へる沙門なり』と。婆悉吒よ、如來に信を置き、信を根ざし、信を確立し、信を堅固にして、或は沙門によりても、或は婆羅門によりても、或は天によりても、或は魔によりても、或は梵天によりても、或は世間の如何なる者によりても、信を動搖せられざる者は、いみじくも斯く言はん、『我等は世尊の眞正なる子なり、彼の口より生れ、法より生じ、法によりて造られ、法の後繼者なり』と。而してそは何の故なる。何となれば、婆悉吒よ、此等は如來にふさはしき名にして、法身とも梵身とも、法體とも梵體とも言へばなり。

一〇　婆悉吒よ、或る相當に長き時期の經過の後、この世の轉廻する時あり。この世の轉廻する時に、大部分の生物は光音天に生るべし。而してそれらは彼處に住み、意所成にして、喜を以て食とし、自ら光を放ち、空を飛び、光輝を保ち、永く長

き時期の間[是の如き狀態を]續く。婆悉吒よ、又或る相當に長き時期の經過の後、この世の轉廻する時あり。この世の轉廻する時、大部分の生物は光音天の生存
85 を捨て、この世に復歸す。而して彼等は意所成にして、喜を以て食とし、自ら光を放ち、空を飛び、光輝を保ち、永く長き時期の間[是の如き狀態を]續く。

一一　さて婆悉吒よ、その時、萬物總ては水となり、黑闇にして物皆見えず、日月現はれず、星辰顯はれず、晝夜の別なく、月と月の黑分白分と明白ならず、年と季節となく、男女の別なくして、萬物は單に萬物たるのみ。それら萬物に、或る相當に長き時の經過の後、甘美なる地味、水中に周遍したり。煮沸したる牛乳の粥の、將に冷えんとして、表面に於て泡を生ずるが如く[大地は]發現したり。かの地は色を具し、香を具し、味を具したり。そは恰も完全なる醍醐、或は純粹なる乳酥の如き色を呈し、又混りなき蜂蜜の如き味あり。

一二　婆悉吒よ、その時、或る貪欲なる性質の者ありて言く、『嗚呼、こは如何なる物ならん』とて、甘美なる地味を指もて嘗めぬ。かの甘美なる地味を指もて[再三]嘗めつゝ、轉た[その甘美に]打たれ、欲望身に滲めり。婆悉吒よ、他の者等も又、彼の例に

倣ひ、指もて甘美なる地味を嘗め試みたり。甘美なる地味を〔再三〕嘗め試みて、轉たその〔甘美に〕打たれ、欲望身に滲めり。婆悉吒よその時それらの者等は、甘美なる地味をば手もて掬し、恣に之を食ひ始めぬ。爾來、婆悉吒よ、彼等は甘美なる地
86 味をば手もて掬し、恣に之を食ひ始めてより、それらの者等の、自ら放てる光も轉た薄くなりぬ。自ら放てる光の薄くなるに從ひて日月現はれ、日月の現はるゝに從ひて星辰顯はれ、星辰の顯はるゝに從ひて、晝夜の區別知られ、晝夜の區別の知らるゝに從ひて、月と月の黑白とは知られ、月と月の黑分白分との知らるゝと共に、季節と年とは現はる。婆悉吒よ、是の如くにして、この世間は再び轉廻す。

一三　さて婆悉吒よ、それらの者等は、かの甘美なる地味を食ひ、之を食料とし、之を滋養として、永く長き間〔この狀態を〕續けたり。婆悉吒よ、それらの者等も、甘美なる地味を食し、之を食料とし、之を滋養とし、永く長き間〔この狀態を〕續くるに從ひ、益々それらの者等の身に、堅固なること起り、而して容貌の變化、見らるゝに至れり。或者は容貌美しく、或者は醜し。美しき者は醜き者を侮りて、思へらく『我等は彼等より美し、彼等は我等より醜し』と。而して彼等は自らの美を恃みて憍

慢を生じ、斯くして甘美なる地味は消え去りぬ。甘美なる地味の消ゆると共に、
彼等は集合し、集合したる後、慟哭して言く『嗚呼、美なる味、…嗚呼、美なる味…』と。
實に今に至るも、人々はかの甘美なる味を忘れずして言く『嗚呼、美なる味…嗚呼、
美なる味…』と。只管昔の最初に生ぜる慣例に從ひて、その本義をば知らざるな
り。

一四　婆悉吒よ、その時、かの甘美なる地の、かれらに消えたる時、[2]地餅出現せり。
87 そは恰も菌の發生するが如くに出現せり。かの地餅は、色を具し、香を具し、味を
具したり。その色は實に完全なる醍醐の如く、或は純粹なる乳酥の如し。又そ
の味は實に混りなき蜂蜜の如くなり。その時、婆悉吒よ、彼等は地餅を食ひ始め
たり。而して彼等は之を食し、之を食料とし、之を滋養となし、永く長き間〔この狀
態を〕續けぬ。婆悉吒よ、彼等は地餅を食しつゝ、之を食料とし、之を滋養となしつ
つ、永く長き間〔この狀態を〕續くるに從ひ、益々其等のもの等の身に、次第に堅固な
ること起り、而して容貌の變化現はれ、或者は容貌美しく或者は容貌醜し。美し
き者は醜き者を侮りて、思へらく『我等は彼等より美し、彼等は我等より醜し』と。

而して自らの美を恃みて憍慢を生じ、斯くして地餅は消え去れり。地餅の消ゆると共に蔓草出現したり。そは恰も竹の如く出現したり。そは色を具し、香を具し、味を具せり…〔乃至〕…蜂蜜の如くなり。

一五　婆悉吒よ、その時、人々は蔓草を食ひ始めたり。而して彼等は之を食し…〔乃至〕…昔の最初に生ぜる慣例にのみ従ひて、その本義を知らざるなり。[88]

一六　その時、婆悉吒よ、それらの人々に、かの蔓草の消えたる時、耕さざるに熟する米出現せり。そは糠なく、殼なく、よき香ありて、木理細なり。夕に之を夕食として家に持運べば、朝には〔舊の如く〕熟して再び生長し、朝に之を朝食として家に持運べば、夕には〔舊の如く〕熟して再び生長して、切れ目は見えざりき。婆悉吒よ、その時、それらの人々は、耕さざるに熟する米を食しつゝ、之を食料とし、之を滋養となして、永く長き間〔この狀態を〕續けたり。婆悉吒よ、それ等の人々は、耕さざるに熟する米を食しつゝ、之を食料とし、之を滋養として、永く長き間〔この狀態を〕續くるに從ひ、それら有情の身體に、益々堅固なること起り、容貌の變化顯著となり、女子には女子の相顯はれ、男子には男子の相顯はれぬ。而して女子は實に極端

に男子を思慕し、男子も同じく女子を思慕したり。各々互に思慕して情欲生じ、戀に身を焦し、遂に戀慕に縁りて交會を行へり。婆悉吒よ、その時他の人々は、かの交會を行ふを見て、或者は泥を投げ、或者は灰を投げ、或者は牛糞を投げて言く、
89『滅びよ、汚れたるものよ。滅びよ、汚れたるものよ』と。如何にして人々は、人々を斯くは取扱ひ得るや。或地方に於ては、今に到るも猶ほ、人々は花嫁を追放しつゝ、或は泥を投げ、灰を投げ、牛糞を投ぐ。そは實に古の、最初に生ぜる、慣例に從ひて、その本義をば知らざるなり。

一七　婆悉吒よ、その時に於て不道德なりと考へられたることは、今は德なりと考へらる。その時、婆悉吒よ、人々の交會を行ひたる者は、一月或は二月の間、村或は町に入ることを許されざりき。婆悉吒よ、それらの人々はその時、不道德に對し極度に批難を加へて以來、かの人々は、かの不道德を隱蔽すべく小屋に入れり。婆悉吒よ、それより或怠惰なる性質の者は、斯く考へたり。『嗚呼、…何の故に、我は夕には夕食の爲、朝には朝食の爲に、米を持來りて自ら勞苦をなすや。夕食と朝食との分の米を、一度に運びたらんには如何に』と。婆悉吒よ、此處に於てかの者

は、朝夕の食に充分なる米を、一度に持運べり。その時、他の者は前の者に近づき、近づきたる後、かの者に斯く言へり、『いざ、御身よ、米を集めに行かん』と。『御身よ、そは必要ならず。朝夕の食の爲に、米を一度に我は持運べり』と。此處に於て、婆悉吒よ、かの者は、その者の例に倣ひて、一度に二日分の米を運びて言く、『確かに斯くするも妙なり』と。婆悉吒よ、その時、他の人は前の人の許に來り、來りたる後に言
90
へり。『いざ、御身よ、米を集めに行かん』と。『御身よ、そは必要ならず。我は二日分の米を一度に持運べり』と。此處に於て、婆悉吒よ、かの者はその者の例に倣ひて、一度に四日分の米を運びて言く、『確かに斯くするも妙なり』と…(乃至)… 一度に八日分の米を持運びて言く、『確かに斯くするも妙なり』と。さて、婆悉吒よ、その時より、それらの人々は、蓄積せる米を食ひ始めたり。かくて糠は滑かなる米を包み、穀は滑かなる米を包む様になり、收獲せられたる後は、再び生えずなり、切り口は見らるゝ様になり、米の刈株は束をなせり。

一八　婆悉吒よ、その時それらの人々は集合し、集合したる後慟哭すらく、『嗚呼、惡しき法ぞ、人々の間に出現しぬ。御身等よ、何となれば、我等は過去に於て、意所成

91

にして、喜を以て食となし、自ら光を放ち、空を飛び、光輝を失はず永く長き間［この狀態を］續けたり。或る相當に長き時の經過の後、その我等に對して、甘美なる地味は水中に周遍せり。そは色を具し、香を具し、味を具せり。その我等は甘美なる地を、手もて掬し、之を食ひ始めたり。甘美なる地味を手もて掬し、之を食ひ始めたるその我等に、自らの光は消えたり。自らの光の消ゆると共に、日月出現せり。日月の出現すると共に、星辰出現せり。星辰の出現すると共に、晝夜顯はれたり。晝夜の顯はるゝと共に、半月、月顯れたり。半月、月の顯はるゝと共に、季節・年顯はれたり。甘美なる地を食しつゝ、之を食料となし、之を滋養として、永く長き間［是の如き狀態を］續けたるこの我等に、惡しき不善の法出現し、甘美なる地は消え失せたり。甘美なる地の消ゆると共に、地餠出現せり。そは色を具し、香を具し、味を具せり。かの我等は地餠を食ひ始めたり。かの我等は、そを食しつゝ、之を食料とし、之を滋養とし、永く長き間［この狀態を］續けたり。その我等に、惡しき不善の法出現して、地餠は消えたり。地餠の消ゆると共に、蔓草現はれたり。そは色を具し、香を具し、味を具せり。かの我等は蔓草を食ひ始めたり。かの我

等、之を食しつゝ、之を食料とし、之を滋養とし、永く長き間〔この状態を〕續けたり。その我等に、惡しき不善なる法出現したる時、蔓草は消えたり。蔓草の消ゆると共に、耕さざるに熟する米出現せり。糠なく、殼なく、純粋にして好き香あり、木理滑かなり。夕に之を夕食の爲めに持運べば、朝には〔舊の如く〕熟して再び生長して、切り口は見えざりき。かの我等は耕さざるに熟する米を食ひつゝ、之を食料とし、之を滋養として、永く長き間〔この狀態を〕續けたり。その我等に惡しき不善なる法出現し、糠は滑かなる米を包み、殼は滑かなる米を包み、刈りたる後は、再び生長せず、切り口は現はれ、米の刈株は束をなせり。今や我等は米〔の田〕を分たんと欲し、境界を造らんと欲す』と。

その時、婆悉吒よ、かの有情は米〔の田〕を分割し、境界を作れり。

一九　婆悉吒よ、その時、或る貪欲なる性質の者、自身の領域を守り、更に他人の領域を奪ひて之を享受したり。人々は彼を捕へ、捕へたる後斯く言へり。『嗚呼、御身は惡事をなせり。何となれば、實に自身の領域を守り、更に汝は他人の領域を奪ひて之を享受せり。いざ、御身よ、再び是の如き事をなすべからず』。婆悉吒よ、

『唯』と、かの者は人々に答へぬ。婆悉吒よ、再度彼は…乃至…三度彼は自らの領域を守り、更に他人の領域を奪ひて之を享受したり。人々は彼を捕へ、捕へたる後…〔乃至〕…或る者は手もて打ち、或る者は土塊もて打ち、或る者は杖もて打ちぬ。婆悉吒よ、是の如きことを始として、窃盗顯著となり、非難顯著となり、妄語顯著となり、刑罰顯著となれり。

二〇　さて此等の人々は、婆悉吒よ、集合し、集合したる後、慟哭して曰く、『嗚呼、惡しき法ぞ、人々の間に顯はれぬ。何となれば實に窃盗顯著となり、非難顯著となり、妄語顯著となり、刑罰顯著とならんとする程となれり。今に於ては我等は或一人を選定したらんには如かじ。その人は我等に對し、當に怒るべき時に怒り、當に非難すべきを非難し、當に流罪にすべきを流罪とせん。我等は又その人に一定の米を贈與せん』と。

93 その時、婆悉吒よ、それ等の人々は、多くの人の中に於て一層美しく、一層容貌優れ、一層愛想よく、一層人氣ある人の許に行き、その人に言へり。『いざ、御身よ、當に怒るべきに怒れ、當に非難すべきに非難せよ、當に流罪にすべきに流罪とせよ。

我等は又御身に米の分割を贈與せん』と。婆悉吒よ、『宜し』と、かの人はそれらの人人に答へ、當に怒るべき時に怒り、當に非難すべき時に非難し、當に流罪にすべき時に流罪にせり。一方彼等は彼に米の分割を贈與せり。

二一　婆悉吒よ、摩訶三摩多（マハーサンマタ）とは『全人類によりて選ばれたる者』てふ意なり。實に第一の語として『摩訶三摩多』てふ名が用ひらるゝに至れり。婆悉吒よ、刹帝利とは『農場の主』てふ意なり。實に第二の語として、『刹帝利』てふ名が用ひらるゝに至れり。婆悉吒よ、王とは『法によりて他人を喜悦せしむる者』てふ意なり。實に第三の語として『王』てふ名が用ひらるゝに至れり、婆悉吒よ、是の如く、この刹帝利の一般に、古の、最初に生ぜる、慣例によりて、その名が用ひらるゝに至れり。そは實に、それらの人々より起りて、其の他のものに非ず。彼等に相應したるものにて、不相應なるものに非ず。そは法を以ての故に、非法ならざるを以ての故に〔用ひらるゝに至れり〕。婆悉吒よ、何となれば、法は此の世にても他世にても、人類の最上なるものなればなり。

二二　婆悉吒よ、さて、それらの人々の或者に、次の如き考起れり。『實に惡しき法

は人々の間に顯はれたり。何となれば竊盜は顯著となり、妄語は顯著となり、刑罰は顯著となり、流罪は顯著とならんとする程となれり。さて我等は惡しき不善なる法を取り去るべし』と。而して彼等は惡しき不善なる法を追ひ拂へり。婆羅門とは『惡しき不善なる法を追ひ拂へる者』てふ意なり。

斯くして第一の語として、實に『婆羅門』てふ名が用ひらるゝに至れり。彼等は森林に住みて木の葉の家を作り、木の葉の家に於て思念せり。彼等に燃ゆる炭火は消え、煙は絶え、杵は捨てられたり。夕には夕食の爲に、朝には朝食の爲に、村・町・市に下りて食物を求めたり。彼等は食物を得たる時、再び阿蘭若の處なる、木の葉の家に歸りて思念を凝せり。人々之を見て言く、『此等の人々は、森林に住み、木の葉の家を作りて、木の葉の家に於て思念す。彼等に燃ゆる火は消え、煙も絶え、杵も捨てられたり。夕には夕食の爲に、朝には朝食の爲に、村・町・市に下りて食を求む。彼等食物を得れば、歸りて再び阿蘭若の處なる、木の葉の小屋に思念を凝す』と。思念者とは『思念をなす者』てふ意なり。斯くして、婆悉吒よ、『思念者』てふ名が、第二の語として用ひらるゝに至れり。

95

二三　さて此等の人々の或者は、婆悉吒よ、阿蘭若の處なる、木の葉の家に於て、思念を續くる能はずして、村の郊外、町の郊外に居を構へ、聖典を作れり。人々之を見て言く、『其等の人々は森林の住所なる、木の葉の小屋に於て思念をなすに堪えず、村の郊外、町の郊外に下りて居を構へ、聖典を作る。彼等は思念せず』と。さて、婆悉吒よ、學習者とは『彼等は思念せず』てふ意なり。かくて『學習者』てふ名が、第三の語として用ひらるゝに至れり、その當時は、婆悉吒よ、彼等は卑賤なるものと考へられたり。今は彼等は最上なるものと考へらる。婆悉吒よ、是の如くにして、爾來、古の、最初に生ぜる、慣例によりて、婆羅門の一般に、その名が用ひらるゝに至れり。そは、それらの人々より起りたるものにして、其の他のものに非ず。彼等に相應したるものにして、不相應なるものに非ず。法を以ての故に、非法ならざるを以ての故なり。何となれば、婆悉吒よ、法は此の世にても、他世にても、人類の最上なるものなればなり。

二四　さて、婆悉吒よ、それらの人々の中の或者は、結婚生活をなして、種々の商業に從事せり。吠舍とは『結婚生活をなして種々なる商業に從事する者』てふ意な

り。これより吠舍なる語が用ひらるゝに至れり。婆悉吒よ、吠舍の一般に、かの古の、最初に生ぜる、慣例によりて、その名が用ひらるゝに至れり。そは實に、それらの人々より起り、他のものに非ず。彼等に相應したるものにして、不相應なるものに非ず。そは法を以ての故に、非法ならざるを以ての故なり。

二五　婆悉吒よ、かの人々の中の殘餘の者は、總て狩獵をなす者となれり。婆悉吒よ、首陀羅とは『狩獵を以て業とし、又雜事を以て業とす』てふ意なり。これより首陀羅なる語が用ひらるゝに至れり。婆悉吒よ、首陀羅の一般に…乃至…非法ならざるを以ての故なり。

二六　今や、婆悉吒よ、或時、刹帝利の或者は、自己の法を輕蔑し、家を出でゝ家なき生活に入れり。言く『我は出家とならん』と。婆羅門の或者も、又自己の法を輕蔑し、家を出でゝ家なき生活に入れり。言く『我は出家とならん』と。吠舍の或者も
96 …〔乃至〕…『我は出家とならん』と。首陀羅の或者も…〔乃至〕…『我は出家とならん』と。此等四姓の一類より、婆悉吒よ、出家なる一團は出現せり。その名は實に彼等より起り、他の者より起れるに非ず、又そは相應したるものにして、不相應なるもの

に非ず。法を以ての故に、非法ならざるを以ての故なり。何となれば、婆悉吒よ、法は此の世にても、他世にても、人類の最上なるものなればなり。

二七　婆悉吒よ、刹帝利の或者は、身口意に於て惡しき生活に入り、邪見を有し、邪なる見解と行爲とを取れる結果、身體衰滅して命終の後、惡生、惡趣、險難處、地獄に再生す。婆羅門の或者は…〔乃至〕…吠舍の或者は…〔乃至〕…首陀羅の或者は…〔乃至〕…命終の後、惡生、惡趣、險難處、地獄に再生す。

二八　復、婆悉吒よ、刹帝利の或者は、身口意に於てよき行をなし、正見を有し、正しき見解と行爲とを取りし結果、身體衰滅して命終の後、善趣、天世に再生す。婆羅門の或者は…〔乃至〕…吠舍の或者は…〔乃至〕…首陀羅の或者は…〔乃至〕…命終の後、善趣、天世に再生す。

二九　婆悉吒よ、刹帝利の或者は、身口意に於て〔善惡〕二行をなし、混合せる見を有し、混合せる見解と行爲とを取れる結果、身體衰滅して、命終の後、樂と苦との兩つ[97]を受く。婆羅門の或者は…〔乃至〕…吠舍の或者は…〔乃至〕…首陀羅の或者は…〔乃至〕…命終の後、樂と苦との兩つを受く。

三〇　又、婆悉吒よ、刹帝利の或者は、身口意に於て自制し、七覺支を修し、法を修し現世に於て完全に涅槃す。婆羅門の或者は…〔乃至〕…吠舍の或者は…〔乃至〕…首陀羅の或者は…乃至…現世に於て完全に涅槃す。

三一　婆悉吒よ、何となれば、此等四姓の何人と雖も、比丘となり、阿羅漢となり、諸漏を滅せる者、作すべきことを作し終れる者、重擔を捨てたる者、再生なき位を正しく得たる者、有の束縛を滅せる者、完全智を有する者、解脫したる者たらんとするその人こそ、此等の中の最上者と稱せらる。法を以ての故に、又非法ならざるを以ての故なり。何となれば、婆悉吒よ、法は此の世にても他世にても、人類に於ける最上なるものなればなり。

三二　婆悉吒よ、次の句は、常童形梵天によりて說かれたり。
　家系を重んずる此等の人々の中
　刹帝利は最勝なり
　明と行とを完全に具せる者は
　人天に於て第一人者たり。

98

さてこの句は、婆悉吒よ、かの常童形梵天によりて、よく歌はれて、惡しく歌はれず、よく告げられて惡しく告げられず、利益深くして無益ならず、我によりて愛誦せらる。婆悉吒よ、我も亦歌はん。

家系を重んずる此等の人々の中
刹帝利は最勝なり
明と行とを完全に具せる者は
人天に於て第一人者たり。

斯く世尊は説き給へり。婆悉吒と婆羅墮とは、佛の所説に心歡喜し、踊躍せり。

註❶經題の aggañña に就き巴利聖典出版協會の巴英辭典には agga+ñña と分解し、チルダース氏の辭書には aggañña を agra+jña と分解せると同樣の考より、recognised as primitive primeval となしたれど jña は受働の意とならず。寧ろ aggañña は aggaṁ+ja =aggañ+ja が類化作用に依り aggañña となれるものにして「最初に生ぜる」との形容詞か或は「原人」とも譯すべきものか。或は更に妥當なりと思はるゝは大事 (Mahāvastu I. P. 340) に於

けるagriñyaなる語との類同なり。anya→añña, bhaṇya→bhañña の例の如く agriñya が agañña に等しきは間違ならざるべし。

❷地餅(pappaṭaka)或は「地膏」ともいふ。牛乳と米とを混じて煮之を團子の如くなしたる食物、巴利聖典出版協會の巴英辭書には「芽」「瘤」「ひこばえ」等となすも今は之を採らず。

❸此の上に、底本は vusitavā 「梵行已立」の一句を缺けり。

自歡喜経 (Sampasādanīya-sutta)

SC: Inspiring Confidence

二八　自歡喜經（サンパサーダニーヤ・スッタンタ）

是の如く我聞く。

一　一時、佛世尊は、那爛陀(ナーランダー)[城]の波波利菴婆林(パーヴァーリカ)に在(いま)しき。その時、長老舍利弗は、佛世尊の在す所に到り、到り已つて、佛世尊を禮拜して、一方に坐しぬ。一方に坐し已つて、長老舍利弗は、佛世尊に、是の如く白し上げぬ。

「世尊、われ今、餘の沙門、若しくは婆羅門にして、所謂、等正覺に於て、勝智を有すること、佛世尊に及ぶ者、[曾て]無く、[未來にも]在らざるべく、[現在にも]在ること無しと、[斯く悟得して]、佛世尊を信じ奉る」[1]と。

「善い哉、善い哉、舍利弗よ、汝能く、『世尊、われ今、餘の沙門、若しくは婆羅門にして、所謂、等正覺に於て、勝智を有すること、佛世尊に及ぶ者、[曾て]無く、[未來にも]在らざるべく、[現在にも]在ること無しと、[斯く悟得して]、佛世尊を信じ奉る』と、堂々と表白し、一向に受持し、師子吼をなせり。舍利弗よ、汝が[かく表白する以上]過去

信佛功德經 (T. 18; NJ 922) is equivalent. Śāriputra's 舍利弗 deep confidence in the Buddha was once proclaimed aloud in an eloquent eulogy of the Buddha spoken in the Buddha's presence. For making this bold utterance on the virtues of the Buddha, the Buddha asked him whether he had personal knowledge of the minds of all the buddhas, those of the past, of the future and of the present, their morality, their concentration, their wisdom, and the manner of their emancipation. Śāriputra said he did not claim to have such knowledge but justified himself by stating in detail the course of the Dharma taken by all the buddhas – their accomplishment in *śīla,* abandonment of the five hindrances 五障, establishment in the four bases of mindfulness 四念住 and cultivation of the seven factors of enlightenment 七覺支. (http://www.buddhism-dict.net/cgi-bin/xpr-ddb.pl?q=信佛功德經)

世に在して應供・等正覺たりし一切の諸佛世尊の、その心中の所念は、汝の心によりて、已によく會得せられたるべし。謂く『過去の諸佛世尊の戒は是の如く……
100 法は是の如く…… 智は是の如く…… 住は是の如く…〔乃至〕…解脱は是の如し』と。

「否とよ、世尊」と。

「されど舍利弗よ、未來世の應供・等正覺たるべき、一切の諸佛世尊の心中の所念は、汝の心によりて、已によく會得せられたるべし。謂く、『當來の諸佛世尊の、戒は是の如く…… 法は是の如く…… 智は是の如く…… 住は是の如く…〔乃至〕…解脱は是の如し』と」。

「否とよ、世尊」と。

「されど舍利弗よ、現在の應供・等正覺たる我が心中の所念は、汝の心によりて、已によく會得せられたるべし。謂く『現在の佛世尊の戒は是の如く…〔乃至〕…解脱は是の如し』と」。「否とよ、世尊」

「おゝ、さらば、舍利弗よ、汝は過去未來・現在の應供・等正覺者に對する、心差別智を有せざるに非ずや。若し爾らば、舍利弗よ、汝は何が故に、『世尊、われ今、餘の沙門、

若しくは婆羅門にして…〔乃至〕…と〔悟得して〕佛・世尊を信じ奉る』と、堂々と表白し、一向に受持し、師子吼をなせるや」。

二「世尊、われ實に、過去・未來・現在の應供・等正覺に對する心差別智を有せざるも、而も、世尊、我は諸佛の總[2]相の法を能く了知すればなり。世尊、譬へば、茲に、
101 一國王の、邊境の城市を有するあり、その城壁は堅牢にして、壘(るい)・砦(とりで)共に強固なり。唯一の門あるのみ。この門に、思慮あり、經驗に富み、而も賢明なる門番ありとせんに、彼は未知なるは禁じ、素性明かなる者のみ〔の入出〕を許すならん。されど彼は、決して、この都城を遶る凡ての通路を巡察し廻りて、城壘の裂目、又は城壘の罅隙の何處に於て、猫の如き小動物が、出入するやを看守るべきに非ざらんも、非情有情の如何を問はず、苟くもこの城內に入り、又は出づる者の一切は皆、唯此の門を通じてのみ入り又は出づべし〔と考へ〕、此彼の爲にのみ看張りをなさん。世尊、我は唯、〔諸佛〕の總相の法のみを了知するも、亦是の如し。〔所以は如何〕。過去世の應供・等正覺たりし一切の諸佛世尊も、〔この總相の法に依り、卽ち〕五蓋を斷盡し、[3]心隨煩惱を、正智に依りて抑制し、四念處に於て修成し、七覺支に於て如實に修習し

通達して、無上究竟の等正覺を成就し給ひしなり。復次に、世尊、未來世の應供・等正覺たるべき一切の諸佛世尊も亦、五蓋を斷盡し、心隨煩惱を正智に依りて抑制し、四念處に於て修成し、七覺支に於て如實に修習し通達して、無上究竟の等正覺を成就し給ふべし。復次に、世尊、亦、佛世尊なる現在世の應供等正覺も…〔乃至〕…等正覺を成就し給ひしなり。

102 さて世尊、嘗て、われ法を聽かんが爲に、佛世尊の許に到りぬ。世尊、その時、佛世尊は我が爲に、法の深きを轉じ妙なるを轉じて、黑〔法〕と白〔法〕との對立を説示し給へり。世尊、佛世尊が、是の如く我が爲に、法の深きを轉じ妙なるを轉じて、黑法と白法との對立を説示し給ひしが如く、是の如く、我は次第に、その法に於て勝智を得ると倶に、諸法中に於て、一の法に安住することを得、大師に於て歸[4]命し奉れり、世尊は等正覺者たり、法は世尊に依りて善説せられたり、僧は善く建立せられたりと〔信じて〕。

三　復次に世尊、佛世尊が、諸の善法に就きて説き給ひし法の如きは、これ無上なるものなり。こゝに諸の善法とは、卽ち、四念處、四正勤、四神足、五根、五力、七覺支、

八聖道支をいふ。世尊、比丘は、此(の諸の善法)に於て、有漏を斷盡して無漏を得、心解脱、慧解脱し、已に現前の諸法に於けるが如く、自身に勝智を成じて、究竟し、安住するなり。世尊、これぞ諸善法中の無上なるものなり。佛世尊はこれを究竟して了知し給へり。この佛世尊の究竟了知し給へるものは、苟くも諸善法に關する限り、最勝にして、餘の沙門若しくは婆羅門の智の如何なるものも、これ以上なりと認むべきものあること無し。

四　復次に、世尊、佛世尊が、諸の入處(十二處)の施設に關して說き給へる法の如きは、これ無上なるものなり。こは、六の內(處)と外處とにして、眼と色、耳と聲、鼻と香、舌と味、身と觸、意と法とをいふ。世尊、これぞ入處の施設に於ける無上なるものなり。佛世尊はこれを、究竟して了知し給へり。この佛世尊の究竟し了知し給へるものは、苟くも諸入處の施設に關する限り、最勝にして、餘の沙門若しくは
103 は婆羅門の智の如何なるものも、これ以上なりと認むべきものあること無し。

五　復次に、世尊、佛世尊が入胎に關して說き給ひし法の如きは、これ無上なるものなり。世尊、卽ちこは四種の入胎なり。世尊、此の中、ある者は無知にし

て母胎中に入り、又、無知にして母胎內に住し、無知にして母胎外に出づるあり、これ第一の入胎なり。更に復、世尊、此の中、ある者は正知にして母胎中に入るも、而も無知にして母胎內に住し、無知にして母胎外に出づるあり、これ第二の入胎なり。更に復、世尊、此の中、ある者は、正知にして母胎中に入り、正知にして母胎內に住するも、無知にして母胎外に出づるあり、これ第三の入胎なり。更に復、世尊、此の中、ある者は正知にして母胎中に入る如く、正知にして母胎內に住し、正知にして母胎外に出づるあり、これ第四の入胎なり。世尊、これぞ入胎に關する無上なるものなり。

六　復次に、世尊、佛世尊が諸の記[5]心の種類に關して說き給ひし法の如きは、これ無上なるものなり。世尊、この記心に四種類あり。或は一[6]類あり。占相に依りて、「他人の心を」觀察して謂く、『汝の意は是の如く、汝の意はかくあり、汝の心は此の狀態にあり』と。假令、彼は幾度かく觀察するも、正しく是の如くにて、更に誤ること無し。これ第一の記心の種類なり。復次に、世尊、此の中、或は一類あり。正にかく占相に依りて記心するに非ざるも、而も若しくは人、若しくは非人、若し

くは天神の音聲を聞きて、〔他心を〕觀察して謂く、『汝の意は是の如く、汝の意はかくあり汝の心は此の狀態にあり』と。假令、彼は幾度かく觀察するも、正しく是の如くにて、更に誤ること無し。これ第二の記心の種類なり。復次に、世尊、此の中、或は一類あり。かく占相に依りて〔他心を〕觀察するにも非ず。亦、若しくは人、若しくは非人、若しくは天神の音聲を聞きて觀察するに非ざれども、而も正に尋
104 に依り、伺により、〔又は〕❼尋の擴大の働きに依る音聲を聞くことによりて、〔他心を〕觀察して謂く、『汝の意は是の如く…〔乃至〕…此の狀態にあり』と。假令、彼は幾度かく…〔乃至〕…誤ること無し。これ第三の記心の種類なり。復次に、世尊、此の中、或は一類あり。實にかく占相に依りて〔他心を〕觀察するにも非ず。亦、若しくは人、若しくは非人、若しくは天神の音聲を聞きて觀察するにも非ず、亦、尋により伺により、尋の擴大の働きに依る音聲を聞くことによりて觀察するにも非ざれど、而も無尋無伺三昧に入りたる心に依りて、心中に能く他心を認知して謂く、『此に對して尊者の決定されたる意行は是の如くにして、尊者のこの心の直後に起るその心は、卽ち〔亦〕是の如し』と。彼は幾度かく觀察すると雖も正しく是の如くに

て、更に誤ること無し。これ第四の記心の種類なり。世尊、是ぞ諸の記心の種類に關する無上なるものなり。

七　復次に、世尊、佛世尊が諸の見定に就きて説き給へる法の如きは、これ無上なるものなり。世尊、こゝに四種の見定あり。此の中、世尊、一類の沙門、若しくは婆羅門にして、熱心に依り、精勤に依り、修定に依り、不放逸に依り、正作意に依り、三昧心に於て、此の身體を、〔下は〕足裏の皮上より、〔上は〕頭髮の直下に至る迄、皮膚を以て限られ、全身これ種々の不淨に滿つと、觀ずるが如き、是の如き種類の心三昧に入るものあり。卽ち此の身中には、頭髮・微毛・爪・齒・皮膚・肉・筋肉・骨・髓・腎・心臟・肝・肋膜・脾・肺・腸・隔膜・胃・糞・膽汁・痰・膿・血・汗・脂肪・涙・油・痰唾・鼻涕・骨液・尿等ありて〔滿つと觀ずるをいふ〕。これ第一の見定なり。

105 復次に、世尊、此の中、一類の沙門、又は婆羅門にして、熱心に依り、精勤に依り、修定に依り、不放逸に依り、正作意に依り、三昧心に於て、此の身體を、〔下は〕足裏の皮上より、〔上は〕頭髮の直下に至る迄、皮膚を以て限られ、全身これ種々の不淨に滿つと、觀ずるが如き、是の如き種類の心三昧に入るものあり。卽ち此の身中には、頭髮・

微毛・爪・齒・皮膚・肉・筋肉・骨・髓・腎・心臟・肝・肋膜・脾・肺・腸・隔膜・胃・糞・膽汁・痰・膿・血・汗・脂肪・涙・油・痰唾・鼻涕・骨液・尿等ありて〔滿つと觀じ〕、更に亦、人は外皮と肉と血と骸骨とに過ぎずと、かく觀ずるをいふ。これ第二の見定なり。

復次に、世尊、此の中、一類の沙門、若しくは婆羅門にして…乃至…人は、外皮と肉と血と骸骨とに過ぎずとかく觀じ、復、人の意識の流は、不斷に相續して、亦、此の世にも住し、亦、彼の世にも住すと確知す。これ第三の見定なり。

復更に、世尊、一類の沙門、若しくは婆羅門にして…乃至…復、人は、外皮と肉と血、と骸骨とに過ぎずと觀じ、復、人の意識の流は、不斷に相續して、亦此の世にも不住なり、彼の世にも不住なりとかく確知す。これ第四の見定なり。世尊、これ諸見定に於ける無上なるものなり。

八　復次に世尊、佛世尊が人施設に關して說き給ひし法の如きは、これ無上なるものなり。世尊、こは七種の人〔施設〕にして、倶解脫・慧解脫・身證・見至・信勝解・隨法行隨信行をいふ。世尊、これ人施設に於ける無上なるものなり。

106
九　復次に、世尊、佛世尊が諸の精[8]勤に關して說き給ひし法の如きは、これ無上

なるものなり。世尊、これ卽ち七覺支にして、念覺支・擇法覺支・精進覺支・喜覺支・輕安覺支・定覺支・捨覺支をいふ。世尊、これ精勤に於ける無上なるものなり。

一〇　復次に、世尊、佛世尊が諸の通行に關して說き給ひし法の如きは、これ無上なるものなり。世尊、これ四種の通行にして、苦遲通行と、苦速通行と、樂遲通行と、樂速通行となり。世尊、此の中、苦遲通行といふこの通行は、世尊、困難あるが故に、亦愚鈍なるが故に、この兩義に依りて、卑陋なりと稱せらるゝものなり。世尊、此の中、苦速通行といふこの通行は、世尊、困難あるが故に、卑陋なりと稱せらるゝものなり。世尊、此の中、樂遲通行といふこの通行は、世尊、愚鈍なるが故に、卑陋なりと稱せらるゝものなり。世尊、この中、樂速通行といふこの通行は、世尊、易樂なるが故に、亦、利根にてもあるが故に、この兩義に依りて、正に優勝なるものと稱せらるゝものなり。世尊、是ぞ通行に於ける無上なるものなり。

一一　復次に、世尊、佛世尊が言正行に就きて說き給ひし法の如きは、これ無上なるものなり。世尊、この中、一類ありて、虛誑語を含める語言を語らず、亦麤惡

〔語〕をなさず、亦、離[9]間〔語〕をもなさず、諍論に勝つことを覓めずして、賢[10]人と賢人との如く、意味深き、且つ適時の語言をなすは、世尊、　これ言正行に於ける無上なるものなり。

一二　復次に、世尊、　佛世尊が、士夫の戒正行に就きて說き給ひし法の如きは、これ無上なるものなり、世尊、　この中、一類あり、正直にして、又これが爲に信用あり、亦詐欺師にも非ず、背信者にも非ず、亦占相者にも非ず、亦利に依りて利を貪る者にも非ず、五官の門のよき監視者にてあり、食によく節を持し、行作は靜平にして、常によく驚覺を持し、精進不捨にして、不動に住し、[11]定を修し、答辭明快にして、行爲決斷に富み、理性的にして情に溺れず、亦よく憶念して用意周到なり。世尊、これ士夫の戒正行に於ける無上なるものなり。

一三　復次に、世尊、　佛世尊が敎誡法に就きて說き給ひし法の如きは、これ無上なるものなり。世尊、　之に四種の敎誡あり。世尊、　佛世尊は、獨自の如理作意によりて、他人をかく知り給ふ。『敎誡せられし如く、是の如く、如實に行ずる人は、三結の斷盡に由りて、預流と成り、退墮法無きを得、決定して等正覺に趣入するを

得べし』と。世尊、佛世尊は、獨自の如理作意によりて、他人をかく知り給ふ。『敎誡せられし如く、是の如く如實に行ずる人は、三結の斷盡に由り、貪・瞋・癡の滅盡に由りて、一來と成り、彼は正に、今一度、此の世に還來するのみにして、苦の邊際を作すべし』と。世尊、佛世尊は、獨自の如理作意によりて、他人をかく知り給ふ。「敎誡せられし如く、是の如く如實に行ずる人は、五下分結の斷盡に由りて、⑫不還となり、その生所に於て直ちに般涅槃し、決して此の世に來生せず」と。世尊、佛世尊は、獨自の如理作意によりて他人をかく知り給ふ。『敎誡せられし如く、是の如く如實に行ずる人は、有漏を斷盡することに由りて無漏の心解脫・慧解脫を現法に於て自ら了知し作證し到達し、正に〔その中に〕住するを得べし』と。世尊、これ敎誡法に於ける無上なるものなり。

108 **一四**　復次に、世尊、佛世尊が、他人の解脫に關する智に就きて說き給ひし法の如きは、これ無上なるものなり。世尊、佛世尊は、その獨自の如理作意によりて、他人をかく知り給ふ。『此の人は、三結の斷盡によりて、預流と成り、退墮法無きを得、決定して等正覺に趣入すべし』と。世尊、佛世尊は、その獨自の如理作意により

て、他人をかく知り給ふ。『此の人は、三結の斷盡に由り、亦、貪·瞋·癡を滅盡することに由り、一來と成り、彼は正に、今一度、此の世に還來するのみにて、苦の邊際を作すべし』と。世尊、佛世尊は、その獨自の如理作意によりて、他人をかく知り給ふ。『此の人は五下分結の斷滅に由り、不還と成り、その生所に於て直ちに般涅槃し、決して此の世に來生せず』と。世尊、佛世尊は、その獨自の如理作意に依りて、他人をかく知り給ふ。『此の人は、有漏の斷盡に由りて無漏の心解脫·慧解脫を、現法に於て自ら了知し作證し到達し、正に〔その中に〕住することを得べし』と。世尊、これ他人の解脫に關する智に於ける無上なるものなり。

一五　復次に、世尊、佛世尊が諸の常住論に就きて說き給ひし法の如きは、これ無上なるものなり。世尊、此は三種の常住論なり。世尊、此の中、一類の沙門、若しくは婆羅門にして、熱心により、精勤により、修定により、不放逸により、正作意によりて、その心が三昧に入りたるとき、種々なる宿命を想起するが如き、是の如き種類の心三昧に入るものあり、卽ち、一生、二生、三生、四生、五生、乃至十生、二十生、三十生、四十生、五十生、乃至百生、千生、百千生、多百生、多千生、多百千生〔の間の宿命を想

起し」、而して、『其の處に於て、予は是の如き名を有し、是の如き種族に屬し、是の如き姓にして、是の如く飲食し、是の如き苦樂を經驗し、是の如き壽命を有したりし
109 が、彼處より沒して、其の處に生じ、其の處に於て、〔復〕是の如き名を有し、是の如き種族に屬し、是の如き姓にして、是の如く飲食し、是の如き苦樂を經驗し、是の如き壽命を有しぬ。而してまた、彼處より沒して此處に生を受けたり』と。是の如く、其の事情と境遇とを併せて種々なる宿命を想起して、彼は是の如く主張す。『予は過去世に於て、[13]世界が破壞し、又は成立せりとも知らず、未來世に於て、世界が破壞すべきや、將た成立すべきやを知らざるも、我と世界とは、常住にして、生産する所無く、山頂の如く常住にして、石柱の立てる如く不動なり。而して彼等有情は流轉し輪廻し死去し出生するも、而も[14]〔我と世界とは〕常住に存す』と。これ第一の常住論なり。復次に、世尊、此の中、一類の沙門、若しくは婆羅門にして、熱心により、精勤により、修定により、不放逸により、正作意によりて、その心が三昧に入りたる時、種々なる宿命を想起するが如き、是の如き種類の心三昧に入るものあり。卽ち、一成壞、二成壞、三成壞、四成壞、五成壞、十成壞、二十成壞〔劫の間の宿命を想起し」、而

して、『其の處に於て、予は是の如き名を有し、是の如き種族に屬し、是の如き姓にして、是の如く飲食し、是の如き苦樂を經驗し、是の如き壽命を有したりしが、彼處より沒して、其の處に生じ、其の處に於て、復、是の如き名を有し、是の如き種族に屬し、是の如き姓にして、是の如き飲食をなし、是の如き苦樂を經驗し、是の如き壽命を有しぬ。而して、又彼處より沒して、此處に生を受けたり』と。是の如く其の事情と境遇とを併せて種々なる宿命を想起して、彼は是の如く主張す。『實に予は、過去世に世界が破壞し[15]、又世界が成立せしことを知り、未來世に於ても正しく予は、
110 世界が破壞すべく、又成立すべきことを知るも、而も、我と亦世界とは、常住にして、生產する所無く、又、山頂の如く常住にして、石柱の立てる如く不動なり。而して彼等有情は、流轉し輪廻し死去し出生するも、而も〔我と世界とは〕常住に存す』と。これ第二の常住論なり。復次に、世尊、　此の中、一類の沙門、又は婆羅門にして、熱心により……乃至……心が三昧に入るとき、種々なる宿命を想起するが如き、是の如き種類の心三昧に入るものあり。　卽ち、十成壞、二十成壞、三十成壞、四十成壞〔の劫の間に於ける宿命を想起し〕、而して、『其の處に於て、予は是の如き名を……〔乃至〕……ま

た、彼處より沒して、此處に生を受けたり』と。是の如く、其の事情と境遇とを併せ
て種々なる宿命を想起して、彼は是の如く主張す。『實に予は、過去世に於て世界
が破壞し、又世界が成立せしことを知り、又予は未來世に於て、世界が破壞すべく、
また世界が成立すべきことを知るも、而も我と世界とは常住にして、生産する所
無く、また山頂の如く常住にして石柱の立てる如く不動なり。而して彼等有情
は流轉し輪廻し死去し出生するも、而も我と世界とは常住に存す』と。これ第三
の常住論なり。世尊、これ諸の常住論中に於ける無上なるものなり。

一六　復次に、世尊、佛世尊が宿住隨念智に關して說き給ひし法の如きは、これ
無上なるものなり。世尊、此の中、一類の沙門若しくは婆羅門にして、熱心によ
り、精勤により、修定により、不放逸により、正作意によりて、心が三昧に入りし時、種
々なる宿命を想起するが如き、是の如き心三昧に入るものあり。卽ち、一生、又は
二生、又は三生、四生、五生、十生、二十生、三十生、四十生、五十生、百生、千生、百千生、幾壞劫、
111 幾成劫、幾成壞劫の宿命を想起し、而して『其處に於て、予は是の如き名を有し、是の
如き種族に屬し、是の如き姓にして、是の如く飲食し、是の如き苦樂を經驗し、是の

如き壽命を有したりしが、彼處より沒して、かの處に生じ、その處に於て、また是の如き名を有し、…〔乃至〕…又、かの處より沒して、此處に生を受けたり』と。是の如く、其の事情と境遇とを併せて、種々なる宿命を想起す。世尊、また諸天あり、彼等に對して、その壽命の長さを數ふべき計算の能力もなく、又それが思ひ及ぼされしことも無きに拘らず、彼等の前生の生活が如何なる特殊相を有したるにせよ、若しくは有色にありしとするも、若しくは無色にありしとするも、若しくは有想、若しくは無想、若しくは非想非々想に在りしとするも、凡て是の如く、其の事情と境遇とを併せて種々なる宿命を想起するものあらんに、世尊、是ぞ宿住隨念智に於ける無上なるものなり。

一七　復次に、世尊、佛世尊が、有情死生智に關して說き給ひし法の如きは、これ無上なるものなり。世尊、此の中、一類の沙門、若しくは婆羅門にして、熱心、精勤、修定、不放逸、正作意によりて、その心が三昧に入りし時、清淨にして、超人的なる天眼によりて、諸の有情を觀察し、諸の有情が、その業力の引くまゝに、死去し、出生し、〔或は〕卑賤となり富貴となり、優美となり醜惡となり、幸福となり不幸となるを了

知するが如き、心三昧に入る者あり。而して卽ち謂ふ、『尊者よ、實に諸の有情が身惡行を具足するにより、語惡行を具足するにより、意惡行を具足するにより、聖賢を誹謗し、邪見を有するにより、邪見による業を行ふとき、彼等は、その身壞し、死して後には、惡生・惡趣・險難處・地獄に再生すべし。亦、尊者よ、諸の有情が身妙行を具足するにより、語妙行…乃至…意妙行を具足するにより、〔又〕賢聖を誹謗せず、正見を持するにより、又、正見に依る業を行ふとき、彼等は、その身壞し、死して後には、善趣に行き、天界に生ずるなり』と。是の如く清淨にして、超人的なる天眼によりて、諸の有情を觀察し、諸の有情が、その業力の引くまゝに、死去し、出生し、或は卑賤となり富貴となり、優美となり醜惡となり、幸福となり不幸となるを了知すること、これ世尊、これ有情死生智に於ける無上なるものなり。

一八　復次に、世尊、佛世尊の神通の種類に就きて說き給ひし法の如きは、無上なるものなり。世尊、こゝに二種の神通あり。世尊、そのうち有漏、有依にして、『聖ならず』と稱せらるゝ神通あり。また、世尊、無漏、無依にして、『聖なり』と稱せらるゝ神通あり。世尊、又何物か、有漏有依にして『聖ならず』と稱せらるゝ神通

なるや。世尊、此の中、一類の沙門、若しくは婆羅門にして、熱心、精勤、修定、不放逸、
正作意によりて、その心が三昧に入りし時、〔次の如き〕種類の神通を現ずるものあ
り。〔即ち〕或は一〔身〕を變じて多〔身〕を成じ、多〔身〕を變じて、一〔身〕を成ずるあり。或は
〔身を〕顯はし或は隱れ、墻壁を過ぎ、城砦を通り、攀づることを得ざる山石を通過す
ること、恰も空中に於けるが如きものあり。或は大地に出沒すること、恰も水中
に於けるが如く、水上を沈まずして行步すること、恰も地上に於けるが如く、虛空
を坐して行くこと、恰も飛鳥の如きものあり。更に、彼の日月の如き、是の如き大
神力と大威德とを有するものを、手を以て觸れ、又は捫(な)づるを得、終に身によりて
梵界に達しうるに至るものあり。世尊、これ有漏・有依にして、『聖ならず』と稱せ
らるゝ所の神通なり。世尊、何物かこれ無漏、無依にして、『聖なり』と稱せらるゝ
神通なるや。世尊、この中、比丘にして、若し〔欲情の上よりは〕不快なる〔べき物事〕
に於て、而も、快の想に住せんと欲せば、則ち直ちに快の想に住し、又、若し〔欲情の上
113 よりは〕快なる〔べき物事〕に於て、而も不快の想に住せんと欲せば、則ち直ちに不快
の想に住し、又、若し不快なるに於ても、亦快なるに於ても、〔常に〕快の想に住せんと

欲せば、則ち直ちに快の想に住し、若し又、快なるに於ても、亦不快なるに於ても、不快の想に住せんと欲せば、則ち直ちに、不快の想に住し、若し又、不快なるに於ても、亦、快なるに於ても、その兩方〔の感情〕を除去することによりて、捨なる、正念智に住せんと欲せば、則ち直ちに、捨なる正念智に住し得るものあり。世尊、是ぞ無漏・無依にして、『聖なり』と稱せらる〻神通なり。

世尊、こは神通の種類中の無上なるものなり。佛世尊は、この凡てを、究竟して了知し給へり。苟くもこの神通に關しては、佛世尊の智は、最勝にして、餘の沙門、又は婆羅門の智の何ものも、これ以上なりと認むべきもの無し。

一九 ⑯篤信なる善男子に依りて、〔卽ち〕奮鬪の持續により、不抜の意力により、人間の力により、人間の精進、人間の努力、人間の忍耐によりて得らるべき所のものを、佛世尊は已に逮得し給へり。世尊、佛世尊は、愛欲に於て、感覺的享樂に耽著し、低級・卑賤・世俗的なること・又は無意義なるものに順應せんと求め給ふことなく、自我の難行苦行の執に著して、苦・非聖・無意義なることに順應せんと求め給はず。佛世尊は、四禪を得んが爲、明晰なる智識を有せんが爲、現見の法樂に住せんが爲

に、欣求する所の凡てを得、自由を獲得し、[17]無苦憂を得給へり。

世尊、若し我にかゝることを問ふものあらん。〔卽ち〕『いかに友、舍利弗よ、過去世に於ける餘の沙門若しくは婆羅門にして、等正覺に於て、佛世尊より勝れたる智慧を有したるもの有りしや』と。世尊、かゝる問に對して、我は『否』と答へんと欲す。復、更に、『いかに、友、舍利弗よ、未來世に於ける餘の沙門、若しくは婆羅門にして、等正覺に於て、佛世尊より勝れたる智慧を有するものあるべきや』と。かゝる問に對して、世尊、我は『否』と答へんと欲す。復更に、『いかに、友、舍利弗よ、現在世に於ける餘の沙門、若しくは婆羅門にして、等正覺に於て、佛世尊より勝れたる智慧を有するものありや』と。かゝる問に對して、世尊、我は『否』と答へんと欲す。若し復、世尊、我にかゝることを問ふものあらん。〔卽ち〕『いかに、友、舍利弗よ、過去世に於ける餘の沙門、若しくは婆羅門にして、等正覺に於て、佛世尊と等正なるものありしや』と。かゝる問に對して、世尊、我は『是の如し』と答へんと欲す。復、『いかに、友、舍利弗よ、未來世に於ける餘の沙門、若しくは婆羅門にして、等正覺に於て、佛世尊と等正なるもののあるべきや』と。かゝる問に對して、世尊、我は『是の如し』と

答へんとす。復、『いかに、友、舍利弗よ、現在に於ける餘の沙門、又は婆羅門にして、等正覺に於て、佛世尊と等正なるものありや』と。かゝる問に對して、世尊、我は、『否』と答へんと欲するなり。

若し復、世尊、我にかゝる問を作すものあらん。〔卽ち〕、『何の故に、長老舍利弗は、⑱一者を無比なりと認め、一者を無比と認めざるや』と。是の如き問に對して、世尊、我は、是の如く說示せん。〔卽ち〕『我は、師が過去世にも、等正覺に於て、我と全同なる應供・等正覺者ありきと〔曰へるを〕、佛世尊の御前にて聽聞し、眼前(まのあたり)に受敎せり。我は又、師が、未來世にも、等正覺に於て、我と全同なる應供・等正覺者あるべしと〔曰へるを〕、佛世尊の御前にて聽聞し、眼前に受敎せり。〔されど〕、我は師が一の世界に於て、二人の應供・等正覺者の出現するが如き、かゝる機會の起ることは、前來にもなく、將來にも望み得べきに非ず。こは不可能なることなりと、〔曰へる
115 を〕、佛世尊の御前に於て聽聞し、眼前に受敎せしなり』と。世尊、是の如き質問に對して、われ是の如き說明をなさんとするは、佛世尊の所說を正しく語ることとなりや。又誤謬を犯して、われ佛世尊を誣ふることとならざるや。又⑲法に對する順

法の說明たり得るや。又、法に適ふ說・順說をば虛僞に述ぶることとはならざるや」。

「實に、舍利弗よ、是の如き質問に對して、汝、是の如く說明するは正しく、わが所說を語るものにして、又、過誤によりて、われを誣ふるものにも非ず、法に對する順法の說明たり得るものにして、又法に適ふ說・順說をば、虛僞に述ぶるものにも非ざるなり」と。

二〇　是の如き〔佛の〕所說を聞きて、長老優陀夷（ウダーイ）は、佛世尊に白して言く、「甚奇なり、世尊、未曾有なり、世尊、如來は、少欲と知足と嚴肅なる行事とに依りて、如來に是の如き威神力あり、是の如き大威德あるにも拘らず、而も亦、更に自己に對する些の揚言すらなし給はず。世尊、若し餘の異學の遊行者ならんには、この中の個々の法をだに、自己中に見出さんとき、直ちに彼等は法幢を高く揭げんと欲せんに。甚奇なり、世尊、未曾有なり、世尊、如來は、その少欲と知足と嚴肅なる行事とによりて、卽ち如來に是の如き威神力あり、是の如き大威德あるにも拘らず、而も亦、更に自己につき、〔些の〕揚言をもなし給はざるとは。

「汝、優陀夷よ、よく心せよ。如來は、少欲と知足と嚴肅なる行事とによりて、如來に是の如き威神力あり、是の如き大威德あるにも拘らず、而も亦、自己につき、些の揚言だになさざるに、優陀夷よ、若し、異學の遊行者ならんには、この中の個々の法をだに、自己中に見出さんとき、彼等は直ちに、法幢を高く揭げんと欲すべけん。汝、優陀夷よ、よく心せよ。』如來は、少欲と知足と嚴肅なる行事とによりて、如來に是の如き威神力あり、是の如き大威德あるにも拘らず、而も亦、自己につき些の揚言だに作さざるを』と」。

116 **二一**　こゝに佛世尊は、長老舍利弗に告げ給はく、「それ故に、舍利弗よ、汝はこの法の分別を以て、諸の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に對して宣說すべし。然らば、たとひ如來に對して疑惑、又は猶豫を懷ける愚癡者なりとも、この法の分別を聞かば、如來に對して、懷ける疑惑と猶豫とは、消滅すべければなり」と。

實に是の如く、長老舍利弗は、佛世尊の御前に、「確信より生ぜし」歡喜を表白し奉れり。されば、この故に、こ「の經」を解釋して、[20]自歡喜經と稱するなり。

註❶信ずる (pasanno) は、元來愉快快明なりといふ程の意味であるが、この語が Bhagavanti (Bhagavant の於格) と結ぶときは、信仰の意あるが上に、亦知的意味の滿足をも含むが故に、斯く悟得してとの意を補つて譯せしなり。

❷總相の法 (dhammanvayo) とは、こゝにては一切に通ずる法の類集の意。

❸心隨煩惱 (cetaso upakkilesā) は心に隨つて惱亂の事を爲す意味にて、諸の煩惱の總稱と解すべし。

❹「歸命せり」pasīdiṁ は、pasāda と語源を同じくし、於格をとる時は、宗教的信仰の意味となるを以て、これを歸命すと飜ぜり。

❺記心 (ādesana) は、新譯の譯語例に從ひしも、漢譯自歡喜經には、觀察と譯せり。故にこの兩譯をその場合によりて混用せり。意を取りていへば、讀心術とも稱すべきものなり。

❻一類 (ekacco) は一人或は、ある人ありといふに同じ。

❼尋の擴大の働き (vitakka-vipphāra) は Skt. にては vitarkavisphāra にして、visphāra は振動の意あり。物事を思ひつめたるとき、所謂天籟の響の如きを尋、伺、尋の擴大の働に依る聲といふと解せば可ならん。佛音はこれを、隨眠等の聲とするも、意必ずしも明かならず。

❽精勤 (padhāna) は努力の意にして、一般にこの語は三十七菩提分法中の四正勤の正勤 (sammāppadhāna) と熟語され、梵には正斷又は正勤、samyakprahāṇa に相當する。されど、この所にては、實は七覺支を說けり。所謂、修所斷の斷を現はさんとするの意なるか。

❾離間語 (pesuṇiyaṁ) は底本に pesuniyaṁ とあるも誤なり。

⑩賢人と賢人との如くは mantā mantā にして、mantā は mantar (賢人) の Nominative なるも、賢人の如く、聖者の如く、思索家の如くといふ風な意味に用ひる場合あり。今はこの慣用法に從ひしなり。

⑪定を修し jñāyi は、底本には、ñāyi とあるも、ビルマ本及び註釋に從へり。

⑫不還は一般に anāgāmin なるも、而もこゝには opapātiko (化生) とあるのみ。化生は卽ち梵の upapādukāḥ に當り、父母なくして生ずるものを意味するも、父母に依りては生ぜざるといふ否定的方面をとりて、特にこゝにこの字を用ひたるならんと思はるゝにより、こゝでは前後の文勢よりこれを不還と意譯せり。

⑬「世界が破壞……知らず」底本には jānāmi saṁvaṭṭi vā loko vivaṭṭi vā ti とありて na なく、「世界の破壞し又は成立するを知る」なれど、註本には na を附してゐるし、又、この類の三昧には、世界の成壞に關して、何等の想起も有せざるが故に、知らずとすべきを可とせん。しかのみならず、未來の世界の成壞をいふ場合には、次に本經の示す如く、未來に世界が成立し又は破壞すべしと知らずとあるを以て見るも、その對比上、こゝに na を入れ na jānāmi とするを適當とせん。

⑭「我と世界とは……常住なり」は、atthi (tvava) sasati-samaṁ をかく我と世界の主格を補ひて譯せり。atthi は Stede に依るも、第三人稱の複數にも用ひ得らるゝが故に、前後の文勢より思惟するとき、かく我と世界の主格を補ふを至當と考へたり。

⑮この世界が破壞す (saṁvaṭṭi) は、世界が展開をまき收める、離散するの意と見るべく、決し

て消滅の意には非らざるべく、これに對して、世界が成立せり(vivaṭṭi)とは、展開する、形成するの意味なり。

⑯一九　底本は二〇とあるも、誤なり、從って以下の番號は一つ宛繰り上げたり。

⑰無苦憂 (akasira-lābhi) は難行苦行せずして得るの意。

⑱一者 (ekaccaṁ) は、こ丶では、過去と未來とには、佛と同等の等正覺を成ずるものありといひ、現在にはなしといひしかば、過去又は未來のものを一者と見、これに對して現在のものを一者と見しなり。因に過去又は未來の沙門又は婆羅門にして、佛と等正なるものとは、過去佛又は未來佛を指すこと勿論なり。

⑲法に對する順法 (dhammassa cânudhammaṁ) とは、法とその法に隨ふ法の意にして、正說の法と、その法を解する豫備となる法の意と見るべし。佛音は、法とは出世間的と世間的との經卽ち九分經を意味すといふ。

⑳自歡喜經 (sampasādaniya) は漢譯はこ丶では、自淸淨經と飜ぜり。而してビルマ本では經題に於ても此處でも Sampasādaniya となつてゐる。Sampasādaniya は sampasāda に義務分詞又は未來分詞の語尾 aniya を附したるものにして「歡喜に導くべき」又は「淸淨となるべき」の意であり、Sampasādaniya は Sampasādana に taddhita 語尾 iya を附したるものにして「歡喜せる」又は「淸淨となる」の意である。

しょうじょうきょう

清浄 経 (Pāsādika-sutta)

SC: An Impressive Discourse

二九 清淨經（パーサーディカ・スッタンタ）

是の如く我聞く。

一 或時、世尊は、緬祇（デーダンニャ）と名づくる釋迦族の菴羅林中の樓閣に於て、釋迦族の間に住し給へり。折しもその時、尼乾子（ニガンタナータプッタ）は波婆（パーヴァー）〔城〕に於て滅したり。彼の滅せし時、尼乾達（ニガンタ）は分れて二派となり、相鬪ひ、相諍ひ、こもごも鬪諍に卷込まれて、互に鋭き舌鋒を交へて相住せり。〔言はく〕「汝は此の法・律を知らず、我は此の法・律を知る。如何なれば、汝は此の法・律を知らんや」。「汝は邪行に從ひ、我は正行に從ふ」。「我が言は相應するも、汝の言は相應せず」。「〔汝は〕前に云ふべきことを後に云ひ、後に云ふべきことを前に云へり」。「汝の熟考せざりしことは、直に顚覆せられたり」。「汝は言論を立てしも、負處に墮せり」。「汝の說を脫せんが爲に巡遊せよ、若し能ふべくんば、自ら解け」と。思ふに尼乾子の徒輩の中には殺戮行はれん。尼乾子の白衣〔派〕の在家の弟子達すら、尼乾子に對し、厭忌し、讖慊し、違反し已つて、其の狀、恰も

正しく說かれざる、誤說せられたる〔出離に〕導かざる、寂靜に至らしめざる、正等覺者によりて說かれざる法と律とに對する如く、又は依持處たり得ざる、破れし塔に對するが如くなり。

二　時に沙彌周陀（チュンダ）は波婆に安居して住せり。〔彼は〕舍彌（サーマ）村に於ける具壽阿難に近づき、近づき已りて、具壽阿難を禮拜して一方に坐せり。一方に坐せる沙彌周陀は、具壽阿難に斯く云へり。

「大德よ、尼乾子は、今、波婆〔城〕に滅せり。彼、滅して、尼乾は分れて二派となり…乃至…依持處たり得ざる、破れし塔に對するが如し」と。

是の如く言へる時、具壽阿難は沙彌周陀に斯く言へり。「友、周陀よ、こは世尊に白し上ぐべき價値ある話なり。友、周陀よ、行きて、我等は世尊に近づかん。近づきて、此の事を世尊に白し上げん」と。

「然り、大德よ」と沙彌周陀は、具壽阿難に答へたり。

三　こゝに於て、具壽阿難及び沙彌周陀は、世尊に近づけり。近づきて世尊を禮拜し、一方に坐せり。一方に坐せる具壽阿難は、世尊に斯く白し上げぬ。

「世尊、此の沙彌周陀は斯く云へり『尼乾子（ニガンタナータプッタ）は、今、波婆(城)に滅したり。彼、滅して、尼乾は分れて二派となり…乃至…依持處たり得ざる、破れし塔に對するが如し』と」。

119 〔世尊は曰（のたま）はく〕「周陀よ、實に是の如きは、これ正しく説かれざる、誤説せられたる、〔出離に〕導かざる、寂靜に至らしめざる、正等覺者によりて説かれざる法と律となればなり。

四　周陀よ、こゝに師ありて正等覺者に非ず。法は正しく説かれざる、誤説せられたる、〔出離に〕導かざる、寂靜に至らしめざる、正等覺者によりて説かれざるものなり。而して弟子は、此の法に於て、法・隨法を成就して住せず、眞正を成就せず、隨法の行あらずして、その法を離れて逸せり。彼に人は斯く言はん。『友よ、そは汝の爲になり、そは汝の利益となる。汝の師は正等覺者に非ず。法は正しく説かれざる、誤説せられたる、〔出離に〕導かざる、寂靜に至らしめざる、正等覺者によりて説かれざるものなり。而して汝は其の法に於て、法・隨法を成就して住せず、眞

正を成就せず、隨法の行あらずして、其の法を離れて逸せり』と。周陀よ、是の如く、師がこゝに侮蔑せられ、法がこゝに侮蔑せられ、弟子がこゝに斯く稱讃せらる。周陀よ、斯かる弟子に『具壽は、師が汝に法を說き示せるが如く、之を成就せよ』と言ふ者、並に誰にても喜ばす所の者、何事をも喜ばしむる者、及び喜ばされて其の如く行ふ者、それ等凡ては夥しき非福を生ず。そは何故なるや。何となれば、周陀よ、此の法と律とは、正しく說かれざる、誤說せられたる、〔出離に〕導かざる、寂靜に至らしめざる、正等覺者によりて說かれざるものなればなり。

五　更に周陀よ、こゝに師は正等覺者に非ず。法は正しく說かれざる、誤說せられたる、〔出離に〕導かざる、寂靜に至らしめざる、正等覺者によりて說かれざるものなり。而もその弟子は、其の法に於て法・隨法を成就して住し、眞正を成就し、隨法を行じ、其の法を行ず。或人彼に斯く言はん、『友よ、そは汝の爲にならず。そは汝の利益とならず。汝の師は、正等覺者に非ず。法は正しく說かれざる、誤說せら
120 れたる、〔出離に〕導かざる、寂靜に至らしめざる、正等覺者によりて說かれざるものなり。而して汝は其の法に於て、法・隨法を成就して住し、眞正を成就し、隨法を行

じ、其の法を行ず』と。是の如く周陀よ、師がこゝに侮蔑せられ、法がこゝに侮蔑せられ、弟子がこゝに斯く侮蔑せらる。周陀よ、斯かる弟子に、『具壽は、實に何によりて理趣を行じ、理趣に努むるや』と言ふ者、並に誰にても稱讚する者、何事をも稱讚する者、及び稱讚されて益々精進する者、それ等凡ては、夥しき非福を生ず。それは何故なるや。何となれば、周陀よ、此の法と律とは、正しく説かれざる、誤説せられたる、〔出離に〕導かざる、寂靜に至らしめざる、正等覺者によりて説かれしものに非ざればなり。

六　更に周陀よ、こゝに師は正等覺者なり。法は正しく説かれたる、善説せられたる、〔出離に〕導く、寂靜に至らしむる、正等覺者によりて説かれたるものなり。而して弟子は其の法に於て、法・隨法を成就して住せず、眞正を成就せず、隨法の行あらず、其の法を離れて逸せり。或人は是の如く彼に云はん。『友よ、そは汝の爲にならず、そは汝の利益とならず。汝の師は正等覺者なり。法は正しく説かれたる、善説せられたる、〔出離に〕導く、寂靜に至らしむる、正等覺者によりて説かれたるものなり。而して汝は其の法に於て、法隨法を成就して住せず、眞正を成就せず、

に稱讃せらるゝにあらずや。是の如く、周陀よ、師がこゝに周陀よ、師がこゝに斯く侮蔑せらる。周陀よ、斯る弟子に『具壽は、師が法を說き示せるが如く、汝は之を成就せよ』と言ふ者、並に誰にても喜ばす所の者、何事をも喜ばしむる者、及び喜ばされて其の如く行ふ者、其等凡ては夥しき福を生ず。そは何故なるや。何となれば、周陀よ、此の法と律とは、正しく說かれたる、善說せられたる、〔出離に〕導く、寂靜に至らしむる、正等覺者によりて說かれたるものなればなり。

121

七　更にまた、周陀よ、こゝに、師は正等覺者なり。法は正しく說かれたる、善說せられたる、〔出離に〕導く、寂靜に至らしむる、正等覺者によりて說かれたるものなり。而して弟子は其の法に於て、法隨法を成就して住し、眞正を成就し、隨法の行あり、其の法を行ず。或人は彼に斯く云はん『友よ、そは汝の爲になり、そは汝の利益となる。汝の師は阿羅漢·正等覺者なり。法は正しく說かれたる、善說せられたる、〔出離に〕導く、寂靜に至らしむる、正等覺者によりて說かれたるものなり。而して汝は其の法に於て、法·隨法を成就して住し、眞正を成就し、隨法の行ありて、其の法

を行ず』と。是の如く、周陀よ、師がこゝに稱讚せられ、法がこゝに稱讚せられ、弟子
がこゝに斯く稱讚せらる。周陀よ、斯かる弟子に『具壽は、實に何によりて理趣を
行じ、理趣に努むるや』と言ふ者、並に誰にても稱讚する者、何事をも稱讚する者、及
び稱讚せられて、益々精進する者、彼等凡ては夥しき福を生ず。そは何の故なる
や。何となれば、周陀よ、この法と律とは、正しく說かれたる、善說せられたる、〔出離
に〕導く、寂靜に至らしむる、正等覺者によりて說かれたるものなればなり。

八　更に周陀よ、こゝに師は世に出興して、阿羅漢・正等覺者たり。而して法は、正
しく說かれたる、善說せられたる、〔出離に〕導く、寂靜に至らしむる、〔而して〕正等覺
者によりて說かれたるものなり。されど彼の弟子は妙法をよく知らしめられ
ず、また純粹圓滿にして、明白に說かれ、凡ての集心事となり、不思議を有せる梵行
122 を人中に說くことをせざるに、然も彼等の師は滅度す。周陀よ、斯かる師の滅す
る時、弟子に憂あり。そは何故なるや。何となれば『我等が師は世に出興して、阿
羅漢・正等覺者たり。法は正しく說かれたる、善說せられたる、〔出離に〕導く、寂靜に
至らしむる、正等覺者によりて說かれたるものなり。されど我等は妙法をよく

知らしめられず、また純粹圓滿にして・明白に説かれ・凡ての集心事となり・不思議を有せる梵行を、人中に説くことをせざるに、而も我等が師は滅し給へり』と。周陀よ斯かる師の滅するとき、弟子に憂あり。

九 更に周陀よ、こゝに師は世に出興して、阿羅漢・正等覺者たり。法は正しく説かれたる、善説せられたる、〔出離に〕導く、寂靜に至らしむる、正等覺者によりて説かれたるものなり。而して、彼の弟子は妙法をよく知らしめられ、また純粹圓滿にして明白に説かれ・凡ての集心事となり・不思議を有せる梵行を、人中に説くことをなす。而して彼等の師は滅度す。周陀よ、かゝる師の滅する時、弟子に憂あらず。そは何故なるや。何となれば『我等が師は世に出興して、阿羅漢・正等覺者たり。法は正しく説かれたる、善説せられたる、〔出離に〕導く、寂靜に至らしむる、正等覺者によりて説かれたるものなり。而して我等は妙法をよく知らしめられ、また純粹圓滿にして・明白に説かれ・凡ての集心事となり・不思議を有する梵行を、人中に説くことをなす。而して我等が師は滅度す』と。周陀よ、かゝる師の滅する
123 とき、弟子に憂あらず。

一〇　周陀よ、若しこれらの支を具備せる梵行あり。されど師は耆宿にして、早く出家し、道を行ひ、老境に達せる長老ならずば、是の如きは、これ梵行を支によりて成滿せるに非ざるなり。されど、周陀よ、これらの支を具備せる梵行あり。而して師は耆宿にして、早く出家し、道を行ひ、老境に達せる長老ならば、是の如きはこれ、梵行をその支を以て成滿せるなり。

一一　周陀よ、若しこれらの支を具備せる梵行あり。而して師は耆宿にして、早く出家し、道を行ひ、老境に達せる長老なり。されど彼の弟子長老比丘は、完全者・學行者・無畏者・涅槃に達せるものに非ず、實に妙法を宣說するに堪へず。實に生起せる異論をば、共法を以て制伏すること能はず、制伏して不思議を有する法を說くこと能はず。是の如きはこれ、梵行をその支を以て成滿せるに非ず。

一二　されど周陀よ、これらの支を具備せる梵行あり。而して師は耆宿にして、早く出家し、道を行ひ、老境に達せる長老なり。而して彼の弟子長老比丘は〔完全者・學行者・無畏者・涅槃に達せるものにして……不思議を有する法を說くことを得〕…乃至…されど彼の弟子中年比丘は〔……說くこと能はず〕…乃至…而して彼

の弟子中年比丘は〔……説くことを得〕…乃至…されど彼の弟子新比丘は〔……説
くこと能はず〕…乃至…而して彼の弟子新比丘は〔……説くことを得〕…乃至…さ
れど彼の弟子長老比丘尼は〔……説くこと能はず〕…乃至…而して彼の弟子長老
比丘尼は〔……説くことを得〕…乃至…されど彼の弟子中年比丘尼は〔……説くこ
124 と能はず〕…乃至…而して彼の弟子中年比丘尼は〔……説くことを得〕…乃至…さ
れど彼の弟子新比丘尼は〔……説くこと能はず〕…乃至…而して彼の弟子新比丘
尼は〔……説くことを得〕…乃至…されど彼の弟子優婆塞、在家白衣の梵行者は〔…
…説くこと能はず〕…乃至…而して彼の弟子優婆塞、在家白衣の梵行者は〔……説
くことを得〕…乃至…されど彼の弟子優婆塞、在家白衣の欲を縱にする者は〔……
説くこと能はず〕…乃至…而して彼の弟子優婆塞、在家白衣の欲を縱にする者は
〔……説くことを得〕…乃至…されど彼の弟子優婆夷、在家白衣の梵行者は〔……説
くこと得はず〕…乃至…而して彼の弟子優婆夷、在家白衣の梵行者は〔……説くこ
とを得〕…乃至…されど彼の弟子優婆夷、在家白衣の欲を縱にする者は〔……説く
こと能はず〕…乃至…而して彼の弟子優婆夷、在家白衣の欲を縱にする者は〔……

說くことを得〕…乃至…されど彼に梵行なく、富なく、繁榮なく、廣く知られたる名
聲なく、乃至、人々の中に善く說かれたることなく…乃至…而して彼に梵行あり、
富あり、繁榮あり、廣く知られたる名聲あり、乃至、人々の中に善く說かれたり。さ
れど最も勝れたる利養・稱揚に達せず。是の如きはこれ梵行を、その支を以て成
滿せるに非ず。

一三　而して周陀よ、これらの支を具備せる梵行あり。師は耆宿にして、早く出
家し、道を行ひ、老境に達したる長老なり。且つ彼の弟子長老比丘は完全者・學行
者…乃至…不思議を有する法を說き、且つ彼の弟子中年比丘は〔……〕、且つ彼の弟
子新比丘は〔……〕、且つ彼の弟子長老比丘尼は〔……〕、且つ彼の弟子中年比丘尼は〔…
…〕且つ彼の弟子新比丘尼は〔……〕、且つ彼の弟子優婆塞在家白衣の梵行者は〔……〕、
125 且つ彼の弟子優婆塞、在家白衣の欲を縱にする者は〔……〕、且つ彼の弟子優婆夷、在
家白衣の梵行者は〔……〕、且つ彼の弟子優婆夷、在家白衣の欲を縱にする者は〔…說
くことを得〕。且つ彼に梵行あり、富あり、繁榮あり、廣く知られたる名聲あり、乃至、
人々の中に善く說かれ、最も勝れたる利養・稱譽に達したり。是の如きは、これ梵

行をこの支をもて成滿せるなり。

一四　然るに周陀よ、我は今、世に師として出興し阿羅漢・正等覺者たり。而して法は正しく說かれ、善說せられ、〔出離に〕導き、寂靜に至らしめ、正等覺者によりて說かれたり。而して我が弟子は妙法をよく知らしめられ・また純粹圓滿にして・明白に說かれ・〔凡ての〕集心事となり・不思議を有する梵行を、人中に說けり。而して、周陀よ、我は今長老、耆宿にして、早く出家し、道を行ひ、老境に達せる師たり。

一五　又周陀よ、今、我に完全者・學行者・無畏者・涅槃に達せる弟子長老比丘あり、實に妙法を宣說し、實に生起せる異論をば共法を以て制伏し、制伏して不思議を有する法を說くことを得。而して周陀よ、我に完全者〔……〕弟子中年比丘あり。又周陀よ、今我に〔……〕弟子新比丘あり。又周陀よ、今我に〔……〕弟子長老比丘尼あり。又周陀よ、今我に〔……〕弟子中年比丘尼あり。又周陀よ、今我に〔……〕弟子新比丘尼あり。又周陀よ、今我に〔……〕弟子優婆塞、在家白衣の梵行者あり。又周陀よ、今我に〔……〕弟子優婆塞、在家白衣の、欲を縱にする者あり。又周陀よ、今我に〔……〕弟子優婆夷、在家白衣の梵行者あり。又周陀よ、今、我に〔……〕弟子優婆夷、在家白衣の、欲

126 を縦にする者：乃至：今又周陀よ、我に梵行あり、富あり、繁榮あり、廣く知られたる名聲あり、乃至、人々の中に善く説かれたり。

一六 されば周陀よ、今、諸の師、世に出興せるも、我は、周陀よ、我の得たる如き、是の如く最も勝れたる利養稱譽を得たる他の一師をすら見ず。而して周陀よ、今僧伽又は衆團は世に出興せるも、周陀よ、我は、比丘僧伽の得たるが如き、是の如く最も勝れたる利養、稱譽を得た他の一の僧伽をも見ざるなり。周陀よ、正しく説くとき『一切相を具足し、一切相を成滿し、減なく増なく、善く説かれたる、純粋圓滿なる梵行が明にせられたり』と云ふべきそれを、正説して、『一切相を具足し：乃至：梵行が明にせられたり』と云ふべし。周陀よ、げに欝頭藍弗（ウッダカラーマプッタ）は斯かる語を説けり。『見つゝ見ず』と。如何に見つゝ見ざるや。かの剃刄のよく磨かれたる面を見れども、その刄をば見ず。周陀よ、これを『見つゝ見ず』とは云ふ。周陀よ、更に此の欝頭藍弗によりて説かれたる事は、劣りて卑しく、凡夫的にして、聖に非ず、意味無くして、剃刄に就きて云ふが如し。而して周陀よ、正しく説くとき、『見つゝ見
127 ず』と云ふべきそれを、正説して『見つゝ見ず』と云ふべし。如何に見つゝ見ざるや。

是の如く一切相を具足し、一切相を成滿し、滅なく增なく、善く說かれたる、純粹圓滿なる梵行が、明にせられたりと。實に是の如く、これを見る。卽ちこはこゝに除かるべきなり、こは一層淸淨なるべしと。實に是の如くこれを見ず。こはこゝに執らるべきなり。こは成就せらるべしと。實に是の如くこれを見ず。是が『見つゝ見ず』とは謂はるゝなりと。さて周陀よ、正しく說くとき、『一切相を具足し…乃至…梵行が善く明にせられたり』と云ふべきそれを、正說して、『一切相を具足し、一切相を成滿し、滅なく增なく、善く說かれたる、純粹圓滿なる梵行が明にせられたり』と云ふべし。

一七　故にこゝに周陀よ、我によりて遍知せられたる法が、汝等に說かれたり。こゝに卽ち一切の者は共に來り共に集ひて、義理を以て義理を、字句を以て字句を宣說すべく、等誦すべく、諍ふべからず。乃ちこの梵行の、永續し久住せんことは、諸人の利益、諸人の安樂、世間への慈愍、諸の天と人との義利と利益と安樂との爲なり。周陀よ、如何なる法が、我によりて遍知せられて說かれ、そこに卽ち一切の者は共に來り、共に集ひて、義理を以て義理を、字句を以て字句を宣說すべく、等

誦すべく、諍ふべからず、乃ちこの梵行の永續し久住せんことは、かの諸人の利益、諸人の安樂、世間への慈愍、諸の天と人との義利と利益と安樂のためなる。卽ち四念處・四精勤・四神足・五根・五力・七覺支・聖八支道なり。周陀よ、この法は我の知解して說けるものなり。こゝに卽ち一切の者は共に來り、共に集ひて、義理を以て128義理を、字句をもて字句を宣說すべく、等誦すべく、諍ふべからず。卽ちこの梵行の永續し久住せんことは、かの諸人の利益、諸人の安樂、世間への慈愍、諸の天と人との義利と、利益と安樂の爲なり。

一八　汝、周陀よ、斯く和合し、喜びて、諍はざる者に學ばるべきなり。他の同梵行者ありて、僧伽に法を說かんに、若し汝等にして『此の具壽は、義理をば實に誤解し、字句をば誤說せり』と判ぜん時、それに贊成すべからず、諍ふべからず。贊成せず、諍はずして、汝等は是の如く彼に云ふべし。『友よ、此の義理に對しては、その字句か或はこの字句か、何れがより相應せるや。或は此の字句に對しては、その義理か、或はこの義理か、何れがより相應せるや』と。彼にして、若し『友よ、此の義理に對しては、その字句こそより相應したり。此の字句に對しては、その義理こそより

相應したり』と、斯く云はんに、彼を排斥すべからず、拒否すべからず。彼を排斥せず、拒否せずして、その義理、及び其の字句をば、注意して善く知らしむべきなり。

一九　更に又、周陀よ、同梵行者ありて、僧伽に法を説かんに、若し汝等にして、『此の具壽は、義理をば實に誤解せるも、字句をば正しく述べたり』と判ぜん時、それに贊
129 成すべからず、諍ふべからず。贊成せず、諍はずして、汝等は是の如く彼に云ふべし。『友よ、此の字句に對しては、その義理か或は此の義理か、何れがより相應せるや』と。彼にして若し、『友よ、此の字句に對しては、その義理こそより相應す』と、斯く云はんに、彼を排斥すべからず、拒否すべからず。排斥せず、拒否せずして、その義理を、注意して善く知らしむべきなり。

二〇　更に復、周陀よ、同梵行者ありて、僧伽に法を説かんに、若し汝等にして、『此の具壽は、義理をば實に正しく解したるも、字句をば誤り述べたり』と判ぜん時、それに贊成すべからず、諍ふべからず。贊成せず、諍はずして、是の如く、彼に云ふべし。『友よ、此の義理に對して、その字句か、或は此の字句か、何れがより相應せるや』と。彼にして若し『友よ、此の義理に對しては、その字句は、これよりも、より以上に相應

す』と、斯く云はんに、彼を排斥すべからず、拒否すべからず。彼を排斥せず、拒否せずして、その字句を、注意して善く知らしむべきなり。

二一　更に復、周陀よ、若し同梵行者ありて僧伽に法を説かんに、若し汝等にして、『此の具壽は義理を正しく解し、字句を正しく述べたり』と判ぜん時、彼に『善い哉』と言ひて賛成すべく、喜悦すべし。彼に『善い哉』と言ひて賛成し喜悦して、是の如く彼に云ふべし。『友よ、我が具壽の如き、是の如く義理に達し、字句に達したる同梵行者を見んことは、我等の利益なり、我等の利得たり』と。

二二　周陀よ、我は現法のみの有漏を制せんが爲に汝等に法を説くに非ず。[1] 周
130 陀よ、又來世のみの有漏を壞せんが爲に法を説くに非ず。周陀よ、我は現法の有
漏を制せんがため、來世の有漏を壞せんがために法を説くなり。されば こゝに、周陀よ、汝等の爲に我によりて制せられたる衣は、實にそは汝等の寒さを防がんが爲、暑さを防がんが爲、虻・蚊・風・熱・蛇觸を防がんが爲、且つは禪襠を覆はんがためなり。汝等のために我によりて制せられたる托鉢は、實にそは汝等の體を安定せんがため、養はんがため、傷害を防がんがため、梵行を修せんがためなり、『是の如

くして、予は故痛を滅し、新痛を生ぜしめず、又予の生涯は過無く且つ安穩ならん』と。汝等の爲に我によりて制せられたる居住は、實にそは寒さを防がんがため、暑さを防がんがため、虻・蚊・風・熱・蛇觸を防がんがため、且つは時候の厄を除き、閑居・獨坐を好むがためなり。汝等の爲に我によりて制せられたる疾病の資具・藥品・資糧は、實にそは生起せる苦惱の痛を防がんがため、離苦の目的のためなり。

二三 次に周陀よ、此の事有り。外道遊行者は是の如く云はん、『釋子沙門は安樂行に專心して住す』と。周陀よ、是の如く外道遊行者の云へるとき、斯く彼に答ふべし、『友よ、何れの安樂行なるや。安樂行にも亦甚しく多種多樣あり』と。周陀よ、こゝに四の安樂行ありて、劣りて卑しく、凡夫的にして、聖に非ず、義理に適はず、遠離に導かざる、離欲に導かざる、滅に導かざる、寂靜に導かざる、智に導かざる、覺に導かざる、涅槃に導かざるものなり。四とは何ぞや。周陀よ、こゝに或愚者は、生ける者を殺して、自ら樂しみ喜ぶ。これ第一の安樂行なり。更に復、周陀よ、こ
131 ゝに或者は、與へざるものを取りて自ら樂しみ喜ぶ。これ第二の安樂行なり。更に復、周陀よ、こゝに或者は妄語して自ら樂しみ喜ぶ。これ第三の安樂行なり。

更に復、周陀よ、こゝに或者は五欲の樂を滿足し具足して耽る。これ第四の安樂行なり。周陀よ、此等四の安樂行は、劣りて卑しく、凡夫的にして、聖に非ず、義理に適はず、遠離に導かざる、離欲に導かざる、滅に導かざる、寂靜に導かざる、智に導かざる、覺に導かざる、涅槃に導かざるものなり。

二四　次に周陀よ、此の事有り。外道遊行者は是の如く云はん、『釋子沙門は此等四の安樂行に專心して住するや』と。『然らず』と彼等に答ふべし。彼等は正語を語らず、然にあらざる、事實ならざることを以て汝を譏謗せるなり。周陀よ、こゝに四の安樂行ありて、必ず遠離に導き、離欲に導き、滅に導き、寂靜に導き、智に導き、覺に導き、涅槃に導くなり。四とは何ぞや。周陀よ、こゝに比丘は諸欲を離れ、不善法を離れ、有尋・有伺にして、而も離より生ぜる喜樂ある初禪に達して住す。これ第一の安樂行なり。更に復、周陀よ、比丘は尋伺を滅し、內心靜安となり、心の一境相を得て、無尋無伺にして、而も定より生ぜる喜樂ある第二禪に達して住す。これ第二の安樂行なり。更に復、周陀よ、比丘は喜を脫し…乃至…これ第三の安樂行なり。更に復、周陀よ、比丘は樂を捨離し…乃至…これ第四の安樂行なり。

132 周陀よ、此等四の安樂行は、必ず遠離に、離欲に、滅に、寂靜に、智に、覺に、涅槃に導くなり。

更に周陀よ、此の事有り。外道遊行者は是の如く云はん、『釋子沙門は此等四の安樂行に專心して住するや』と。『然り』と彼等に答ふべし。彼等は正語を語り、然にあらざる、事實ならざることを以て譏謗せざるなり。

二五　次に周陀よ、此の事有り。外道遊行者は是の如く云はん、『また友よ、此等四の安樂行に專心して住するものに、如何なる果[報]、如何なる利益か期待さるゝや』と。周陀よ、外道遊行者にして是の如く云はゞ、斯く彼に答ふべし。『友よ、此等四の安樂行に專心して住するものに、四果・四利益は期待せらる。四とは何ぞや。友よ、茲に三結を克く斷ぜる比丘は預流となり、惡趣に墮することなきものにして、正覺に向つて決定せるものなり。これ第一の果、第一の利益なり。更にまた友よ、三結を克く斷ぜる比丘は、一來となり、貪・瞋・癡を滅し、唯一度此の世間に來りて、苦の邊をなす。これ第二の果、第二の利益なり。更にまた友よ、五下分結を斷ぜる比丘は化生となり、彼處に般涅槃し、更に其處より此の世間に還らざる者な

り。これ第三の果、第三の利益なり。更にまた友よ、比丘は漏を盡し、無漏の心解脱・慧解脱を、現法中に自ら知解し實證して住す。これ第四の果、第四の利益なり。友よ、此等四の安樂行に專心して住するものに、この四果・四利益は期待せらる』と。

二六　次に周陀よ、此の事有り。外道遊行者は是の如く云ふべし、『釋子沙門は不
133 住法に住す』と。周陀よ、外道遊行者にして是の如く云はゞ、斯く彼に答ふべし。『友よ、かの知者・見者・阿羅漢・正等覺者たる世尊によりて、聲聞の法は、命數を盡して説かれ、知らしめられたり。友よ、譬へば因陀羅の柱、又は鐵の柱の深く根ざし、善く据はりて動かず震はざるが如し。是の如く、友よ、かの知者・見者・阿羅漢・正等覺者たる世尊によりて、聲聞の法は、命數を盡して説かれ、知らしめられたり。友よ、かの阿羅漢にして、諸漏已に盡き、〔梵行〕已に立ち、所作已に辨じ、重擔を捨て、利を獲、有の結使を盡し、正智解脱したる比丘は、九事をなすことを得じ。友よ、漏盡の比丘は、故（ことさら）に生物の生命を奪ふことを得じ。漏盡の比丘は、盜心を以て與へられざるものを取ることを得じ。漏盡の比丘は、邪婬を行ふことを得じ。漏盡の比丘は、正知にして妄語を語ることを得じ。漏盡の比丘は、譬へば前の在俗の場合に

於けるが如く、欲樂を享受せんがため、富を貯ふることを得じ。漏盡の比丘は、欲道を行くことを得じ。漏盡の比丘は、瞋道を行くことを得じ。漏盡の比丘は、癡道を行くことを得じ。漏盡の比丘は、怖道を行くことを得じ。友よ、かの阿羅漢にして諸漏已に盡き、〔梵行〕已に立ち、所作已に辨じ、重擔を捨て、利を獲、有の結使を盡し、正智解脱したる比丘は、この九事を爲すことを得じ』と。

二七 次に周陀よ、此の事有り。外道遊行者は、是の如く云はん、『沙門瞿曇は過去に關して無涯の智見を知らしむ。されど未來に關して無涯の智見を知らしめず、そは何にして、そは何故なるかを』と。かの外道遊行者は、無智に覆はれたる智見を以て、無智に覆はれたる智見を知らしめざるべからずと考ふるなり。譬へば愚者の無知なるが如し。周陀よ、過去につきて世尊は隨念の知を有す。彼は欲する限り凡てを憶念す。未來に關して世尊は、『こは最後の生なり、今や再生あることなし』と、菩提生の智を生ず。

二八 周陀よ、過去にして若し虛妄・不實にて義利に適はずんば、そを如來は說かず。周陀よ、過去にして若し眞にして實なるも、義利に適はずんば、そを如來は說

かず。周陀よ、過去にして若し眞にして實、義利に適はんには、如來は時を知りて、かの問に對して答ふ。周陀よ、未來にして若し虛妄・不實にて、義利に適はずんば、そを如來は說かず。周陀よ、未來にして若し眞にして實なるも、義利に適はずんば、そを亦如來は說かず。周陀よ、未來にして若し眞にして實、義利に適はんには、如來は時を知りて、かの問に對して答を略述す。周陀よ、現在にして若し虛妄・不實にて、義利に適はずんば、そを如來は說かず。周陀よ、現在にして若し眞にして

135
實なるも、義利に適はずんば、そを亦如來は說かず。周陀よ、現在にして若し眞にして實、義利に適はんには、如來は時を知りて、かの問に對して答ふ。是の如く、周陀よ、過去・未來・現在の法に於て、如來は時語者、實語者、義語者、法語者、律語者なり。故に如來と稱せらる。

二九　周陀よ、天と共なる、魔と共なる、梵と共なる世界、沙門・婆羅門と共なる衆生と、天と人との見聞覺知し、達し求め、意によりて思惟せる凡てを、如來は正覺したり。故に如來と稱せらる。周陀よ、如來は夜分に無上正等覺を正覺し、夜分に無餘涅槃界に於て般涅槃す。此の二の間に於て、說き語り敎示するところ、一切は

これ實にして他なし。故に如來と稱せらる。周陀よ、如來は所說の如く、その如く行ひ、所行の如く、その如く說く。是の如く如說に行じ、如行に說く。故に如來と稱せらる。天と共なる、魔と共なる、梵と共なる世界、沙門・婆羅門と共なる衆生と、天と人とを、如來は征服して、征服せられず。何物にてもあれ見る者たり、調御する者たり。故に如來と稱せらる。

三〇　次に復、周陀よ、此の事有り。外道遊行者は是の如く云ふべし、『友よ、如來は其の死後に存するや、而してこれのみ眞實にして他は虛なりや』と。周陀よ、外道遊行者にして是の如く云はゞ、斯く彼に答ふべし、『友よ、「如來はその死後に存す、
136 これのみ眞實にして他は虛なり」と、世尊は說きたまはず』と。

次に復、周陀よ、此の事有り。外道遊行者にして是の如く云ふべし、『友よ、如來はその死後に存せざるや、而してこれのみ眞實にして他は虛なりや』と。周陀よ、外道遊行者にして是の如く云はゞ、斯く彼に答ふべし、『友よ、又「如來はその死後に存せず、これのみ眞實にして他は虛なり」と、世尊は說きたまはず』と。

次に復、周陀よ、この事有り。外道遊行者にして是の如く云ふべし、『友よ、如來は

その死後に存し、又存せざるや…乃至…如來はその死後に存するにも非ず、又存せざるにも非ざるや、而してこれのみ眞實にして他は虛なりや』と。周陀よ、外道遊行者にして是の如く云はゞ斯く彼に答ふべし、『友よ、又「如來はその死後に存するにも非ず、又存せざるにも非ず、これのみ眞實にして他は虛なり」と、世尊は說きたまはず』と。

三一　次に又周陀よ、この事有り。外道遊行者にして是の如く云ふべし、『友よ、そは何故に沙門瞿曇によりて說かれざるや』と。周陀よ、外道遊行者にして是の如く云はゞ、斯く彼に答ふべし、『友よ、何となれば、こは義利に適はず、法に適はず、根本梵行ならず、遠離に導かず、離貪に導かず、滅に導かず、寂靜に導かず、智に導かず、覺に導かず、涅槃に導かず。故にそは世尊によりて說かれざるなり』と。

三二　次にまた周陀よ、此の事有り。外道遊行者にして是の如く云ふべし、『友よ、沙門瞿曇によりて何が說かれたるや』と。周陀よ、外道遊行者にして是の如く云はゞ、斯く彼に答ふべし、『友よ、「こは苦なり」と、世尊によりて說かれたり。友よ、「こは苦の集なり」と、世尊によりて說かれたり。友よ、「こは苦の滅なり」と、世尊により

て說かれたり。友よ、「こは苦の滅に導く道なり」と、世尊によりて說かれたり』と。

137 **三三** 次にまた、周陀よ、この事有り。外道遊行者にして是の如く云ふべし、『友よ、何故にそは沙門瞿曇によりて說かれたるや』と。周陀よ、外道遊行者にして是の如く云はゞ、斯く彼に答ふべし、『實に友よ、こは義利に適ひ、法に適ひ、根本梵行にして、決定して遠離に、離貪に、滅に、寂靜に、智に、覺に、涅槃に導けばなり。故にこは世尊によりて說かれたり』と。

三四 周陀よこれら過去に關する見の依處たる其の凡ては、汝等に說かるべきが如くに、予によりて說かれたり。而して汝等に說くべからざる如きは、❷如何ぞ予これを說かんや。周陀よ、これら未來に關する見の依處たる其の凡ては、汝等に說かるべきが如くに、予によりて說かれたり。而して汝等に說くべからざる如きは、如何ぞ予これを說かんや。

周陀よ、如何が、それら過去に關する見の依處たる其の凡ては、汝等に說かるべきが如くに、予によりて說かれたるや。❸

周陀よ、或沙門・婆羅門は斯かる說を有し、斯かる見を有す。『我（が）及び世間は常住

なり。これのみ眞實にして他は虛なり』と。

更に周陀よ、或沙門・婆羅門は斯かる說を有し、斯かる見を有す。

『我及び世間は無常なり…乃至…

我及び世間は常住にして無常なり…乃至…

我及び世間は常住にも非ず無常にも非ず…乃至…

我及び世間は自造なり…乃至…

我及び世間は他造なり…乃至…

我及び世間は自造にして他造なり…乃至…

我及び世間は自造にも非ず他造にも非ずして、忽然として生ぜり。これのみ眞實にして他は虛なり』と。

『樂と苦は常住なり。

樂と苦は無常なり。

樂と苦は常住にして無常なり。

樂と苦は常住にも非ず無常にも非ず。

樂と苦は自造なり。
樂と苦は他造なり。
樂と苦は自造にして他造なり。
樂と苦は自造にも非ず、他造にも非ず、忽然として生ぜり。これのみ眞實にして他は虚なり』と。

三五　玆に周陀よ、かの沙門・婆羅門は斯かる說を有し、斯かる見を有す。『我及び世間は常住なり。これのみ眞實にして他は虚なり』と。予彼等に近づきて是の如く云ふ、『友よ、我及び世間は常住なりと汝の云へる事は、そは眞なるや』と。若し彼等にして『これのみ眞實にして他は虚なり』と、斯く云はんに、予はそを許さず。そは何の故に。蓋し、周陀よ、異想を有する或衆生あるも、周陀よ、予は智に於て予と等しきものを見ず、況んや我より勝れたる者をや。而して予こそ此の事に於て勝れたる者なり、卽ち增上智を有すればなり。

三六　周陀よ、かの沙門・婆羅門は斯かる說を有し、斯かる見を有す。
『我及び世間は無常なり。

我及び世間は常住にして無常なり。
我及び世間は常住にも非ず、無常にも非ず。
我及び世間は自造なり。
我及び世間は他造なり。
我及び世間は自造にして他造なり。
我及び世間は自造にも非ず他造にも非ず、忽然として生ぜり。
樂と苦は常住なり。
樂と苦は無常なり。
樂と苦は常住にして無常なり。
樂と苦は常住にも非ず無常にも非ず。
樂と苦は自造なり。
樂と苦は他造なり。
樂と苦は自造にして他造なり。
樂と苦は自造にも非ず他造にも非ず、忽然として生ぜり。これのみ眞實にし

て他は虚なり』と。

予彼等に近づきて、是の如く云ふ、『友よ、樂と苦は自造にも非ず、他造にも非ず、忽然として生ぜりと汝の云へる事は、そは眞なるや』と。而して彼等にして、『これのみ眞實にして他は虚なり』と斯く云はんに、予はこれを許さず。そは何の故に。蓋し、周陀よ、異想を有する或衆生あるも、周陀よ、予は智に於て予と等しき者を見ず、況んや予より勝れたる者をや。而して予こそ此の事に於て、勝れたる者なり、卽ち増上智を有すればなり。これぞ周陀よ、過去に關する見の依處たるその凡てが、汝等に說くべきが如くに、予によりて說かれたるなり。而して汝等に說かるべからざる如きをば、如何ぞ予これを說かんや。

三七　周陀よ、如何が、それら未來に關する見の依處たる其の凡ては、汝等に說かるべきが如くに、予によりて說かれたるや。

周陀よ、或沙門婆羅門は、斯かる說を有し、斯かる見を有す。『我は有色にして、死後は無病なり。これのみ眞實にして他は虚なり』と。

更に周陀よ、或沙門・婆羅門は、斯かる說を有し、斯かる見を有す。

『我は無色にして……
我は有色にして、又無色なり……
我は有色にも非ず無色にも非ず……
我は有想なり……
我は無想なり……
我は有想にも非ず無想にも非ず……
我は滅せらるべく、壞せらるべく死後に在ることなし。これのみ眞實にして他は虛なり』と。

三八　玆に周陀よ、かの沙門・婆羅門は、斯かる說を有し、斯かる見を有す、『我は有色にして、死後は無病なり。これのみ眞實にして他は虛なり』と。予彼等に近づきて斯く云ふ、『友よ、我は有色にして、死後無病なりと汝の云へる事は、そは眞なるや』と。若し彼等にして、『これのみ眞實にして他は虛なり』と云はんに、予はそを許さず。何の故に。蓋し、周陀よ、玆に予は智に於て予と等しき者を見ず、況んや予より勝れたる者をや。而して周陀よ、予こそこの事に於て勝れたる者なり、卽ち

增上智を有すればなり。

三九　玆に周陀よ、かの沙門・婆羅門は、斯かる說を有し、斯かる見を有す。

『我は無色なり：乃至：

我は有色にして無色なり……

我は有色にも非ず無色にも非ず……

我は有想なり……

我は無想なり……

我は有想にも非ず、無想にも非ず……

我は滅せらるべく、壞せらるべく、死後に在ることなし。これのみ眞實にして他は虛なり』と。

予彼等に近づきて、是の如く云ふ、『友よ、我は滅せらるべく、壞せらるべく、死後に在ることなしと汝の云へる事は、そは眞實なるや』と。周陀よ、もし彼等にして、『これのみ眞實にして他は虛なり』と斯く云はんに、予はそを許さず。何の故に。玆に周陀よ、異想を有せる或衆生あるも、周陀よ、予は智に於て、予と等しき者を見ず、

況んや予より勝れたる者をや。而して予こそこの事に於て勝れたる者なり、卽ち增上智を有すればなり。周陀よ、これら未來に關する見の依處たる其の凡て
141 は、汝等に說かるべきが如くに、予によりて說かれたり。而して汝等に說くべからざる如きをば、如何ぞ予これを說かんや。

四〇　周陀よ、これら過去に關する見の依處、及び未來に關する見の依處を捨てんが爲、越えんが爲に、是の如く予は四念處を說きて知らしむ。四とは何ぞ。周陀よ、こゝに、比丘は身につきて身觀に住し、熱心にして正念正知あり、以て世間の貪と憂とを斷ぜよ。受につき……心につき……法につきて身觀に住し、熱心にして正念正知あり、以て世間の貪と憂とを斷ぜよ。周陀よ、これら過去に關する見の依處、及び未來に關する見の依處を捨てんが爲、越えんが爲に、是の如くこれらの四念處を、予は說きて知らしむるなり」と。

四一　其の時、具壽ウパヴーナ(阿難)は、世尊の後に立ちて世尊を扇げり。而して具壽ウパヴーナは世尊に次の如く白し上げぬ。

「稀有なり、世尊、未曾有なり、世尊。世尊、實に此の法門は清淨なり。世尊、實に此の法門は甚だ清淨なり。世尊、此の法門を何と名づくべきや」と。「然らば汝ウパヴーナよ、此の法門を清淨と名づけて、之を執持すべし」と。世尊はかく曰へり。具壽ウパヴーナは世尊の所說を聞いて歡喜せりと。

註❶底本には navaṁ とあれどシャム本に na vo とあるを採りて譯せり。
❷如何ぞ云く底本には kiṁ no ahaṁ …… とあるも no vo と訂正して讀むべし。
❸底本には次に「汝等に說かるべからざる如く」の一句あれど、今は異本に依りて、此の句を除く。下、第三七節の初の處に於ても亦然り。

三十二相経（さんじゅうにそうきょう） (Lakkhaṇa-sutta)

SC：Marks of a Great Man

三〇　三十二相經（ラッカナ・スッタンタ）

是の如く我聞く。

第一誦品

一　一時、佛は舍衞城（サーヴァッティー）〔外〕なる祇樹給孤獨園に住（とゞ）まりましぬ。その時、佛は比丘等に言葉を掛けて「比丘等よ」と曰（のたま）へば、彼の比丘等も此に應じて「世尊」と白し上げぬ。佛は次の如く語り給へり。

「比丘等よ、大人には斯く斯くの三十二の大人相あり、此を具足（そな）ふる大人の趣く處は、二つに〔定まりて〕其の他に有ることなし。若し在家に住まらんには、轉輪王となりて正法の王たり、四海の征御者にして其の國土は搖ぐなく、七寶を具足せん。七寶とは卽ち、輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶と〔而して〕主兵寶を第七となすものの是なり。其の王子は實に千人を超え、「何れも」勇健にして雄猛、よく敵軍を摧

伏せん。彼〔の王〕は此の地を海際に至る迄、刑杖も兵刄も用ひず、正法によりての
み〔よく〕統治して在るべし。然れども、若し彼〔の大人〕にして、在家より非家に出家
せんか、應供・等正覺者となり、此の世にありて覆障を取り去らん。

二　比丘等よ、而して大人の其等三十二の大人相――其を具足(そな)ふる大人の趣く
143 處は、二つに〔定まり〕てその他に有ることなし。若し在家に住まらんには、轉輪王
となり…乃至…若しまた彼にして、在家より非家に出家せんか、應供・等正覺者と
なり、此の世にありて覆障を取り去らん――とは何々なりや。

比丘等よ、實(げ)に大人は〔其の〕足安らかに立てり。大人が〔其の〕足安らかに立つは、
これ〔卽ち〕、比丘等よ、大人の〔有つ〕大人相なり。

比丘等よ、而してまた、大人の兩足の蹠(あなうら)には〔二〕輪生ず。千輻あり、輞(わ)あり、轂(こしき)あり、
一切の形完く具足(そな)はりて、❶其等〔一々〕の間の區分(けじめ)は判然とせり。大人の…乃至…
これ卽ち、比丘等よ、大人の〔有つ〕大人相なり。

比丘等よ、而してまた、大人は〔其の〕跟(くびす)廣長なり…乃至…
諸の指長し…乃至…

手足は柔軟なり…乃至…
手足に網縵あり…乃至…
踝(くるぶし)高し…乃至…
腨(はぎ)は伊泥(エーニ)延鹿の如し…乃至…
正立して跪(かが)まざるに、掌(たなごころ)は膝に觸れて[之を]摩す…乃至…
布もて覆ふべきもの(陽莖)は陰藏せらる…乃至…
色は黃金の如し。黃金に擬(まが)ふ皮膚を有す…乃至…
皮膚は細滑(きめこまか)なり、細滑なる皮膚なれば、塵垢の身上を汚すことなし…乃至…
毛は一つ一つなり。毛孔に一本づゝの身毛生ず…乃至…
毛は上靡す、上靡して生ぜる身毛は、紺青にして安闍那(アンヂャナ)❷の色をなし、耳璫の如く曲り、右旋す…乃至…
身肢は直(すぐ)なること梵天の如し…乃至
七箇の隆滿せる處あり…乃至…
上軀は獅子の如し…乃至…

兩肩の間充實す…乃至…

身の周(まはり)、尼拘律(ニグローダ)樹の如し。其の身〔の周〕は幾許なりやと言ふに、一尋なり、一尋は幾許なりやと言ふに、其の身〔の周〕なり…乃至…

兩肩は等しくして圓し…乃至…

最上の味感あり…乃至…

頷(あぎと)は獅子の如し…乃至…

四十齒あり…乃至…

齒は齊平なり…乃至…

齒に隙間なし…乃至…

齒牙極めて白し…乃至…

舌は大いなり…乃至…

❸梵音を有てり、迦陵頻伽(カラギーカ)の音色なす…乃至…

眼(まなこ)は紺碧なり…乃至…

眼睫(まつげ)は牝牛の如し…乃至…

眉間に毫生(ほそげ)ず、白色にして柔軟なること、兜羅綿(トゥーラ)に類す。大人の眉間に毫生じ、白色にして兜羅綿に類するは、これ〔卽ち〕比丘等よ、大人の〔有つ〕大人相なり。

比丘等よ、而してまた、大人は頭上に肉髻あり。大人の頭上に肉髻あるは、これ〔卽ち〕比丘等よ、大人の〔有つ〕大人相なり。

三　比丘等よ、大人には是の如き三十二の大人相あり。此を具足ふる大人の趣く處は、二つに〔定まり〕て、其の他に有ることとなし。若し在家に住まらんには、轉輪王となりて正法の王たり、四海の征御者にして、其の國土は搖ぐなく、七寶を具足せん。七寶とは、輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶と〔而して〕主兵寶を第七となすもの是なり。其の王子は實に千人を超え、〔何れも〕勇健にして雄猛、よく敵軍を摧伏せん。彼〔の王〕は此の地を海際に至る迄、刑杖も兵双も用ひず正法によりてのみ〔よく〕統治して在るべし。然れども若し彼〔の大人〕にして在家より非家に出家せんか、應供・等正覺者となり、此の世にありて覆障を取り去らん。

比丘等よ、大人の〔有つ〕是等三十二の大人相は外道の諸賢も〔亦〕よく此を憶持せり。然も彼等は『此の業を爲せるによりて此の相を獲得す』とは知らざるなり。

四　比丘等よ、如來は、嘗ての前(さき)の世、生れ存(なが)らひ住みにける其の昔(かみ)の日、人間に生れ來て、諸の善法を把握すること、堅固にして不動なりき。身・口・意の三つの善行に於ても、布施をなし戒律を守り布薩を行ずるに於ても〔或は〕父母に對する親愛、沙門・婆羅門に對する敬虔に於ても、同族の長老に對する恭敬に於ても、其の他、是の如き優れて善き諸法に於ても〔然かなりき〕。彼、此の業を遂行し蓄積し積聚し
146 增大したれば、身壞し命終せる後、善趣天界に再生す。彼は彼處に在りて、他の諸天に優越するもの十ありき。天界の壽命・美貌・安樂・名聲・威力・姿態・音聲・薰香・好味・觸接なり。彼や彼處に死沒して、此の世に生れ來ては、此の大人相を獲得す。〔謂く〕足安らかに立てり、④平らかに足を地に按じ、平らかに〔足を〕地より擧げ、其の蹠の凡てをもちて、平らかに地に接す。

五　彼は此の相を具足へたれば、若し在家に住まらんには、轉輪王となりて正法の王たり、四海の征御者にして其の國土は搖ぐなく、七寶を具足せん。七寶とは輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶と〔而して〕主兵寶を第七となすもの是なり。其の王子は實に千人を超え、〔何れも〕勇健にして雄猛、よく敵軍を摧伏せん。彼〔の王〕

は此の地を海際に至る迄、頑凶もなく、無惡無礙にして、繁榮豐饒、〔また〕安穩に、擾亂あることなく、刑杖も兵刄も用ひず、正法によりてのみ統治して在るべし。王となりて何をか得るや。人間たる如何なる怨敵、如何なる仇敵によりても、妨げ抗はるゝことなし。王となりては、是の如きを得るなり。

然れども、若し彼にして在家より非家に出家せんか、應供・等正覺者となり、此の世にありて覆障を取り去らん。佛陀となりて何をか得るや。内外の〔如何なる〕怨敵仇敵にも、或は貪慾・瞋恚・愚癡、或は沙門・婆羅門・天人・魔〔王〕・梵天〔等〕、此の世界に
147 於ける如何なるものにも、妨げ抗はるゝことなし。佛陀となりては、是の如きを得るなり」。

六　佛は斯かる意味を說き給ふ。

それに就きて、こは言はるゝなり。

諦〔の言葉〕を語り善き行爲なして、〔諸根〕を攝し身を守り

而も〔三業に〕淸淨に、戒を守り布薩を行ひ

布施をなし、〔有情を〕害するなく、粗暴に非ず——〔是の如きに〕心樂しみて

是の如きを堅く把り持ちて、悉く行ひ遂げぬ。
彼は此の業もて天上に昇り
安樂と戯樂とを享受せり。
彼處より死沒して此の世に再來しては、
平らなる兩足もてよく❺戴持するもの――大地に觸るゝなり。
占相者群(つど)ひ來りて〔其を〕解き明すらく、
「平らかに安立する者に搖ぐことのあるべきや。
在家ならむも、はた、また出家ならむも
其の相〔こそ〕は斯かる義を明かすなれ。
在家に住まらば敵の妨ぐるなく、
他の凡てに打克ちて敵を破摧し〔盡さ〕む。
彼の業の果報の致す處
何人かよく抗(てむか)ふ者あらむ。
若しまた斯かる人、出家者とならば

出離を望み、出離を樂しみて、心ひたぶるに
斯かる優れし、人中の最尊は〔再生すべく〕ゆめ胎内に宿らじ、
如何とならば、實にそは斯かる人の常法なれば」。

148

七 「比丘等よ、如來は嘗ての前の世、生れ存らひ住みにける其の昔の日、人間に生れ來て、數多の人の安樂の爲に驚怖・懼怖を除き、正しき守護・防衞を樹立し、次第ある布施を行じたり。彼、此の業を遂行し蓄積し積聚し增大したれば、身壞し命終せる後は善趣天界に再生す…乃至…彼や彼處に死沒して、此の世に生れ來ては、此の大人相を獲得す。〔謂く〕兩足の蹠には〔二〕輪生じ、千輻あり、輞あり、轂あり、一切の形完く具足はりて、其等〔一々〕の間の區分は判然とせり。

八 彼、此の相を具足へたれば、若し在家に住まらんには轉輪王となりて…乃至…王となりて何をか得るや。數多の圍繞者あり。彼には婆羅門と居士、市民と村人、主財官と司政官、衞兵、門衞、顧問官、廷臣、副王、富豪、王子〔と言ふ如き〕數多の圍繞者あり。王となりては、是の如きを得るなり。

然れども若し彼にして、在家より非家に出家せんか、應供・等正覺者となり、此の

149

世にありて覆障を取り去らん。佛陀となりて何をか得るや。數多の圍繞者あり。彼には比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天人・人間・阿修羅・龍蛇・乾闥婆〔と言ふ如き〕數多の圍繞者あり。佛陀となりては、是の如きを得るなり」。

佛は斯かる意味を説き給ふ。

九 それに就きて、こは言はるゝなり。

嘗て往昔（そのかみ）、幾度かの生にありて
人間に生れ、數多の者のために安樂を齎らせり。
驚怖・懼怖を除き去り
防衛・守護に〔甚（いた）く〕勵みぬ。
彼、この業によりて天上に昇り
安樂と戲樂とを享受せり。
彼處より死沒して此の世に再來しては
兩足〔の蹠〕に二輪あるを見る。
輞（わ）等しく輻（や）は一千

占相者群ひ來りて〔そを〕解き明すらく、
王子の百の功德を具へたる相を見て、
彼や圍繞者に仕へらるゝ者、〔よく〕敵を摧伏する人たらむ。
如何にとならば〔二〕輪あり、等しき輞（わ）を具足へたれば。
是の如き人、若し出家せずとせむか、
輪〔寶〕を轉ぜしめて〔此の〕地を統ぶるべし。
此の時、彼に率ゐらるゝは刹帝利（カッティヤ）の生れの者、
大いなる名聲ある〔彼の王〕に共に扈（したが）はむ。
若しまた是の如き人、出家者とならば、
出離を望み、出離を樂しみて、心ひたぶるに
天人も人間も、阿修羅、帝釋、羅刹も
乾闥婆も龍蛇も、飛鳥も走獸も
無上にして天人・人間の供養しておかざる
大いなる名聲ある彼〔の佛〕に共に隨はむ。

一〇　「比丘等よ、如來は嘗ての前(さき)の世、生れ存(なが)らひ住みにける其の昔(かみ)の日、人間に生れ來て、殺生を廢(や)め、つゆ殺生することなく、刑杖も兵刄も用ひず、廉恥にして愛憫、凡ゆる生物を利益し憐愍したり。彼、此の業を遂行し蓄積し積聚し増大したれば、身壞し命終せる後は善趣天界に再生す…乃至…彼や彼處に死沒して此の世に生れ來ては、此の三つの大人相を獲得す。〔謂く〕跟(くびす)廣長なると、諸指の長きと、
150 梵天の如く身肢の直(すぐ)なると〔の三つ〕なり。

一一　彼、此等の相を具足へたれば、若し在家に住まらんには、轉輪王となりて…乃至…王となりて何をか得るや。長壽よく存らへん。長き壽命を保ち、生ける限りは人間たる如何なる怨敵にも仇敵にも、能く生命を奪はるゝことなし。王となりては是の如きを得るなり…乃至…。佛陀となりて何をか得るや。長壽よく存(なが)らへん。長き壽命を保ち、生ける限りは人間たる如何なる怨敵にも仇敵にも、沙門・婆羅門・天人・魔〔王〕・梵天〔等〕、此の世界に於ける如何なるものにも、能く生命を奪はるゝことなし。佛陀となりては是の如きを得るなり」。

佛は斯かる意味を說き給ふ。

一二
それに就きて、こは言はるゝなり。
己自から死と滅とを懼怖するを知りて
　他のものをつゆ殺さざりき。
此の善行によりて天上に昇り
　善く爲し遂げし〔其の業の〕果報を享けぬ。
〔彼處に〕死沒して此の世に再來しては、
　三つの相を獲得す。
❻廣くして長き跟、
　梵天のごと直(すぐ)なる、輝ける、正しく成れる身肢、
美はしき腕は若やぎ、〔身に〕著くこと堅くして正しく成れる、
　〔更に〕其の指は柔軟なる、
〔此の〕三つの優れたる〔大〕人相より檢(かんが)へ見るに、
　其の長きは王子の齡(よはひ)永らへむことを示すなり。
若し彼、在家者ならば、長らへ活きむ。

若し〔一たび〕其處より出家せむか、更にも長く活きぬべし。

神通の力、禪定の力あれば、

是の如、其は長壽を得べき標なり。

一三　「比丘等よ、如來は嘗ての前の世、生れ存らひ住みにける其の昔の日、人間に生れ來て、豐かなる美味なる種々の食物——嚙むべきもの、食ふべきもの、味はふべきもの、舐むべきもの——や種々の飮物の施與者なりき。彼、此の業を遂行し蓄積し積聚し增大したれば、身壞し命終せる後は善趣天界に再生す…乃至…。彼や彼處に死沒して、此の世に生れ來ては、此の大人相を獲得す。〔謂く〕、七箇の隆滿せる處あり。〔卽ち〕、兩手に隆滿あり、兩足に隆滿あり、兩肩に隆滿あり、項に隆滿あり。

一四　彼、この相を具足へたれば、若し在家に住まらんには轉輪王となりて…乃至…。王となりて何をか得るや。豐かなる美味なる種々の食物——嚙むべきもの、食ふべきもの、味はふべきもの、舐むべきもの——や種々の飮物を受くる者たり。王となりては是の如きを得るなり…乃至…。佛陀となりて何をか得る

や。豐かなる美味なる種々の食物――嚙むべきもの、食ふべきもの、味はふべきもの、舐むべきもの――や種々の飮物を受くる者たり。佛陀となりては是の如きを得るなり」。

152

佛は斯かる意味を說き給ふ。

一五 それに就きて、こは言はるゝなり。

嚙むべき、食ふべき、また舐むべき味はふべきものを
最上のよき味ある物を施與する人なりき。
其の行のよく爲し遂げられたれば、
彼の人、歡喜〔天の世界〕にありて長く樂しみ、
此の世に〔生れ來り〕ては七處の隆滿を得て、
而も〔また〕手足の柔軟なるを見る。
觀相の諸賢は言へらく
「〔そは〕嚙むべき食ふべき味はふべきものを受くることゝならむ。
家に住まる者にありては、其のこと明かなり難しといふも、

出家しては嚙むべき食ふべき味はふべきもの丶受者となり、
最高の位を獲得して
なべて在家の束縛を斷絶せむ」となり。

一六「比丘等よ、如來は嘗ての前(さき)の世、生れ存らひ住みにける其の昔(かみ)の日、人間に生れ來て、四攝事もて〔よく〕人を攝したり、布施により愛語により利行により同事によりてなり。彼、此の業を遂行し蓄積し積聚し增大したれば、身壞し命終せる後は善趣天界に再生す。彼や彼處に死沒して、此の世に生れ來ては、此の二つの大人相を獲得す。〔謂く〕、手足の柔軟なると手足に網縵あると〔の二つ〕なり。

一七 彼、此等の相を具足へたれば、若し在家に住まらんには轉輪王となりて…乃至…。王となりて何をか得るや。隨從者よく攝せらる丶なり。婆羅門も居士も、市民も村人も、主財官も司政官も、衞兵・門衞・顧問官・廷臣・副王・富豪・王子〔何れも〕よく彼に攝せらる。王となりては、是の如きを得るなり…乃至…。佛陀となりて何をか得るや。隨從者よく攝せらる丶なり。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天人・人間・阿修羅・龍蛇・乾闥婆、〔何れも〕よく彼に攝せらる。佛陀となりては是の如きを

得るなり」。

一八　佛は斯かる意味を説き給ふ。
それに就きて、こは言はるゝなり。

布施と而して利行とを
親語と而して同事とを
〔他にも〕爲さしめ〔自らも〕行ひて、數多の者の爲、よく〔彼等を〕攝し
德を輕しめず、爲に天界に昇る。
〔彼處に〕死沒して此の世に再來しては、
手足の柔軟なると、〔其の〕網縵あるとを
若く幼き王子は得たるなり。
〔そは〕極めて輝き美はしく、眺むるに厭くことなし。
其[7]の隨從者極めて從順にして、
此[8]の地に住しては優れてよく〔人を〕攝す。
愛語をなし利益と安樂とを求め

甚く美はしき諸德を行ず。
而も一切の愛欲せらるゝ富財を捨離せむか、
勝者となりて數多の者に法話を語るべし。
❾言葉を償ふ者——〔佛陀〕——に信仰を有つ諸人は
大小種々の法を聽きて之を行はむ。

一九　「比丘等よ、如來は嘗ての前の世、生れ存らひ住みにける其の昔の日、人間に生れ來て、數多の人の爲に、義あり法ある言葉を語りぬ。數多の人に〔之を〕解き明かし、諸々の生き物に利益を齎らすもの、法の施者なりき。彼、この業を遂行し蓄積し…乃至…。彼や彼處に死沒して、此の世に生れ來ては、此の二つの大人相を獲得す。〔謂く〕、踝の高きと、身毛の上靡すると〔の二つ〕なり。

二〇　彼、此等の相を具足へたれば、若し在家に住まらんには轉輪王となりて…乃至…。王となりて何をか得るや。財物を愛樂する者の中にありて、最も優れ最も勝り、第一者たり最上者たり、最も秀でたる者なり。王となりては是の如きを得るなり…乃至…。佛陀となりて何をか得るや。一切有情の中にありて、最

も優れ最も勝り、第一者たり最上者たり、最も秀でたる者なり。佛陀となりては、
是の如きを得るなり」。

佛は斯かる意味を説き給ふ。

155

二一 それに就きて、こは言はるゝなり。

嘗て義あり法ある語を發して
數多の人に說き明かしぬ。
命(いのち)あるものに利益と安樂とを齎らす者、
法施を行ひて吝(やぶさ)かならず、
彼やこの行をよく爲し遂げたれば、
善趣に到り、彼處にありて幸なりき。
而して此の世に生れ來りては二つの相の
優れて安らけく具足(そな)ふるを見る。
⑩身毛の上に靡けるを自からに有すると
足の踝(くるぶし)安住して

肉と血とに覆はれ、皮膚は伸びて〔皺あることなく〕
しかもまた其の上には輝ける色あるとなりき。
若し家に住まり住まむか、斯かる人
財物(とみ)を愛樂する者の中にありて
最も優れたり、〔況んや〕彼に過ぐる者に於てをや。
閻浮提中を征御して行かむ。
而して出家たるならば、其の最高の努力者は
一切の有情の中にありて最も優れ、
彼より勝る者は見えず。
なべての世界を征御して住せむ。

二二　「比丘等よ、如來は嘗ての前(さき)の世、生れ存らひ住みにける其の昔(かみ)の日、人間に生れ來て、或(ある)は技術を或は世學を、行を業(わざ)を愼みて敎ふる者なりき。『如何にせば人々、我によりて速かに學び、速かに理解し、速かに徹底して、長く疲れざるべきや』と。彼、この業を遂行し蓄積し…乃至…。彼や彼處に死沒して、此の世に生れ來

ては、此の大人相を獲得す。〔謂く〕、腨(はぎ)は伊泥延(エーニ)鹿の如し。

二三　彼、此の相を具足へたれば、若し在家に住(とゞ)まらんには轉輪王たり。王となりて何をか得るや。此等王に適(ふさ)はしきもの、王に屬するもの、王の樂しむもの、王の好むもの　ゝ〔世に〕ある限りは、〔凡て〕此を速かに獲得す。王となりては是の如きを得るなり…乃至…。佛陀となりて何をか得るや。此等沙門に適はしきもの、沙門に屬するもの、沙門の樂しむもの、沙門の好むもの　ゝ〔世に〕ある限りは、〔凡て〕此を速かに獲得す。佛陀となりては是の如きを得るなり」。

佛は斯かる意味を說き給ふ。

二四　それに就きて、こは言はるゝなり。

諸種(あまた)の技術、世學、〔或は〕行、業(わざ)に就きて、
　如何にして人、速かに理解し得るやと〔其を〕冀ひ
何人の害にも赴けるなく、
　敎ふること速かにして長く疲れず。
善と樂とを齎らすこの行を成就して、

美はしく安立(あんりふ)したる膙(はぎ)は得られたり。
圓く〔縮れ〕、正しく成りて順次に生え出でし
上靡せる毛あり、〔また〕細滑(きめこまか)なる皮膚擴がりて
〔そは〕伊泥鹿(エーニ)の如き膙(はぎ)なりと、斯かる男(をのこ)に就きて諸人(もろびと)は語る。
〔更に〕云ふならく、此の世にありて速かに〔事を〕成就する相なりと。
毛の一つ一つ生ふる〔膙を有つ〕なれば、〔其の〕望むがまゝに、
〔若しは〕出家せざるも、速かに此の世にありて〔成就を〕得む。
若しまた出家せむか、是の如き人
出離を望み、出離を樂しみて心ひたぶるに、
適はしき者には適はしきものゝあるがごと、
最高の出離者は速かに其〔の成就〕を見出さむ。

二五　「比丘等よ、如來は嘗ての前(さき)の世、生れ存(なが)らひ住みにける其の昔(かみ)の日、人間に生れ來て、或(ある)は沙門或は婆羅門の許に近づき行きて問ひ質(たゞ)すらく、『御身よ、何をか善となし、何をか不善となすや、何をか罪ありとなし、何をか罪なしと云ふや。何

にかこと従ひ、何にかこと従はざるべきや。何をかわれ行ひて、長く利なく樂なきこと丶なるべきや。或はまた何をかわれ行ひて、長く利あり樂あること丶なるべきや」と。彼、この業を遂行し蓄積し…乃至…。彼や彼處に死沒して、此の世に生れ來ては、此の大人相を獲得す。〔謂く〕、皮膚は細滑（きめこまか）なり、細滑なる皮膚なれば
158 塵垢の身上を汚（けが）すことなし。

二六 彼、この相を具足へたれば、若し在家に住まらんには轉輪王となりて…乃至…。王となりて何をか得るや。大智あり、財物（とみ）を愛樂する者の、一人として彼に竝ぶ者なく、〔況んや〕彼に過ぐる者をや。王となりては是の如きを得るなり…乃至…。佛陀となりて何をか得るや。大智あり。廣き智慧、敏（はしこ）き智慧、聰（さと）き智慧、鋭き智慧、徹する智慧なり。一切の有情の一人として、彼に竝ぶ者なく、〔況んや〕彼に過ぐる者をや。佛陀となりては是の如きを得るなり」。

佛は斯かる意味を説き給ふ。

二七 それに就きて、こは言はる丶なり。

嘗ての往昔（むかし）、幾度かの生にありて、

159

彼は正しき知識を求むるの人なりき。
問ひ質し、明らけく聽問せむことを望みて出家者の許に近づき、
義の差別あるを知りて、其の鮮明に耳傾けぬ。
〔彼や〕智慧を獲むとの〔此の〕業を果したれば、
人間に生れ來ては〔其の〕皮膚はきめ細かなり。
出生の相を占ふ諸賢は解き明すらく、
「〔彼は〕微細の義を確知するなり。
是の如き人、若し出家せざるとせむか、
輪寶を轉ぜしめて、地上を統御せむ。
義を敎へ義を把握するに
彼と竝ぶ者は見えず、〔況んや〕優るゝ者に於てをや。
若し出家者とならむには、斯かる人
出離を望み、出離を樂しみて、心ひたぶるに
智慧の最高にして無上なるを獲得し、

菩提に到れる、優れて大いなる智者たらむ」。

二八　「比丘等よ、如來は嘗ての前の世、生れ存らひ住みにける其の昔の日、人間に生れ來て、無瞋にして無惱〔の心〕に滿ちぬ。多く言はるれど、怒ることなく、心擾ぐなく、亂るゝなく〔また〕頑なることなし。忿怒も瞋恚も、はたまた不滿も色に出ださず、きめ細かなる敷物、さわり柔かき著物、或は維細やけき麻・木綿・絹の類を施與する人なりき。彼、この業を…乃至…。彼や彼處に死沒して、此の世に生れ來ては、此の大人相を獲得す。〔謂く〕色は黃金の如く、黃金に擬ふ皮膚を有す。

二九　彼、この相を具足へたれば、若し在家に住まらんには轉輪王たり。王となりて何をか得るや。きめ細かなる敷物、さわり柔かき著物、〔或は〕維細やけき麻・木綿・絹の類を得る人にてあるべし。王となりては、是の如きを得るなり…乃至…。佛陀となりて何をか得るや。きめ細かなる敷物、さはり柔かき著物、〔或は〕維細やけき麻・木綿・絹の類を得る人にてあるべし。佛陀となりては、是の如きを得るなり」。

佛は斯かる意味を説き給ふ。

160

三〇 それに就きて、こは言はるゝなり。

無瞋の行を果し、〔更に〕また
　布施を、きめ細やかに觸り娯しき布を施與したり。
嘗て在りし世のこと、確乎として〔盛んに〕布施を行ひぬ。
　天の大地に雨(あめふ)らすがごと
そを爲し遂げて、此處に命終り、天上に再生す。
　爲し遂げし果報によりて
此の世に生れ來ては、其の體黄金に擬ひ、
　帝釋天の如く強健にして優美に、
家に住まりて主家を望まずば
　彼の男(をのこ)、此の地を〔なべて〕統御せむ。
統べ從へては優れてよき優美なる衣を得べし。
　廣大にして纖細、觸感いとめでたき〔衣なり〕。
若し彼にして非家に赴かむか、

衣を、著物を、最上の著物を得るならむ。

〔業の〕持者たる彼、嘗てなせることの果を受くるなり。

爲せることの〔果の〕消ゆるは――〔其の〕理(ことわり)あることとなし。

三一　〔比丘等よ、如來は嘗ての前(さき)の世、生れ存らひ住みにける其の昔(かみ)の日、人間に生れ來て、長く行方知れず、いと長きに亘りて姿見えざる親戚·朋友·知己·同輩を〔搜し索めて〕伴ひ歸りけり。子には母を、母には子を伴ひ歸り、子には父を、父には子を伴ひ歸り、兄弟には兄弟を、姉妹には兄弟を、兄弟には姉妹を伴ひ歸り、〔斯くは〕遭逢の仲介なしして自から樂しみぬ。彼、この業を遂行し…乃至…彼や彼處に死沒して、此の世に生れ來ては、此の大人相を獲得す。〔謂く〕、布もて覆ふべきもの(陽莖)は陰藏せらる。

三二　彼、この相を具足へたれば、若し在家に住まらんには轉輪王たり。王となりて何をか得るや。多子なり。實に其の王子は千人を越え、〔何れも〕強健にして雄猛に生ひ立ち、よく敵軍を摧伏せん。王となりては是の如きを得るなり…乃至…佛陀となりて何をか得るや。多子なり。實に其の弟子は數千に及び〔何れ

を得るなり」。

も]強健にして雄猛に生ひ立ち、能く敵軍を摧伏せん。佛陀となりては是の如き

佛は斯かる意味を說き給ふ。

三三　それに就きて、こは言はるゝなり。

過ぎにし前(さき)の世の幾度かの生れにありて、

長く行方知れず、いと長きに亘りて姿見えざりし

親戚・知己・同輩を伴ひ來り、

[斯かる]遭逢の仲介なして自から樂しみぬ。

彼、この業によりて天上に昇り

安樂と戲樂とを享けたり。

彼處に死沒して此の世に再來しては、

布もて覆ふべきものゝ陰藏せられたるを見出しぬ。

是の如き人數多の子あり。

自から生める[其の子等は]千人を超え、

〔何れ劣らぬ〕強健と雄猛、能く怨敵を苦しめむも、
在家者には歡喜を生ぜしめ、愛好の語(ことば)を語るべし。
〔然もまた〕威儀とゝのへる出家者とならば更に多くの子ありて
〔何れも〕其の行ひ、言葉に從はむ。
在家ならむもはたまた出家たらむも、
此の相こそは〔實に〕斯る意味を顯はすものなれ。

第二誦品

一　「比丘等よ、如來は嘗ての前(さき)の世、生れ存(なが)らひ住みにける其の昔(かみ)の日、人間に生れ來て、大衆の群がれるを觀察しつゝ熟慮したり。自己を知り人を知りて、人間の差別を知り、夫々に就きて「彼のものは是に相應す、彼のものは是に相應す」とて、人間差別を行ひぬ。彼、この業を遂行し云々…乃至…彼や彼處に死沒して、此の世に生れ來ては、此の二つの大人相を獲得す。〔謂く〕、身の圍、尼拘律樹(ニグローダ)の如きと、〔正〕立して跪(かゞ)まざるに、掌(たなうら)は膝に觸れて〔之を〕摩するとの〔二〕なり。

二　彼、此等の相を具足へたれば、若し在家に住まらんには轉輪王となりて…乃163至…。王となりて何をか得るや。富者たり。大富あり、多財あり、數多の金銀、數多の財物、數多の金錢・穀物あり、豐富にして藏に充ち充ちぬ。王となりては是の如きを得るなり…乃至…。佛陀となりて何をか得るや。富者たり。大富あり、多財あり、彼の富財とは卽ち、信・戒・慚・愧・〔多〕聞・施與・智慧の富是なり。佛陀となりては是の如きを得るなり」。

佛は斯かる意味を說き給ふ。

三　それに就きて、こは言はるゝなり。

大衆の群れるを觀察しつつ
〔是を〕量り〔是を〕調べて〔其の差別を〕思惟し、
「彼のものは是に相應す」とて夫々に就き
嘗て前(さき)の世、人分別を行ひぬ。
而して實に彼や〔正〕立して跪(かゞ)まざるに、
兩手もて膝に觸るる〔相を得たり〕」。

〔更に又〕其の身の圍り、地より生ふる樹〔幹〕の如き〔相〕もあり。
其の業をよく爲し遂げし果報の齎らすところ。
諸種の占相に精しき多くの
いと賢き人の解き明すらく、
「家ある者に應はしき數多のものを
此の若く幼き王子は得るならむ。
此の世にありて王たらば世俗の娯しみ、
家ある者に應はしき數多のものの具足ふべし。
而も一切の世俗の娯しみを捨て去らば、
無上最高の、最善の財物を得るならむ」。

四　「比丘等よ、如來は嘗ての前の世、生れ存らひ住みにける其の昔の日、人間に生れ來て、多數の人の益あらんことを望みたり。〔彼等の〕利益を、慰安を、至樂を望みて〔思へらく〕、「如何にせば彼等、我によりて信を増益し、〔多〕聞を施與を正法を智慧を増益すべきや、金錢・穀物を、耕田・宅地を、二足・四足の〔家〕畜を増益すべきや、妻子を

奴僕を親戚を朋友を眷族を増益すべきや」と。彼、この業を遂行し蓄積し積聚し増大したれば、身壞し命終せる後は善趣天界に再生す…乃至…彼や彼處に死歿して、此の世に生れ來ては、此の三つの大人相を獲得す。〔謂く〕、上軀は獅子の如きと、兩肩の間充實せると、兩肩の等しくして圓きと〔の三〕なり。

165 **五**　彼、此等の相を具足へたれば、若し在家に住まらんには轉輪王たり。王となりて何をか得るや。滅衰することなし。金錢・穀物も、耕田・宅地も、二足・四足の〔家〕畜も、妻子・奴僕・親戚・朋友・眷族も滅衰することなく、——一切の成就に於て滅衰せざるなり。王となりては是の如きを得るなり…乃至…。佛陀となりて何をか得るや。滅衰することなし。信に於ても戒に於ても、〔多〕聞・施與・智慧に於ても滅衰することなく、——一切の成就に於て滅衰せざるなり。佛陀となりては是の如きを得るなり」。

六　佛は斯かる意味を説き給ふ。

それに就きて、こは言はるゝなり。

信・戒・〔多〕聞・智慧・施與・〔正〕法

〔其の他〕數多の善事にもあれ、
金錢・穀物・耕田・宅地
妻子・家畜にもあれ、
親戚・朋友・眷族に於ても、
はた力強さ・美しさ・安らかさに於ても等しく、
如何にせば他の人々、〔其等が〕滅衰せられざる可きやと、其を希ひ、
更に〔他の人の〕利益の成就せんことを甚(いた)く望みたり。
〔斯くて〕獅子の如き上軀ありて安住し、
兩肩は等しくして圓く、〔更に〕兩肩の間充實す。
〔そは〕嘗て前(さき)の世、よく爲し遂げし
滅することなき業に[11]基づける相——前徴〔を示す相〕なり。
家にあらば穀物・金錢・妻子
家畜の類(たぐひ)増益せむ。
無物の出家者とならば、無上の菩提

⑫滅衰することなき法性を得るならむ。

166 **七**　「比丘等よ、如來は嘗ての前(さき)の世、生れ存らひ住みにける其の昔(かみ)の日、人間に生れ來て、手によるも石によるも、或はまた杖、刀によるも有情を害(そこな)はざる者に屬したり。彼、この業を遂行し蓄積し積聚し増大したれば、身壞し命終せる後は善趣天界に再生す…乃至…彼や彼處に死沒して、此の世に生れ來ては、此の大人相を獲得す。〔謂く〕、最上の味感あり――⑬咽喉に味感官生じ、凡て〔味覺を〕尖(さき)立てるものに傳ふ。

八　彼、この相を具足へたれば、若し在家に住まらんには轉輪王たり。王となりて何をか得るや。無病なり。患ひなく、消化を萬遍なくとり行ふ〔よき〕消化器官を具足(そな)へ、〔體溫は〕冷きにも失せず、熯きにも偏せず。王となりては是の如きを得るなり…乃至…。佛陀となりては何をか得るや。無病なり。患ひなく、消化を萬遍なく取り行ふ〔よき〕消化器官を具足へ、〔體溫は〕冷きにも失せず、熯きにも偏せず、中庸を得、努力をなすに撓むことなし。佛陀となりては是の如きを得るなり」。

佛は斯かる意味を説き給ふ。

九

それに就きて、こは言はるゝなり。

手にもあれ、杖・石にもあれ、
或は刀にもあれ、更にまた鏖殺にもあれ、
縲縛・脅迫にもあれ、生ける物を
〔ゆめ〕害(そこなは)ず、惱ますことなかりき。
實に彼や其の爲に善趣に到りて安樂の果報を享け、
業の〔果なる〕多くの樂しみを見出しぬ。
此の世に生れ來りては味感官の
〔喉頭に〕安住せるを成就し、最上の味感あり。
而して優れて賢く注意深き人人
そのことを語りて云ひぬ、「此の男(をのこ)安樂に充ちむ、
在家ならむもはたまた出家たらむも、
其の相こそは斯かる義を顯すなれ」と。

一〇

「比丘等、如來は…乃至…其の昔(かみ)の日、人間に生れ來て、〔蟹の如く横目に〕廣く

見ず、また斜視⑭もせず、更にまた差別しても見ず、直に〔眼の廣く〕開けるが儘に、心を曲げず、愛眼もて數多の人々を眺めたり。彼、この業を遂行し蓄積し積聚し増大したれば、身壞し命終せる後は善趣天界に再生す…乃至…。彼や彼處に死沒して、此の世に生れ來ては、此の二の大人相を獲得す。〔謂く〕眼の紺碧なると、眼睫(まつげ)の牝牛の如きと〔の二〕なり。

一一　彼、此等の相を具足へたれば、若し在家に住まらんには轉輪王たり。王となりて何をか得るや。數多の人々より愛視せらる。婆羅門と居士、市民と村人、
168 主財官と司政官・衞兵・門衞・顧問官・廷臣・副王・富豪・王子より、愛せられ且つ喜ばる。王となりては是の如きを得るなり…乃至…。佛陀となりて何をか得るや。數多の者より愛視せらる。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天人・人間・阿修羅・龍蛇・乾闥婆より、愛せられ且つ喜ばる。佛陀となりては是の如きを得るなり」。

佛は斯かる意味を説き給ふ。

一二　それに就きて、こは言はるゝなり。

横視もなさず、はた斜視もせず、

更にまた差別して眺むることもなし。
直に〔眼の廣く〕開けるがままに、心を曲げず
愛眼もて數多の人を眺めたり。
彼、善趣にありて〔其の業の〕果を享け
彼處にありて樂しみぬ。
更に此の世に〔生れ〕ては牝牛の如き眼睫と
紺碧の眼の明かに見ゆるとあり。
多くの優れし行者の
占相に巧みなるもの
眼細微を穿ち視るに誤ることなき男等
そを「愛視なり」と解きぬ。
家にありては愛視せられ
數多の人の親愛を受く。
若しまた家に住まらず、沙門とならば、

數多の人の愛する所、憂悲の滅者にてぞあらむ。

一三　「比丘等よ、如來は……乃至……其の昔の日、人間に生れ來て、數多の人に先立ちて行くもの、諸の善法を行ふに、數多の人の中、最も優れたり。〔卽ち〕身・口・意の三業に於ても、布施をなし戒律を守り布薩を行ずるに於ても、父母に對する親愛、沙門・婆羅門に對する敬虔に於ても同族の長老に對する恭敬に於ても、其の他、是の如き優れて善き諸法に於ても然かなり。彼、この業を遂行し蓄積し積聚し增大したれば、身壞し命終せる後は善趣天界に再生す……乃至……。彼や彼處に死沒して、此の世に生れ來ては、此の大人相を獲得す。〔謂く〕、頭上に肉髻あり

一四　彼、この相を具足へたれば、若し在家に住まらんには轉輪王たり。王となりて何をか得るや。多數の扈從あり、婆羅門と居士、市民と村人、主財官と司政官・衞兵・門衞・顧問官・廷臣・副王・富豪・王子〔是なり〕。王となりては是の如きを得るなり……乃至……。佛陀となりて何をか得るや。多數の扈從あり、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天人・人間・阿修羅・龍蛇・乾闥婆〔是なり〕。佛陀となりては、是の如きを得るなり」。

佛は斯かる意味を說き給ふ。

一五　それに就きて、こは言はるゝなり。

諸法を正しく行ずるに
先立ちて行く者法行を樂しみぬ。
〔然も〕彼、數多の人につき屈へり。
〔斯くて〕天上に生れ其の德の果を享け樂しみぬ。
彼や善行の〔其の〕果を受け終へて
此の世に生れ來ては、頭に肉髻を具足へたり。
占相〔の知識〕を憶持する諸人、こを解きぬ
「是は數多の人に先立ちて行く者ならむ。
世にありて人人の彼に奉仕を齎すあり、
其の昔の日に然かなりしがごと。
若し刹帝利の族に生れて地上の主たらば、
數多の人人〔心からなる〕奉仕を捧げむ。
然もまた斯かる男の出家するあらむか、

諸の法に明かにして其を〔正しく〕行ずべし。
つき屈ふ數多の人人、彼が敎說に
彼が有德に心樂しまむ。

一六　「比丘等よ、如來は…乃至…其の昔の日、人間に生れ來て、妄語をなさず、眞を語る者、眞を離れざる者、信じ得べく據り得べく、何人に對ふも僞る所なかりき。彼、この業を遂行し蓄積し積聚し增大したれば…乃至…。彼や彼處に死沒して、この世に生れ來ては、此の二の大人相を獲得す。〔謂く〕、毛の一つ一つなると、眉間に毫の生じ、白色にして兜羅綿に類すると〔の二〕なり。

一七　彼、此等の相を具足へたれば、若し在家に住まらんには轉輪王たり。王となりて何をか得るや。多數の人々、彼の許に來集す、婆羅門と居士、市民と村人、主
171 財官と司政官・衞兵・門衞顧問官・廷臣・副王・富豪・王子〔是なり〕。王となりては是の如きを得るなり…乃至…。佛陀となりて何をか得るや。多數の人々、彼の許に來集す、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天人・人間・阿修羅・龍蛇・乾闥婆〔是なり〕。佛陀となりては是の如きを得るなり」。

佛は斯かる意味を說き給ふ。

一八 それに就きて、こは言はるゝなり。

幾たびかの前(さき)の世、眞(まこと)を認むるの人たり、
　兩舌を用ひて語るなく虛妄を避けぬ。
何人に對(むか)ふも僞る所なく
　事實に基づき眞實に據り、在るが儘に〔語りて〕樂しめり。
〔されば〕彼には眞白く輝きて柔かさ兜羅綿にさも似たる
　毫(ほそげ)ありて兩眉の間に整ひ生じたり。
〔また〕毛孔には二本の毛の生ずるなく、
　⑮一つづつの毛に身肢は覆はれてあり。
數多の占相の智者――出生の相を占ふ諸賢
　〔此處に〕群ひ來りて其の相を解き明すらく、
「〔白〕毫と身毛と、斯は正しく其の處を得たり、
　斯かる人に〔こそ〕數多の人は集(つど)ふなれ。

家に在らば數多の人人集り來たらむ。
其の前の世になし遂げし業によるなれば。
一物もなき出家の身とならば、無上なる寂靜なる
覺者とならば、人人〔其の處に〕來り從はむ。

一九　「比丘等よ、如來は嘗ての前の世、生れ……乃至……其の昔の日、人間に生れ來て、離間の語を捨て離間の語をなさず、此處に聞きたるを彼處に〔至り〕て人々〔の和合せる〕を壞らんが爲に語り告ぐることもなく、或は彼處に聞きたるを、人々〔の和合せる〕を壞らんとて〔此處にある〕人々に、語り告ぐることもなし。是の如く仲破れたるは此を和せしめ、和合せるは〔更に〕此を緊密ならしめて、和合を嬉しみ和合を悅び和合を樂しみて、和合ならしむる言葉を語りたり。彼、この業を遂行し蓄積し積聚し增大したれば、身壞し命終せる後は善趣天界に再生す……乃至……。彼や彼處に死沒して、この世に生れ來ては、此の二の大人相を獲得す。〔謂く〕、四十齒あると、齒に隙間なきと〔の二〕なり。

二〇　彼、此等の相を具足へたれば、若し在家に住まらんには轉輪王たり。王と

173

なりて何をか得るや。會衆仲違ふことなし。婆羅門、居士も、市民、村人も、主財官、司政官も、衞兵・門衞・顧問官・廷臣副王・富豪・王子も、互に仲違ふことなし。王となりては是の如きを得るなり…乃至…。佛陀となりて何をか得るや。會衆、仲違ふことなし、比丘・比丘尼も、優婆塞・優婆夷も、天人・人間・阿修羅・龍蛇・乾闥婆も、互に仲違ふことなし。佛陀となりては是の如きを得るなり」。

佛は斯かる意味を說き給ふ。

二一　それに就きて、こは言はるゝなり。

毀訾の語（ことば）――結合せるを破り、
　破壞を增し、啀（いさ）かひをなさしめ、
爭鬪を增し、爲さざる可きを爲さしむる
　結合せる者に破壞を生ぜしむる〔語（ことば）〕を語るなし。
啀かはざるを增益し、長く
　〔仲〕破れたる者の和合を生ずる〔語〕を語り、
人人の爭鬪を排して結合を具足ふる彼、

〔それをもて〕心樂しみはた喜びぬ。
幾多の善趣に〔生れ〕て其の業の果を享け
　彼處にありて〔其を〕樂しめり。
此の世に〔生れ〕來ては齒に隙間なく、〔よく〕塡みて
〔而も〕齒は四十、極めて堅く著けり。
若し刹帝利の生れならむには地上の主たり、
其の〔從ふ〕民衆は穩やかに、
而して無垢、穢なき沙門とならば、
　其の圍繞する者〔よく〕從ひ動ずることなけむ。

二二　「比丘等よ、如來は…乃至…其の昔の日、人間に生れ來て、粗語を捨て粗語をなさず、其の語る言葉に過つ所なく、耳に樂しく聞え、愛好すべく、心をときめかし、優雅にして數多の人の愛するもの、數多の人の心喜ぶもの――斯かる言葉を語る者なりき。彼、この業を遂行し蓄積し積聚し增大したれば、身壞し命終せる後は善趣天界に再生す…乃至…。彼や彼處に死沒して此の世に生れ來ては此の

二つの大人相を獲得す。〔謂く〕、大いなる舌と、迦陵頻伽の音色なす梵音と〔の二〕なり。

二三　彼、此等の相を具足へたれば、若し在家に住まらんには轉輪王たり。王となりて何をか得るや。言葉〔よく〕受容せらる。彼の言葉は、婆羅門・居士も、市民・村人も、主財官・司政官も、衞兵・門衞・顧問官・廷臣・副王・富豪・王子も、〔よく〕此を受容す。王となりては是の如きを得るなり…乃至…。佛陀となりて何をか得るや。言葉

174
〔よく〕受容せらる。彼の言葉は、比丘・比丘尼も、優婆塞・優婆夷も、天人・人間・阿修羅・龍蛇・乾闥婆も、〔よく〕此を受容す。佛陀となりては是の如きを得るなり」。

二四　佛ば斯かる意味を說き給ふ。

それに就きて、こは言はるゝなり。

罵り爭ひ惱ましむる語(ことば)

抑へ苦しめ、數多の人〔の和合〕を壞(やぶ)る

強き語も粗き語も、彼は語らず。[16]

柔和にしてよく和合せしむる親しき語(ことば)をなしぬ。

其の語る處、心に樂しく胸をときめかす。
彼や耳に〔聞えて〕樂しき語を發したり。
〔而して〕正しく行へる〔其の業の〕果を獲て
善趣に生れては福德の果報を享けぬ。
彼、そのよき業の果を享け終り、
此の世に來りて梵音を獲、
其の舌は廣く大いなるもの〔なれば〕、
語るところの言葉は〔よく〕受容せらるなり。
家にとゞまり住まば、語るが儘に榮(は)えまさむ。
然れども若しまた彼の男(をのこ)、出家せむときは、
群(つど)へる人人、彼が言葉を憶持せむ。
數多の人に語られし數多のことども〔互に〕語りつゝ。

175

二五　「比丘等よ、如來は嘗ての前(さき)の世、生れ存らひ住みにける其の昔(かみ)の日、人間に生れ來て、綺語を捨て綺語をなさず、適時に語り、事實を話し、義ある語をなし、法を

語り、律を語り、藏持すべき語を語り、〔また〕時ありてか、理あり節度あり義を具へたる語をなしぬ。彼、この業を遂行し蓄積し積聚し増大したれば、身壞し命終せる後は、善趣天界に再生す。…乃至…。彼や彼處に死沒して、この世に生れ來ては、この大人相を獲得す。〔謂く〕、頷(あぎと)は獅子の如し。

二六　彼、この相を具足へたれば、若し在家に住まらんには轉輪王たり。王となりて何をか得るや。人間としての如何なる怨敵、仇敵にも打克たるゝことなし。王となりては是の如きを得るなり…乃至…。佛陀となりて何をか得るや。内外の〔如何なる〕怨敵、仇敵にも――或は貪慾・瞋恚・愚癡、或は沙門・婆羅門・天人・魔〔王〕・梵天、其の他この世界の如何なるものにも打克たるゝことなし。佛陀となりては是の如きを得るなり」。

二七　佛は斯かる意味を說き給ふ。

それに就きて、こは言はるゝなり。

綺語も愚鈍も〔語る〕なく
散亂せずして緊密なる語(ことば)をなしぬ。

益なきは排し去り、而して益あり
　數多の人を安樂ならしむる語は、こを語りたり。
其を爲しおへて此の世より沒し去り、天上に再生す。
　〔彼處にありて〕良き業の果を得たるなり。
其處より死沒して、この世に再び歸り來りては、
二[17]對の二〔足〕ありて行く〔獸類〕の最勝なるものの如き頷(あぎと)を得たり。
王たらば打克たれ難き者となり、人間の頭(かしら)、
　人間を統ぶる主(あるじ)——大威力を具足せむ。
　諸天に優れたる〔彼の〕天帝にさも似たり。
忉[18]利天の都城に〔住める〕優者にも較ぶべき彼、
乾闥婆、阿修羅、帝釋、羅刹にも
　諸天にも能く打克たるることなし。
斯[19]かる人、若し家に住(とど)まり住まば、是の如き性(さが)、
　四方四維至る處にありて〔此を證せむ〕。

二八　「比丘等よ、如來は嘗ての前(さき)の世、生れ存らひ住みにける其の昔(かみ)の日、人間に生れ來て、不正なる生活を捨て、正しき生法をもて活きぬ。不正なる斗秤、[20]不正なる貨幣、不正なる尺度も、贈賄・欺瞞・詐欺・不誠も、〔さては〕斬切・殺戮・繩縛・剽掠・奪取・強暴もなさざりき。彼、この業を遂行し蓄積し……乃至……。彼や彼處に死沒して、此の世に生れ來ては、この二の大人相を獲得す。〔謂く〕、齒の齊平なると、齒牙の極めて白きと〔の二〕なり。

二九　彼、此等の相を具足へたれば、若し在家に住まらんには、轉輪王となりて正法の王たり。四海の征御者にして、其の國土は搖ぐなく、七寶を具足せん。七寶とは即ち、輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶と〔而して〕主兵寶を第七となすものの是なり。其の王子は實(げ)に千人を超え、〔何れも〕勇健にして雄猛、よく敵軍を摧伏せん。彼〔の王〕はこの地を海際に至る迄、頑凶もなく、無惡無礙にして、繁榮豐饒、また安穩に、擾亂あることなく、刑杖も兵刄も用ひず〔唯〕正法によりてのみ統治して在るべし。王となりて何をか得るや。清淨なる隨從者あり、彼に隨從する者〔凡て〕清淨たるなり。婆羅門・居士も、市民・村人も、主財官・司政官も、衞兵・門衞・顧問官・廷臣・副王・

178

富豪・王子も〔然かり〕。王となりては是の如きを得るなり。

三〇　然れども若し彼の人にして、在家より非家に出家せんか、應供・等正覺者となり、この世にありて覆障を取り去らん。佛陀となりて何をか得るや。清淨なる隨從者あり、彼に隨從する者〔凡て〕清淨たるなり。比丘・比丘尼も、優婆塞・優婆夷も、天人・人間・阿修羅・龍蛇・乾闥婆も〔然かり〕。佛陀となりては是の如きを得るなり」。

佛は斯かる意味を說き給ふ。

三一　それに就きて、こは言はるゝなり。

邪(よこしま)の生活を棄て去りて、偏(かたよ)らず、
淸(さや)けく正しく、彼は生を營めり。
益なきは排し、而して益あり
　數多の人を安樂ならしむる行は此を爲しぬ。
賢(さか)しき巧みなる〔業(わざ)〕もて讚(ほ)め稱(たた)ふべき數多なし遂げし彼の男(をのこ)
天上に生れては樂の果の享受——
忉利天の都城に住める優者にも較ぶべき彼

喜悅と戯樂とを具足へ得し彼は其處に樂しめり。
彼處より[21]死没して人間たる生を受けぬ。
[22]而して其の爲し遂げし果報の殘す處、
口に生ずるもの——〔齒〕は齊平に、
〔齒牙〕の極めて淸く眞白なるを得たり。
數多ある占相の人人群ひ來り——
賢（さか）しき敬（うやま）ふべき、人の頭たる人人、其を解きぬ。
其のつき從ふ群人（むれびと）〔なべて〕淸淨たり、
〔斯く〕[23]二生の齊平にして眞白く光り輝ける齒を有（も）てる人
王たらば數多の隨從の人人〔皆〕淸淨にして、
彼や大地の上を統べ治むべし。
而して鎭壓しては國土に動搖あるなく、
〔民衆こぞりて〕數多の人の利益と安樂とを行ぜむ。
然もまた出家せむには、惡を離れし沙門、

煩惱を鎭め、覆障を去り
苦惱を〔心〕勞を離れたる人となり、
此の世界、また他の世界を眺め見む。
其の敎誡を受けし數多の在家・出家〔何れも共に〕
不淨なる、離ずべき惡を除くべし。
實(げ)に彼や淸淨なる人人に圍繞せられ、
〔心〕垢も〔心〕障も罪過も煩惱も此を除かしむなり。

註❶其等一一の間の區分（suvibhatt-antara）「間がよく分たれたる」の字義なり。Mahāpadāna-s. 其の他 Pāli 語系のものには見ざる加註なり。
❷安闍那（añjana）眼を隈取る粧料なり。
❸底本は梵音と迦陵頻伽音とを別出し、その爲に三十三相となる。Mahāpadāna-s. 等は是を一相とせるを以て、譯また是に從へり。
❹Brahmāyu, Mahāpadāna 等に見えざる加註なり。
❺よく戴持するもの（sundhara）字義明かならず、恐らく su-dhara より來たれるか。（大地のことを dharaṇi と言ふ）。

❻廣くして云云、底本に vipula-digha-pāṇika. とあり、此の場合 pāṇika は paṇhi と讀むべし。

❼其の隨從者云云、底本に bhavati parijanassa vo vidheyyo. (隨從者に對して實に從順なり)にては意味通ぜず、今 Buddhaghosa に從つて bhavati parijano assa vo vidheyyo. と讀みたり。

❽此の、底本に mahimaṁ とあるも mahim-imaṁ なりと註釋は云へり。

❾言葉を償ふ者 (vacanappaṭikara) 其の意味明かならず。

❿身毛の上に靡けるを云云　底本には ubbham uppatita-lomavāsaso とあるも、暹羅版によりて ubham uppatitalomavā assa と讀めり。

⓫基づける相、前徵なり。　底本に pubba-nimittamassataṁ とあるも、pubba-nimittam assitaṁ と讀めり。

⓬減衰することなき　底本に asahāna とあるも apurihāna と讀むべし。

⓭ uddhaggassa rasa-haraṇiyo gīvāya jātā honti samabhivāhiniyo 他經に見ざる加註、其の意味甚だ明瞭を缺けり。喉頭に味覺神經ありてよく味覺を捕へ、またこれを傳ふるの意味ならんも、uddhagga が何を指すや不明なり。漢譯にありては味中得上味、咽中二處津液流出(智度論、卷八十八、因果經卷一)と言ひ、また、佛舌根淨故、令諸飲食變成上味(大婆沙、卷百七十七)等と言へるものあり。參照、大毘婆沙論卷百七十七(大正藏、二七・888c)、大般若、卷三百八十一(大正藏、六・967c)　大智度論卷四(大正藏、二五・90c-91a), Burnouf, Lotus, II. pp. 566-7.

⓮斜視　底本に visā citaṁ とあるも、暹羅版に從ひ visāvi と讀めり。

⓯一つづつの云云　底本に ekeka-lomūpacit-aṅgavā ahu とあり、aṅgavā の意味明かならず、此

處にては aṅga-vant の意として解したり。

⓰強き語云云 「强からざる語を語り、粗き語は語ることなかりき」の字義なり。

⓱二對の二[足]ありて行く dvidu-gama. 四足卽ち獸類の意なるべし。

⓲忉利天 底本に tidiva とあるは tāvatiṁsa-deva の意なり。

⓳此の偈のみは他と異りて出家したる場合のことに就きて語らず、多少の注意を要す。何故なるかは明かならず。

⓴不正なる貨幣 (kaṁsakūṭa) 贋造貨幣を以て欺くなり。

㉑死沒して 底本に caviya とあるも、cavitvā と讀むべし。

㉒而して 底本に na とあり、玆に異本によりて puna と讀めり。

㉓二生 dijā の意味明かならず。

教授尸伽羅越経 (Sigālovāda Sutta)

SC: Advice to Sigālaka

三一　教授尸伽羅越經（シンガーローヴーダ・スッタンタ）

是の如く我聞く。

一　ある時、世尊は王舍〔城に近き〕栗鼠養餌處、竹林に住し給ひき。さて實に、この時、家主子尸伽羅越は、早く起床し、王舍〔城〕を出で、〔郊外に至り〕衣を淨め髪を淨めて合掌し、東方・南方・西方・北方・下方・上方の各方を禮拜せり。

二　その時、世尊は早朝、内衣を著け、鉢と衣とを取り、行乞して、王舍城に入り給へり。世尊は家主子尸伽羅越の、早く起床し、王舍〔城〕を出で、〔郊外に至り〕衣を淨め髪を淨めて合掌し、東方・南方・西方・北方・下方・上方の各方を禮拜するを見給ひき。家主子尸伽羅越を見て、かく曰へり。

「家主子よ、汝は何故に早く起床し、王舍〔城〕を出で、衣を淨め髪を淨めて合掌し、東方・〔南方〕…乃至…上方の各方を禮拜するや」と。

「世尊、父の將に命終せんとする時、我に〔遺〕言すらく、『親愛なるものよ、汝は須ら

く諸方を禮拜すべし」と。かくて世尊、我は父の〔遺〕言を尊重し、珍敬し、敬信し、奉戴して、早く起床し、王舍〔城〕を出で、衣を淨め髮を淨めて合掌し、東方・〔南方〕…乃至…上方の各方を禮拜するなり」。

「家主子よ、聖者の律に於ては、是の如く、六方を禮拜すべきものならず」。

「然らば世尊、聖者の律に於ては、如何に六方を禮拜すべきや。善い哉、世尊、世尊は、聖者の律に於て、六方を禮拜すべき、その法を我に教示し給へ」と。

「然らば家主子よ、聽け、善く思惟せよ、我、當に語らん」。

「世尊、畏りぬ」と、家主子尸伽羅越は、世尊に答へき。世尊はかく說き給へり。

三　「家主子よ、聖弟子にして、四の業垢を捨離し、四の理由より惡業を爲さず、又財を散ずる六の原因を習はざれば、彼は斯くて十四の罪惡より離脫し、六方を覆護し、彼は〔現在並に未來〕の兩世に打勝つ爲に修業し、此の世、彼の世は彼によりて征せられ、彼は肉身離散の死後に、善趣・天界に生ずべし。

彼に依りて捨離せられたる四の業垢とは何ぞや。家主子よ、殺生は業垢なり、不與取は業垢なり、肉慾に於ける邪行は業垢なり、虛誑語は業垢なり。彼の捨離

せる四の業垢とは卽ちこれなり」と。
世尊はかく曰へり。

182
四　善逝は斯く曰ひ已りて、更に又師主は斯く曰へり。

殺生と不與取と
又虛誑語と
又、他人の妻に近づくとは
賢者は賞讃せず。

五　「如何なる四の理由より人は惡業を爲さゞるや。貪欲によりて非道を行くが故に惡業を爲し、瞋恚によりて非道を行くが故に惡業を爲し、愚痴によりて非道を行くが故に惡業を爲し、恐怖によりて非道を行くが故に惡業を爲すなり。其故に、家主子よ、聖弟子は、決して貪欲によりて非道を行かず、瞋恚によりて非道を行かず、愚痴によりて非道を行かず、恐怖によりて非道を行かず。これ等の四の理由より彼は惡業を爲さゞるなり」と。世尊はかく曰へり。

六　善逝は斯く曰ひ已りて、更に又師主は斯く曰へり。

貪欲と瞋恚と恐怖と愚痴とにより、
法を犯すものはみな、
恰も黑分に於ける月の如く、
彼の名聲は減退すべく、
貪欲と瞋恚と恐怖と愚痴とにより、
法を犯さざるものはみな、
恰も白分に於ける月の如く、
彼の名聲は増廣すべし。

七　「財を散ずる六の原因とは如何なるものなりや。酒類など放逸の因たるものに熱中するは、實に、家主子よ、財を散ずる原因なり。時ならざるに街衢を遊行することに熱中するは、財を散ずる原因なり。〔祭禮舞踊の〕觀覽處に入りこむは財を散ずる原因なり。賭博など遊惰なる事に熱中するは、財を散ずる原因なり。惡友と交はるは、財を散ずる原因なり。懶惰に耽るは財を散ずる原因なり。

八　家主子よ、酒類など放逸の因たるものに熱中するより、實にこれ等六〔種〕の過

患は生ずるなり。現に資財の損失あり、闘諍を増し、疾病の巣窟となり、名譽を傷
183 け、陰藏を現はし、第六事に智力を減殺す。實に家主子よ、これ等六〔種〕の過患は、酒類など放逸の因たるものに熱中するより〔生ずる〕なり。

九　家主子よ、時ならざるに街衢を遊行することに熱中するより、實にこれ等六〔種〕の過患は〔生ずる〕なり。〔即ち〕かれ自身も、護衞なく防禦なく、かれの子も妻も亦護衞なく防禦なく、かれの財産も亦護衞なく防禦なく、又惡事に於て疑念を懷かれ、不實の讒言はかれに起り、多くの苦法に取圍まるゝに至るなり。家主子よ、實にこれ等六〔種〕の過患は、時ならざるに街衢を遊行することに熱中するより〔生ずる〕なり。

一〇　家主子よ、〔祭禮舞踊の〕觀覽處に入りこむより、實にこれ等六〔種〕の過患は〔生ずる〕なり。〔即ち〕何處に舞踏ありや、何處に歌ありや、何處に音樂ありや、何處に講談ありや、何處に手樂(がく)ありや、何處に陶器樂ありやと〔尋求するなり〕。實に家主子よ、これ等六〔種〕の過患は、〔祭禮舞踊の〕觀覽處に入こむより〔生ずる〕なり。

一一　家主子よ、賭博など遊惰なる事に熱中するより、實にこれ等六〔種〕の過患は

〔生ずる〕なり。　勝者に怨を生じ、又勝者は〔贏ち得たる富を失ふを憂いて〕心に悲み〔あり〕、現に資財の損失あり、法廷に入りて〔彼の〕語は效力なく、朋友同僚より輕侮せられ、婚姻は拒絶せられ、賭博漢は妻を〔持つ〕能はずと主張せらる。　家主子よ、實にこれ等六〔種〕の過患は賭博など遊惰なる事に熱中するより〔生ずる〕なり。

一二　家主子よ、惡友に交はるより、實にこれ等六〔種〕の過患は〔生ずる〕なり。　狡猾者、亂行者、大酒家、詐僞者、欺瞞者、粗暴者、これ等は彼の朋友なり、これ等は〔彼の〕伴侶なり。　實に家主子よ、これ等六〔種〕の過患は惡友に交はるより〔生ずる〕なり。

一三　家主子よ、懶惰に耽るより、實にこれ等六〔種〕の過患は〔生ずる〕なり。　寒きに過ぐとて業〔務〕を爲さず、暑きに過ぐとて業〔務〕を爲さず、晩きに過ぐとて業〔務〕を爲さず、早きに過ぐとて業〔務〕を爲さず、我は甚だしく飢ゑたりとて業〔務〕を爲さず、我は甚だしく渴したりとて業〔務〕を爲さず。　彼は是の如く、事業に多く口實を設くるが故に、未生の富は生ぜず、已生の富は、損失に向ふなり。　家主子よ、實にこれ等六〔種〕の過患は、懶惰に耽るより〔生ずる〕なり」と。

斯く世尊は曰へり。

一四

善逝は斯く日ひ已りて、更に又師主は斯く日へり。
飲み友だちなるものあり
又親友中の親友なりと〔自稱す〕
さあれ必要の生ぜる時に於ける
伴侶は是れ朋友なり。
太陽の昇れる〔後にも〕寢床にあり
他人の妻女に狎れ近づき
鬪爭に從事し無益の事に〔熱中し〕
又惡友と〔交はり〕又慳貪を〔事とす〕
これ等六〔種〕の事項は
人を破滅に導くなり。
惡友と惡伴侶と
惡行を行ずる人は
此の世と彼の世との兩世に於て

185

破滅に至るなり。
骰子と女、酒、舞踏と歌
白晝の就眠、非時の街衢遊行
悪友と慳貪なると
これ等六〔種〕の事項は
人を破滅にぞ至らしむ。
骰子を遊び、酒を飲み
他人の生命とする妻女に通ひ
卑しきに交はり賢きに交はらずば
黑分に於ける月の如く缺け行くなり。
無財、無一物にして
酒飲むことを懇望し、酒場に入る者は
水に沈むが如く負債に沈み
速に己が家門を亡ぼす。

白晝眠るを例とし、
夜は起きるものと思ひ
常に泥醉にのみ耽るものは
家に住する能はざるなり。
甚だ寒し、甚だ暑し
甚だ遲しと稱して
かくて業を等閑にすれば
利益は若者より去り行かん。
寒さをも、暑さをも
草程にも思はずに
人として義務を爲すものは
決して幸福を逸すること無かるべし。

一五 「家主子よ、これ等の四は敵にして友に似たるものなりと知るべし。たゞ何物にても取り行く人は、敵にして友に似たるものなりと知るべし。言說を主

とするものは、敵にして友に似たるものなりと知るべし。甘言者は敵にして友に似たるものなりと知るべし。遊蕩の伴侶は敵にして友に似たるものなりと知るべきなり。

一六　實に家主子よ、四の理由に依りて、何物なりとも、取り行く人は敵にして友に似たるものなりと知るべし。彼は品物を擇ばずして取り行き、小を〔與へて〕大を〔得んと〕願ひ、畏怖よりして業務をなし、利益のために働くなり。實に家主子よ、これ等四の理由に依りて、たゞ何物にても取り行く人は敵にして友に似たるものなりと知るべきなり。

一七　實に家主子よ、四の理由に依りて、言説を主とするものは、敵にして友に似たるものなりと知るべし。彼は過去の事に友情を裝ひ、未來の事に友情を裝ひ、無意義の愛嬌を云ひ、爲すべき事の眼前に迫るや都合惡しきを示すなり。實に家主子よ、これ等四の理由に依りて、言説を主とする者は、敵にして友に似たるものなりと知るべきなり。

一八　實に家主子よ、四の理由に依りて、甘言者は、敵にして友に似たるものなり

その面前にて讃美し、その背後にて毀嗤す。實に家主子よ、これ等四の理由に依りて、甘言者は、敵にして友に似たるものなりと知るべきなり。

一九 實に家主子よ、四の理由に依りて、遊蕩の伴侶は、敵にして友に似たるものなりと知るべし。彼は諸の酒類など放逸の因となる事に耽る時の伴侶なり、時ならざるに街衢を遊行する時の伴侶なり、（祭禮舞踊の）觀覽處に入りこむ時の伴侶なり、賭博など遊惰なる事に耽る時の伴侶なり。實に家主子よ、これ等四の理由に依りて、遊蕩の伴侶は、敵にして友に似たるものなりと知るべきなり」と。

斯く世尊は曰へり。

二〇 善逝は斯く曰ひ已りて、更に又師主は斯く曰へり。

何物にても取り行く友

言說を主とする友

甘言する友

遊蕩の友

これ等の四〔者〕は敵なりと
かく賢者は了知して
〔これ等を〕遠く避けよかし
恐怖の存する道のごと。

187 二一 「家主子よ、これ等四〔種〕の友は心がけ善きものなりと知るべし。援助の友は、心がけ善きものなりと知るべく、樂にも苦にも一様に友たるものは、心がけ善きものなりと知るべく、善利を告ぐる友は心がけ善きものなりと知るべく、同情ある友は、心がけ善きものなりと知るべし。

二二 實に家主子よ、四の理由に依りて、援助の友は、心がけ善きものなりと知るべし。彼は友の酩酊せるを防護し、友の酩酊せる時その財を守り、怖るゝ時の庇護たり、所作の作さるべき時には〔必要とする〕二倍の財を給すべし。實に家主子よ、これ等四の理由に依りて援助の友は、心がけ善きものなりと知るべし。

二三 實に家主子よ、四の理由に依りて、樂にも苦にも、一様に友たるものは、心がけ善きものなりと知るべし。彼は〔己の〕祕密を告げ、彼の祕するものは隱藏し、窮

乏の時に[他を]捨てず、[他の]利益の爲には、その一命をも捨つるなり。實に家主子よ、これ等四の理由に依りて、樂にも苦にも、一様に友たるものは、心がけ善きものなりと知るべし。

二四　實に家主子よ、四の理由に依りて、善利を告げ知らす友は、心がけ善きものなりと知るべし。彼は罪惡を防止し、善事を行はしめ、未だ聞かざることを聞かしめ、天への道を教ゆるなり。實に家主子よ、これ等四の理由に依りて、善利を告げ知らす友は、心がけ善きものなりと知るべし。

二五　實に家主子よ、四の理由に依りて、同情ある友は、心がけ善きものなりと知るべし。その衰微を喜ばず、その隆盛を喜び、毀呰する人を防止し、稱讃する人を褒むるなり。實に家主子よ、これ等四の理由に依りて、同情ある友は、心がけ善きものなりと知るべし」と。

世尊は斯く曰へり。

二六　善逝は斯く曰ひ已りて、更に又師主は斯く曰へり。

援助する友と

樂にも苦にも〔交を更めぬ〕友と
善利を告げ知らす友と
同情ある友と、
實にこれ等の四〔者〕を友なりと
かく賢者は了知して
〔これ等に〕眞心もて盡せかし
母の實子に〔於けるが〕如く。
戒を具する賢者は、
山頂に燃ゆる火の如く輝く。
食物を集むる蜂の働く如き
彼の財は自ら集積して
蟻の垤高めらるゝ如し。
かく財を集めては
良き家主となるに堪ふ、

〔その〕財を四分して、
彼はかくして朋友を結束し、
一分の財を自ら享受し
二分の財にて業務を營み
第四分は蓄積して、
窮乏の備と爲すべし。

189

二七 「家主子よ、聖弟子は、如何に六方を覆護せんとするや。家主子よ、これぞ六方なりと知らるべし。東方は母父なりと知らるべく、南方は師匠なりと知らるべく、西方は妻子なりと知らるべく、北方は朋友なりと知らるべく、下方は奴僕傭人なりと知らるべく、上方は沙門婆羅門なりと知らるべし。

二八 實に家主子よ、五の理由に由り、東方〔に配せらるゝ〕父母は、子に依りて奉仕せらるべきなり。『撫育されし我は兩親を養ふべし、兩親の爲に業務を爲すべし、家督を相續すべし、相續を正しくすべし、而して又諸の死靈に對して時に應じたる供物を捧ぐべし』と。實に家主子よ、これ等五の理由に由り東方〔に配せらるゝ〕

樂にも苦にも〔交を更めぬ〕友と
善利を告げ知らす友と
同情ある友と、
實にこれ等の四〔者〕を友なりと
かく賢者は了知して
〔これ等に〕眞心もて盡せかし
母の實子に〔於けるが〕如く。
戒を具する賢者は、
山頂に燃ゆる火の如く輝く。
食物を集むる蜂の働く如き
彼の財は自ら集積して
蟻の垤高めらるゝ如し。
かく財を集めては
良き家主となるに堪ふ、

〔その〕財を四分して、
彼はかくして朋友を結束し、
一分の財を自ら享受し
二分の財にて業務を營み
第四分は蓄積して、
窮乏の備と爲すべし。

二七「家主子よ、聖弟子は、如何に六方を覆護せんとするや。家主子よ、これぞ六
方なりと知らるべし。東方は母父なりと知らるべく、南方は師匠なりと知らる
189 べく、西方は妻子なりと知らるべく、北方は朋友なりと知らるべく、下方は奴僕傭
人なりと知らるべく、上方は沙門婆羅門なりと知らるべし。

二八 實に家主子よ、五の理由に由り、東方〔に配せらるゝ〕父母は、子に依りて奉仕
せらるべきなり。『撫育されし我は兩親を養ふべし、兩親の爲に業務を爲すべし、
家督を相續すべし、相續を正しくすべし、而して又諸の死靈に對して時に應じた
る供物を捧ぐべし』と。實に家主子よ、これ等五の理由に由り東方〔に配せらるゝ〕

父母は、子に依りて奉仕せられ、〔又〕五の理由に由り子をば愛するなり。罪惡より遠ざけ、善事を行はしめ、技能を訓練せしめ、適當なる妻女を迎へ、時機に應じて家督を讓渡するなり。實に家主子よ、これ等五の理由に由り東方に〔配せらるゝ〕父母は、子に依りて奉仕せられ、これ等五の理由に由り子をば愛するなり。かくてかの東方は覆護せられ、安穩にして怖畏なし。

二九　實に家主子よ、五の理由に由り、南方〔に配せらるゝ〕師匠は、門弟子に依りて、奉仕せらるべきなり。立禮と、近事と、從順と、給仕と、虔んで學藝を受くることに依りて。實に家主子よ、これ等五の理由に由り、南方〔に配せらるゝ〕師匠は門弟子に依りて、奉仕せられ〔又〕五の理由に由り門弟子をば愛護するなり。彼等は善き訓練法に由つて訓練し、善く保持せられたるものを保持せしめ、凡て學藝を習熟せしめ、朋友知人の間に於て稱揚し、諸方に於て守護を作すなり。實に家主子よ、
190 これ等五の理由に由り、南方〔に配せらるゝ〕師匠は、門弟子に依りて奉仕せられ、これ等五の理由に由りて門弟子をば愛するなり。かくてかの南方は覆護せられ、安穩にして怖畏なし。

三〇　實に家主子よ、五の理由に由り、西方〔に配せらるゝ〕妻女は、夫に依りて奉仕せらるべきなり。敬意に依り、禮儀に依り、不邪行に依り、權威を與ふるに依り、裝飾品の提供に依りて。實に家主子よ、これ等五の理由に由り、西方〔に配せらるゝ〕妻女は、夫に依りて奉仕せられ、〔又〕五の理由に由りて夫をば愛するなり。〔妻女は〕業務を善く整理し、婢僕を親切に遇し、貞淑にして、財を保護し、都て爲すべき事柄に對して、巧妙にして且つ勤勉なり。實に家主子よ、これ等五の理由に由り西方〔に配せられたる〕妻女は、夫に依りて奉仕せられ、これ等五の理由に由りて、夫をば愛するなり。かくて、かの西方は覆護せられ、安隱にして怖畏なし。

三一　實に家主子よ、五の理由に由り、北方〔に配せらるゝ〕朋友は、族姓子に依りて奉仕せらるべきなり。布施に依り、愛語に依り、利行に依り、同事に依り、不欺誑に依りて。實に家主子よ、これ等五の理由に由り、北方〔に配せらるゝ〕朋友は、族姓子に依りて、奉仕せられ、〔又〕五の理由に由り、族姓子をば愛するなり。〔族姓子の〕酩酊せるを防護し、酩酊せる時その財を守り、恐るゝ時の庇護たり、窮困の場合に見捨てず、その他の同族をも尊重するなり。實にこれ等五の理由に由り、北方〔に配

せらるゝ〕朋友等は、族姓子に依りて奉仕せられ、これ等五の理由に由り、族姓子をば愛するなり。かくてかの北方は覆護せられ、安穏にして怖畏なきなり。

三二　實に家主子よ、五の理由に由り、下方〔に配せらるゝ〕奴僕傭人は、聖なる主人
191 に依りて奉仕せらるべきなり。奴僕傭人は、その力倆に應じて、仕事を課せらることに依り、食物と給料とを給與せらるゝことに依り、病時いたはることに依り、珍味の食事を分與せらるゝことに依り、時には休むことに依りて。實に家主子よ、これ等五の理由に由り、下方〔に配せらるゝ〕奴僕傭人は、聖なる主人に依りて、奉仕せられ、〔又〕五の理由に由り、聖なる主人をば愛するなり。彼等は〔主人よりも〕朝早く起き、後に寢に就き、與へられたる物をのみ受け、その仕事を善く爲し、〔彼等主人の〕名譽と稱讃を吹聴す。實に家主子よ、これ等五の理由に由り、下方〔に配せらるゝ〕奴僕傭人は、聖なる主人に依りて奉仕せられ、これ等五の理由に由りて聖なる主人をば愛するなり。かくて、かの下方は覆護せられ、安穏にして怖畏なきなり。

三三　實に家主子よ、五の理由に由り、上方〔に配せらるゝ〕沙門婆羅門は、族姓子に

依りて奉仕せらるべきなり。親切なる身業に依り、親切なる口業に依り、親切なる意業に依り、門戸を閉すことなく、食物を給與することに依りて。實に家主子よ、これ等五の理由に由り、上方に配せらるゝ沙門・婆羅門は、族姓子に依りて奉仕せられ、(又)六の理由に由りて、族姓子をば愛するなり。罪惡に近寄らしめず、善を行はしめ、善心よりして愛し、未だ聞かざるものを敎へ、既に聞きしことを正淨にし、天への道を示すなり。實に家主子よ、これ等五の理由に由り、上方に配せらるゝ沙門・婆羅門は、族姓子に依りて、奉仕せられ、これ等六の理由に由りて族姓子をば愛するなり。かくて上方は、覆護せられ、安穩にして怖畏なきなり。

世尊は斯く曰へり。

三四 善逝は斯く曰ひ、更に又師主は斯く曰へり。

父母は東方なり、
師匠は南方なり、
妻子は西方なり、
朋友は北方なり、

奴僕傭人は下方なり、
沙門婆羅門は上方なり、
一族中堪能の家主に依り、
これ等諸方は拜せらるべきなり。
學識ありて戒を具足し、
上品にして且つ才智あり、
謙讓にして柔順なるもの、
是の如きは名稱を得ん。
勇健にして懈怠なく、
不幸に處して動ぜず、
行儀を破らず賢きもの
是の如きは名稱を得ん。
能く衆を攝して友愛あり、
寛廣にして吝まず

導師、化導師、願導師たり、
是の如きは名稱を得ん。
布施し愛語し、
世の何人にも利行し
諸法に於て同事なること
何の處にも應供の如かれ、
實に世に於けるこれ等攝持は
轄（くさび）の車輪に於けるが如し、
若し此等の攝持無ければ、
母は子より尊敬も
或は供養も得ざるべく、
父も子より〔それを得ざるべし〕。
諸の賢者は、これ等の攝持を
遍く觀察するが故に

彼等は偉大と成り、
賞讃を得るに至るなりと。

三五 かくの如く說かれしとき、家主子、戸伽羅越は、世尊に對して次の如く言へり。

「超勝なり世尊、超勝なり世尊。世尊、恰も倒れたるものを起し、或は隱されたるものを顯はし、或は迷へるものに道を示し、或は『眼ある者は諸色を見ん』とて、黑暗に油燈を掲ぐるが如く、是の如く世尊に依りて、種々の方法を以て、法は示されたり。大德、我は世尊に歸依し、又法と僧とに歸依しまつる。願はくは世尊、今日より以後、命終に至るまで、歸依する優婆塞として攝受し給へ」と。

あ　たくのうてい きょう
阿吒曩胝経 (Āṭānāṭiya Sutta)

SC：Āṭānāṭiya Protection

三二　阿吒曩胝經（アーターナーティヤ・スッタンタ）

是の如く我聞く。

一　ある時、世尊は王舍〔城の外なる〕靈鷲山の中に住したまひぬ。時に四大〔天〕王は、衆多の夜叉（ヤッカ）軍、衆多の乾闥婆（ガンダッバ）軍、衆多の鳩槃荼（クンバンダ）軍、衆多の那伽（ナーガ）軍を以て、四方に守護を立て、四方に警護を立て、四方に保障を立て、深夜に絶妙の容色をなして偏く靈鷲〔山〕を照らし、世尊の居たまへる所に來り、世尊を敬禮して一方に坐しぬ。その夜叉等も亦、或は世尊を敬禮して一方に坐し、或は世尊と共に會釋し、喜ばしき懇なる會釋の語を交したる後、一方に坐し、或は世尊の、居たまへる方へ合掌を向けて一方に坐し、或は〔己の〕名と姓とを告げて一方に坐し、或は默したるまゝ一方に坐しぬ。

二　一方に坐したる毘沙門大〔天〕王は、世尊に白して言へり、「聖尊、上位の夜叉の、世尊に信心を有（も）たざるあり。聖尊、上位の夜叉の、世尊に信心を有てるあり。

195 聖尊、 中位の夜叉の、世尊に信心を有たざるあり。聖尊、 中位の夜叉の、世尊に信心を有てるあり。聖尊、 下位の夜叉の、世尊に信心を有たざるあり。聖尊、 下位の夜叉の、世尊に信心を有てるあり。されど聖尊、 夜叉は概ね世尊に信心を有たざるものなり。そは何に因るや。聖尊、 世尊は殺生を斷つことのために法を說きたまひ、不與取を斷つことのために法を說きたまひ、欲邪行を斷つことのために法を說きたまひ、妄語を斷つことのために法を說きたまひ、放逸の本たる飲酒を斷つことのために法を說きたまふ。然るを聖尊、 夜叉は概ね殺生を斷たず、不與取を斷たず、欲邪行を斷たず、妄語を斷たず、放逸の本たる飲酒を斷たず。〔されば〕こは彼等に取りて喜ばしからず、快からざることとなり。

聖尊、 世尊の弟子衆の、深林の樹茂り、閑かにして音少く、響少く、❶人のにほひなく、人のけはひなくして、臥するに堪へ、靜思に適する坐臥處を用ふることあり。此處に住する上位の夜叉にして、世尊の語を信ぜざるものあり。聖尊、 彼等の信心を發さんがため、願はくは世尊の阿吒曩胝(アーターナータ)の護經を納受したまはんことを。これ比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の保護のため、守護のため、安全のため、安樂住のた

めなり」。

世尊は默して、これを肯ひたまひぬ。

三　時に毘沙門大〔天〕王は、世尊の肯ひたまひしを知りて、その時、阿吒曩胝(アーターナータ)の護經を唱へぬ。

196

明眼にして光輝ある
毘婆尸〔佛〕に歸命す。
あらゆる有情を慈愍する
尸棄〔佛〕に歸命す。
〔煩惱〕を洗ひ除きたる苦行者、
毘舍浮〔佛〕に歸命す。
魔王の軍を打碎きたる
拘樓孫〔佛〕に歸命す。
完全を得たる婆羅門の
拘那含牟尼〔佛〕に歸命す。

あらゆる方に於て解脱したる
迦葉〔佛〕に歸命す。
あらゆる苦を除くべき
この法を說きたる
光輝ある釋子
❷鴦耆羅(アンギーラサ)に歸命す。
世に〔煩惱を〕滅し
如實に觀
❸兩舌を用ひず、偉大にして
怖畏を知らざる彼の人々は
人天利益〔の本たり〕
明と行とを具足し
偉大にして怖畏なき
瞿曇〔佛〕に歸敬す。

四

アディティの子にして大なる
輪形をなせる太陽の昇る所、
彼昇れば
夜は影を沒し、
彼昇れる時をば
稱して『晝』と呼ぶ。
そこなる湖は深くして
海には水夥し。
こゝに人は『海には水夥し』と
是の如くこれを知る。
これより『かの東の方』と
人のかく呼ぶ、
この方を統ぶる
譽ある大〔天〕王は

乾闥婆鬼の主神にして、
提頭頼吒（ダタラッタ）と名乗る彼は
乾闥婆鬼に護侍せられ、
舞と歌とによりて娯しむ。
彼には多くの児あり、
同一名なりとわれは聞く。
九十と又一〔の児等〕は
因陀羅と名づけて大力あり。
彼等亦佛陀——
日の族なる佛陀を見て、
偉大にして怖畏なき〔佛陀〕に
遠くより歸敬す。
汝に歸命す人中の尊貴者、
汝に歸命す人中の優者、

五

汝巧〔智〕を以て〔大衆を〕觀る。
非人亦汝を禮拜す。
こはわが常には聞かざる所、
されば斯くは言ふ、
『勝者瞿曇を禮せよ』、
勝者瞿曇を禮せん
明と行とを具有せる
瞿曇佛を禮せん』。
[4]死者〔並に〕兩舌を用ひ、
陰言をなすもの、
殘忍なる殺生者、
盜賊、欺瞞の輩を
〔伴ひ出せ〕と
いはる處、

これより『かの南の方』と
人のかく呼ぶ
この方を統ぶる彼の
譽高き大〔天〕王は
鳩槃茶鬼の主神にして、
毘樓勒と名乗る彼は
鳩槃茶鬼に護侍せられ、
舞と歌とによりて娯しむ。
彼には多くの兒あり、
同一名なりとわれは聞く。
九十と又一〔の兒等〕は
因陀羅と名づけて大力あり。
彼等亦佛陀——
日の族なる佛陀を見て、

六

偉大にして怖畏なき〔佛陀〕に
遠くより歸敬す。
汝に歸命す人中の尊貴者、
汝に歸命す人中の優者、
汝巧〔智〕を以て〔大衆を〕觀る。
非人亦汝を禮拜す。
こは余が常には聞かざる所、
されば斯くは言ふ、
『勝者瞿曇を禮せよ、
勝者瞿曇を禮せん、
明と行とを具有せる
瞿曇佛を禮せん』。
『アディティの子にして大なる
輪形をなせる太陽の沒する所、

199

彼没すれば
晝は消え失せ、
太陽沈みたる時は
「夜」と稱せらる。
そこなる湖は深くして
海には水夥し。
こゝに人は「海には水夥し」と
是の如くこれを知る。
これより「かの西の方」と、
人のかく呼ぶ、
この方を統ぶるかの
譽ある大〔天〕王は
那伽鬼の主神にして、
毘樓博叉（ヰルーパッカ）と名乗る彼は

那伽鬼に護侍せられ、
舞と歌とによりて娯しむ。
彼には多くの兒あり、
同一名なりと我は聞く。
九十と又一〔の兒等〕は
因陀羅と名づけて大力あり。
彼等亦佛陀――
日の族なる佛陀を見て、
偉大にして怖畏なき〔佛陀〕に
遠くより歸敬す。
汝に歸命す人中の尊貴者、
汝に歸命す人中の優者、
汝巧〔智〕を以て〔大衆を〕觀る。
非人亦汝を禮拜す。

七

こはわが常には聞かざる所、
されば斯くは言ふ、
『勝者瞿曇を禮せよ、
勝者瞿曇を禮せん、
明と行とを具有せる
瞿曇佛を禮せん』。
樂しき北拘盧
そこは見るに美はしき
大須彌〔山〕の〔聳ゆる處、
そこなる〕人人は
我意なく
繫著心なくして生く。
我等は種を蒔くことなく、
犂をも携ふることなし。

人人は耕さずして
熟する米を食ふ。
糠なく籾なくして清く
香好き稲米の實をば
❺石の竈にかけて炊ぎ、
それより炊ぎたるを食ふ。
牝牛を隻蹄〔の乗物〕となして
一處より一處へと巡行し、
牡牛を❻隻蹄〔の乗物〕となして
一處より一處へと巡行す。
女子の乗物を作りて
一處より一處へ巡行し、
男子の乗物を作りて
一處より一處へ巡行し、

童女の乘物を作りて
一處より一處へ巡行し、
童男の乘物を作りて
一處より一處へ巡行す。
彼等この王に奉事せる〔夜叉等〕は
乘物に騎りてあらゆる方向に轉行す。
象の乘物、馬の乘物、
天上の乘物も
宮殿、駕輿も亦譽高き
大〔天〕王に隨侍せり。
彼の〔天王〕の都城は
空中に化作され、
アーターナーター、クシナーター、
パラクシナーター、

ナータプリヤー、
パラクシタナーター〔と呼ぶ〕。
北方にはカピーヴンタ、
西には又ヂャノーガ、
ナヴナヴティヤ、
アンバラ、アンバラヴティヤ、
アーラカマンダーと
名づくる王都あり。
而して尊[7]よ、倶尾羅大〔天〕には
ギサーナーと呼ぶ王都あり、
それ故倶尾羅大〔天〕王は
毘沙門と稱せらる。
一一訪ねて〔大臣の名を〕
說き明す、〔謂く〕

タ[8]トーラー、タッタラー、タトータラー、
オーヂャシ、テーヂャシ、タトーヂャシ、
スーラ、ラーヂャ、アリッタ、ネーミ。
そこなる湖はダラニーと名づけ、
それより、雲湧き起り、雨落ち來る。
諸夜叉の集坐せるかの堂は
バガラヴティと名づけ、
そこには不斷に果實を結べる樹より、
様々の鳥群集へり、
孔雀、蒼鷺の鳴く音、
美妙なる拘耆羅、
そこには耆婆鳥の
「生きよ、「生きよ」と呼び、
それより「他の鳥の」

「心起きよ、心起きよ」と〔呼ぶ聲聞ゆ〕
ククッタカ、クリーラカ、
ボッカラサータカは森林内にあり。
能言鳥、九官鳥の聲こゝに〔聞え〕、
杖少年〔の聲〕亦〔聞ゆ〕
彼の倶尾羅蓮池は
常時不斷に美し。
これより『かの北の方』と、
人は斯くこれを呼ぶ、
この方を統ぶる
譽ある大〔天〕王は
夜叉鬼の主神にして
毘沙門と名乘る彼は
夜叉鬼に護侍せられ、

舞と歌とによりて娯しむ。
彼には多くの兒あり、
同一名なりとわれは聞く。
九十と又一〔の兒等〕は
因陀羅と名づけて大力あり。
彼等亦佛陀――
日の族なる佛陀を見て、
偉大にして怖畏なき〔佛陀〕に
遠くより歸命す。
汝に歸命す人中の尊貴者、
汝に歸命す人中の優者、
汝巧〔智〕を以て〔大衆を〕觀る。
非人亦汝を禮拜す。
こはわが常には聞かざる所、

されば斯くは言ふ、

「勝者瞿曇を禮せよ
勝者瞿曇を禮せん、
明と行とを具有せる
瞿曇佛を禮せん」。

203
八 尊よ、この阿吒曩胝の護經は、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の保護のため、守護のため、安全のため、安樂住のためなり。尊よ、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の中、何ものにても、この阿吒曩胝の護經をよく習ひ、よく學び覺えば、もしは非人夜叉、もしは夜叉女、もしは夜叉男子、もしは夜叉女兒、もしは夜叉大臣、もしは夜叉眷屬、もしは夜叉使人、もしは乾闥婆、もしは乾闥婆女……乃至……もしは鳩槃茶、もしは鳩槃茶女……乃至……もしは那伽、もしは那伽女……乃至……邪心を以て、或は比丘、或は比丘尼、或は優婆塞、或は優婆夷の行けるに隨ひて行き、立てるに接して立ち、坐せるに接して坐し、臥せるに接して臥することあらば、尊よ、かの非人夜叉は予の村邑聚落に於て恭敬尊重を獲ることなからん。尊よ、かの非人は予の都城なるアーラカマ

ンダーに於て、土地も住所も得ることとなからん。尊よ、彼の非人は、余の夜叉等の集會に加はることを得ざらん。尊よ、諸の非人等は、彼と嫁とり嫁やりもなさゞらん。而も尊よ、諸の非人等は、その身等の悪語を以て、飽くまで彼を罵らん。尊よ、諸の非人等は、❾空鉢を以て〔彼の〕頭に被せん。尊よ、諸の非人等は、彼の頭を碎きて七分となさん。

九　尊よ、非人の兇(あら)く、猛く、恐ろしきものあり。彼等は諸大〔天〕王を顧はず、諸大〔天〕王の大臣を顧はず、諸大〔天〕王の陪臣を顧はず。〔されば〕尊よ、これ等非人は、諸大〔天〕王に叛けるなりといはる。譬へば、尊よ、摩掲陀王の領土に大盗あり、これ等は摩掲陀王を顧はず、摩掲陀王の大臣を顧はず、摩掲陀王の陪臣を顧はず。このこれ等の大盗は摩掲陀王に叛けりといはるゝが如く、是の如く、尊よ、非人にして兇く、猛く、恐ろしきものあり。これ等は諸大〔天〕王を顧はず、諸大〔天〕王の大臣を顧はず、諸大〔天〕王の陪臣を顧はず。尊よ、これ等の非人は、諸大〔天〕王に叛けりと稱せらる。尊よ、如何なる非人夜叉にても、もしは夜叉女にても…乃至…邪心を以て、もしは比丘、もしは比丘尼、もしは優婆塞、もしは優婆夷の行けるに隨ひて行き、立てるに

接して立ち、坐せるに接して坐し、臥せるに接して臥することあらば、これ等の夜叉・大夜叉・軍帥・大軍帥をば罵き、呼び叫ぶべきなり。「この夜叉は〔吾等を〕捕へ、侵し、悩まし、害ひ、放さず」と。

一〇 如何なる夜叉・大夜叉・軍帥・大軍帥をば〔罵き、呼び叫ぶべきぞや〕。

インダ、ソーマ、ヴルナと、
バーラドヴヂャ、パヂャーパテイ、
チャンダナ、カーマセッタと、
キンヌガンドゥ、ニガンドゥと、
パナーダ、オーパマンニャと
天〔王〕の御者マータリと、
チッタセーナ乾闥婆と
ナラ、ヂャネーサバ王、
サーターギラ、ヘーマヴタと、
プンナカ、カラティヤ、グラ、

シーヴカ、ムチャリンダと、
ヹッサーミッタ、ユガンダラ、
ゴーパーラ、スッパゲーダと、
ヒリ、ネッティ、マンディヤ
パンチャーラチャンダ、アーラヴカ、
パッヂュンナ、スマナ、スムカ、
ダティムカ、マニ、マーニチャラ、ディーガ、
それよりセーリッサカと共に。
これ等の夜叉・大夜叉軍帥・大軍帥を魔き、呼び叫ぶべきなり。「この夜叉は〔吾等を〕捕へ、侵し、悩まし、害ひ、放たず」と云ひて。
一一　尊よ、これなるこの阿吒曩胝の護經は、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の保護のため、守護のため、安全のため、安樂住のためなり。
尊よ、いざ吾等は去らん、吾等には勤め多く事繁し」と。
「今、諸大〔天〕王よ、汝等意の欲する所に隨ひてなせ」。

ここに於て四大〔天〕王は、座より起ちて、世尊を敬禮し、右繞の禮を行ひて、その處に消え去りぬ。かの夜叉等も亦座を起ち、或は世尊を敬禮し、右繞の禮を行ひて、その處に消え去りぬ。或は世尊と共に會釋を行ひ、喜ばしき懇なる會釋の語を
206 交したる後、その處に消え去りぬ。或は世尊の居たまへる方に合掌を向けて、その處に消え去りぬ。或は默したるまゝ、その處に消え去りぬ。

一二　それより世尊は、その夜を過ぎて後、比丘等に告げて曰く、

「比丘等よ、昨夜、四大〔天〕王は、衆多の夜叉軍……

明眼にして光輝ある
毘婆尸〔佛〕に歸命す。
あらゆる有情を慈愍する
尸棄〔佛〕に歸命す。

…〔三以下の偈參照〕…

「尊よ、これなるこの阿吒曩胝の護經は……　或は默したるまゝ、その處に消え去りぬ。

一三　比丘等よ、阿吒曩胝の護經を學習せよ、阿吒曩胝の護經に熟せよ、阿吒曩胝の護經を保持せよ。比丘等よ、この阿吒曩胝の護經には利益あり、こは比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の保護のため、守護のため、安全のため、安樂住のためのものなり」。

世尊はこれを語げたまへり。喜びたる彼の比丘等は世尊の所說を歡受しぬ。

註❶人のにほひなく vijanavāta をば vi+jana+vāta と分解したり。

❷鴦耆羅 Sumaṅgala-Vilāsini (Siamese adition, vol. iii. p. 193) に支節 aṅga より光明 rasmi 發出するが故にアンギーラサと呼ぶと註す、これ素より俗解なり。Aṅgiras はヱーダ時代に出たる聖仙の名、それを佛の一稱呼となしたるが如し。

❸この二三行文法的には原文とよほどの相違あれど意味は變らずと信ず。註釋書の意によりて補譯したり、但註釋書によれば、兩舌を用ひず乃至瞿曇佛に歸敬する人に歸命すべしといふ。

❹死者及び兩舌を使ふもの、陰口を利くもの、殺生者、竊盜を働くもの、人を欺くもの等は城の南門より伴れ出されて、或は茶毘に附せられ、切られ、或は鞭たるる習慣なりしが如し。「中阿含」四卷波羅牢經に「又復見王收捕罪人、反縛兩手、打鼓唱令出南城門」の文あり、尤も同經に北城門より罪人をつれ出し、壍中に棄著することを說く。

❺石の竈にかけて炊ぎ (tundikire pacitvāna) 長阿含世記經、鬱單曰品に「其土常有自然釜鍑、有

摩尼珠、名日焔光、置於鍑下、飯熟光滅、不假樵火、不勞人功」と云ひ、中阿含第十二卷、鞞婆陵耆經に「大王、我便受鬱單日法、卽於鑊釜中、取藥飯而去」Sumaṅgala-Vilāsini, p. 196 にこれを說明して、「釜に入れ煙なき炭火にかけて炊ぐ、これを「光石」と呼ぶ、その石を三箇据え、その上に釜を置きて炊ぐに、石より光を發して米は自然に煮らるるといふ。

❻隻蹄〔の乘物〕 一の蹄を有てる馬に形どり、擬へて。

❼尊よ (mārisa) は喜語 (piyavacana) 敬語 (garuvacana) 等等、唯呼格のみにて現はる、天人の佛又は佛弟子を呼ぶに用ひらるること多く、稀に佛の天人又は佛弟子を呼ぶに用ひらる。
Rys Davids は dear sir と譯す。

❽これを yakkharaṭṭhika と呼ぶ、夜叉大臣なり。 註には十二とあれどここには十又は八を擧ぐるのみ。
ことに Vessavaṇa なる名詞は Visāṇā より來れりと解せんと試みるものの如くなるも、こは恐く不可能事にて、Vessavaṇa (梵 Vaiśravaṇa) は vi+savaṇa の變化に因るもの、而して savaṇa の語根は su (梵 śru) なれば、やはり「多聞廣聞」の意となるかと思ふ。 śru 〔正しくは sru) は「漏出、滲出」の意もあり、しかし Vessavaṇa をこれより來れりと解するも亦無理なるが如し。

❾空鉢を Sumaṅgala-Vilāsini (p. 201) に比丘たちの用ゐる鉢に似たる青銅製の鉢あり、それを頭に被せて首の本に至り、鐵杙を以てその中央を叩くといふ。一種の懲罰法か。この註を正しとすれば Rys Davids の They would bend doun his head like an empty bowl と譯せるは正しからず。

とうじゅきょう
等誦経 (Saṅgīti-sutta)

SC: Reciting in Concert

三三 等誦經（サンギーティ・スッタンタ）

是の如く、我聞く。

第一誦品

一　一時、佛は末羅（マッラ）族の間を遊行し、五百の大比丘衆と倶に在しき。次第に遊行して、波婆（パーヴァー）と呼ぶ末羅族の都にいたり、彼處の純陀（チュンダ）と名づくる鍛冶師❶の所有にかかる菴羅樹林中に住（とどま）らせ給ふ。

二　この時、恰も、波婆の末羅族らはウッバタカ❷と名づくる新公會堂を建てゝ久しからず、而も未だ曾て、沙門、婆羅門、乃至、如何なる人性も、これに住せしことあらざりき。

波婆の末羅族らの聞けらく、「佛は五百の大比丘衆と倶に末羅族の間を遊行して波婆に著し、彼處の純陀と呼べる鍛冶師が所有にかゝる菴羅樹林中に住まらせ給へり」と。

この時、波婆の末羅族らは、便ち、佛の所（みもと）に詣り、詣り已つて、佛を恭禮し、一方に坐せり。一方に坐し已りて、波婆の末羅族らは佛に白して言はく、

「世尊、波婆の末羅族らは、ウッバタカと名づくる公會堂を新に建立して久しからず、而も、未だ曾て沙門・婆羅門、その他の如何なる人もこれに住せず。願くは
208 世尊、これを世尊初めて受用し給へ。世尊の初めて受用し給ふことは、後に於て、波婆の末羅族らが永遠の利益と安樂とを得ることゝなるべし」と。

佛はこれを默然として許容し給へり。

三　この時、波婆の末羅族らは、佛の受諾し給へるを知り已りて、座より起つて、佛を恭禮し、右遶の禮をなしつゝ、かの公會堂に詣り、詣り已りて公會堂一面に敷物をしつらへ、敷物をしつらへ已つて、多くの座を設け、水瓮を置き、高く油燈をかゝげ、よつて〔再び〕佛の所（みもと）に詣り、詣り已つて、佛を恭禮して一方に立てり。一方に立つて、波婆の末羅族らは佛に白して言はく、

「世尊、公會堂は一面に敷物を設けられたり。諸の座は設けられ、水瓮は置かれ、油燈は掲げられたり。世尊、佛は時宜しと思召さば出御あらせ給へ」と。

四　この時、佛はすなはち下衣を整へ、鉢と上衣とをとり、比丘衆と俱に公會堂に詣り給ふ。詣り已つて、足を洗ひ、公會堂に入り、中央の柱によ[3]りつゝ、東方に向つて坐し給へり。諸の比丘衆も、亦、各、足を洗ひて公會堂に入り、西方の壁によりつ
209 ゝ東方に向つて而も佛を前にして坐せり。波婆の末羅族らは、亦、各、足を洗ひて、公會堂に入り、東方の壁によりつゝ、西方に向つて、同じく佛を前にして坐せり。この時、佛は夜の更くるまで、波婆の諸の末羅族らの爲に說法し給ひ、彼らを敎誡し、感奮せしめ、喜悅せしめ、慶悅せしめ、而して〔次の如く告げて、もつて〕去らしめ給ひぬ。

「ヴーセッタらよ、夜は更けたり。汝らは時宜しと思はゞ去るべし」。

「世尊、誠に然り」と。波婆の末羅族らは、佛〔の敎勅(おしへ)に〕從ひ、座より起つて、佛を恭禮し、右遶の禮をなしつゝ退き去れり。

五　この時、佛は便ち、末羅族らの去りて久しからず、孰れも默然としてある諸の比丘衆を遍く見そなはして、而も尊者舍利弗に告げて曰(のたま)はく、

「舍利弗よ、わが諸の比丘衆は惛沈と睡眠とを遠離したり。舍利弗よ、まさに志[4]

を起して、この諸の比丘衆の爲に說法せよ。我は背に痛あり。今少しく横[5]臥せん」。

「世尊、誠に然り」と、尊者舍利弗は則ち世尊に對えまつれり。

かくて、佛は僧伽胝衣を四にたゝみ、右脅を下にして、恰も獅子の臥するが[6]如くに臥し給ひぬ――〔一〕足を〔他の〕足の上にかさね、念を具し、正知ありて、〔自ら〕起想をいとなみ給ひつゝ。

210 六　この時、恰も、尼乾子(ニガンタナータプッタ)が波婆に於て死して間無し。而も、その死するや、諸の尼乾(ガンタ)の徒は分裂して二派となり、互に相鬪ひ、相諍ひ、こもごも鬪諍にまきこまれて、鋭き舌鋒を交へて相住せり。いへらく「汝はこの法と律とを知らざるも、我はこれを知る。〔將來とも〕如何にしてか、汝これを知ることあらむや」。「汝は邪行をなすも我は正行をなす」。わが言は理に應ずるも、汝の言は理に應ぜず」。「汝は前に言ふべきを後に言ひ、後に言ふべきを前に言へり」。「汝の熟慮せざりしことは直に顚覆せられたり」。「汝は言論を立てしも、負處に墮せり」。「汝の說を脫せんが爲に巡遊せよ、若し能ふべくむば、自ら解け」と。

思ふに、かくして、尼乾子の徒の間には、殺戮行はれん。然れば彼ら諸の尼乾子の在家白衣の弟子すら、尼乾子に對し、悉く厭忌し、譏❼慊し、違反し已つて、その狀、恰も正しく説かれざる、誤説せられたる、〔出離に〕導かざる、寂靜に至らしめざる、正等覺者によりて説かれざる法と律とに對する如く、又は依持處たり得ざる、破壞せる塔に對するが如くなりき。

七　この時、尊者舍利弗は諸の比丘衆に向つて語るらく、

「友よ、尼乾子は近く波婆邑に於て死せり。而も、その死するや、尼乾が徒は、分裂
して二派となり……乃至……依持處たり得ざる、破壞せる塔に對するが如し。「友よ、
詢に、かの正しく説かれざる、誤説せられたる、〔出離に導かざる、寂靜に至らしめざ
る、正等覺者によりて説かれざる、法と律とに於ては是の如し。されど、友よ、われ
211 らが佛の法は、正しく説かれたる、善説せられたる、〔出離に〕導引する、寂靜に至らし
むる、正等覺者によりて説かれたる所なり。〔故に〕、われらの一切は、今そを結集し
て、また紛諍なからしめざるべからず。蓋しこの梵行の永續し、久住せむことは、
多衆の利益、多衆の安樂、世間への慈愍、諸の天と人との義❽利と利益と安樂との爲

なるべし。

友よ、已に然らば、云何なるがわれらの佛の法なる。そは正しく説かれたる、善説せられたる、〔出離に〕導引する、寂靜に至らしむる、正等覺者によりて説かれたる所なり。〔故に〕、われらの一切は、今、そを結集して、また紛諍なからしめざるべからず。蓋しこの梵行の永續し、久住せむことは、多衆の利益、多衆の安樂、世間への慈愍、諸の天と人との義利と利益と安樂との爲なるべし。

友よ、正知者にして正見者たり、應供者にして正等覺者たる佛は、正しく一法を開示し給へり。〔故に〕、われらの一切は今そを結集して、また紛諍なからしめざるべからず。蓋しこの梵行の永續し、久住せむことは、多衆の利益、多衆の安樂、世間への慈愍、諸の天と人との義利と利益と安樂との爲なるべし。

八　一法とは云何。

一切の有情は食によりて住し、一切の有情は行[9]によりて住す。友よ、是の如く、正知者にして正見者たり、應供者にして正等覺者たる佛は、正しく一法を開示し給へり。〔故に〕われらの一切は、今そを結集して、また紛諍なからしめざるべから

慈愍、諸の天と人との義利と利益と安樂との爲なるべし。

九　友よ、正知者にして正見者たり、應供者にして正等覺者たる佛は、二法を開示し給へり。〔故に〕こゝに、われらの一切は、そを結集して…乃至…諸の天と人との義利と利益と安樂との爲なるべし。

二法とは云何。

一　名と色となり。

二　無明と有愛となり。

三　有見と無有見となり。

四　無慚と無愧となり。

五　慚と愧となり。

六　惡言と惡友となり。

七　善言と善友となり。

八　入罪善巧と出罪善巧となり。

九　等至〔に關する〕善巧と等至より起つ〔ことに關する〕善巧となり。

一〇　界〔に關する〕善巧と作意〔に關する〕善巧となり。

一一　處(しよ)〔に關する〕善巧と縁起〔に關する〕善巧となり。

一二　處(ことわり)〔に關する〕善巧と處に非ざること〔に關する〕善巧となり。

一三　質直と柔和となり。

一四　堪忍と可樂となり。

一五　和順と供養となり。

一六　無害と清淨となり。

一七　失念と不正知となり。

一八　念と正知となり。

一九　根門を護らざると、食の量を計らざるとなり。

二〇　根門を能く護ると、食の量を知るとなり。

二一　思惟力と修習力となり。

二二　念力と定力となり。

二三　止と觀となり。
二四　止相と精勤相となり。
二五　精勤と專念となり。
二六　戒成就と見成就となり。
二七　戒衰耗と見衰耗となり。
二八　戒淸淨と見淸淨となり。
二九　見淸淨と、見に依る精勤となり。
三〇　可厭處に於ける厭と、厭を生ずる爲の正精勤となり。
三一　善法に於て喜足せざると、[10]精勤に於て遮止せざるとなり。
三二　[11]明と解脫となり。
三三　盡智と無生智となり。

友よ、かの正知者にして正見者たり、應供者にして正等覺者たる佛は、此らの二法を正しく說き給へり。〔故に〕、こゝにわれらの一切は今、そを結集して……乃至……諸の天と人との義利と利益と安樂との爲なるべし。

一〇　友よ、詢に、かの正知者にして正見者たり、應供者にして正等覺者たる佛は、正しく三法を開示し給へり。〔故に〕こゝに、われらの一切は今そを結集して、…乃至…諸の天と人との義利と利益と安樂との爲なるべし。
三法とは云何。
一　三不善根〔あり。謂く〕貪不善根、瞋不善根、癡不善根なり。
二　三善根〔あり。謂く〕無貪善根、無瞋善根、無癡善根あり。
三　三惡行〔あり。謂く〕身惡行、語惡行、意惡行なり。
四　三善行〔あり。謂く〕身善行、語善行、意善行なり。
五　三不善尋〔あり。謂く〕欲尋、恚尋、害尋なり。
六　三善尋〔あり。謂く〕出離尋、無恚尋、無害尋なり。
七　三不善思〔あり。謂く〕欲思、恚思、害思なり。
八　三善思〔あり。謂く〕出離思、無恚思、無害思なり。
九　三不善想〔あり。謂く〕欲想、恚想、害想なり。
一〇　三善想〔あり。謂く〕出離想、無恚想、無害想なり。

一一　三不善界あり。謂く欲界、恚界、害界なり。
一二　三善界あり。謂く出離界、無恚界、無害界なり。
一三　復の三界あり。謂く欲界、色界、無色界なり。
一四　復の三界あり。謂く色界、無色界、滅界なり。
一五　復の三界あり。謂く劣界、中界、勝界なり。
一六　三愛あり。謂く欲愛、有愛、無有愛なり。
一七　復の三愛あり。謂く欲愛、色愛、無色愛なり。
一八　復の三愛あり。謂く色愛、無色愛、滅愛あり。
一九　三結あり。謂く有身見、疑、戒禁取なり。
二〇　三漏あり。謂く欲漏、有漏、無明漏なり。
二一　三有あり。謂く欲有、色有、無色有なり。
二二　三求あり。謂く欲求、有求、梵行求なり。
二三　三慢あり。謂く「われは勝る」との慢、「われは等し」との慢、「われは劣る」との慢なり。

二四　三時〔あり。謂く〕過去時、未來時、現在時なり。

二五　三邊〔あり。謂く〕有身邊、有身集邊、有身滅邊なり。

二六　三受〔あり。謂く〕樂受、苦受、非苦非樂受なり。

二七　三苦性〔あり。謂く〕苦苦の性、行苦の性、壞苦の性なり。

二八　三聚〔あり。謂く〕邪定聚、正定聚、不定聚なり。

二九　三疑〔あり。謂く〕過去の時に關して疑ひ猶豫し、[12]決意し得ず、平意なり難きと、未來の時に關して疑ひ…〔乃至〕…現在の時に關して疑ひ…〔乃至〕…。

三〇　如來の三不護〔あり。謂く〕友よ、如來は清淨の身行あり。如來の身惡行の、『これを他の知ることなかれ』とて、藏護し給ふべきものなし。友よ、如來は清淨の語行あり。如來の語惡行の、『これを他の知ることなかれ』とて、藏護し給ふべきものなし。友よ、如來は清淨の意行あり。如來の意惡行の…〔乃至〕…。

三一　三障〔あり。謂く〕貪障、瞋障、癡障なり。

三二　三火〔あり。謂く〕貪火、瞋火、癡火なり。

三三　復の三火〔あり。謂く〕供養火、居士火、惠施火なり。

三四　三種の色聚〔あり。謂く〕有見有對色、無色有對色、無見無對色なり。

三五　三行〔あり。謂く〕福行、非福行、不動行なり。

三六　三人〔あり。謂く〕學人、無學人、非學非無學人なり。

三七　三長老〔あり。謂く〕生長老、法長老、認定の長老なり。

三八　三福業事〔あり。謂く〕施行福業事、戒行福業事、修行福業事なり。

三九　三擧罪事〔あり。謂く〕見によると、聞によると、疑によるとなり。

四〇　三欲生〔あり。謂く〕友よ、諸の有情あり、現前の欲を受け、現前の欲に於て自在力あり。例へば人及び一分の天、並に、一分の險難處者の如し。これ第一欲生なり。友よ、諸の有情あり、〔自ら〕化作せる欲を受け、彼らは〔自ら〕盛に化作しつゝ、欲に於て自在力あり。例へば化樂天の如し。これ第二欲生なり。友よ、諸の有情あり、他が化作したる欲を受け、彼らは他の化作せる欲に於て自在力あり。例へば他化自在天の如し。これ第三欲生なり。

四一　三樂生〔あり。謂く〕友よ、諸の有情あり、盛[13]に禪定樂を起しつゝ住す。例へば梵衆天の如し。これ第一樂生なり。友よ、諸の有情あり、樂に遍潤せられ、遍

滿せられ、充滿せられ、遍溢せられ、彼らは便ち時々に感激の語を發して曰く、『あはれ、樂なるかな。あはれ、樂なるかな』と。例へば光音天の如し。これ第二樂生なり。友よ、諸の有情あり、樂に遍潤せられ、遍滿せられ、充滿せられ、遍溢せられ、彼ら
219 はかくて滿足し已つて、樂を感受す。例へば遍淨天の如し。これ第三樂生なり。

四二　三慧あり。謂く學の慧、無學の慧、非學非無學の慧なり。

四三　復の三慧あり。謂く思所成の慧、聞所成の慧、修所成の慧なり。

四四　三仗あり。謂く聞仗、離仗、慧仗なり。

四五　三根あり。謂く未知當知根、已知根、具知根なり。

四六　三眼あり。謂く肉眼、天眼、慧眼なり。

四七　三學あり。謂く增上戒學、增上心學、增上慧學なり。

四八　三修あり。謂く身修、心修、慧修なり。

四九　三無上あり。謂く見無上、行無上、解脱無上なり。

五〇　三定あり。謂く有尋有伺定、無尋唯伺定、無尋無伺定なり。

五一　復の三定あり。謂く空定、無相定、無願定なり。

五二　三淸淨あり。謂く身淸淨、語淸淨、意淸淨なり。
五三　三寂默あり。謂く身寂默、語寂默、意寂默なり。
五四　三善巧あり。謂く增益善巧、損益善巧、方便善巧なり。
五五　三憍あり。謂く無病憍、年壯憍、活命憍なり。
五六　三增上あり。謂く我增上、世增上、法增上なり。
五七　三論事あり。謂く過去の時に關して、此の言說を爲さんが如し。「過去時には是の如くありき」と。未來の時に關して、此の言說を爲さんが如し。「未來時には是の如くなるべし」と。今の現在の時に關して、此の言說を爲さんが如し。「今の現在には、是の如くあり」と。
五八　三明あり。謂く過去に於ける所住を隨念する智の明。諸の有情の死と生とに關しての智の明。諸漏の滅盡に關しての智の明なり。
五九　三住あり。謂く天住、梵住、聖住なり。
六〇　三神變あり。謂く神通神變、知他心神變、敎誡神變なり。
友よ、かの正知者にして正見者たり、應供者にして正等覺者たる佛は正しく是

の如きの諸の三法を開示し給へり。故に…乃至…諸の天と人との義利と利益と安樂との爲なるべし。

221 一一　友よ、かの正知者にして正見者たり、應供者にして正等覺者たる佛は、正しく四法を開示し給へり…〔乃至〕…。

四〔法〕とは云何。

一　四念處〔あり。謂く〕友よ、ここに比丘あり、身に於て、身を隨觀して住し、精勤にして、正知と念とあり、もつて世の貪と憂とを斷ず。受に於て……心に於て……法に於て、法を隨觀して住し、精勤にして、正知と念と有り、もつて、世の貪と憂とを斷ず。

二　四正勤〔あり。謂く〕友よ、ここに比丘あり。未生の惡・不善の諸法を不生ならしむべく、欲を起し、精進し、發勤し、策心し、持心す。已生の惡・不善の諸法を斷ずべく、欲を起し、精進し…〔乃至〕…未生の善の諸法を生ぜしむべく…〔乃至〕…已生の善の諸法を住せしめ、失はざらしめ、倍增せしめ、廣大せしめ、修習せしめ、圓滿せしむべく、欲を起し、精進し、發勤し、策心し、持心す。

三　四神足〔あり〕。謂く〕友よ、ここに比丘あり、欲三昧地勤行成就神足を修す。
222 心三昧地勤行成就神足を修す。精進三昧地勤行成就神足を修す。思惟三昧地
勤行成就神足を修す。

四　四靜慮〔あり〕。謂く〕友よ、ここに比丘あり。欲を離れ、諸の不善法を離れ、尋有り伺有り、離より生ぜる喜と樂とある初靜慮を成就して住す。尋と伺を滅し、內心を靜穩に歸し、心の一境相を得、〔かくて〕、尋無く伺無く、三昧地所生の喜と樂とある第二靜慮を成就して住す。喜を離れ、捨なる者として住し、念を具し、正知あり、身によりて樂を覺受し、諸の聖者が「捨にして、念を具し、樂住するもの」と稱する第三靜慮を成就して住す。樂を斷じ、並に苦を斷じ、乃至、さきにありたる喜と憂とをも滅して、苦無く樂無く、捨念の清淨なる第四靜慮を成就して住す。

五　四定修〔あり〕。謂く〕友よ、定修あり。〔もし〕修習し、多く所作すれば、現法樂住に導く。友よ、定修あり、〔もし〕修習し、多く所作すれば、智と見との獲得に導く。友よ、定修あり、〔もし〕修習し、多く所作すれば、〔正〕念と正智とに導く。友よ、定修あり、〔もし〕修習し、多く所作すれば、諸漏の滅盡に導く。〔爾らば〕、友よ、定修あり、〔もし〕修

習し、多く所作すれば、現法楽住に導くとは云何。〔謂く〕友よ、ここに比丘あり、欲よ
り離れ、諸の不善法より離れ、初静慮を成就して住し、…乃至…第二静慮を…乃至
…第三静慮を…乃至…第四静慮を成就して住す。これ、友よ、定修あり、〔もし〕修習
223 し、多く所作すれば、現法楽住に導くなり。友よ、定修あり、〔もし〕修習し、多く所作
すれば、智と見との獲得に導くとは云何。〔謂く〕、友よ、ここに比丘あり、光明想を作
意し、日想を専作し、夜も晝の如く観じ、〔逆に〕晝も夜の如く〔観じ〕、かくて、明徹・諒々
の心もて光明暉々たる心を修す。これ、友よ、定修あり…〔乃至〕…智と見との獲得
に導くなり。友よ、…〔乃至〕…〔正〕念と正知とに導くとは云何。〔謂く〕友よ、ここに比
丘あり、受の生起を了知し、住を了知し、滅を了知し、想の…〔乃至〕…尋の…〔乃至〕…こ
れ、友よ、…〔乃至〕…〔正〕念と正知とに導くなり。友よ、…… 諸漏の滅盡に導くとは云
何。〔謂く〕友よ、ここに比丘あり、五取蘊に於て、生と滅とを観じて住す。曰く、これ
色なり。これ色の集なり。これ色の滅なり。これ受…〔乃至〕…これ想…乃至…
これ行…乃至…これ識なり。これ識の集なり。これ識の 滅なりと。これ、友よ、
…〔乃至〕…諸漏の滅盡に導くなり。

六　四無量〔あり〕。謂く〕友よ、ここに比丘あり、慈倶行の心もて一方に遍蔽して住し、是の如く、第二、第三、第四〔方〕も〔然り〕。かくて上、下、横、一切處、一切方、一切の一世界に、慈倶行の、廣大、大廣博、無量、無怨、無憂の心もて遍蔽して住す。悲倶行の心もて…乃至…喜倶行の心もて…乃至…捨倶行の心もて…乃至…。

224

七　四無色〔あり〕。謂く〕友よ、ここに比丘あり、一切の色想を超越し、有對想を滅し、種々想を作意せずして、「虚空は無限なり」とて、空無邊處を成就して住す。一切の空無邊處を超越し、「識は無邊なり」とて、識無邊處を成就して住す。一切の識無邊處を超越し、「何ものもあること無し」とて、無所有處を成就して住す。一切の無所有處を超越し、非想非々想處を成就して住す。

八　四依〔あり〕。謂く〕友よ、ここに比丘あり、一〔法〕を思惟して受用す。一〔法〕を思惟して忍受す。一〔法〕を思惟して遠避す。一〔法〕を思惟して遣除す。

九　四聖種〔あり〕。謂く〕友よ、ここに比丘あり、隨つて得る所の衣服もて喜足し、且、かく隨つて得る所の衣服もて喜足することを讃歎し、衣服の因縁の故に、不當、不應〔の方法〕に陷ること無く〔もし〕衣服を獲ざるも懊惱せず。獲るも、また、染著せ

ず、迷悶せず、無罪にして、過患を見、出要の慧もて受用す。更に、隨つて得る所の衣服もて喜足することの爲に、自ら慢ずることも無く、他を𣢾蔑することも無し。詢に、是の如きの善巧あり、精勤あり、正知と正念とあるの比丘は、友よ、古昔以來の、第一聖種に住するものと名づく。

225 次に復、友よ、比丘あり、隨つて得る所の飲食もて喜足し…〔乃至〕…次に復、友よ、比丘あり、隨つて得る所の房舍もて喜足し…乃至…次に復、友よ、比丘あり、斷を樂び斷を愛し、修を樂び修を愛す。而も、〔彼は〕、斷を樂び斷を愛し、修を樂び修を愛するが爲に、自ら慢ずること無く、他を𣢾蔑することも無し。詢に、是の如きの善巧有り、精勤あり、正知と正念とあるの比丘は、友よ、古昔以來の第一聖種に住するものと名づく。

一〇　四勤〔あり〕。謂く、律儀勤、斷勤、修勤、隨護勤なり。律儀勤とは云何。〔謂く〕友よ、ここに比丘あり、眼もて色を見已りて、相を取らず隨相を取らず。かくして、226 もし、該眼根を制御することなくして住せば、貪・憂・罪・不善の諸法の隨起すべきにつき、能くそれの制御に入り、眼根を護り、眼根の制御に入る。耳もて聲を聞き已りて…乃至…鼻もて香を齅ぎ已りて……舌もて味を嘗め已りて……身もて觸

を覺し已りて……意もて法を認識し已りて……〔乃至〕……。友よ、是を律儀勤といふ。斷勤とは云何。〔謂く〕、友よ、ここに比丘あり。已生の欲尋を忍容せず、斷じ、滅し、遠離し、無有ならしめ、已生の恚尋を……已生の害尋を……諸の已生の惡・不善法を……〔乃至〕……友よ、是を斷勤といふ。修勤とは云何。〔謂く〕友よ、ここに比丘あり、念等覺支を修す。これ離の依なり、離欲の依なり、滅の依なり、捨離の成熟者なり。擇法等覺支を修す。これ離の依なり……乃至……精進等覺支を修す……喜等覺支を修す……輕安等覚支を修す……定等覚支を修す……捨等覚支を修す。これ離の依なり、離欲の依なり、滅の依なり、捨離の成熟者なり。友よ、是を修斷といふ。隨護勤とは云何。〔謂く〕友よ、ここに比丘あり、已生の善の定相を隨護す。〔謂く〕骨想、蟲噉想、青瘀想、敗壞想、脹膨想なり。友よ、是を隨護勤といふ。

一一　四智〔あり〕。謂く、法智、類智、他心智、世俗智なり。

一二　復、四智〔あり〕。謂く、苦智、集智、滅智、道智なり。

一三　四預流向支〔あり〕。謂く、善士との親近、正法の聽受、如理の作意、法・隨法行なり。

228

一四　四預流果支〔あり。謂く〕友よ、ここに聖弟子あり、佛陀に於て不動の信を成就す。卽ち、是の如くかの佛は應供者なり、正等覺者なり、明行足者なり、善逝者なり、世間解者なり、無上師なり、調御丈夫者なり、人・天の師なり、佛・世尊なりと。法に於て不動の信を成就す。卽ち、佛の善說し給へるの法は、現見にして、時を超越し、近づいて觀ぜしめずんばやまず、引導し、唯、智者のみの親しく諒知すべき所なりと。僧伽に於て不動の信を成就す。卽ち、佛の聖弟子の僧伽は、妙行を具足し、質直行を具足し、如理行を具足し、正行を具足し、所謂、四雙八輩すべての佛の聖弟子の僧伽はこれ恭敬すべく、尊重すべく、布施すべく、合掌禮拜すべく、世の無上の福田たりと。聖所愛の戒を成就す。これ、所壞に非ず、所損無く、〔能く人を〕自在にし、智者は讚歎し、染汙無く、定に導くものたり。

一五　四沙門果〔あり。謂く〕預流果、一來果、不還果、阿羅漢果なり。

一六　四界〔あり。謂く〕地界、水界、火界、風界なり。

一七　四食〔あり。謂く〕、段食若しは麤、若しは細なり。第二に解〔食〕、第三に意思〔食〕、第四に識食なり。

一八　四識住〔あり。謂く〕友よ、色を縁として、識は竪立し、色を境とし色を依とし喜を座として、増長し、増盛し、増廣す。友よ、受を縁として……友よ、想を縁として……友よ、行を縁として、識は竪立し、行を境とし、行を依とし、喜を座として、増長し、増盛し、増廣す。

一九　四不行處行〔あり。謂く〕、貪不行處行、瞋不行處行、癡不行處行、怖不行處行なり。

二〇　四愛生〔あり。謂く〕友よ、衣服を因として比丘に愛生ず。友よ、飲食を因として比丘に愛生ず。友よ、房舍を因として比丘に愛生ず。友よ、更に、有・無有を因として比丘に愛生ず。

二一　四行〔あり。謂く〕苦遲通行、苦速通行、樂遲通行、樂速通行なり。

229 二二　復、四行〔あり。謂く〕不堪忍行、堪忍行、調伏行、寂靜行なり。

二三　四法足〔あり。謂く〕無貪法足、無恚法足、正念法足、正定法足なり。

二四　四法受〔あり。謂く〕友よ、法受あり、現に苦にして、當來にも苦報あり。友よ、法受あり、現に苦にして、當來には樂報あり。友よ、法受あり、現に樂にして、當來

には苦報あり。友よ、法受あり、現に樂にして、當來にも樂報あり。

二五　四法蘊〔あり。謂く〕、戒蘊、定蘊、慧蘊、解脱蘊なり。

二六　四力〔あり。謂く〕、勤力、念力、定力、慧力なり。

二七　四處あり。謂く〕、慧處、諦處、捨處、止息處なり。

二八　四記問〔あり。謂く〕、一向記問、分別記問、反詰記問、應捨記問なり。

二九　四業〔あり。謂く〕、友よ、業あり、黑にして黑報あり。友よ、業あり、白にして白報あり。友よ、業あり、黑白にして黑白報あり。友よ、業あり、非黑非白にして非黑非白の報あり、業の斷盡に向つて轉ず。

三〇　四應證法〔あり。謂く〕宿住〔の事〕は應に念によつて證すべし。死生〔の事〕は應に眼によつて證すべし。八解脱は應に身によつて證すべし。漏の盡は慧によりて證すべし。

三一　四瀑流〔あり。謂く〕欲瀑流、有瀑流、見瀑流、無明瀑流なり。

三二　四軛〔あり。謂く〕、欲軛、有軛、見軛、無明軛なり。

三三　四離軛〔あり。謂く〕、欲軛よりの離軛、有軛よりの離軛、見軛よりの離軛、無

明軛よりの離軛なり。

三四　四繫あり。謂く、貪身繫、恚身繫、戒禁取身繫、此實執身繫なり。

三五　四取あり。謂く、欲取、見取、戒禁取、我語取なり。

三六　四生あり。謂く、卵生、胎生、濕生、化生なり。

三七　四入胎あり。謂く、友よ、一類あり、正知せずして母胎中に入り、正知せずして、母胎中に住し、正知せずして、母胎中より出づ。是を第一入胎となす。友よ、次に、復一類あり、正知して母胎に入り、而も、正知せずして母胎中に住し、正知せずして母胎中より出づ。是を第二入胎となす。友よ、次に、復一類あり、正知して母胎中に入り、正知して母胎中に住し、而も正知せずして母胎中より出づ。是を第三入胎となす。友よ、次に、復一類あり、正知して母胎中に入り、正知して母胎中に住し、正知して母胎中より出づ。是を第四入胎と爲す。

三八　四自體得あり。謂く、友よ、自體得あり、自らの思の作用する所にして、他が思には非ず。友よ、自體得あり、他が思の作用する所にして、自らの思には非ず。友よ、自體得あり、自らの思と他が思と倶に作用す。友よ、自體得あり、自らの思も、

他が思も倶に作用せず。

三九　四施浄〔あり。謂く〕友よ、施あり、施者〔此を〕浄にして、受者には非ず。友よ、施あり、受者〔此を〕浄にして、施者には非ず。友よ、施あり、施者と受者と倶に〔此を〕浄
232 にせず。友よ、施あり、施者と受者と倶に〔此を〕浄にす。

四〇　四攝事〔あり。謂く〕布施、愛語、利行、同事なり。

四一　四非聖言〔あり。謂く〕虚誑語、離間語、麤悪語、雑穢語なり。

四二　四聖言〔あり。謂く〕離虚誑語、離離間語、離麤悪語、離雑穢語なり。

四三　復、四非聖言〔あり。謂く〕見ざるを見るといふこと、聞かざるを聞くといふこと、覺せざるを覺すといふこと、識らざるを識るといふことなり。

四四　復、四聖言〔あり。謂く〕見ざるを見ずといふこと、聞かざるを聞かずといふこと、覺せざるを覺せずといふこと、識らさるを識らずといふことなり。

四五　復、四非聖言〔あり。謂く〕見るを見ずといふこと、聞くを聞かずといふこと、覺せるを覺せずといふこと、識るを識らずといふことなり。

四六　復、四聖言〔あり。謂く〕見るを見るといふこと、聞くを聞くといふこと、覺

せるを覺すといふこと、識るを識るといふことなり。

四七　四人〔あり。謂く〕友よ、一類の人あり、自らを苦しめ、勤めて自らを苦しむ。友よ、一類の人あり、他を苦しめ、勤めて他を苦しむ。友よ、一類の人あり、自らを苦しめ、勤めて自らを苦しめ、また、他を苦しめ、勤めて他を苦しむ。友よ、一類の人あり、自らを苦しむるに非ず。勤めて自らを苦しむるに非ず。また、他を苦しむるに非ず、勤めて他を苦しむるに非ず。彼は自らを苦しめず、他を苦しめずして、現
233 在世に於て、欲を斷じ、滅盡し、淸凉たり、樂を覺し、自ら聖性となりて住す。

四八　復、四人〔あり。謂く〕友よ、一類の人あり、自利行ありて、利他〔行〕に非ず。友よ、一類の人あり、利他行ありて、自利〔行〕に非ず。友よ、一類の人あり、自利行も非ずまた、利他〔行〕も非ず。友よ、一類の人あり、自利行もあり、また、利他〔行〕もあり。

四九　復、四人〔あり。謂く〕闇にして闇に赴く。闇にして明に赴く。明にして闇に赴く。明にして明に赴くなり。

五〇　復、四人〔あり。謂く〕不動沙門、赤蓮華沙門、白蓮華沙門、妙軟沙門なり。友よ、かの正知者にして正見者たり、應供者にして正等覺者たる佛は正しくこ

れらの四法を開示し給へり。〔故に〕…乃至…諸の天と人との義利と利益と安樂との爲なるべし」。

第二誦品

一　「友よ、かの正知者にして正見者たり、應供者にして正等覺者たる佛は正しく五法を開示し給へり。〔故に〕…乃至…諸の天と人との義利と利益と安樂との爲なるべし。

五法とは云何。

一　五蘊〔あり。謂く〕色蘊、受蘊、想蘊、行蘊、識蘊なり。

二　五取蘊〔あり。謂く〕色取蘊、受取蘊、想取蘊、行取蘊、識取蘊なり。

三　五欲功德〔あり。謂く〕眼所識の識は可愛、可喜、可樂、可意にして、能く欲を齎し、また能く染著せしむ。耳所識の聲は……鼻所識の香は……舌所識の味は……身所識の觸は可愛、可喜、可樂、可意にして、能く欲を齎し、また能く染著せしむ。

四　五趣あり。謂く、地獄、畜生、餓鬼、人、天なり。

五　五慳あり。謂く、住處慳、家慳、利得慳、色慳、法慳なり。

六　五蓋あり。謂く、欲貪蓋、瞋恚蓋、惛沈・睡眠蓋、掉擧惡作蓋、疑蓋なり。

七　五下分結あり。謂く、有身見、疑、戒禁取、欲貪、瞋恚なり。

八　五上分結あり。謂く、色貪、無色貪、慢、掉擧、無明なり。

九[18]　五學處あり。謂く、離殺生、離不與取、離欲邪行、離虚誑語、離窣羅(スーラ)[15]・迷麗耶(メーラヤ)[16]・末陀(マッジャ)[17]等諸放逸處なり。

一〇　五不能處あり。謂く、友よ、漏盡の比丘は故意に生者の命を斷ずること能はず。漏盡の比丘は與えられざるに、盜心もて取ること能はず。漏盡の比丘は婬欲法を行ずること能はず。漏盡の比丘は正知して虚誑語を說くこと能はず。漏盡の比丘は蓄積せるものを——譬へば、前の在家時の如く——愛欲意もて受用すること能はず。

一一　五損失あり。謂く、親屬損失、財損失、病損失、戒損失、見損失なり。友よ、諸の有情はその親屬損失を因とし、財損失を因とし、病損失を因としては、身壞命終

の後、無幸處、惡趣、險難處、地獄には生ぜず。〔然れども〕、友よ、諸の有情は、その戒損失を因としては、身壞命終の後、無幸處、惡趣、險難處、地獄に生ず。

一二　五成就〔あり〕。謂く、親屬成就、財成就、無病成就、戒成就、見成就なり。友よ、諸の有情は、その親屬成就を因とし、財成就を因とし、無病成就を因としては、身壞命終の後、善趣、天界に生ぜず。〔然れども〕、友よ、諸の有情は、その戒成就を因とし、見成就を因としては、身壞命終の後、善趣、天界に生ず。

一三　惡戒・犯戒者の五患〔あり〕。謂く、友よ、惡戒・犯戒の者は放逸を因として、財富の大損失を來す。是を惡戒・犯戒者の第一患と爲す。復、次に、友よ、惡戒・犯戒の者は惡名稱流布す。是を惡戒・犯戒者の第二患と爲す。復、次に、友よ、惡戒犯戒の者は諸の衆、〔卽ち〕刹帝利衆、婆羅門衆、居士衆、沙門衆等の何れにもあれ、これに近づくに、〔中に於て〕、怖畏を得、(19)意安らかならず。是を惡戒・犯戒者の第三患と爲す。復、次に、友よ、惡戒・犯戒の者は、迷亂にして命終す。是を惡戒・犯戒者の第四患と爲す。復、次に、友よ、惡戒・犯戒の者は身壞命終の後、無幸處、惡趣、險難處、地獄に生ず。是を惡戒・犯戒者の第五患と爲す。

一四　具戒・持戒者の五功德〔あり〕。〔謂く〕友よ、具戒・持戒の者は不放逸を因として、大財富聚を得。是を具戒・持戒者の第一功德と爲す。復、次に、友よ、具戒・持戒の者は善名稱流布す。是を具戒・持戒者の第二功德と爲す。復、次に、友よ、具戒・持戒の者は諸の衆、〔卽ち〕刹帝利衆、婆羅門衆、居士衆、沙門衆等の何れにもあれ、これに近づくに、〔中に於て〕、離怖畏を得、心、安らかなるを得。是を具戒・持戒者の第三功德と爲す。復、次に、友よ、具戒・持戒の者は正念にして命終す。是を具戒・持戒者の第四功德と爲す。復、次に、友よ、具戒・持戒の者は身壞命終の後、善趣、天界に生ず。是を具戒・持戒者の第五功德と爲す。

一五　友よ、叱責する比丘の、他を叱責せむと欲するときは、五法の內心に現前するありて、應に他を叱責すべし。〔謂く〕『我は應時に語るべく、非時には語らず』。『我は應に實を語るべく、不實を語らず』。『我は應に柔和の語をなすべく、麤惡の語をなさず』。『我は應に義と相應するの語をなすべく、義と相應せざる語をなさず』。
237 『我は應に慈心もて語るべく、瞋恚を懷いて語らず』と。友よ、叱責する比丘の、他を叱責せむと欲するときは、應にこれらの五法の內心に現前するありて、他を叱責

すべきなり。

一六　五勤支〔あり。謂く〕友よ、ここに比丘あり、信ありて、如來の覺(さとり)を信ず。謂く、是の如く彼佛は應供者なり、正等覺者なり、明行足者なり、善逝者なり、世間解者なり、無上師なり、調御丈夫者なり人・天の師なり、覺者なり、世尊なりと。〔復、次に〕、無病にして疾無く、放熱平等の消化器を成就して、冷きに過ぎず、熱きに失せず、詢に中庸を得て、精進に堪ゆ。〔復、次に〕、諂ること無く、誑(たばか)ること無く、〔大〕師、及び、有智の同梵行者の前に於て、如實に、自らを顯現す。〔復、次に〕、不善法を斷ずるが爲、善法を成就するが爲に、專念精進して住し、力有り、勢有り、常に諸の善法中に繫軛〔せられて住す〕。〔復、次に〕、慧を具して、生滅〔觀〕に趣くべきの慧を成就す。此は、これ、聖にして、決擇〔に趣き〕正しく、苦の盡に趣く。

一七　五淨居〔あり。謂く〕無煩〔天〕、無熱〔天〕、善現〔天〕、善見〔天〕阿迦膩吒〔天〕なり。

一八　五不還〔あり。謂く〕中般涅槃、生般涅槃、無行般涅槃、有行般涅槃、上流趣阿迦尼吒なり。[20]

一九　五心蕪〔あり。謂く〕友よ、ここに比丘あり、〔大〕師に於て疑あり、危懼あり、勝

解ある能はず、心浄安なる能はず。友よ、もし比丘あり、是の如く、〔大〕師に於て疑あり、危懼あり、勝解ある能はず、心浄安なる能はずんば、彼が心は熱勤、專念、堪忍、精勤に向つて趣向せず。是の如く、心の熱勤、專念、堪忍、精勤に趣向せずんば、是を第一の心蕪と爲す。復、次に、友よ、ここに比丘あり、法に於て疑あり、危懼あり……乃至……〔是を第二の心蕪と爲す。復、次に、友よ、ここに比丘あり〕、僧衆に於て疑あり……〔是を第三の心蕪と爲す。復、次に、友よ、ここに比丘あり〕、學處について疑あり……〔是を第四の心蕪と爲す。復、次に、友よ、ここに比丘あり〕、同梵行者の間に於て、恚心あり、不喜心あり、心の動ずるあり、蕪心生ず。友よ、もし比丘あり、同梵行者の間に於て恚心あり、不喜心あり、心の動ずるあり、蕪心生ずることあらば、彼が心は熱勤、專念、堪忍、精勤に向つて趣向せず。是の如く、その心の熱勤、專念、堪忍、精勤に向つて趣向せずんば、是を第五の心蕪と爲す。

二〇　五心縛〔あり。謂く〕友よ、ここに比丘あり、愛欲に於て貪を離れず、欲を離れず、愛を離れず、渇心を離れず、熱惱を離れず、渇愛を離れず。友よ、もし比丘あり、愛欲に於て貪を離れず、欲を離れず、愛を離れず、渇心を離れず、熱惱を離れず、渇愛

239

を離れずんば、彼が心は熱勤、專念、堪忍、精勤に向つて趣向せず。〔而も〕その心の、かく〔熱勤、專念、堪忍、精勤に向つて〕趣向せずんば、是を第一の心縛と爲す。復、次に、友よ、ここに比丘あり、身に於て貪を離れず…乃至…是を第二の心縛と爲す。復、次に、友よ、ここに比丘あり、色に於て貪を離れず…乃至…是を第三の心縛と爲す。〔復、次に、〕友よ、ここに比丘あり、胃の欲するだけを取食して、勝樂、觸樂、眠樂を享受しつゝ住す。……〔是を第四の心縛と爲す〕。復、次に、友よ、ここに比丘あり、一類の諸天衆たらむことを祈願して、梵行を修す。謂く、『我は是等の禁、戒、苦行、梵行もて、天或は天の類たらむ』と。友よ、比丘あり、是の如く、一類の諸天衆たらむことを祈願して梵行を修す。謂く、『我は是等の禁、戒、苦行、梵行もて天或は天の類たらむ』と。是の如き〔比丘〕の心は熱勤、專念、堪忍、精勤に向つて趣向せず。而も、その〔心の、かく、熱勤、專心、堪忍、精勤に向つて趣向せずんば〕是を第五の心縛と爲す。

二一　五根〔あり。謂く〕眼根、耳根、鼻根、舌根、身根なり。

二二　復、五根〔あり。謂く〕樂根、苦根、喜根、憂根、捨根なり。

二三　復、五根〔あり。謂く〕信根、精進根、念根、定根、慧根なり。

240

二四　五出離界〔あり。　謂く〕友よ、ここに比丘の、欲を思惟するときも、その心は欲に趣入せず、信樂（しんげう）せず、安住せず、[21]引牽せられず。　而も、それよりの捨離を思惟するときは、則ち、その心は捨離に能く趣入し、信樂し、安住し、引牽せらる。　便ち、彼の是の如きの心は欲より善く離れ、善く修し、善く起り、善く解脱し、善く離繫し、かくて凡そ欲を緣と爲して生ずる限りの諸の漏、損害、熱惱は、それよりすべて離脱し、彼は斷えて〔それらに由る〕受を受すること無し。　是を欲よりの出離と名づく。復、次に、友よ、ここに比丘は瞋を思惟するときも、その心は瞋に趣入せず…〔乃至〕…是を瞋よりの出離と名づく。　復、次に、友よ、ここに比丘は害を思惟するときも、その心は害に趣入せず…〔乃至〕…是を害よりの出離と名づく。　復、次に、友よ、ここに比丘は色を思惟するときも、その心は色に趣入せず…〔乃至〕…是を色よりの出離と名づく。　復、次に、友よ、ここに比丘は有身を思惟するときも、その心は有身に趣入せず、信樂せず、安住せず、引牽せられず。　而も、それよりの捨離を思惟するときは、則ち、その心は捨離に能く趣入し、信樂し、安住し、引牽せらる。　便ち、彼の是の如きの心は欲より善く離れ、善く修し、善く起り、善く解脱し、善く離繫し、かくて凡そ

241

有身を緣と爲して生ずる限りの諸の漏、損害、熱惱は、すべてそれより離脫し、彼は絶えて〔それらに由る〕受を受すること無し。是を有身よりの出離と名づく。

二五　五解脫處あり。謂く、友よ、ここに〔大〕師〔佛〕又は隨一の尊重すべき同梵行者ありて、比丘の爲に法を說く。友よ、かく〔大〕師或は隨一の尊重すべき同梵行者ありて、比丘の爲に法を說くに、その所說に從ひて、彼はその法に於て義を覺知し、法を覺知す。而して、かく義を覺知し、法を覺知するものには欣心生ず。欣〔心〕あるものには喜〔心〕生ず。喜心あるものには、身、靜穩に歸す。身靜穩なれば樂受あり。樂あるものは、心、定す。是を第一解脫處と爲す。復、次に、友よ、〔大〕師又は隨一の尊重すべき同梵行者ありて、比丘の爲に法を說くに非ず。而も、正しく所聞のまゝ、憶持のまゝに、詳しく法を他が爲に說く。友よ、比丘ありて、かく所聞のまゝ、憶持のまゝに、詳しく法を他が爲に說くに、その所說に從ひて、彼はその法に於て義を覺知し、法を覺知す…〔乃至〕…是を第二解脫處と爲す。復、次に、友よ、〔大〕師或は隨一の同梵行者ありて、比丘の爲に法を說くに非ず、且所聞のまゝ、憶持のまゝに、詳しく法を他が爲に說くにも非ず。而も、所聞のまゝ、憶持のまゝに、詳しく法を讀誦す。

友よ、比丘あり、かく所聞のまゝ、憶持のまゝに、詳しく法を讀誦するに、その讀誦に從ひて、彼はその法に於て義を覺知し、法を覺知す…〔乃至〕…是を第三解脫處と爲[242]す。復、次に、友よ、〔大〕師或は隨一の同梵行者ありて、比丘の爲に法を說くに非ず。所聞のまゝ、憶持のまゝに、詳しく法を他が爲に說くにも非ず。且、所聞のまゝ、憶持のまゝに、詳しく法を讀誦するにも非ず。而も、所聞のまゝ、憶念のまゝに法を心に於て隨尋し、隨伺し、意に於て隨觀す。友よ、比丘あり、かく、所聞のまゝ、憶持のまゝに法を心に於て隨尋し、隨伺し、意に於て隨觀するに、それらに從ひて、彼はその法に於て義を覺知し、法を覺知す…〔乃至〕…是を第四解脫處と名づく。復、次に、友よ、〔大〕師或は隨一の尊重すべき同梵行者ありて、比丘の爲に法を說くに非ず。所聞のまゝ、憶持のまゝに、詳しく法を他が爲に說くに非ず。所聞のまゝ、憶持のまゝに詳しく法を讀誦するに非ず。且、所聞のまゝ、憶持のまゝに、法を心に於て隨尋し、隨伺し、意に於て隨觀するにも非ず。而も、能く、慧もて、隨一の[22]定相を善く取り、善く作意し、善く念持し、善く通達す。友よ、比丘あり、かく能く慧もて隨一の定相を善く取り、善く作意し、善く念持し、善く通達するに、それらに從ひて、彼はそ

の法に於て義を覺知し、法を覺知す。而して、かく、義を覺知し、法を覺知するものには欣〔心〕生ず。欣心あるものには喜〔心〕生ず。喜心あるものには、身、静穏に歸す。

243 身、静穏なれば樂受あり。樂あるものは、心、定す。是を第五解脱處と爲す。

二六　五解脱成熟想〔あり〕。〔謂く〕無常想、無常苦想、苦無我想、斷想、離貪想なり。友よ、かの正知者にして正見者たり、應供者にして正等覺者たる佛は正しくこれ等の五法を開示し給へり。〔故に〕…〔乃至〕…。

二　友よ、かの正知者にして正見者たり、應供者にして正等覺者たる佛は正しく此等の諸の六法を開示し給へり…〔乃至〕…。

六法とは云何。

一　六内處〔あり〕。〔謂く〕眼處、耳處、鼻處、舌處、身處、意處なり。

二　六外處〔あり〕。〔謂く〕色處、聲處、香處、味處、觸處、法處なり。

三　六識身〔あり〕。〔謂く〕眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識なり。

四　六觸身〔あり〕。〔謂く〕眼觸、耳觸、鼻觸、舌觸、身觸、意觸なり。

244 五　六受身〔あり〕。〔謂く〕眼觸所生の受、耳觸所生の受、鼻觸所生の受、舌觸所生の

受、身觸所生の受、意觸所生の受なり。

六 六想身〔あり。謂く〕色想、聲想、香想、味想、觸想、法想なり。

七 六思身〔あり。謂く〕色思、聲思、香思、味思、觸思、法思なり。

八 六愛身〔あり。謂く〕色愛、聲愛、香愛、味愛、觸愛、法愛なり。

九 六不恭敬〔あり。謂く〕友よ、ここに比丘あり。〔大〕師に於て恭敬せずして住し、また隨順ならず。法に於て恭敬せずして住し、また隨順ならず。僧伽に於て恭敬せずして住し、また隨順ならず。學處に於て恭敬せずして住し、また隨順ならず。不放逸に於て恭敬せずして住し、また隨順ならず。交友に於て恭敬せずして住し、また隨順ならず。

一〇 六恭敬〔あり。謂く〕友よ、ここに比丘あり。〔大〕師に於て恭敬ありて住し、また隨順なり。法に於て…〔乃至〕…僧伽に於て…〔乃至〕…學處に於て…〔乃至〕…不放逸に於て…〔乃至〕…交友に於て…〔乃至〕…。

一一 六喜近伺〔あり。謂く〕眼もて色を見已りて、喜を齎す色を近伺す。耳もて聲を聞き已りて……鼻もて香を齅ぎ已りて……舌もて味を嘗め已りて……

身もて觸を觸し已りて……意もて法を識し已りて、喜を齎す法を近伺す。

一二　六憂近伺〔あり〕。謂く〕眼もて色を見已りて、憂を齎す色を近伺す。〔耳もて聲を聞き已りて……鼻もて香を齅ぎ已りて……舌もて味を嘗め已りて……身もて觸を觸し已りて……〕意もて法を識し已りて、憂を齎す法を近伺す。

一三　六捨近伺〔あり〕。謂く〕眼もて色を見已りて、捨を齎す色を近伺す。耳もて聲を聞き已りて……鼻もて香を齅ぎ已りて……舌もて味を嘗め已りて……身もて觸を觸し已りて……意もて法を識し已りて、捨を齎す法を近伺す。

一四　六和敬法〔あり〕。謂く〕友よ、ここに比丘あり、同梵行者の間に於て、陽に陰に、慈身業を興す。是の如きの和敬法は能く愛を齎し、恭敬を齎し、能く攝受と無諍と和合と一趣とに導くなり。復、次に、友よ、ここに比丘あり…〔乃至〕…慈語業を興す…〔乃至〕…。復、次に、友よ、ここに比丘あり…〔乃至〕…慈意業を興す…〔乃至〕…。復、次に、友よ、ここに比丘あり、如法の所得、如法の所獲、鉢中所受のものまでも、獲得する所のまゝに、具戒の同梵行者と共に、相俱に受用せざれば止まず、相伴ふて受用せざれば止まず。是の如きの和敬法は、能く愛を齎し、恭敬を齎し…〔乃至〕…。

復、次に、友よ、ここに比丘あり、彼此の諸戒の無壞、無斷、無雜、無瑕にして、〔能く人を〕自由にし、智者は稱讚し、穢無く、定に導く、是の如きの諸戒の間に於て、諸の同梵行者と相連れて、陽に陰に、平等に受持して住す。是の如きの和敬法は…〔乃至〕…。復、次に、友よ、ここに比丘あり、彼此の見の、神聖にして、導引し、これあるの人を能く正盡苦に誘ふ。是の如きの諸見の間に於て、諸の同梵行者と相連れて、陽に陰に、平等に修學して住す。是の如きの和敬法は能く愛を齎し、恭敬を齎し、能く攝受と無諍と和合と一趣とに導くなり。

一五　六諍根〔あり。謂く〕友よ、ここに比丘ありて忿有り、恨有り。友よ、比丘のかく忿あり、恨あるものは、〔大〕師に於て尊重せずして住し、また隨順ならず。法に於て尊重せずして住し、また隨順ならず。僧伽に於て恭敬せずして住し、また隨順ならず。學處に於ても、また圓滿究竟すること無し。友よ、もし比丘あり、かく〔大〕師に於て恭敬せずして住し、また隨順ならず。法に於て…〔乃至〕…僧伽に於て…〔乃至〕…學處に於ても、また圓滿究竟することなければ、則ち、僧伽に於て鬪諍を興す。人あり、かく鬪諍を起さば、多衆の不利を齎し、多衆の非樂を齎し、多衆の非

義を齎し、人・天の不和と苦とを齎す。友よ、汝等は是の如きの諍根を〔自らの〕内外に於て、周遍觀察せよ。而して、友よ、汝等はそこに斯かる惡諍根を斷ぜむが爲に精勤すべし。友よ、汝等もし、是の如きの諍根を〔自らの〕内外に於て周遍觀察すること無ければ、友よ、その時、汝等はその惡諍根を將來除却すること能はざるに到らむ。かの惡諍根の斷は、蓋し是の如し。かの惡諍根の將來除却すべからざるの事も、亦、是の如し。復、次に、友よ、ここに比丘ありて覆あり、惱あり……。〔復、次に、友よ、ここに比丘ありて〕嫉あり、慳あり……。〔復、次に、友よ、ここに比丘ありて〕誑あり諂あり……。〔復、次に、友よ、ここに比丘ありて〕惡悕望あり、邪見あり……。〔復、次に、友よ、ここに比丘ありて〕自らの所見に取著し、堅守して、棄捨せしむべからず。友よ、比丘の斯く自らの所見に取著し、堅守して、棄捨せしむべからざるものは、〔大〕師に於て尊重せずして住し、また隨順ならず。法に於て…〔乃至〕…僧伽に於て…乃至…學處に於ても、また圓滿究竟すること無し。友よ、もし比丘あり、かく〔大〕師に於て尊重せずして住し、また隨順ならず…〔乃至〕…學處に於ても、また圓滿究竟すること無ければ、則ち、僧伽に於て鬪諍を興す。友よ、人あり、かく鬪諍を起さば、

248

多衆の不利を齎し、多衆の非樂を齎し、[2]多衆の非義を齎し、人・天の不利と苦とを齎す。友よ、汝等は是の如きの諍根を〔自らの〕内外に於て周遍觀察せよ。而して、友よ、汝等はそこにかゝる惡諍根を斷ぜむが爲に精勤すべし。友よ、汝等もし是の如きの諍根を、〔自らの〕内外に於て周遍觀察すること無ければ、友よ、その時、汝等はその惡諍根を將來、除却すること能はざるに至らむ。かの惡諍根の斷は、蓋し、是の如し。かの惡諍根の將來、除却すべからざるの事も、亦、是の如し。

一六　六界〔あり〕。謂く〕地界、水界、火界、風界、空界、識界なり。

一七　六出離界〔あり〕。謂く〕友よ、ここに比丘あり、是の如く言はむが如し、『我は慈心解脫を修習し、多く所作し、所乘と爲し、所因と爲し、行じ、數修(そくしふ)し、善く精勤せり。而も我が心は、尙ほ瞋恚ありて纏縛して住す』と。人は應に彼に告げて言ふべし、『是の如く〔なる〕こと勿れ。尊者よ、是の如く言ふべからず。佛を咎責すること勿れ。佛を咎責することは最も善(よろ)しからず。佛は〔恐らく〕、是の如くは言はれざるべし』と。友よ、處(ことわり)も無く所容(いはれ)もなし。凡そ、慈心解脫を修習し、多く所作し、所乘と爲し、所因と爲し、行じ、數修(そくしふ)し、善く精勤して、尙ほその時、その心の瞋恚の爲に

纒縛せられて住せむとは。是の如きことは、處あること無し。友よ、慈心解脫はこれ卽ち瞋恚よりの出離に外ならず。復、次に、友よ、ここに比丘あり、是の如く言はむが如し、『我は悲心解脫を修習…〔乃至〕…而も、我が心は尙ほ害〔心〕ありて、纒縛して住す』と…〔乃至〕…友よ、悲心解脫は、これ卽ち、害〔心〕よりの出離に外ならず。復、次に、友よ、ここに比丘あり、是の如く言はむが如し、『我は喜心解脫を修習し…〔乃至〕…而も、我が心は尙ほ不樂ありて纒縛して住す』と…〔乃至〕…友よ、喜心解脫は、これ則ち、不樂よりの出離に外ならず。復、次に、友よ、ここに比丘あり、是の如く言はむが如し、『我は捨心解脫を修習し…〔乃至〕…而も、我が心は貪ありて纒縛して住す』と…〔乃至〕…友よ、捨心解脫はこれ卽ち、貪よりの出離に外ならず。復、次に、友よ、ここに比丘あり、是の如く言はむが如し、『我は無相心解脫を修習し…〔乃至〕…而も、我が心は尙ほ隨相識あり』と…〔乃至〕…友よ、無相心解脫はこれ則ち、一切相よりの出離に外ならず。復、次に、友よ、比丘あり、是の如く言はむが如し、『我は我あり〔との見〕を遠離せり。我はこれなりと周遍觀見すること無し。而も、我が心は、尙ほ疑、狐疑の箭ありて纒縛して住す』と。人は應に彼に告げて言ふべし、『是の如くなること

250 勿れ。尊者よ、是の如く言ふべからず。佛を咎責すること勿れ。佛を咎責することは最も善しからず。佛は、恐らく、是の如くは言はれざるべし」と。友よ、處も無く、所容もなし。凡そ、「我あり」との見を遠離し、「我はこれなり」と周遍觀見することなくして、而も、尚ほ、その心の、疑、狐疑の箭ありて纏縛せむとは。是の如きは處あること無し。友よ、「我あり」との慢の遠離はこれ則ち、疑、狐疑の箭よりの出離に外ならず。

一八　六無上〔あり。謂く〕見無上、聞無上、利得無上、戒無上、行無上、憶念無上なり。

一九　六隨念處〔あり。謂く〕念佛、念法、念僧、念戒、念施、念天なり。

二〇　六恒住〔あり。謂く〕友よ、ここに比丘あり、眼もて色を見已りて喜ばず、又、憂へず、捨〔心〕にして住し、念あり、正知あり。耳もて聲を聞き已りて……鼻もて香を齅ぎ已りて……舌もて味を嘗め已りて……身もて所觸を觸し已りて……意もて法を識し已りて喜ばず、又、憂へず、捨〔心〕にして住し、念あり、正知あり。

251 二一　六生類〔あり。謂く〕、友よ、ここに一類の沙門は黑生類にして、黑法を生ず。友よ、ここに一類の沙門は黑生類にして、白法を生ず。友よ、ここに一類の沙門は

黑生類にして非黑非白の涅槃を生ず。友よ、ここに一類の沙門は白生類にして白法を生ず。友よ、ここに一類の沙門は白生類にして黑法を生ず。友よ、ここに一類の沙門は白生類にして非黑非白の涅槃を生ず。

二二 六決擇分想あり。謂く、無常想、無常苦想、苦非我想、斷想、離貪想、滅想なり。

「友よ、かの正知者にして正見者たる應供者にして正等覺者たる佛は正しく六法を開示し給へり。故に…〔乃至〕…。

三 友よ、…〔乃至〕…佛は諸の七法を正しく開示し給へり。故に…〔乃至〕…。

七〔法〕とは云何。

一 七財あり。謂く信財、戒財、慚財、愧財、聞財、施財、慧財なり。

二 七等覺支あり。謂く念等覺支、擇法等覺支、精進等覺支、喜等覺支、輕安等覺支、定等覺支、捨等覺支なり。

三 七定具あり。謂く正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念なり。

四 七非正法あり。謂く友よ、ここに比丘あり、不信なり、無慚なり、無愧なり、少聞なり、懈怠なり、多忘なり、無慧なり。

五　七正法〔あり。謂く〕友よ、ここに比丘あり、信あり、慚あり、愧あり、多聞なり、勤めて精進す、念現前す、具慧なり。

六　七善士法〔あり。謂く〕友よ、ここに比丘あり、法を知る、義を知る、自らを知る、量を知る、時を知る、衆を知る、人を知る。

七　七殊妙事〔あり。謂く〕友よ、ここに比丘あり、學處を受持することに於て熱求し、當來に於て、學處を受持することより離るゝこと勿らむと渴望す。法を視察することに於て…〔乃至〕…悕望を調伏することに於て…〔乃至〕…閑居に於て…〔乃至〕…勤めて精進することに於て…〔乃至〕…具念明察なることに於て…〔乃至〕…
253 見解あることに於て熱求し、當來に於て、見解より離るゝこと勿らむことを渴望す。

八　七想〔あり。謂く〕無常想、無我想、不淨想、患想、斷想、離貪想、滅想なり。

九　七力〔あり。謂く〕信力、精進力、慚力、愧力、念力、定力、慧力なり。

一〇　七識住〔あり。謂く〕友よ、諸の有情あり、種々の身を具し、種々の想を備ふ。例へば、諸の人、一類の天、及び、一類の險難處者の如し。是を、第一識住と爲す。友

よ、諸の有情あり、種々の身を具し、一種の想を備ふ。例へば、梵衆天の最初生時の如し。是を第二識住と爲す。友よ、諸の有情あり、一種の身を具し、種々の想を備ふ。例へば光音天の如し。是を第三識住と爲す。友よ、諸の有情あり、一種の身を具し、一種の想を備ふ。例へば、遍淨天の如し。是を第四識住と爲す。友よ、諸の有情あり、一切種の色想を超越し、有對想を滅し、種々の想をば作意せず。『虛空は無邊なり』とて、空無邊處を成就す。是を第五識住と爲す。友よ、諸の有情あり、一切の空無邊處を超え、『識は無邊なり』とて、識無邊處を成就す。是を第六識住と爲す。友よ、諸の有情あり、一切の識無邊處を超越し、『何ものもあること無し』とて、無所有處を成就す。是を、第七識住と爲す。

一一　七應供人あり。謂く倶分解脫、慧解脫、身證、見至、信解脫、隨法行、隨信行なり。

一二　七隨眠あり。謂く欲貪隨眠、瞋隨眠、見隨眠、疑隨眠、慢隨眠、有貪隨眠、無明隨眠なり。

一三　七結あり。謂く愛結、瞋結、見結、疑結、慢結、有貪結、無明結なり。

一四　七止諍〔法あり〕能く所起の諍訟をとゞむべく、また治すべし。〔謂く〕現前毘奈耶を與ふべし。憶念毘奈耶を與ふべし。不癡毘奈耶を與ふべし。自認によつて行ぜらるべし。多數決〔法〕なり。求其罪處〔法〕なり。草覆地〔法〕なり。友よ、…〔乃至〕…佛は此らの諸の七法を正しく開示し給へり。〔故に〕…〔乃至〕…。

第三誦品

三　友よ、…〔乃至〕…佛は正しく諸の八法を開示し給へり。故に…〔乃至〕…。八〔法〕とは云何。

一　八邪〔あり〕。謂く、邪見、邪思、邪語、邪業、邪命、邪精進、邪念、邪定なり。

二　八正〔あり〕。謂く、正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定なり。

三　八應供人〔あり〕。謂く、預流〔人〕、預流果應證位成就〔人〕、[24]一來〔人〕、一來果應證位成就〔人〕、不還〔人〕、不還果應證位成就〔人〕、阿羅漢〔人〕、阿羅漢〔果應證位成就人〕なり。

四　八懈怠事〔あり〕。謂く、友よ、ここに比丘ある〔が如し〕。事業の作すべきあり。乃ち所爲らく、『我は事業の應に作すべきあり。而も、我が身はその事業を作すこ

こによりて疲憊すべし。今寧ろ臥憩せむ』と。彼は便ち臥憩して未だ得ざるを得むが爲、未だ至らざるに至らむが爲、未だ證せざるを證せむが爲に、勤めて精進することを爲さず。是を第一懈怠事と爲す。復、次に、友よ、ここに比丘ある〔が如し〕。已に事業を作す。乃ち所爲らく、『我は已に事業を作せり。而も我が身はその事業を作すことによりて疲憊せり。今寧ろ臥憩せむ』と。彼は便ち臥憩して…乃至…是を第二懈怠事と爲す。復、次に、友よ、ここに比丘ある〔が如し〕。應に道路を行くべし。乃ち所爲らく、『我は應に道路を行くべし。而も我が身はその道路を行くことによりて疲憊すべし。今寧ろ臥憩せむ』と。彼は便ち臥憩して……是を第三懈怠事と爲す。復、次に、友よ、ここに比丘ある〔が如し〕。已に道路を行けり。乃ち所爲らく、『我は已に道路を行けり。而も我が身はその道路を行くことによりて疲憊せり。今寧ろ臥憩せむ』と…〔乃至〕…是を第四懈怠事と爲す。復、次に、友よ、ここに比丘ある〔が如し〕。若しは町若しは村を行乞して、好悪の食を十[25]二分に得ず。乃ち所爲らく、『我は若しは町若しは村を行乞して、好悪の食を十二分に得ず。而も爲に我が身は疲憊して、事業に堪ゆること無し。今寧ろ臥憩せ

む』と…〔乃至〕…是を第五懈怠事と爲す。復、次に、友よ、ここに比丘ある〔が如し〕。若しは町若しは村を行乞して、好惡の食を十二分に受く、乃ち所爲らく、『我は若しは町若しは村に行乞して、好惡の食を十二分に受けたり。而も爲に我が身は疲憊して、事業に堪ゆること無し。今寧ろ臥憩せむ』と…〔乃至〕…是を第六懈怠事と爲す。復、次に、比丘ある〔が如し〕。少疾の起れるあり。乃ち所爲らく、『我は少疾の起れるあり。臥し憩ふことふさはしかるべし。今寧ろ臥憩せむ』と…〔乃至〕…是を第七懈怠事と爲す。復、次に、友よ、ここに比丘ある〔が如し〕。病癒え、疾醫して久からず。乃ち所爲らく、『我は病癒え、疾醫して久からず。而も爲に我が身は力弱くして、事業に適せず。今寧ろ臥憩せむ』と。彼は便ち臥憩して、未だ得ざるを得むが爲、未だ至らざるに至らむが爲、未だ證せざるを證せむが爲に勤めて精進することを爲さず。是を第八懈怠事と爲す。

五　八精進事〔あり〕。謂く、友よ、ここに比丘ある〔が如し〕。事業の作すべきあり。乃ち所爲らく、『我は事業の應に作すべきあり。而も、我の事業を作すに際しては、諸佛の敎法を思惟すること、容易ならず。今寧ろ未だ得ざるを得むが爲、未だ至

らざるに至らむが爲、未だ證せざるを證せむが爲に、勤めて精進すべし」と。彼は便ち未だ得ざるを得むが爲、未だ至らざるに至らむが爲、未だ證せざるを證せむが爲に、勤めて精進す。是を第一精進事と爲す。復、次に、友よ、ここに比丘ある〔が
257
如し〕。已に事業を作せり。乃ち所爲らく、「我は已に事業を作せり。而も我の事業を作すに際しては、諸佛の敎法を思惟すること能はざりき。今寧ろ…〔乃至〕…是を第二精進事と爲す。復、次に、友よ、ここに比丘ある〔が如し〕。道路を行くべし。乃ち所爲らく、「我は應に道路を行くべし。而も我の道路を行くに際しては、諸佛の敎法を思惟すること容易ならず。今寧ろ…〔乃至〕…是を第三精進事と爲す。復、次に、友よ、ここに比丘ある〔が如し〕。已に道路を行けり。乃ち所爲らく、「我は已に道路を行けり。而も我の道路を行くに際しては、諸佛の敎法を思惟すること能はざりき。今寧ろ…〔乃至〕…是を第四精進事と爲す。復、次に、友よ、ここに比丘ある〔が如し〕。若しは町若しは村に行乞して、好惡の食を十二分に得ず。乃ち所爲らく、「我は若しは町若しは村を行乞して、好惡の食を十二分に得ず。而も爲に我が身は輕く能く事業に堪ゆ。今寧ろ…〔乃至〕…是を第五精進事と爲す。復、次

に、友よ、ここに比丘あるが如し」。若しは町若しは村に行乞して、好惡の食を十二分に受く。乃ち所爲らく、『我は若しは町若しは村を行乞して、好惡の食を十二分に受く。而も爲に我が身は力を具し、能く事業に堪ゆ。今寧ろ…〔乃至〕…是を第六精進事と爲す。復次に、友よ、ここに比丘ある〔が如し〕。少疾起れり。乃ち所爲らく、『我は少疾起れり。而も我が疾の增盛ならむことも、その處（ことわり）なしとせず。今
258 寧ろ…〔乃至〕…是を第七精進事と爲す。復次に、友よ、ここに比丘ある〔が如し〕。病癒え、疾醫して久しからず。乃ち所爲らく、『我は病癒え、疾醫して久しからず。而も我が病の再起し來らむことも、その處（ことわり）なしとせず。今寧ろ…〔乃至〕…是を第八精進事と爲す。

六　八施事〔あり。謂く〕近づくによりて施をなす。怖畏の爲に施をなす。『彼は我に施せり』とて施をなす。『我に施すことあるべし』とて施をなす。『施は善なり』とて施をなす。『我は炊ぐ。されど彼らは炊がず。而も、我は炊ぎて、炊がざるものに施をなさざるは相應（ふさは）しきことに非ず』とて施をなす。『我は此の施をなす時には善き名稱流布せん』とて施をなす。心の莊嚴の爲、心の資助の爲に施をな

259

す。

七　八施生〔あり。謂く〕ここに一類あり、若しは沙門、若しは婆羅門に施を惠施す。謂く、飮食、衣服、車乘、華鬘、薫香、塗香、床坐、房舍、燈明等なり。彼はその惠施する所〔の果報〕あらむことを希望す。謂く、彼は刹帝利の大家、婆羅門の大家、乃至、居士の大家の、五欲功德を以て充滿、具足・供御せられたるを見、所爲らく、『あはれ、冀くは我が身壞命終の後、刹帝利の大家、婆羅門の大家、乃至、居士の大家のともがらに受生し得むことを』と。彼はその心を定め、その心を安住せしめ、その心を修す。而も、爲に、その心は下[26]者に於て解脫するも、進むで修せらるゝこと無くしてその生[27]處に向つて轉ず。是の如きを、我はまた具戒者の〔心〕と名づけて、惡戒者のそれには非ず。而も、友よ、具戒者の心願は清淨にして〔常に〕成就せらる。復、次に、友よ、ここに一類あり。若しは沙門若しは婆羅門に…〔乃至〕…而も、彼は所聞あり、曰く、四大王〔衆〕天は長壽にして麗しく、その樂饒多なりと。仍つて所爲らく…〔乃至〕…復、次に、友よ、ここに一類あり…〔乃至〕…而も彼は所聞あり、曰く、三十三天は……〔復、次に、友よ、……而も彼は所聞あり、曰く〕、夜摩天は……〔復、次に、友よ……而も彼は所聞

あり、曰く〕、覩史多天は……〔復、次に、友よ、……而も彼は所聞あり、曰く〕、樂變化天は……〔復、次に、友よ、……而も彼は所聞あり、曰く〕他化自在天は…〔乃至〕…復、次に、友よ、ここに一類あり、若しは沙門、若しは婆羅門に施をなす。〔謂く〕、飲食、衣服、車乘、華鬘、薫香、塗香、床坐、房舍、燈明等なり。彼はその施す所の果報あらむことを希望す。而も彼は便ち所聞あり。曰く、梵衆天は長壽にして麗しく、その樂、饒多なりと。仍つて彼の所爲らく、『あはれ、冀くは、我が身壞命終の後、梵衆天のともがらに受生し得むことを』と。彼はその心を定め、その心を安住せしめ、その心を修す。而も、爲に、その心は是の如きの下者に於て解脱するも、進むで修せらるゝことなく、その生處に向つて轉ず。是の如きを、また我は具戒者の〔心〕と名づけて、惡戒者のそ
260 れには非ず。離貪者のそれと名づけて、具貪者のそれには非ず。而も、友よ、[28]具戒・離貪の者の心願は清淨にして、〔常に〕成就せらる。

八　八衆〔あり〕。謂く〕刹帝利衆、婆羅門衆、居士衆、沙門衆、四大王衆、三十三〔天〕衆、魔〔天〕衆、梵〔天〕衆なり。

九　八世法〔あり〕。謂く〕得と不得と名聲と惡聲と誹謗と稱譽と樂と苦となり。

一〇　八勝處〔あり。謂く〕一人あり、内に色想あり。外に、些少の好惡の色の諸の色を見る。而も、これら〔諸の色に對して〕勝自在力を得已りて、便ち、『我は見、我は知る』と是の如きの想あり。是を第一勝處と爲す。一人あり、内に色想あり。外に無量の、好惡の色の諸の色を見る。而も…〔乃至〕…是を第二勝處と爲す。一人あり、内に無色想あり。外に些少の好惡の色の諸の色を見る。而も…〔乃至〕…是を第三勝處と爲す。一人あり、内に無色想あり、外に好惡の色の諸の色を見る。而も…〔乃至〕…是を第四勝處と爲す。一人あり、内に無色想あり。外に青、青色、青澤、青光の諸の色を見る。例へば、青、青色、青澤、青光の烏莫迦花の如く、或は、青、青色、青澤、青光の、兩面柔滑なる波羅奈衣の如し。是の如く、一人あり、内に色想あり、外に青、青色、青澤、青光の色を見る。而も…〔乃至〕…是を第五勝處と爲す。一人あり、内に無色想あり、外に黄、黄色、黄澤、黄光の諸の色を見る。例へば黄、黄澤、黄光の羯尼迦花の如し。是の如く…〔乃至〕…是を第六勝處と爲す。一人あり、内に無色想あり。外に赤、赤色、赤澤、赤光の諸の色を見る。例へば赤、赤色、赤澤、赤光の槃豆時縛迦花の如く、或は、赤、赤色、赤澤、赤光の、兩面柔滑なる波羅奈衣の如し。是の如く、

一人あり、内に無色想あり、外に赤、赤色、赤澤、赤光の諸の色を見る。而も…〔乃至〕…是を第七勝處と爲す。一人あり、内に無色想あり、外に白、白色、白澤、白光の諸の色を見る。例へば白、白色、白澤、白光の烏沙斯（オーサディ）星の如く、或は、白、白色、白澤、白光の、兩面柔滑なる波羅奈衣の如し。是の如く、一人あり、内に無色想あり、外に白、白色、白澤、白光の諸の色を見る。而も、それらの〔諸色に對〕して勝自在力を得已りて、便ち、『我は知り、我は見る』と是の如きの想あり。是を第八勝處と爲す。

一一　八解脫〔あり〕。謂く、若し(29)有色にして諸色を觀る、これ第一解脫なり。一人あり、内に無色想あり、外の諸色を觀る、これ第二解脫なり。『清淨なり』との勝解あり、これ第三解脫なり。一切の色想を超え、有對想を滅し、種々の想を作意せず、『空は無邊なり』とて、空無邊處を成就して住す。これ第四解脫なり。一切の無所有處を超え、『識は無邊なり』とて、識無邊處を成就して住す。これ第五解脫なり。一切の識無邊處を超え、『何ものもあること無し』とて、無所有處を成就して住す。これ第六解脫なり。一切の無所有處を超え、非想非非想處を成就して住す。これ第七解脫なり。一切の非想非非想處を超え、想受滅を成就して住す。これ第

八解脱なり。

友よ…〔乃至〕…佛は是の如きの諸の八法を正しく開示し給へり。〔故に〕…〔乃至〕…。

二 友よ…〔乃至〕…佛は諸の九法を、正しく開示し給へり。〔故に〕…〔乃至〕…。

九〔法〕とは云何。

一　九害心事〔あり。謂く〕『彼は我に不饒益をなせり』とて害心を結ぶ。『彼は我に不饒益をなす』とて害心を結ぶ。『彼は我が所愛・可意の者に不饒益を作せり』〔とて害心を結ぶ。『彼は我が所愛・可意のものに不饒益を作す』とて……『彼は我が所愛・可意のものに〕不饒益を作すべし』とて害心を結ぶ。『彼は我が愛せざるもの、不快の者に、饒益を作せり』とて……〔『彼は我が愛せざるもの、不快のものに〕饒益を作す』とて……〔『彼は我が愛せざるもの、不快のものに〕饒益を作すべし』とて害心を結ぶ。

二　九害心調伏〔あり。謂く〕『彼は我に不饒益を作せり。而も、如何にして是のことありしか』と〔反省し〕て害心を調伏す。『彼は我に不饒益を作すべし。而も、

263 如何にして是のことありしか」と〔反省し〕て、害心を調伏す。「彼は我に不饒益を作すべし。而も如何にして是のことありしか」と〔反省し〕て害心を調伏す。「彼は我が所愛・可意の者に不饒益を作せり。而も……〔「彼は我が所愛・可意の者に〕、不饒益を作す。而も……〔「彼は我が所愛・可意の者に〕不饒益を作すべし。而も…〔乃至〕…「彼は我が愛せざるもの、不快の者に饒益を作せり。而も……〔「彼は我が愛せざるもの、不快の者に〕饒益を作す。而も……〔「彼は我が愛せざるもの、不快のものに〕饒益を作すべし。而も、如何にして、是のことありしか」と〔反省し〕て、害心を調伏す。

三　九有情居〔あり〕。謂く〕友よ、諸の有情あり、種々の身と種々の想とを有す。例へば、諸の人と、一分の諸天と、一分の険難処の者との如し。これ、第一有情居なり。友よ、諸の有情あり、種々の身と一種の想とを有す。例へば、梵衆天の最初生時のもの丶如し。これ、第二有情居なり。友よ、諸の有情あり、一種の身と種々の想とを有す。例へば諸の光音天の如し。これ、第三有情居なり。友よ、諸の有情あり、一種の身と一種の想とを有す。例へば、諸の遍浄天の如し。これ、第四有情居なり。友よ、諸の有情あり、想もなく、また[30]、別受も無し。例へば、諸の無想有情天

の如し。これ、第五有情居なり。友よ、諸の有情あり、一切の色想を越え、諸の有對想を滅し、種々の想を作意することなく、『虚空は無邊なり』とて、空無邊處を成就す。これ、第六有情居なり。友よ、諸の有情あり、一切の空無邊處を越え、『識は無邊なり』とて、識無邊處を成就す。これ、第七有情居なり。友よ、諸の有情あり、一切の識無邊處を越え、『何ものもあること無し』とて、無所有處を成就す。これ第八有情居なり。友よ、諸の有情あり、無所有處を越えて非想非非想處を成就す。これ第九有情居なり。

四　梵行住の九不時不節〔あり。謂く〕、友よ、ここに如來ありて、世に出現し給ふ。これ阿羅漢なり、正等覺なり。又、法ありて説示せらる。これ寂靜に順じ、般涅槃に順じ、等覺に導き、善逝の開示し給ふ所なり。〔然るに〕、彼の人(にん)は〔時恰も〕地獄に生れてあり。これ第一の梵行住の不時不節なり。復次に、友よ、ここに如來ありて、世に出現し給ふ。これ阿羅漢なり、正等覺なり。又法ありて説示せらる。これ寂靜に順じ、般涅槃に順じ、等覺に導き、善逝の開示し給ふ所なり。〔然るに〕彼の人(にん)は〔時、恰も〕畜生趣に生れてあり。これ第二の梵行住の不時不節なり。…乃

至…〔時、恰も〕餓鬼趣に生れてあり……。阿修羅衆中に生れてあり…乃至…長壽天衆中に生れてあり…乃至…〔時、恰も〕[31]邊地に於て生を受く。これ蠻族・無智者の間にして、そこには比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の行くことなし。…〔乃至〕…〔時、恰も〕中國に於て生を受くと雖も、自ら邪見あり、顚倒の見ありて、謂へらく、布施無く、[32]供養なく、[33]燒施無く、善行・惡行の業の果たる異熟無く、此の世無く、彼の世無く、母無く、265 父無く、化生の有情無く、世に、諸の沙門・婆羅門の[34]正至、[35]正行にして、此世と彼世とを自ら證智し、作證し已りて宣說するものなしと。これ第七の梵行住の不時不節なり。復、次に…〔乃至〕…〔時、恰も〕中國に於て生を受くと雖も、自ら、惡慧、愚癡、聾瘂にして、善說・惡說の義理を諒知すること能はず…〔乃至〕…復次に、友よ、如來、阿羅漢、正等覺の世に出現せず。法の、寂靜に順じ、般涅槃に順じ、等覺に導き、善逝の開示し給ふ所なるも亦說示せられず。而も、自らは慧を具へ、愚癡ならず、聾瘂に非ず、善說・惡說の義理を能く諒知することを得。これ第九の梵行住の不時不節なり。

五　九次第住〔あり。謂く〕友よ、ここに比丘あり、欲を離れ、諸の不善法を離れ、尋有り、伺有り、かゝる離より生ぜる喜と樂とのある初靜慮を成就して住す。…〔乃

至〕…第二靜慮を……第三靜慮を……第四靜慮を成就して住す。一切の色想を超え、諸の有對想を滅し、種々の想を作意すること無く、『空は無邊なり』とて、空無邊處を成就して住す。一切の空無邊處を超え、『識は無邊なり』とて、識無邊處を成
266 就して住す。一切の識無邊處を超え、『何ものもあること無し』とて、無所有處を成就して住す。一切の無所有處を超えて、非想非非想處を成就して住す。一切の非想非非想處を超えて、想受滅を成就して住す。

六　九次第滅〔あり。謂く〕初靜慮を成就せるものには欲想已に滅せり。第二靜慮を成就せるものには尋と伺と已に滅せり。第三靜慮を成就せるものには喜已に滅せり。第四靜慮を成就せるものには出入息已に滅せり。空無邊處を成就せるものには色想已に滅せり。識無邊處を成就せるものには、空無邊處想已に滅せり。無所有處を成就せるものには識無邊處想已に滅せり。非想非非想處を成就せるものには無所有處想已に滅せり。想受滅を成就せるものには想も受も已に滅せり。

「友よ、…〔乃至〕…佛は是の如きの諸の九法を正しく開示し給へり。〔故に〕…〔乃至〕

…。

三　友よ…〔乃至〕…佛は諸の十法を正しく開示し給へり。〔故に〕…〔乃至〕…。十〔法〕とは云何。

一　十依因法〔あり〕。謂く〔〕友よ、ここに比丘あり、具戒にして、能く順解脱律儀に護られて住し、所行、乞食、〔みな〕具足し、微罪に於ても怖畏を見、諸の學處に於て、〔よく〕受持して〔此を〕學す。友よ、是の如く、比丘あり、具戒にして…〔乃至〕…諸の學處に於て〔よく〕受持して、〔此を〕學する、これ依因法なり。復次に、友よ、比丘あり、多聞にして、聞を持し、聞を積集し、諸の法の、初善く、中善く、後善く、意義具足し、〔文字の〕相とゝのひ、一向圓滿にして清浄なる梵行を開示する、是の如き類の諸の法を多く聞き、持し、唱誦積集し、專意觀察し、見によりて、善く通達す。友よ、是の如く、比丘あり、多聞にして…乃至…見によりて善く通達する、これ依因法なり。復次に、友よ、比丘あり、善友たり、善伴侶たり、善伴黨たり。友よ、是の如く、比丘あり…〔乃至〕…善伴黨たる、これ依因法なり。復次に、友よ、比丘あり、善言者にして、善言の因たる法を具足し、堪忍にして、諸の敎法を善く易く意解す。友よ、是の如く、比丘あり、善言

者にして…乃至…諸の教法を〔善く〕易く意解する、これ依因法なり。復、次に、友よ、比丘あり、諸の同梵行者のための種々の所作の業あり。彼はそれらに於て、これを作し、これを成就すべき巧みあり、勢勤あり、一切の方便と思慮とを具足す。友よ、是の如く、比丘あり…乃至…一切の方便と思慮とを具足する、これ依因法なり。復次に、友よ比丘あり、法欲を具し、談[36]を憙び、勝法[37]と勝律とに於て大歡喜を有す。友よ、是の如く、比丘あり…乃至…大歡喜を有する、これ依因法なり。復次に、友よ、
268 比丘あり、隨つて〔與へらるゝ所の〕衣服、飲食、床座、病を緣としての醫藥・資具をもつて喜足す。友よ、是の如く、比丘あり…乃至…喜足する、これ依因法なり。復次に、友よ、比丘あり、勤めて精進して住し、諸の不善法を斷ぜむが爲、諸の善法を成就せむが爲、勢力あり、精勤あり、諸の善法に於て、常に、忍持を廢せず。友よ、是の如く、比丘あり…乃至…忍持を廢せざる、これ依因法なり。復次に、友よ、比丘あり、具念にして、最上の念のたしなみ能く具足し、遠き所作と、遠き所說とを俱に善く憶念するの性、隨念するの性なり。友よ、是の如く、比丘あり…乃至…隨念するの性なる、これ依因法なり。復次に、友よ、比丘あり、具慧にして、生滅〔の意解〕に順じ、聖にし

て、決擇に順じ、正盡苦に趣くの慧を具足す。友よ、是の如く比丘あり、具慧にして、生滅〔の意解〕に順じ、聖にして、決擇に順じ、正盡苦に趣くの慧を具足する、これ依因法なり。

二　十遍處〔あり。謂く〕、一〔人〕あり、地遍を想して、上・下・横・無二・無量なり。一〔人〕あり、水遍を……一〔人〕あり、火遍を……一〔人〕あり、風遍を……一〔人〕あり、青遍を……一〔人〕あり、黄遍を……一〔人〕あり、赤遍を……一〔人〕あり、白遍を……一〔人〕あり、空遍を……一〔人〕あり、識遍を想して、上・下・横・無二・無量なり。

269

三　十不善業道〔あり。謂く〕、斷生命、不與取、欲邪行、虚誑語、離間語、麁悪語、雜穢語、貪欲、瞋恚、邪見なり。

四　十善業道〔あり。謂く〕、離斷生命、離不與取、離欲邪行、離虚誑語、離離間語、離麁悪語、離雜穢語、離貪、離瞋、正見なり。

五　十聖居〔あり。謂く〕、友よ、ここに比丘あり、五支を斷じ、六支を具足し、一護あり、四依あり、自諦を捨し、求を斷盡し、思に濁無く、身行寂靜なり、心善く解脱し、善解脱慧あり。然らば、友よ、比丘あり、五支を斷ずとは云何。友よ、ここに比丘の愛

欲を斷じ、瞋恚を斷じ、惛沈・睡眠を斷じ、掉擧・惡作を斷じ、疑を斷ず。友よ、蓋し、是を、
比丘あり、五支を斷ず〔と爲す〕。然らば、友よ、比丘あり、六支を具足すとは云何。〔謂
く〕友よ、ここに比丘ありて、眼もて色を見已りて、憙ばず、憂へず、捨にして住し、念あ
り、正知あり。耳もて聲を聞き已りて……鼻もて香を齅ぎ已りて……舌もて味
を嘗め已りて……身もて所觸を觸し已りて……意もて法を識り已りて、憙ばず、
憂へず、捨にして住し、念あり、正知あり。友よ、蓋し、是を、比丘あり、六支を具足す〔と
爲す〕。然らば、友よ、比丘あり、一護ありとは云何。〔謂く〕友よ、ここに比丘あり、念の
〔善く〕護する所の心を具足す。友よ、蓋し是を比丘あり、一護あり〔と爲す〕。然らば、
270 友よ、比丘あり、四依ありとは云何。〔謂く〕、友よ、ここに比丘あり、熟思して一〔法〕を
追求し、熟思して一〔法〕を忍受し、熟思して一〔法〕を遣除し、熟思して一〔法〕を遠避す。
友よ、蓋し是を比丘あり四依あり〔と爲す〕。然らば、友よ、比丘あり自諦を捨すとは
云何。〔謂く〕、友よ、ここに比丘あり、諸の沙門婆羅門の、諸雜の、各自に諦〔とするも
の〕あるに、〔彼らは〕その一切を捨し、棄し、除し、吐遣し、放捨し、斷じ、遠離す。友よ、蓋
し、是を比丘あり自諦を捨す〔と爲す〕。然らば、友よ、比丘あり、求を斷盡すとは云何。

〔謂く〕、友よ、ここに比丘あり、欲求を斷じ、有求を斷じ、梵行求を寂止す。友よ、蓋し、是を、比丘あり求を斷盡す〔と爲す〕。然らば友よ、比丘あり、思に濁無しとは云何。〔謂く〕、友よ、ここに比丘あり、欲思を斷じ、恚思を斷じ、害思を斷ず。友よ、蓋し是を比丘あり、思に濁無し〔と爲す〕。然らば、友よ、比丘あり、身行寂靜なりとは云何。〔謂く〕、友よ、ここに比丘あり、樂を斷じ、苦を斷じ、前にありたる喜と憂とを滅して苦無く、樂無く、捨念淸淨なる第四靜慮を具足して住す。友よ、蓋し是を比丘あり、身行寂靜なり〔と爲す〕。然らば友よ、比丘あり、心善く解脫すとは云何。〔謂く〕、友よ、ここに比丘あり、貪より心解脫し、瞋より心解脫し、癡より心解脫す。友よ、蓋し是を比丘あり、心善く解脫す〔と爲す〕。然らば友よ、比丘あり、善解脫慧ありとは云何。〔謂く〕友よ、ここに比丘あり、「我は已に貪を斷じて、恰も、根を斷ち、多羅樹の頭を截るが如く、無有に趣かしめ、當來不生の法たらしめたり」と了知し、「我は已に瞋を斷じて…〔乃至〕
271 …「我は癡を斷じて、恰も、根を斷ち、多羅樹の頭を截るが如く、無有に趣かしめ、當來不生の法たらしめたり」と了知す。友よ、蓋し、是を比丘あり善解脫慧あり〔と爲す〕。

六　十無學〔あり〕。謂く〕無學の正見、無學の正思惟、無學の正語、無學の正業、無學

の正命、無學の正精進、無學の正念、無學の正定、無學の正智、無學の正解脱なり。友よ、詢に、正知者にして正見者たり、應供者にして正等覺者たる佛は、是の如きの諸の十法を正しく開示し給へり。〔故に〕こゝに、我らが一切はそを結集して、また紛諍なからしめざるべからず。この梵行の永續し久住するは、これ多衆の利益なり。多衆の安樂なり。世間への慈愍なり。諸の天と人との義利と利益と安樂との爲なり」と。

四 その時、佛は起ち上りて、尊者舍利弗に向つて告げたまはく、「善い哉、善い哉、舍利弗よ、善い哉、舍利弗よ、汝は諸の比丘の爲に、等誦教法を説きたり」と。是の如く、尊者舍利弗は説きぬ。〔而も大〕師は是を允許し給へり。かくして、彼ら諸比丘は、尊者舍利弗の所説〔を聞いて〕歡喜隨喜したりき。

註❶鍛冶師（kammīraputta）鍛冶の子とあるも、これは生れながらに鍛冶なるの意、卽鍛冶師の家の子といふ意の故に、單に今の如く譯す。

❷ウッバタカ (Ubbhaṭaka) この字は又 Ubbhaṭṭhaka に作る。直立の義で、覺音の註に從へば、その高く聳立したるによりて、かく名づけしものなりと。

❸よりつゝ (nissāya) は二義あり、一には「もたれつゝ」、二には「……の近く」の意なる中 Rhys Davids 氏は前者をとり、Neumann 氏は後者をとる。寧ろ後者に與みすべし。

❹志を起し (paṭibhātu) とは「汝の心に……が起れ」の意なれば今かく譯す。

❺横たえむ (taṁ ahaṁ āyamissāmi) 卽ち「それ(背)を我はのばさむ」との原意。

❻起想をいとなみつゝ (uṭṭhānasaññaṁ manasikaritvā) 集異門足論には當起想と記す。卽ち臥する時、已に同時に起想をも意識し、心倫安し、具念正知の上言に違することなき佛の心情を明らかにす。

❼識慊し (visatta-rūpā) たゞ緬甸本の二、暹羅の印刷本にのみ載せられ、他本はすべて缺く。

❽義利 (attha) は一語に意義、利益の二義をかぬ。

❾行とは集異門足論には命根 jivitindriya = 壽と釋す。

❿精勤とは原文には padhāna とありて、以上、二九以來の精勤の字は皆この字の譯なり。而して、この字を玄奘は斷と譯し、今の「精勤に於て遮止せず」は斷に於て遮止せず」に作る。(四正斷又は四正勤の譯も準じて、同字の異譯による。本經四法の下參照)。蓋し斯の字は字としては飽くまでも勤の意なるも、その勤は惡不善法の斷の爲の勤に外ならざると、今一には同字は屢、pahāna (skt. prahāṇa 斷) に作らるゝことあるとの爲に、又、如上譯も斷とすることもあり。

⓫明と云云 Rhys Davids, The higher knowledge and emancipation; Ńeumann, Wissen und Erlösung. 集異門足論二・二六は今と同字。蓋し本來の意は上の無明の反對に、萬法の眞相、佛敎の敎理に關する明、卽ち知見及びそれに基く解脫の意なるべきも、集異門足論には例の無學の三明(本經三法中參照)及び心解脫、慧解脫、及び、無爲解脫＝擇滅涅槃の三解脫とも解く。

⓬決意し得ず　原語は na adhimuccati とありて、漢によく解脫せず等と譯す字なり。

⓭盛にとは、原文には化作しつゝ繰り返して記するを、暫らくかく譯す。

⓮不動の信 (avecca-ppasāda) とは avecca は梵の avetya で、その avetya は ava＋i＋tya 卽ち、深く理解して、證っての意、pasāda (skt. prasāda) は信を意味す。

⓯窣羅 (surā) 法蘊足論諸の律、その他の委解、必ずしも一致せず。今、法蘊足論の解をあぐれば、米麥を主として、諸の藥物を投じ、合成醞釀する所と。

⓰迷麗耶 (meraya) 同上、諸の根莖、葉、花、果等と諸藥物とを合成醞釀せる酒なりと。

⓱末陀同上に、葡萄酒その他や、乃至、上の窣羅迷麗耶等の酒をいふと。

⓲諸放逸處 (pamādaṭṭhāna)　法蘊足論の如きは、この諸放逸處は、上三種の酒の外なりとし、且つ、その酒によつて惹起せらるゝ諸の醉餘の放逸事と釋しおれるが、少くとも原意果して然なりしや否や。恐らくはこは上三酒のしめくゝりの語にて、つまり、「……等諸の放逸沙汰の因たるもの」と解すべからざるか。

⓳「意安らかならず」底本には maiko-bhuto とあれど諸の辭典には maṅku-bhūto (discontented, troubled, confused) とあり。今この方に從つて譯す。

⑳五心蕪(pañca cetokhila) (Rhys Davids, 5 Spiritual barrenness; Neumann, 5 Herzbeklemmungen) 漢譯は無し。集異門足論は五心栽。

㉑引牽せられず。底本に na vimuccati とあり。蓋し覺音は註して nidhimuccati (=is not drawn to) とせるに從ふ。

㉒定相 aññataraṁ samādhi-nimittaṁ (Rhys Davids, some given clue to concentration) 禪觀を誘導すべき諸對象、心象、卽ち、後說の十遍處、不淨觀等をいふ。cf. Points of Controvercy by Mrs. Rhys Davids, p. 388

㉓多衆の等。緬甸印刷本傳にはこの一句を缺く。上も然り。

㉔應證位成就人。別本により補入。

㉕十二分に得 (yāvadatthaṁ pāripūriṁ) 文字通りには「所願の如く、十分に」なり。

㉖下者　五欲をいふ。

㉗生處 (uppatti) 所願の生處の意。

㉘具戒離貪の者の心願。今の巴利聖典協會本の文をそのまゝに譯せば、「具戒者の心願は離貪性なり」とすべきも、諸傳本の異記に從つて、上已揭の文と相應せしむる爲に、今の如く譯す。

㉙有色にして等 又は「有色として……」と譯すも可ならん。

㉚別受 appaṭisaṁvedino は集異門足論卷一九には別想と記す。

㉛邊地 (paccantimesu janapadesu) この中には、古來の解として、欲界四大洲の一たる北倶盧洲

も入れて考ふべきなりとさる。蓋し、同洲には苦受なきを以て、樂著して離染道を修せむとせずと。

㉜供養（yitthaṁ）中阿含八難經は「齋」。

㉝燒施（hutaṁ）中阿含八難經は「呪說」。燒施とは婆羅門教にて、火中に酪等を投じ、燒いて、供御とする等の如きをいふ。

㉞正至（samaggātā）八難經には「眞人の善處に往至せるあり」と。

㉟正行（sammā-paṭipannā）八難經は、「善去善向」。

㊱談を喜び（piyasamudāhāro）覺音註によれば、自らは人の法を談ずるに傾聽することを喜び、他に對しては、又準じて、法を談じて聞かせることを喜ぶなりと。

㊲勝法（abhidhamma）阿毘曇、阿毘達磨と音譯すること周知の如し。字義としては今の譯の如く、卓越せる法の意。

十上経（じゅうじょうきょう） (Dasuttara Sutta)

Figure 2: SC: Up to Ten

272

三四　十上經（ダスッタラ・スッタンタ）

是の如く我聞く。

第一誦品

一　一時、佛は瞻婆（チャンパー）なる伽伽池（ガッガラー）の側に住し給ひ、大比丘衆五百人と俱なりき。

此に於て尊者舍利弗は諸の比丘に告ぐらく「友よ、諸の比丘よ」と。「友よ」と。彼ら諸の比丘は、尊者舍利弗に對へぬ。

尊者舍利弗は、是の如く說けり。

十上法を我當に說くべし。
涅槃の速得の爲に、
苦の限界を作すが爲に、
一切繫解脫の法を。

Same title 十上經 in the Dīrghâgamas. Parallel: 長阿含十報法經 *Cháng āhánshíbàofǎ jīng,* short 十報法經, T. 13: “The ten [aspects] of Buddhist teachings are: the doctrine of attaining 成法, doctrine of cultivation 修法, doctrine of awakening 覺法, doctrine of extinguishing 滅法, doctrine of retrogression 退法, doctrine of enhancement 增法, doctrine that is difficult to understand 難解法, doctrine of birth 生法, doctrine of knowing 知法, and doctrine of realization 證法.”[1] This again is embodied in the famous “Ten ox-herding pictures” of the East Asian tradition. ([1] `http://www.buddhism-dict.net/cgi-bin/xpr-ddb.pl?q=長阿含十報法經`)

二 「友よ、一法は多く所作せらるべし、一法は修せらるべし、一法は遍知せらるべし、一法は断ぜらるべし、一法は捨分あり、一法は勝分あり、一法は解し難し、一法は生ぜしめらるべし、一法は勝知せらるべし、一法は作證せらるべし。

一 云何の一法か多く所作せらるべき。〔謂く〕諸の善法中に於ける不放逸なり。此の一法は多く所作せらるべし。

二 云何の一法か修せらるべき。〔謂く〕可意倶行の身念なり。此の一法は修せらるべし。

三 云何の一法か遍知せらるべき。〔謂く〕有漏有取の觸なり。此の一法は遍知せらるべし。

273 四 云何の一法か断ぜらるべき。〔謂く〕我ありとの慢なり。此の一法は断ぜらるべし。

五 云何の一法か捨分ある。〔謂く〕不正の思惟なり。此の一法は捨分あり。

六 云何の一法か勝分ある。〔謂く〕正思惟なり。此の一法は勝分あり。

七 云何の一法か解し難き。〔謂く〕無間心定なり。此の一法は解し難し。

八　云何の一法か生ぜしめらるべき。〔謂く〕不動の智なり。此の一法は生ぜしめらるべし。

九　云何の一法か勝知せらるべき。〔謂く〕一切有情は食によりて住す。此の一法は勝知せらるべし。

一〇　云何の一法か作證せらるべき。〔謂く〕不動心解脱なり。此の一法は作證せらるべし。

右、此らの十法はこれ實・眞・如にして如是ならざるに非ず、より他なること無く、平等にして、如來の等覺し給へる所なり。[1]

三　二法は多く所作せらるべし、二法は修せらるべし、二法は遍知せらるべし、二法は斷ぜらるべし、二法は捨分あり、二法は勝分あり、二法は解し難し、二法は生ぜしめらるべし、二法は勝知せらるべし、二法は作證せらるべし。

一　云何の二法か多く所作せらるべき。〔謂く〕、念と正知となり。此らの二法は多く所作せらるべし。

二　云何の二法か修せらるべき。〔謂く〕止と觀となり。此らの二法は修せら

るべし。

三　云何の二法か遍知せらるべき。〔謂く〕名と色となり。此らの二法は遍知せらるべし。

274

四　云何の二法か斷ぜらるべき。〔謂く〕無明と有愛となり。此らの二法は斷ぜらるべし。

五　云何の二法か捨分ある。〔謂く〕惡言と惡友となり。此らの二法は捨分あり。

六　云何の二法か勝分ある。〔謂く〕善言と善友となり。此らの二法は勝分あり。

七　云何の二法か解し難き。〔謂く〕諸の有情の染の因及び緣と、諸の有情の淸淨の因及び緣となり。此らの二法は解し難し。

八　云何の二法か生ぜしめらるべき。〔謂く〕盡智と無生智となり。此らの二法は生ぜしめらるべし。

九　云何の二法か勝知せらるべき。〔謂く〕二界。〔卽ち〕有爲界と無爲界となり。

此らの二法は勝知せらるべし。

一〇　云何の二法か作證せらるべき。〔謂く〕明と解脱となり。此らの二法は作證せらるべし。

右、此ら二十の諸法は、これ實・眞・如是にして、如是ならざるに非ず、より他なること無く、平等にして、如來の等覺し給へる所なり。

四　三法は多く所作せらるべし。三法は修せらるべし…乃至…三法は作證せらるべし。

一　云何の三法か多く所作せらるべき。〔謂く〕善士との友交と、正法の聽聞と、法・隨法行となり。此らの三法は多く所作せらるべし。

二　云何の三法か修せらるべき。〔謂く〕三定。〔卽ち〕有尋有伺定、無尋唯伺定、無尋無伺定なり。此らの三法は修せらるべし。

275 三　云何の三法か遍知せらるべき。〔謂く〕三受。〔卽ち〕樂受、苦受、不苦不樂受なり。此らの三法は遍知せらるべし。

四　云何の三法か斷ぜらるべき。〔謂く〕三愛。〔卽ち〕欲愛、有愛、無有愛なり。此

らの三法は斷ぜらるべし。

五　云何の三法か捨分ある。〔謂く〕三不善根。〔卽ち〕貪不善根、瞋不善根、癡不善根なり。此らの三法は捨分あり。

六　云何の三法か勝分ある。〔謂く〕三善根。〔卽ち〕無貪善根、無瞋善根、無癡善根なり。此らの三法は勝分あり。

七　云何の三法か解し難き。〔謂く〕三出要界。〔卽ち〕欲よりのかの出要卽ち出離、色よりのかの出要、卽ち無色、而してかの有・有爲・緣生の者、それらよりの出要なる滅なり。此らの三法は解し難し。

八　云何の三法か生ぜしめらるべき。〔謂く〕三智。〔卽ち〕過去の智、未來の智、現在の智なり。此らの三法は生ぜしめらるべし。

九　云何の三法か勝知せらるべき。〔謂く〕三界。〔卽ち〕欲界、色界、無色界なり。此らの三法は勝知せらるべし。

一〇　云何の三法か作證せらるべき。〔謂く〕三明。〔卽ち〕宿世を隨念する智の明、諸の有情の死と生とに關する智の明、諸の漏の盡に關する智の明なり。此の

三法は作證せらるべし。

右、此らの三十の諸法は、これ實・眞・如是にして如是ならざるに非ず、より他なること無く、平等にして如來の等覺し給へる所なり。

五　四法は多く所作せらるべし、四法は修せらるべし…乃至…四法は作證せらるべし。

一　云何の四法か多く所作せらるべき。〔謂く〕四輪。〔卽ち〕中國に住し、善士に親近し、自ら正願あり、及び宿世に福の所作あるなり。此らの四法は多く所作せらるべし。

二　云何の四法か修せらるべき。〔謂く〕四念處。〔卽ち〕、友よ、ここに比丘あり、身に於て身を隨觀して住し、精勤にして正知と念とあり、以て世の貪と憂とを斷ず。受に於て……心に於て……法に於て法を隨觀して住し、精勤にして正知と念とあり、以て世の貪と憂とを斷ず。此らの四法は修せらるべし。

三　云何の四法か遍知せらるべき。〔謂く〕四食。〔卽ち〕段食の若しは麤若しは細、觸は第二、意思は第三、識は第四なり。此らの四法は遍知せらるべし。

四　云何の四法か斷ぜらるべき。〔謂く〕四瀑流。〔卽ち〕欲瀑流、有瀑流、見瀑流、無明瀑流なり。此らの四法は斷ぜらるべし。

五　云何の四法か捨分ある。〔謂く〕四軛。〔卽ち〕欲軛、有軛、見軛、無明軛なり。此らの四法は捨分あり。

六　云何の四法か勝分ある。〔謂く〕四離軛。〔卽ち〕欲軛よりの離軛、有軛よりの離軛、見軛よりの離軛、無明軛よりの離軛なり。これらの四法は勝分あり。

277 七　云何の四法か解し難き。〔謂く〕四定。〔卽ち〕捨分定、止分定、勝分定、決擇分定なり。此らの四法は解し難し。

八　云何の四法か生ぜしめらるべき。〔謂く〕四智。〔卽ち〕法智、類智、他心智、世俗智なり。此らの四智は生ぜしめらるべし。

九　云何の四法か勝知せらるべき。〔謂く〕四聖諦。〔卽ち〕苦の聖諦、苦集の聖諦、苦滅の聖諦、苦滅に趣く道の聖諦なり。此らの四法は勝知せらるべし。

一〇　云何の四法か作證せらるべき。〔謂く〕四沙門果。〔卽ち〕預流果、一來果、不還果、阿羅漢果なり。此らの四法は作證せらるべし。

右、此らの四十の諸法はこれ實眞・如是にして如是ならざるに非ず、より他なること無く、平等にして如來の等覺し給へる所なり。

六　五法は多く所作せらるべし。五法は修せらるべし……乃至……五法は作證せらるべし。

一　云何の五法か多く所作せらるべき。〔謂く〕五勤支。〔卽ち〕友よ、ここに比丘あり、信を具して…………此らの五法は多く所作せらるべし〔等誦經第二誦品、一・六參照〕

二　云何の五法か修せらるべき。〔謂く〕五正定支。〔卽ち〕喜遍滿、樂遍滿、心遍滿、278 光明遍滿、相觀察なり。此らの五法は修せらるべし。

三　云何の五法か遍知せらるべき。〔謂く〕五取蘊。〔卽ち〕色取蘊、受取蘊、想取蘊、行取蘊、識取蘊なり。此らの五法は遍知せらるべし。

四　云何の五法か斷ぜらるべき。〔謂く〕五蓋。〔卽ち〕欲貪蓋、瞋恚蓋、睡眠・惛沈蓋、掉擧・惡作蓋、疑蓋なり。此らの五法は斷ぜらるべし。

五　云何の五法か捨分ある。〔謂く〕五心蕪なり。〔卽ち〕友よ、ここに比丘あり、〔大〕

師に於て疑あり……此らの五法は捨分あり〔等誦經第二誦品一・一九參照〕。
六　云何の五法か勝分ある。〔謂く〕五根。〔卽ち〕信根、精進根、念根、定根、慧根なり。此らの五法は勝分あり。
七　云何の五法か解し難き。〔謂く〕五出離界。〔卽ち〕友よ、ここに比丘の、欲を思惟するときも……此らの五法は解し難し〔等誦經第二誦品一・二四參照〕。
八　云何の五法か生ぜしめらるべき。〔謂く〕五正定智。〔卽ち〕『彼の定は現に樂にして、亦復當來にも樂の異熟あり』との智の自ら生ずるあり。『彼の定は聖な
279 り、出世なり』との智の自ら生ずるあり。『彼の定は賢善の士夫のみ隨行する所なり』との智の自ら生ずるあり。『彼の定は清凉上妙にして、寂靜を獲、心一趣に輳し、而も有行に非ず、遮戾的に非ず、有碍に非ず』との智の自ら生ずるあり。『我は正に正念にして此の定に入る』。『我は正に正念にして〔此の定より〕出づ』との智の自ら生ずるあり。此らの五法は生ぜしめらるべし。
九　云何の五法か勝知せらるべき。〔謂く〕五解脫處。〔卽ち〕友よ、ここに比丘あり、〔大〕師或は隨一の尊重すべき同梵行者ありて、爲に法を說く……此らの五法は

勝知せらるべし〔等誦經、第二誦品、一・二五參照〕。

一〇　云何の五法か作證せらるべき。〔謂く〕五法蘊。〔卽ち〕戒蘊、定蘊、慧蘊、解脫蘊、解脫智見蘊なり。此らの五法は作證せらるべし。

右、此らの五十の諸法はこれ實、眞…〔乃至〕…。

七　六法は多く所作せらるべし。六法は修せらるべし…〔乃至〕…六法は作證せらるべし。

一　云何の六法か多く所作せらるべき。〔謂く〕六和敬法。〔卽ち〕友よ、ここに比丘あり、同梵行者の間に於て、陽に、陰に、慈身業を興す……此らの六法は多く所作
280 せらるべし〔等誦經、第二誦品、二・一四參照〕。

二　云何の六法か修せらるべき。〔謂く〕六隨念處。〔卽ち〕佛隨念、法隨念、僧伽隨念、戒隨念、施隨念、天隨念なり。此らの六法は修せらるべし。

三　云何の六法か遍知せらるべき。〔謂く〕六內處。〔卽ち〕眼處、耳處、鼻處、舌處、身處、意處なり。此らの六法は遍知せらるべし。

四　云何の六法か斷ぜらるべき。〔謂く〕六愛身。〔卽ち〕色愛、聲愛、香愛、味愛、觸愛、

法愛なり。此らの六法は斷ぜらるべし。

五　云何の六法か捨分ある。〔謂く〕六不恭敬。〔卽ち〕友よ、ここに比丘あり、〔大〕師に於て不恭敬にして住し、不順なり。法に於て……此らの六法は捨分あり。〔等誦經、第二誦品二・九參照〕。

六　云何の六法か勝分ある。〔謂く〕六恭敬。〔卽ち〕友よ、ここに比丘あり、〔大〕師に於て恭敬ありて住し、隨順なり。法に於て……此らの六法は勝分あり〔等誦經、第二誦品二・一〇參照〕。

七　云何の六法か解し難き。〔謂く〕六出離界。〔卽ち〕友よ、ここに比丘あり、是の如く言はむが如し、『我は慈心解脫を修習し、多く所作し、所乘と作し……此らの六法は解し難し〔等誦經、第二誦品二・一七參照〕。

281 八　云何の六法か生ぜしめらるべき。〔謂く〕六恒住。〔卽ち〕友よ、ここに比丘あり、眼もて色を見已りて喜ばず、又憂へず、捨心にして住し、念あり、正知あり。耳もて聲を聞き已りて……此らの六法は生ぜしめらるべし。〔等誦經、第二誦品二・二〇參照〕

九　云何の六法か勝知せらるべき。〔謂く〕六無上支。〔卽ち〕見無上、聞無上、利得

無上、戒無上、行無上、憶念無上なり。此らの六法は勝知せらるべし。

一〇　云何の六法か作證せらるべき。〔謂く〕六通。〔卽ち〕友よ、ここに比丘あり、無量の神變を行じ…乃至…梵衆天までも身もて自在力を轉ず。天耳界の、清淨にして、人〔分〕に過ぐるを以て、天・人の或は遠或は近の聲を共に聞く。他の諸の有情、他の諸の人の心を、自心によりて諒知す。〔謂く〕有貪心は有貪心なり…乃至…不解脫心は不解脫心なりと〔自らの〕無量の宿住を隨念す。〔謂く〕一生、二生…乃至…と。是の如く諸相、[2]諸徵と共に自らの無量の宿住を隨念す。天眼の、清淨にして、人〔分〕に過ぐるを以て…乃至…業のまゝに果を受くる諸の有情を諒知す。諸の漏の盡に由つて、無漏の心解脫・慧解脫を現法の中に自ら勝知し、作證し、成就して住す。此らの六法は作證せらるべし。

右、此らの六十の諸法は、これ實眞…〔乃至〕…

282 八　七法は多く所作せらるべし。七法は修せらるべし…乃至…七法は作證せらるべし。

一　云何の七法か多く所作せらるべき。〔謂く〕七財。〔卽ち〕、信財、戒財、慚財、愧

財、聞財、施財、慧財なり。此らの七法は多く所作せらるべし。

二　云何の七法か修せらるべき。〔謂く〕七覺支。〔卽ち〕念等覺支、擇法等覺支、精進等覺支、喜等覺支、輕安等覺支、定等覺支、捨等覺支なり。此らの七法は修せらるべし。

三　云何の七法か遍知せらるべき。〔謂く〕七識住。〔卽ち〕友よ、ここに諸の有情あり、種々の身を具し、種々の想を具ふ……此らの七法は遍知せらるべし〔等誦經、第二誦品、三・一〇參照〕。

四　云何の七法か斷ぜらるべき。〔謂く〕七隨眠。〔卽ち〕欲貪隨眠、瞋隨眠、見隨眠、疑隨眠、慢隨眠、有貪隨眠、無明隨眠なり。此らの七法は斷ぜらるべし。

五　云何の七法か捨分ある。〔謂く〕七非正法。〔卽ち〕友よ、ここに比丘あり、〔一には〕不信なり。〔二には〕無慚なり。〔三には〕無愧なり。〔四には〕少聞なり。〔五には〕懈怠なり。〔六には〕多忘なり。〔七には〕無慧なり。此らの七法は捨分あり。

六　云何の七法か勝分ある。〔謂く〕七正法。〔卽ち〕友よ、ここに比丘あり、〔一には〕信あり。〔二には〕慚あり。〔三には〕愧あり。〔四には〕多聞なり。〔五には〕勤めて精

進す。〔六には〕念現前す。〔七には〕具慧なり。此らの七法は勝分あり。

283 七　云何の七法か解し難き。〔謂く〕七善士法。〔卽ち〕友よ、ここに比丘あり、〔一には〕法を知る。〔二には〕義を知る。〔三には〕自らを知る。〔四には〕量を知る。〔五には〕時を知る。〔六には〕衆を知る。〔七には〕人を知る。此らの七法は解し難し。

八　云何の七法か生ぜしめらるべき。〔謂く〕七想。〔卽ち〕無常想、無我想、不浄想、過患想、斷想、離貪想、滅想なり。此らの七法は生ぜしめらる。

九　云何の七法か勝知せらるべき。〔謂く〕七殊妙事。〔卽ち〕友よ、ここに比丘あり、學處を護持することに於て熱求し、當來に於て、亦……此らの七法は勝知せらるべし（等誦經、第二誦品三・七參照）。

一〇　云何の七法か作證せらるべき。〔謂く〕七漏盡力。〔卽ち〕友よ、ここに漏盡比丘は、一切行は無常なりと如實に正慧もて正觀す。而も、友よ、是の如く漏盡比丘が、一切行は無常なりと如實に正慧もて正觀することはこれ漏盡比丘の力にして、漏盡比丘は此の力を得已つて、『我が諸の漏は盡きぬ』と諸漏の盡を自知す。復、次に、友よ、漏盡比丘は諸の欲は〔燃ゆる〕炭の聚にも喩ふべしと如實に正慧もて

觀ず。而も…〔乃至〕…復、次に、友よ、漏盡比丘はその心、一切の漏處たる諸法よりの
離に趣し、離に傾き、離に向ひ、離を目的とし、出離を喜び、遠離性なり…〔乃至〕…復、次
284 に、友よ、漏盡比丘は四念處を修し、善く修せり。而も…〔乃至〕…復、次に、友よ、漏盡比
丘は五根を修し、善く修せり。而も…〔乃至〕…復、次に、友よ、漏盡比丘は七覺分を修
し、善く修せり。而も…〔乃至〕…復、次に、漏盡比丘は八聖道を修し、善く修せり。而
も、此の如く、漏盡比丘が八聖道を修し、善く修せることは、これ漏盡比丘の力にし
て、漏盡比丘は此の力を得已つて、「我が諸の漏は盡きぬ」と諸漏の盡を自知す。此
らの七法は作證せらるべし。

右、此らの七十の諸法はこれ實・眞・如是にして、如是ならざるに非ず、より他なること無く、平等にして、如來の等覺し給へる所なり」。

第二誦品

一　「八法は多く所作せらるべし。八法は修せらるべし…乃至…八法は作證せらるべし。

一　云何の八法か多く所作せらるべき。〔謂く〕八因・八縁ありて、根本順梵行的
なる慧の、未だ得ざるは獲得し、已に得たるは倍増し、廣大ならしめ、增修し、圓滿な
らしむることをなす。〔謂く〕友よ、〔大〕師若しくは隨一の尊重すべき同梵行者に近
づいて住し、而して彼に高度の慚愧ありて樹立し、また愛及び恭敬も〔亦然〕なり。
これ第一の因、第一の緣にして、根本順梵行的なる慧の、未だ得ざるは獲得し、已に
285 得たるは倍增し、廣大ならしめ、增修し、圓滿ならしむることをなす。復、かの〔大〕師
若しくは隨一の尊重すべき同梵行者に近づいて住し、而して彼に高度の慚愧あ
りて樹立し、また愛及び恭敬も〔亦然〕なり。〔而も〕時々、彼らの所(みもと)に詣りて質疑し、質
問すらく『尊者よ、これは云何』『云何がこの義なる』と。而して彼に對し、彼ら諸の尊
者は、所蔽は蔽をとり、所閉は閉をとり、且つ無量種の疑處たる諸法に於て能く疑
を斷ず。これ第二の因、第二の緣にして……〔乃至〕……復、かの法を聞き已りて、二の寂
靜を成就す。謂く、身寂靜及び心寂靜なり。これ第三の因、第三の緣にして……
復、次に、友よ、比丘あり、具戒にして、能く別解脫律儀に守護せられ、所[3]行、乞食〔並に〕具
足し、微小の罪に於て能く怖畏を見、受持して諸の學處に於て能く修學す。こ

れ第四の因、第四の縁にして…乃至…復、次に、友よ、比丘あり、多聞にして〔能く〕所聞を持し、所聞を積み、若し諸の法の、初も善く中も善く終も善き義あり、〔文字の〕相ととのひ、純粋圓滿にして清淨なる梵行を宣説する、是の如き諸の法を多く聞き、能く持し、語によつて蒐め、意もて觀察し、見によつて能く通達す。これ第五の因、第五の縁にして…乃至…復、次に、友よ、比丘あり、勤めて精進して住し、諸の不善法を斷じ諸の善法を成就せむが爲の故に、勢力あり、精勤あり、諸の善法に於て忍持を
286 捨せず。これ第六の因、第六の縁にして…乃至…復、次に、友よ、比丘あり、具念にして、最上の念の明を具足し、遠き所作と遠き所説とを〔倶に〕能く憶念し隨念す。これ第七の因、第七の縁にして…乃至…復、次に、友よ、比丘あり、〔能く〕五取蘊に於て生と滅とを觀察して住す。〔謂く〕『色は是の如し』。『色の集は是の如し』。『色の滅は是の如し』。『受は是の如し』……『想は是の如し』……『行は是の如し』……『識は是の如し』。『識の集は是の如し』。『識の滅は是の如し』と。これ第八の因、第八の縁にして、根本順梵行的なる慧の、未だ得ざるは獲得し、已に得たるは倍增し、廣大ならしめ、增修し、圓滿ならしむることをなす。此らの八法は多く所作せらるべし。

二　云何の八法か修せらるべき。〔謂く〕八聖道支。〔卽ち〕正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定なり。此らの八法は修せらるべし。

三　云何の八法か遍知せらるべき。〔謂く〕八世法。〔卽ち〕得と不得と名聲と惡聲と識と稱譽と樂と苦となり。此らの八法は遍知せらるべし。

287 四　云何の八法か斷ぜらるべき。〔謂く〕八邪。〔卽ち〕邪見、邪思、邪語、邪業、邪命、邪精進、邪念、邪定なり。此らの八法は斷ぜらるべし。

五　云何の八法か捨分ある。〔謂く〕八懈怠事。〔卽ち〕友よ、ここに比丘あるが如し、事業の作すべきあり……此らの八法は捨分あり。〔等誦經、第三誦品、一・四參照〕。

六　云何の八法か勝分ある。〔謂く〕八精進事。〔卽ち〕友よ、ここに比丘あるが如し、事事の作すべきあり……此らの八法は勝分あり。〔等誦經、第三誦品、一・五參照〕。

七　云何の八法か解し難き。〔謂く〕梵行住の八不時不節。〔卽ち〕……此らの八法は解し難し。〔等誦經、第三誦品、二・四、梵行住の九不時不際中、第四、阿修羅衆中の生を除けるものの如く說く〕。

八　云何の八法か生ぜしめらるべき。〔謂く〕八大人覺。〔卽ち〕此の法は少慾者

のものなり。此の法は多慾者のものには非ず。此の法は喜足者のものなり。此の法は不喜足者のものには非ず。此の法は獨居者のものなり。此の法は衆居を樂ふもののそれには非ず。此の法は勤精進者のものなり。此の法は懈怠者のものに非ず。此の法は念現前者のものなり。此の法は多忘者のものには非ず。此の法は定者のものなり。此の法は不定者のものには非ず。此の法は具慧者のものなり。此の法は無慧者のものには非ず。此の法は離戯論を樂ふ者、離戯論を憙ぶ者のものなり。此の法は戯論を樂ふ者、戯論を憙ぶ者のものには非ず。此らの八法は生ぜしめらるべし。

九　云何の八法か勝知せらるべき。〔謂く〕八勝處。〔卽ち〕……此らの八法は勝知せらるべし〔等誦經、第三誦品、一・一〇參照〕。

288 一〇　云何の八法か作證せらるべき。〔謂く〕八解脫。〔卽ち〕……此らの八法は作證せらるべし〔等誦經、第三誦品、一・一〇參照〕。

右、是らの八十の諸法はこれ眞實……〔乃至〕……

二　九法は多く所作せらるべし。九法は修せらるべし……乃至……九法は作證せ

らるべし。

一　云何の九法か多く所作せらるべき。〔謂く〕九正思惟根法。〔卽ち〕正思惟する者には欣生じ、欣ある者には喜生じ、喜心ある者には身寂靜し、身の寂靜せる者には樂生じ、樂ある者には心定し、心の定すれば、如色に知・見し、如實に知・見し已りて厭ひ、厭ひ已りて離欲し、離欲によりて解脫す。此らの九法は多く所作せらるべし。

二　云何の九法か修せらるべき。〔謂く〕九清淨勤支。〔卽ち〕戒清淨清淨勤支、心清淨清淨勤支、見清淨清淨勤支、度疑清淨清淨勤支、道非道知見清淨清淨勤支、行知見清淨清淨勤支、知・見清淨清淨勤支、慧清淨清淨勤支、解脫清淨清淨勤支なり。此らの九法は修せらるべし。

三　云何の九法か遍知せらるべき。〔謂く〕九有情居。〔卽ち〕……此らの九法は遍知せらるべし〔等誦經第三誦品二・三參照〕。

280 四　云何の九法か斷ぜらるべき。〔謂く〕九愛根法。〔卽ち〕愛に緣りて求あり。求に緣りて獲あり。獲に緣りて分別あり。分別に緣りて欲貪あり。欲貪に緣

りて取著あり。取著に縁りて執持あり。執持に縁りて慳あり。慳に縁りて護あり。護因に縁りて執杖・執兵器・諍訟・争論・相違・離間語・虚誑語等、無量の罪・不善の法は生ず。此らの九法は斷ぜらるべし。

五　云何の九法か捨分ある。〔謂く〕九害心事。〔卽ち〕……此らの九法は捨分あり〔等誦經、第三誦品、二・一參照〕。

六　云何の九法か勝分ある。〔謂く〕九害心調伏。〔卽ち〕……此らの九法は勝分あり〔等誦經、第三誦品、二・三參照〕。

七　云何の九法か解し難き。〔謂く〕九種々。〔卽ち〕界種々に縁りて觸種々生ず。觸種々に縁りて受種々生ず。受種々に縁りて想種々生ず。想種々に縁りて思種々生ず。思種々に縁りて欲種々生ず。欲種々に縁りて熱種々生ず。熱種々に縁りて求種々生ず。求種々に縁りて得種々生ず。此らの九法は解し難し。

八　云何の九法か生ぜしめらるべき。〔謂く〕九想。〔卽ち〕不淨想、死想、食厭忌想、一
290 切世間不樂想、無常想、無常者苦想、苦者非我想、斷想、離貪想なり。此らの九法は生ぜしめらるべし。

九　云何の九法か勝知せらるべき。〔謂く〕九次第住。〔卽ち〕……此らの九法は勝知せらるべし〔等誦經、第三誦品二・五參照〕。

一〇　云何の九法か作證せらるべき。〔謂く〕九次第滅。〔卽ち〕……此らの九法は作證せらるべし〔等誦經、第三誦品二・六參照〕。

右、是らの九十の諸法は、これ實眞…〔乃至〕…。

三　十法は多く所作せらるべし…〔乃至〕…十法は作證せらるべし。

一　云何の十法か多く所作せらるべき。〔謂く〕十依因法。〔卽ち〕……此らの十法は多く所作せらるべし〔等誦經第三誦品三・一參照〕。

二　云何の十法か修せらるべき。〔謂く〕十遍處。〔卽ち〕……此らの十法は修せらるべし〔等誦經、第三誦品三・二參照〕。

三　云何の十法か遍知せらるべき。〔謂く〕十處。〔卽ち〕眼處、色處、耳處、聲處、鼻處、香處、舌處、味處、身處、可觸處なり。此らの十法は遍知せらるべし。

四　云何の十法か斷ぜらるべき。〔謂く〕十邪。〔卽ち〕邪見、邪思、邪語、邪業、邪命、邪精進、邪念、邪定、邪智、邪解脫なり。此らの十法は斷ぜらるべし。

五　云何の十法か捨分ある。〔謂く〕十不善業道。〔卽ち〕……此らの十法は捨分あり〔等誦經、第三誦品、三・三參照〕。

291 六　云何の十法か勝分ある。〔謂く〕十善業道。〔卽ち〕……此らの十法は勝分あり〔等誦經、第三誦品、三・四參照〕。

七　云何の十法か解し難き。〔謂く〕十聖居。〔卽ち〕……此らの十法は解し難し〔等誦經、第三誦品、三・五參照〕。

八　云何の十法か生ぜしめらるべき。〔謂く〕十想。〔卽ち〕不淨想、死想、食厭忌想、一切世間不樂想、無常想、無常者苦想、苦者非我想、斷想、離貪想、滅想なり。此らの十法は生ぜしめらるべし。

九　云何の十法か勝知せらるべき。〔謂く〕十盡事。〔卽ち〕正見によりて邪見は盡滅せらる。而して凡そ邪見を緣として無量の罪・不善の法は生ずる、其らも亦彼によりて盡滅せらる。また正見を緣とする無量の善法は、修の圓滿に趣く。正思によりて邪思……正語によりて邪語……正業によりて邪業……正命によりて邪命……正精進によりて邪精進……正念によりて邪念……正定によりて

邪定……正智によりて邪智……正解脫によりて邪解脫は盡滅せらる。而して、凡そ邪解脫を緣として無量の罪・不善の法は生ずる、其らも亦彼によりて盡滅せらる。また正解脫を緣とする無量の善法は修の圓滿に趣く。此らの十法は勝知せらるべし。

292 一〇　云何の十法か作證せらるべき。〔謂く〕十無學法。〔卽ち〕……此らの十法は作證せらるべし〔等誦經、第三誦品三・六參照〕。

右、此らの一百の法はこれ實・眞・如是にして如是ならざるに非ず、より他なること無く、平等にして如來の等覺し給へる所なり」と。

是の如く、尊者舍利弗は說きぬ。歡喜せる彼ら諸の比丘は尊者舍利弗の所說を讚歎したり。

註❶より他なる等（anaññathā）或は「不變異なり」とも譯すべし。

❷諸徵（sa-uddesaṁ = with explanation）集異門足論同上には「言說」と譯す。今は示說せられた結果の標徵の意としてかく譯す。

❸所行（ācāra-gocara）玄奘は屢〻規則所行と譯す。

すべての苦を斷じ得べく、
すべての樂を伏し得べく、
不死・安穩を獲え得べく、
〔大〕法王のみもとにて。

跋 (Epilogue)

跋

南傳大藏經の傳說によれば、佛滅後約二ヶ月にして雨安居となつたが、其第一月に諸精舍の修繕をなし、第二月に法と律とを結集し、七ヶ月間で終つたのである。これ所謂第一結集であるが、ここにいふ法は後世一般にいはるる經であつて、三藏中の經藏である。此第一結集に於ける經藏の結集は長部を最初とし、次に中部、次に相應部、次に增支部、最後に小部の順序で誦出せられたのであるし、長部は梵網經を最初とし沙門果經を第二となすとせらるるから、內容の順序は現存の長部と全く同一とせられて居るのである。そして何故に特に長部と命名せられたかといへば、此部中に含まるる經は凡て長文の經であるが爲であるといはるる。部は元來聚集の意味であるから、長部とは卽ち長文の經の集まりの意味である。

現形の長部を見ると、全體は左の如くになつて居る。

長部三十四經

戒蘊編　梵網・沙門果・阿摩晝・種德・究羅檀頭・摩訶梨・闍利・迦葉師子吼・布吒婆樓・須婆・堅固・露遮・三明の十三經。

大　編　大本・大緣・大般涅槃・大善見王・闍尼沙・大典尊・大會・帝釋所問・大念處・弊宿の十經。

波梨編　波梨・優曇婆邏師子吼・轉輪聖王師子吼・起世因本・自歡喜・淸淨・三十二相・敎授尸迦羅越・阿吒曩胝・等誦・十上の十一經。

長部は漢譯長阿含に相當するものであるが、長阿含は三十經より成り、長部の摩訶梨・闍利・須婆と阿吒曩胝との四經を欠き、又大念處・三十二相の二經をも欠くもこれは中阿含に存し、大善見王經は獨立の一經とせられずに大般涅槃經に相當する遊行經の中に含まれ、而も長部に存しない增一・三聚・世記の三經を有する。然し全體の經の順序を異にし、長阿含は大本經を第一となし、世記經を最後となして居る。最後の世記經は閻浮提洲品・鬱單日品・轉輪聖王品・地獄品・龍鳥品・阿須倫品・四天王品・忉利天品・三災品・戰闘品・三中劫品・世本緣品から成り、長阿含四分中の第四分の一分を成して居る。かかる比較對照によつて考へて見るに、長部・長阿含共に元來は三十經を含み、それを三編又は三分に區別して居たのが原形であつて、後世それぞれの部派で傳承さるる間に何等かの事情で、或は數經を他の中部などから取入れ、或は全體の經の順序を異にするが如きことが起つたのであらうと想像せらるる。卽ち長部でいへば、第一編中の摩訶梨・闍利・須婆の三經及び第三編中の三十二相の一經、合せて四經は他から取入れられたものであらう。然しこれ等が取入れらるるにはそれ相當の理由が存するのであるから、全體の趣意を考へるには却つてこれ等が存する上を見るのが便である。

長部第一經梵網經は三誦品より成つて居るが、內容上からは第一誦品の前半と其後半以

下第二第三誦品との二部に區分せらるべきもので、第一部には如來が全く遠離して居る惡心非行を擧げ、以て如來當時の宗敎家の態度行爲と異なることを明にし、第二部には如來當時の宗敎家哲學者の主張固持せる六十二見を述べ、以て如來の敎說のこれ等と質を異にすることを示して居る。第一部に於ける惡心非行を述ぶるに之を小戒・中戒・大戒の三となして居るが、小戒は主として佛敎でいふ不殺生・不偷盜・不邪婬・不妄語・不兩舌・不惡口・不綺語・不飮酒・不非時食・不歌舞作樂・不香鬘塗彩・不坐高大牀・不受蓄金銀の十學處の基となるもので、又小戒の最後部と中戒と大戒とはこれ等の或ものを詳しくしつつ他の事項を述べたものである。如來がこれ等の惡心非行を全く遠離して居る點からいへば、戒即ちシーラはいましめの意味ではなくして、むしろ性質・德行などの意味の方が強いであらうが、之を如來の弟子信者の遠離すべきものと見る時には確に戒即ちいましめの意味となるのである。故にこれ等は佛敎實踐の方面に於て重大な意義を有することになる。長部第二經沙門果經に於ては、如來の弟子となつて佛敎の實踐に入らむとする者が、最初に十號具足の如來の出現を聞き、次に其許に詣りて出家し、其敎を修する時守るべき戒として右の小戒・中戒・大戒が述べられて之を特に戒蘊と稱し、繼いで定と智とが修せらるべきものとして示され、更に修行の進程が鄭寧詳細に敍述せられ、これ等を經て遂に心解脫慧解脫となり解脫知見を得、以て修行が完成して現前に沙門果を實現することが說かれて居る。即ち最初は如來の遠離して居

た如來當時の宗敎家の悪心非行が佛敎の修行道程に於けるいましめとせられ、之に基いて修行道の大綱として型となるに至つたのである。而も此修行道の大綱は長部第一編の凡ての經に存し、第三經以下に於ては同一文の爲に省略せられて居るが、然し之を有するが爲に摩訶梨・闍利・須婆の三經も第一編中に取入れられたのである。第一編が戒蘊編と稱せらるる所以は此處に存するのであるし、而も此修行道の大綱の詳説は第二編大般涅槃經になると既に綱目化せられて、單に戒と定と慧と解脱との四法とせられて居るが、これが一般に戒・定・慧の三學、及び戒・定・慧・解脱の四法、並に戒・定・慧・解脱・解脱知見の五分法身、又は他の方面より纏めて信・戒・念・定・慧の五根・五力となるに至る基たるものである。此修行道の大綱が一弟子によつて實際に行ぜらるる時は其弟子は悟りを得るのであり、そこに如來の法が活きて居るのであるから、五分法身といはるる如く、佛敎として極めて重要な意味あるものとせらるるのである。

梵網經の第二部は如來の敎説が六十二見の如きとは全く選を異にするものなるを示すのであるが、法の優れて居るのは如來が優れて居るが爲であるから、此優越性を明にする爲に第二の大編に於ては、大本經に於て最初に如來が毘婆尸佛以下過去六佛に一貫せる法性規準に據つて出世せることを敍べ、次に大緣經に於て初成道の内容とせらるる甚深なる緣起を説き、更に大般涅槃經に如來の入滅前後の事蹟を述べて如來身の決して平凡普通のも

のでないことを明にして居るし、又それ以下に於ては天界の衆生も如來の法に歸投することを說いて法の優越性を明して居る。更に第三の波梨編に於ては、既に第二編の最後に於て如來の法が事實上當時の宗敎家の說に優ることを示して居るのを承けて、當時の宗敎と哲學とが徒らに思辯を弄し虛しき實行に遊び、爲に如來の法の着實眞摯にして現果あるに遙に及ばざるを示しつつ而も其間に如來の法の內容の大體を明にし、更に如來の法の一般生活に適切なる所以を述べ、最後に法の大綱を法數名目によつて纒めて等誦・十上の二經を結尾となして居るが、等誦・十上の二經は後に如來の法を蒐集編纂する方針の基となるものである。

以上によつて長部の全體の趣意を考へて見ると、長部は對外的に如來と其法との優れて居る所以を解釋し、同時に如來の法の含む內容の大綱を明瞭となすにあるといへるであらう。此長部が傳說上第一結集に於て最初の法卽ち經藏として誦出せられたとなすのは、明にこれ護法の精神が根本となつて大法の維持傳承を敎へて居るものであるといへる。長部に含まるる經の或ものは他の經藏に於て指名闡說せられ、又或ものは他の經の基となり、更に或ものは後世發達の源をなす程であつて、經藏中に於て此長部の占むる地位の如何なるものなるかを推定せしむるに足ると思はる。

最後に、此長部の翻譯は高楠博士功績記念會に於て最初に企てたものであつて門下知人

一同が大體各一經づつを譯出して先生の座右に呈せむとしたものである。今や、それが此の如く公刊せられ終つて先生の劉覽を汚し得るのは門下一同の光榮と歡喜との極みである。

高楠博士功績記念會

索隠

漢 字 索 隱

ク, グ

ケ

コ, ゴ

サ, ザ

シ，ジ

ㄹ

南傳大藏經

高楠博士功績記念會纂譯

代表者
文學博士 宇井伯壽
文學博士 長井眞琴
文學士 福島直四郎

監修
マスター・オブ・アーツ
ドクター・オブ・リテラチュア
ドクトル・フイロゾフイー
文學博士 高楠順次郎

飜譯

文學士 阿部文雄
文學士 和泉得成
文學博士 宇井伯壽
文學博士 荻原雲來
文學士 神林隆淨
文學士 栗原廣廓
文學士 坂本幸男
文學博士 高楠順次郎
文學士 土田勝彌
文學博士 長井眞琴
文學博士 羽溪了諦
文學士 干潟龍祥
文學士 福島直四郎
文學士 增永靈鳳
文學士 宮田菱道
文學士 山田龍城
文學士 渡邊楳雄

文學士 青原慶哉
文學士 石川海淨
文學士 上田天瑞
文學博士 金倉圓照
文學博士 故木村泰賢
文學士 佐藤密雄
文學士 末永眞海
文學士 高田修
文學士 寺崎修一
文學士 成田昌信
文學士 花山信勝
文學士 平松友嗣
文學士 藤田眞道
文學士 松濤誠廉
文學士 宮本正尊
文學士 山本快龍
文學士 渡邊照宏

赤沼智善
文學士 石黒彌致
文學士 小野島行忍
文學士 金森西俊
文學士 久野芳隆
文學士 佐藤良智
文學士 田中於菟彌
ドクター・オブ・フイロソフイー 立花俊道
文學士 中野義照
文學士 西義雄
林五邦
文學士 平等通昭
文學博士 逸見梅榮
文學士 水野弘元
文學士 山崎良順
文學士 山本智教

編輯

文學博士 小野玄妙
文學士 山本快龍
文學士 渡邊俊英

文學士 蓮澤成淳
文學士 金森西俊
文學士 高崎森暢

文學士 和泉得成
文學士 山本智教
莅戸三一

昭和十一年三月五日印刷
昭和十一年三月八日發行

第八卷

編輯兼發行者 東京市本郷區本郷三丁目二 大藏出版株式會社 木村省吾

印刷者 東京市芝區芝浦一丁目二三 和田助一

印刷所 東京市芝區芝浦一丁目二三 單式印刷株式會社

製本所 東京市荒川區日暮里町八ノ五六 村田文泉閣

會員番號

【非賣品】

發行所 東京市本郷區本郷三丁目二 大藏出版株式會社
電話小石川六三一〇番
振替東京五一六八四番

Bibliography

Adi Meyerhofer (2020)

This bibliography lists some modern works on Suttas contained in this volume. Regarding translations of the *Mahāparinibbāna* (DN 16) and *Mahāsatipaṭṭhāna Suttas* (DN 22) when published as separate monographs see the bibliography supplementing Vol. 7. For complete editions of the *Dīgha Nikāya* refer to the listing at the end of Vol. 6.

Aggañña Sutta and the Theravāda Buddhist Tradition; ch. 1 in: *Oxford Handbook of Comparative Political Theory;* Oxford 2020; ISBN 9780190253752

Behrsig, Siegfried; Das *Chung-Tsi-King (Sangīti-Sutta) des Chinesischen Dirghâgama. Übersetzt und mit Anmerkungen versehen;* ASIA MAJOR, Vol. 7, Nr. 1/2, S. 150

Collins, Steven; *Aggañña sutta: the discourse on what is primary; an annotated translation from Pali;* New Delhi 2001 (Sahitya Akademi); ISBN 8126012986; based on: *The discourse on what is primary (Aggañña-Sutta);* JOURNAL OF INDIAN PHILOSOPHY, Vol. 21 (1993), Nr. 4, pp. 301–93; [☞ DN 27, p. 97]

Fenn, Mavis; *Two Notions of Poverty in the Pāli Canon;* JOURNAL OF BUDDHIST ETHICS, Vol. 3 (1996); "The paper is divided into two sections. The first focuses on an analysis of the Cakkavatti-Sīhanāda Sutta, a sutta that provides the most extensive discussion of poverty as deprivation in the Nikāyas. Poverty in this text is primarily a socio-political issue that effects the spiritual development of all members of society. The second section of the paper focuses on the notion of poverty as simplicity, a notion associated with renouncers who are akiñcana, 'without anything,' 'lacking possessions.' Central to this section is an analysis of the Aggañña Sutta." [☞ DN 26 and 27, pp. 73 and 97]

藤井淳; 阿含経と般若経の接点: 長部『清浄経』の逆説表現に注目して; 印度學佛教學研究, Vol. 67 (2019), Nr. 2, pp. 979–73; [☞ DN 29, p. 149]

Hecker, Hellmuth [1923–99]; *Die Merkmale von Saat und Ernte: insbesondere nach der 30. Rede der Längeren Sammlung;* Stammbach 2011 (Beyerlein & Steinschulte); ISBN 978-3-93109579-6; [☞ DN 30, p. 183]

日高三郎; 仏の三十二相と歯科医学 [*Buddha's Thirty-two Features and Dentistry*]; 福岡医療短期大学歯科衛生学科, Vol. 24 (2002), Nr. 2, pp. 321–6

Hoernle, A. F. Rudolf; *Manuscript Remains of Buddhist Literature found in Eastern Turkestan: Facsimiles with transcripts, translations and notes …;* Oxford 1916 (Clarendon); [Intro, re. DN 32 and 33, p. 1]

Hoffmann, Helmut [1912–92]; *Bruchstücke des Āṭānāṭikasūtra aus dem zentralasiatischen Sanskritkanon der Buddhisten;* Glückstadt 1939 (Augustin), Stuttgart 1987, ISBN [1987] 3-51504751-4; [Zugl.: Berlin, Univ., Diss., 1939. DN 32, p. 261]

Mcgovern, Nathan; *On the Origins of the 32 Marks of a Great Man;* JOURNAL OF THE INTERNATIONAL ASSOCIATION OF BUDDHIST STUDIES, 2016, p. 207–47; [☞ DN 30, p. 183]

Meisig, Konrad [*1953]; *Sūtra von den vier Ständen: das Aggañña-Sutta im Licht seiner chinesischen Parallelen;* Wiesbaden 1988 (Harrassowitz); ISBN 3-447-02795-9; [☞ DN 27, p. 97]

Neumann, Karl-Eugen; *Die Reden des Buddha: Längere Sammlung;* München 1907–12 (Pieper & Co.) [= *Die Reden Gotamo Buddho's aus der längeren Sammlung Dīghanikāyo des Pāli-Kanons*] 2 Bde., ^{2}1927–8; Zürich 1957 (Patmos); Stammbach ^{4}1996, 2004 (Beyerlein-Steinschulte); ISBN [1996] 3931095150; [This translation is based on the Royal Thai edition, donated to the Göttingen University Library (e. g. พระ สุต์ตัน์ตปิฎก ทีฆนิกาย ปาฏิกวัค์ค; รัตนโกสินทรศก ๑๑๒ [1893]). Much maligned by his contemporaries, specially Paul Dahlke who published his own translation[5] remains this the most rhythmically correct and poetic translation into German to date. Biogr. Neumann's: Hecker, Hellmuth; *Karl Eugen Neumann: Erstübersetzer der Reden des Buddha, Anreger zu abendländischer Spiritualität;* Wien 1986 (Octopus).]

Sander, Lore; *Preliminary remarks on two versions of the Āṭānāṭīya (Āṭānāṭika)-Sūtra in Sanskrit;* 国際仏教学大学院大学研究紀要, 2007, Nr. 11, p. 153–15; [☞ DN 32, p. 261. DOI: `10.15056/00000057`]

Seidenstücker, Karl [1876–1936]; *System des Buddhismus: eine systematische Aufzählung der Lehren Buddhas unter Zugrundelegung des Saṅgīti-Suttanto, zugleich ein Hilfsbuch für Schüler des Buddhismus;* Breslau 1911 (Markgraf); [☞ DN 33, p. 287]

[5] Errors therein: *paticca-samuppāda* (bedingte Entstehung) as ‚abhängig-gleichzeitiges Entstehen;' *jhāna* (geistige Vertiefung) as ‚Gedankenstufe;' *salāyatana* as ‚Sechssinn;' *sankhāra* (Karmaformationen) as ‚Veranlagungen' or even ‚Begriffe;' *nāma-rūpa* as ‚Geistform;' *sammāsati* (rechte Achtsamkeit) as ‚rechte Verinnerung' etc.

Concordance コンコルダンス

Adi Meyerhofer (2020)

The Japanese texts in this volume are translations based on the *Digha Nikaya* edition of the PTS, 1890–1911. The present volume contains the *Pāṭika Vagga*.

Below: ❶ Links from this `pdf` directly to the respective Sutta at *SuttaCentral* (`SC`), where further paralells are listed;
❷ Captions from Karl-Eugen Neumanns German translation,[6] page numbers (S.) are from the 1996 edition (☞ p. II) followed by direct links to `PK`: *Digha Nikāya – Die Längere Sammlung* `palikanon.de`; ❸ Paralells in the *Dīrgha-āgama* (長阿含經[7][8])

Patika-vagga - Buch des Pāṭikaputto / Der Teil des Patika

---

[6] Errata list to his terminology: `http://www.palikanon.com/diverses/ken_error.html`

[7] T 1. W.-G.: *Ch'ang a han ching. Tripitaka Koreana,* K 647 (장아함경). "Dīrghâgama ; *'dus pa chen po'i mdo.* 22 fasc., trans. Buddhayaśas 佛陀耶舍 and Zhu Fonian 竺佛念 in 412–13. It is one of the four āgamas in Chinese, written in four vargas 品, and one of the five canonical collections of discourses (sūtra) of the Buddha as contained in the Dharma Collection 法藏 by the Theravādins 上座部. It deals with the life of the Buddha in its first varga, teaching and practice in the second, refutation of other teachings in the third, and Buddhist cosmology in the fourth. It is roughly equivalent to the Pāli Dīgha-nikāya. Partial variant translations can be seen in the Middle Length Āgama 中阿含經 (T. 26) and the Longer By One Āgama 增一阿含經 (T. 125). It is believed that this version was handed down in the Dharmagupta school 法藏部." (`http://www.buddhism-dict.net/cgi-bin/xpr-ddb.pl?q=長阿含經`)

[8] Detailled: *Āgama/Nikāya;* in *Brill's Encyclopedia of Buddhism;* Leiden 2015, Vol. I, p. 50–9. Translated into modern Japanese: 1) 国訳一切経; 佛説長阿含経解題 [*Bussetsu jō agon-gyō kaidai*]; Tokyo 1933 (Daitō Shuppansha); 2) 丘山新 [Okayama Hajime; et. al.]; 現代語訳「阿含経典」長阿含経 [*Gendaigoyaku "Agon kyōten:" Jōagonkyō*]; Tokyo 1995–2005 (Hirakawa), 6 Vol.
Supplementary: 1) Dhammadinnā; *Research on the Dīrgha-āgama;* Taipeh 2014 (Dharma Drum), ISBN 978-957-598-657-5; 2) Tamai, Tatsushi; *Sanskrit, Gāndhārī and Bactrian manuscripts in the Hirayama Collection: Tipiṭaka. Suttapiṭaka. Dīghanikāya. Sanskrit;* Tokyo 2016 (International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University); ISBN 9784904234129 ["Partial contents Sanskrit Dīrghāgama." Text in Sanskrit, Gāndhārī and Bactrian; pref. in English.]; 3) Couvreur, Walter; *Sanskrit-Tochaarse en Sanskrit-Koetsjische trefwoordenlijsten van de Dīrghāgama (Dīghanikāya);* Leiden 1969 (Brill), reprint from: ORIENTALIA GANDENSIA, Vol. 4 (1967).

About

The original 65 volumes in 70 parts of the **Nanden Daizōkyō** (南傳大藏經) were published 1936–41 by the Takakusu Hakushi Kōseki Kinenkai (高楠博士功績記念會纂譯), under the editorship of Takakusu Junjirō (高楠順次郎; 1866–1945[9]), who also used the resources of the Taishō Shinshū Daizōkyō Kankōkai (大正新脩大藏經刊行會). It contains the complete Pāli canon as well as additional texts like the Milindapañhā, Visuddhimagga and Edicts of Ashoka. A reprint was published by *Taishō Shinshū Daizōkyō Kankōkai* (大正新脩大藏經刊行會) in Tokyo from 1970 onwards. The three-volume index was edited by Mizuno Kōgen.[10]

`suttacentral.net`

Scans `zenwort.de`
`mail@zenwort.de`

The translation of the Pāli-Canon, *Nanden Daizōkyō* is no longer in Japanese copyright, as determined by the *National Diet Library,* Tokyo. Their reasoning is given below:

2014年1月7日インターネット提供に対する出版社の申出への対応について。2013年7月12日付ニュースでお知らせした一般社団法人日本出版者協議会及び大蔵出版株式会社から『大正新脩大蔵経』（全88巻）ほかのインターネット提供の中止を求める旨の申出を受けた件に関し、その後の対応について報告します。[11]

当館では、申出を受けて、当該資料のインターネット提供を一時停止し、当面館内利用に限定するとともに、2013年7月に館内検討組織を設置し本事案の検討を行い、5名の有識者のヒアリング等も踏まえて、下記の結論を取りまとめました。

1. 『大正新脩大蔵経』（1923年～1934年、大正一切経刊行会、全88巻）については、インターネット提供を再開する。

[9] Biogr.: 鷹谷俊之 (1891–1970); 高楠順次郎先生伝; Tokyo 1957 (武蔵野女子学院).

[10] 水野弘元; *Nanden daizōkyō sōsakuin* [南傳大藏經総索引]; “Comprehensive Index to the Pali Canon,” Tokyo 1959-60 (Nihon Gakujutsu Shinkōkai). Scans available on `archive.org`. Permalinks: Vol. 1-1 (第1部上巻): `ark:/13960/t0rr2qp0m`, Vol. 1-2 (第1部下巻): `ark:/13960/t0zp4x15x`, Vol. 2 (第2部): `ark:/13960/t9s18vg4b`.

[11] 2013年7月12日近代デジタルライブラリー提供資料の一時公開停止について
国立国会図書館が、近代デジタルライブラリー等で提供する『大正新脩大蔵経』（全88巻）及び『南伝大蔵経』（全70巻のうち21巻）について、一般社団法人日本出版者協議会及び刊行元の大蔵出版株式会社から、「当該資料は、現在も商業刊行中であり、公開中止を求める」旨の申出を受けました。
当館としましては、当該資料はすでに著作権の保護期間が満了しており、遠隔地でも広く利活用可能とするため、インターネット公開が望ましいとの基本的立場に変わりはございません。しかしながら、直接の利害を有する商業出版者の申出であることに鑑み、当面3か月程度を目途にしかるべき検討を行うこととし、その結論が出るまでの間、当該資料のインターネット提供を一時停止し、館内利用に限定することといたしました。
利用者の皆様には、ご不便をおかけいたしますが、円満な解決に向けて、引き続き努力を重ねてまいりたいと存じますので、ご理解を賜りますようお願いいたします。(Archived at: `https://web.archive.org/web/20140111204528/http://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2013/1201734_1828.html`)

2. 『南伝大蔵経』（1935 年～1941 年、大蔵出版、全 70 巻）については、当分の間、インターネット提供は行わず、館内限定の提供を行う。

検討の詳細につきましては、報告書（「インターネット提供に対する出版社の申出への対応について」[12]）を参照ください。

現在、日本出版者協議会及び大蔵出版株式会社と『大正新脩大蔵経』のインターネット提供の再開について協議を行っているところであり、再開の時期については未定です。解決に向けて、引き続き努力を重ねてまいりたいと存じます。

The *National Diet Library* limits its scan to in-house use. [13]

"*SuttaCentral* is a website run by a small team, originally based in Australia. We have no institutional affiliation, but are just a group of friends interested in the Suttas. The founders are Rod Bucknell, John Kelly, and Bhante Sujato. As of 2017 the main developers are Bhante Sujato, Ayya Vimala, and Blake Walsh. Financial support for the site comes from the *SuttaCentral Development Trust,* a non-profit charity incorporated in Australia.

SuttaCentral aims at facilitating the study of Buddhist texts from comparative and historical perspectives. It focuses on the texts that represent"Early Buddhism," texts preserved not only in the Pali Sutta and Vinaya Piṭakas but also in Chinese and Tibetan translations and in fragmentary remains in Sanskrit and other languages.

If you make use of any of our material, even though you are under no legal obligations, we respectfully request that you:

- Provide a notice of attribution.
- Maintain the spirit of the Buddhist tradition.

Please let us know if you would like any assistance in making use of our materials."

☸ ☸ ☸

Although the creators of *SuttaCentral* had several times promised to bear the cost of scanning of this project nothing but "umpty words" have been forthcoming as of July 22, 2020. Adi Meyerhofer, Munich.

[12] Archived: `https://web.archive.org/web/20140114004605/http://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2013/report140107.pdf` （pdf: 435 kB）

[13] Call number: 183.039-M723n (DOI: `10.11501/2997519`).

[14] `http://creativecommons.org/publicdomain/zero/1.0/`

Journey to the West (西遊記): "The Seiryu-zan Goblin (青竜山妖怪) steals the Tripitaka from the 'monkey.'" (Woodcut by Katsushika Taito 葛飾戴斗 1818–54).

